(財)米子市教育文化事業団
文化財発掘調査報告書 43

鳥取県米子市

吉谷亀尾ノ上遺跡
橋本徳道西遺跡

第1次～第3次調査

2003

財団法人　米子市教育文化事業団

橋本徳道西遺跡　２区ＳＦ－01（東から）

橋本徳道西遺跡　２区ＳＦ－01（西から）

橋本徳道西遺跡　4・5区ＳＦ―01・02（西から）

橋本徳道西遺跡　4・5区ＳＦ―01・02（東から）

橋本徳道西遺跡　4・5区ＳＦ―01・02（東から）

橋本徳道西遺跡　4・5区ＳＦ―01・02（北から）

橋本徳道西遺跡　6区ＳＦ－01（東から）

橋本徳道西遺跡　ＳＦ－02（南から）

橋本徳道西遺跡　ＳＦ－03（西から）

橋本徳道西遺跡　ＳＦ－04（西から）

橋本徳道西遺跡　４区ＳＦ－05新段階（東から）

橋本徳道西遺跡　４区ＳＦ－05新段階（西から）

序

鳥取県西部地域は近年、道路等、交通網の整備が急速に進められ、さらに、環日本海交流の推進が行われる中、中海臨海地域が輸入促進地域（ＦＡＺ）に指定され、観光と産業のさらなる発展が期待される地域です。

米子市は、「山陰の商都」と称される鳥取県西部の中核都市で、北に雄大な日本海、東に秀峰大山を臨む豊かな自然環境に恵まれています。このような環境の中で、いにしえより人々が生活を営んでおり、市内各地に数多くの遺跡が存在します。特に初期水稲農耕文化を伝える目久美遺跡、国指定史跡の青木・福市遺跡は有名で、周辺では仏教壁画を有する上淀廃寺、我国最大級の弥生集落である妻木晩田遺跡等があり、歴史的、文化的遺産にも恵まれています。

当事業団では、この度、一般県道米子岸本線緊急地方道路整備工事に伴い、吉谷亀尾ノ上遺跡と橋本徳道西遺跡の発掘調査を行ってまいりました。その結果、弥生時代中期～古墳時代後期の集落跡と古代～中世の道路状遺構を確認し、米子市内では３例目となる尖頭器が出土するなど、貴重な成果を得ることができました。特に、道路状遺構は古代の交通や流通を考えるうえでは貴重な資料となるものと思われます。

これらの資料が今後の調査研究および教育のために広く活用され、さらに、広く一般の方々に埋蔵文化財に対する理解、関心を高めていただくうえでお役にたてれば幸いに思います。

最後になりましたが、調査に際しましては多大なご理解とご協力をいただきました地元の皆様をはじめ、ご指導、ご支援を賜りました調査従事者並びに関係各位に対し、心から感謝申し上げます。

平成15年（2003年）３月

財団法人　米子市教育文化事業団

理事長　　山　岡　　宏

例　　言

1．本書は、鳥取県米子市吉谷、橋本において実施した一般県道米子岸本線緊急地方道路整備工事（平成12年度は一般県道米子岸本線道路改良工事）に伴う吉谷亀尾ノ上遺跡、橋本徳道西遺跡の発掘調査報告書である。
2．発掘調査は、鳥取県土木部道路課及び鳥取県米子土木事務所（現鳥取県米子地方県土整備局）の委託を受けて財団法人米子市教育文化事業団が実施した。
3．発掘調査の実施にあたっては、調査地内の基準点測量及び水準測量、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影、火山灰分析、プラント・オパール分析、花粉分析、鉄滓分析、放射性炭素年代測定、鉄製品の保存処理をそれぞれ業者に委託した。
4．本書は高橋が執筆、編集した。
5．出土遺物、実測図、写真等は米子市教育委員会で保管している。

凡　　例

1．発掘調査時における遺構名と報告書記載の遺構名は基本的には一致するが、一部、下表のとおり変更している。なお、竪穴住居跡と掘立柱建物のピット番号は、調査時のものから変更している。
2．本書に用いた方位は第２図、第３図が真北を示している以外は座標北を示し、高度はすべて海抜高である。また、座標値は国土座標第Ⅴ系を用いた。
3．第１図、第72図、第73図は１：2,500国土基本図「米子・境港都市計画計画図（米子市）40」を複製し、加筆したものである。また、第３図は国土地理院発行の１：25,000地形図「米子」、同「母里」、同「淀江」、同「伯耆溝口」を縮小複製、合成し、加筆したものである。
4．本書に用いた遺構の略号は以下のとおりである。
　　ＳＩ：竪穴住居跡　ＳＢ：掘立柱建物　ＳＤ：溝状遺構　ＳＫ：土坑　ＳＦ：道路状遺構　Ｐ：ピット
5．本文中、挿図中及び写真図版中の遺物番号は一致する。
6．遺物番号は遺跡毎（第３章吉谷亀尾ノ上遺跡、第４章橋本徳道西遺跡）に、それぞれ通し番号を付けた。
7．遺構図に用いたスクリーントーンは被熱硬化面を示す。
8．遺物実測図のうち、須恵器は断面黒塗り、それ以外は断面白抜きであらわした。また、第55図の鉄刀は黒色の塗膜を黒塗り、黒色以外の塗膜を赤塗りで示した。

旧遺構名	新遺構名
ＳＤ－53	ＳＦ－04
２区　ＳＥ－06	ＳＥ－11

遺構名新旧対照表

目　　次

巻頭図版
序
例　　言
凡　　例
目　　次
第１章　調査の経緯 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査の経過と方法 …… 1
　第３節　調査体制 …… 3
第２章　位置と環境 …… 5
　第１節　地理的環境 …… 5
　第２節　歴史的環境 …… 6
第３章　吉谷亀尾ノ上遺跡の調査 …… 13
　第１節　遺跡の概要 …… 13
　第２節　検出した遺構と遺物 …… 13
　第３節　遺構外出土遺物 …… 41
第４章　橋本徳道西遺跡の調査 …… 42
　第１節　遺跡の概要 …… 42
　第２節　検出した遺構と遺物 …… 42
　第３節　遺構外出土遺物 …… 79
第５章　まとめ …… 87
　第１節　遺構の変遷 …… 87
　第２節　道路状遺構について …… 91
第６章　自然科学分析 …… 102
　第１節　吉谷亀尾ノ上遺跡の火山灰分析 …… 102
　第２節　橋本徳道西遺跡における自然科学分析 …… 108
　第３節　ＳＫ－49出土鉄刀塗膜の放射性炭素年代測定 …… 116
　第４節　橋本徳道西遺跡出土製鉄関連遺物の分析調査 …… 117
写真図版
報告書抄録

挿　図　目　次

第１図　調査区配置図 …… 4
第２図　吉谷亀尾ノ上遺跡・橋本徳道西遺跡位置図 …… 5
第３図　調査地及び周辺遺跡分布図 …… 10
第４図　グリッド設定図 …… 14
第５図　土層図 …… 14
第６図　遺構配置図 …… 15～16
第７図　ＳＩ－02～08・17遺構図（１） …… 19
第８図　ＳＩ－02～08・17遺構図（２） …… 20
第９図　ＳＩ－02～08・17遺構図（３） …… 21
第10図　ＳＩ－02～08・17変遷図 …… 22
第11図　ＳＩ－02・05出土遺物実測図 …… 22
第12図　ＳＩ－09・10・11遺構図 …… 24
第13図　ＳＩ－09・10・11変遷図 …… 25
第14図　ＳＩ－10出土遺物実測図 …… 25
第15図　ＳＩ－12・13遺構図及びＳＩ－12出土遺物実測図 …… 26
第16図　ＳＩ－01・14・15・16・18遺構図及びＳＩ－14～16・18出土遺物実測図 …… 28
第17図　ＳＩ－01・14・15・16・18変遷図 …… 29
第18図　ＳＢ－01遺構図 …… 30
第19図　ＳＫ－01遺構図及び出土遺物実測図 …… 32
第20図　ＳＫ－02・03遺構図及びＳＫ－03出土遺物実測図 …… 33
第21図　ＳＫ－04遺構図及び出土遺物実測図 …… 34
第22図　ＳＫ－05・06遺構図及びＳＫ－05出土遺物実測図 …… 35
第23図　ＳＤ－01～04遺構図 …… 37
第24図　炭焼窯遺構図 …… 38
第25図　遺構外出土遺物実測図（１） …… 39
第26図　遺構外出土遺物実測図（２） …… 40
第27図　遺構外出土遺物実測図（３） …… 41

第28図　１・３区グリッド設定図 …… 43
第29図　２・４～６区グリッド設定図 …… 43
第30図　１・３・４区土層図 …… 44
第31図　２区土層図 …… 45
第32図　６区土層図 …… 46
第33図　１・３区遺構配置図 …… 47
第34図　２・４～６区遺構配置図 …… 48～49
第35図　ＳＩ－01・02遺構図 …… 50
第36図　ＳＩ－03遺構図及び出土遺物実測図 …… 51
第37図　ＳＦ－01西側遺構図 …… 52～53
第38図　ＳＦ－01東側遺構図 …… 54～55
第39図　ＳＦ－01西側補修位置図 …… 56
第40図　ＳＦ－01東側補修位置図 …… 57
第41図　ＳＦ－02遺構図 …… 58
第42図　ＳＦ－02変遷図 …… 59
第43図　ＳＦ－04遺構図 …… 61
第44図　ＳＦ－05全体図 …… 62
第45図　１・３区ＳＦ－05遺構図 …… 63
第46図　ＳＤ－83遺構図 …… 64
第47図　ＳＦ－05路盤遺構図 …… 65
第48図　ＳＦ－03遺構図 …… 66
第49図　ＳＤ－55遺構図 …… 67
第50図　ＳＥ－01・02遺構図 …… 69
第51図　ＳＥ－03・04・05遺構図 …… 70
第52図　ＳＥ－06・07遺構図 …… 71
第53図　ＳＥ－08・09遺構図 …… 72
第54図　ＳＥ－10・11、ＳＫ－169遺構図 …… 73
第55図　ＳＫ－26・49遺構図及び出土遺物実測図 …… 75
第56図　ＳＤ－21遺構図及び出土遺物実測図 …… 76
第57図　４区第３層上面検出遺構配置図 …… 77
第58図　ＳＤ－48～50遺構図 …… 78
第59図　ＳＤ－61・65・67・74・75・77遺構図及びＳＤ－67出土遺物実測図 …… 80
第60図　石組遺構遺構図 …… 81
第61図　１・３区遺構外出土遺物実測図（１） …… 82
第62図　１・３区遺構外出土遺物実測図（２） …… 83
第63図　２・４～６区遺構外出土遺物実測図（１） …… 84
第64図　２・４～６区遺構外出土遺物実測図（２） …… 85
第65図　２・４～６区遺構外出土遺物実測図（３） …… 86
第66図　遺構変遷図（１） …… 88
第67図　遺構変遷図（２） …… 90
第68図　遺構変遷図（３） …… 92
第69図　道路状遺構変遷図（１） …… 95
第70図　道路状遺構変遷図（２） …… 96
第71図　道路状遺構変遷図（３） …… 97
第72図　ＳＦ－01・02路線想定図 …… 98
第73図　ＳＦ－05路線図 …… 99
第74図　火山灰分析試料採取位置図及び土層柱状図 …… 103
第75図　火山ガラス比ダイアグラム …… 105
第76図　プラント・オパール分析、花粉分析試料採取位置図及び土層柱状図 …… 109
第77図　プラント・オパール分析結果 …… 111
第78図　花粉ダイアグラム …… 114

表　目　次

表１　周辺遺跡一覧表 …… 9
表２　火山ガラス比分析結果 …… 106
表３　屈折率測定結果 …… 106
表４　プラント・オパール分析結果 …… 110
表５　花粉分析結果 …… 113
表６　放射性炭素年代測定結果 …… 116
表７　試料明細および外観所見 …… 117
表８　鉄滓の化学成分分析（wt%） …… 121
表９　鉄滓の化学成分分析まとめ（wt%） …… 121

図　版　目　次

巻頭図版１　橋本徳道西遺跡　２区ＳＦ－01（東から）
　　橋本徳道西遺跡　２区ＳＦ－01（西から）
巻頭図版２　橋本徳道西遺跡　４・５区ＳＦ－01・02（西から）
　　橋本徳道西遺跡　４・５区ＳＦ－01・02（東から）
巻頭図版３　橋本徳道西遺跡　４・５区ＳＦ－01・02（東から）
　　橋本徳道西遺跡　４・５区ＳＦ－01・02（北から）
巻頭図版４　橋本徳道西遺跡　６区ＳＦ－01（東から）
　　橋本徳道西遺跡　ＳＦ－02（南から）
巻頭図版５　橋本徳道西遺跡　ＳＦ－03（西から）
　　橋本徳道西遺跡　ＳＦ－04（西から）
巻頭図版６　橋本徳道西遺跡　４区ＳＦ－05新段階（東から）
　　橋本徳道西遺跡　４区ＳＦ－05新段階（西から）
図版１　全景（東から）
　　全景（西から）
図版２　ＳＩ－02～08・17（北から）
　　ＳＩ－02～08・17（東から）
　　ＳＩ－02・04・05・07・08・17（南から）
図版３　ＳＩ－09～11（南から）
　　ＳＩ－12・13（北から）
　　ＳＩ－01・14～16・18（西から）
図版４　ＳＩ－01・14～16・18（東から）
　　ＳＢ－01（北から）
　　ＳＫ－03～05（北から）
図版５　ＳＫ－01
　　ＳＫ－02
　　ＳＫ－03
図版６　ＳＫ－04
　　ＳＫ－05
　　ＳＫ－06
図版７　炭焼窯天井崩落状況
　　炭焼窯完掘
　　炭焼窯煙道
図版８　竪穴住居跡出土遺物
図版９　土坑出土遺物
図版10　遺構外出土遺物
図版11　第３次調査地空撮（東から）
　　第３次調査地空撮（西から）
図版12　第３次調査地空撮（南から）
　　第３次調査地空撮（北から）
図版13　４・５区全景（上空から）
　　４・５区ＳＦ－01・02（上空から）
図版14　４区ＳＦ－01（上空から）
　　４・５区ＳＦ－02（上空から）
図版15　６区ＳＦ－01、ＳＤ－21（上空から）
　　ＳＦ－04（上空から）
図版16　１区全景（東から）
　　１区全景（西から）
図版17　３区東側調査区全景（東から）
　　３区東側調査区全景（西から）
図版18　３区西側調査区全景（東から）
　　３区西側調査区全景（西から）
図版19　２区全景（北西から）
　　２区全景（西から）
図版20　６区全景（東から）
　　６区全景（西から）
図版21　４区第３層上面検出遺構（東から）
　　ＳＤ－48・49（東から）
　　ＳＤ－50（東から）
図版22　ＳＩ－01・02（南から）
　　ＳＩ－03（西から）
　　ＳＩ－03特殊ピット
図版23　２区ＳＦ－01（東から）
　　２区ＳＦ－01（西から）
　　４・５区ＳＦ－01・02（西から）
図版24　４・５区ＳＦ－01・02（北から）
　　４・５区ＳＦ－01・02（東から）
　　４・５区ＳＦ－01・02（東から）
図版25　２区ＳＦ－01部分拡大
　　２区ＳＦ－01部分拡大
　　２区ＳＦ－01石出土状況
図版26　ＳＦ－02（南から）
　　ＳＦ－01・02合流地点（南から）
　　ＳＦ－01・02合流地点（北から）
図版27　６区ＳＦ－01（東から）
　　６区ＳＦ－01、ＳＤ－21（東から）
　　ＳＦ－03（西から）
図版28　ＳＦ－04（西から）
　　４区ＳＦ－05新段階（東から）
　　４区ＳＦ－05新段階（西から）
図版29　ＳＦ－05路盤断面（第47図Ａ－Ａ′ライン）
　　ＳＦ－05路盤断面（第47図Ｂ－Ｂ′ライン）
　　ＳＦ－04断面
図版30　ＳＥ－01
　　ＳＥ－02
　　ＳＥ－03
図版31　ＳＥ－04
　　ＳＥ－05
　　ＳＥ－06
図版32　ＳＥ－07
　　ＳＥ－08
　　ＳＥ－09
図版33　ＳＥ－10
　　ＳＥ－11・ＳＫ－26
　　ＳＫ－49
図版34　２区ＳＤ－21（南から）
　　２区ＳＤ－21（北から）
　　６区ＳＤ－21（西から）
図版35　ＳＤ－61・65・67・74・75・77（北から）
　　石組遺構（東から）
図版36　ＳＩ－03、ＳＫ－26・49、ＳＤ－21・67出土遺物
図版37　遺構外出土遺物（１）
図版38　遺構外出土遺物（２）
図版39　遺構外出土遺物（３）
図版40　西深掘トレンチ試料31の火山ガラス（AT）
　　西深掘トレンチ試料９の火山ガラス（Ｋ－Ah）
図版41　プラント・オパールの顕微鏡写真
図版42　花粉の顕微鏡写真
図版43　調査試料の外観
図版44　鉄滓の顕微鏡組織観察（１）
図版45　鉄滓の顕微鏡組織観察（２）
図版46　SEM像とEDX微小部分析（１）
図版47　SEM像とEDX微小部分析（２）

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

本発掘調査は、鳥取県が事業主体である一般県道米子岸本線緊急地方道路整備工事（平成12年度は一般県道米子岸本線道路改良工事）に伴い、米子市吉谷、橋本地内において実施したものである。

一般県道米子岸本線は米子市奈喜良の国道180号との合流点を起点として、同市橋本、榎原、大袋を経て、南進し、会見町天万からは東進し、岸本町大寺で国道181号と合流する路線である。

一般県道米子岸本線緊急地方道路整備工事は、米子市街地の交通渋滞の緩和と島根県から鳥取県立フラワーパークへのアクセス道路としての整備を目的としたもので、調査着手前までに米子市榎原～大袋地内において拡幅が行われている。今回の工事は米子市奈喜良、橋本地内の既存の県道は幅員が狭く、交通量の増大に対応するためには拡幅が必要であることと、国道180号バイパスや島根県能義郡伯太町へ通じる県道米子広瀬線とのアクセスを容易にするために、既存の県道を南側へ移し、県道米子広瀬線と国道180号との合流点を起点として、米子市古市、吉谷、橋本を経て、米子市榎原の既存の県道へ合流させるものである。

工事予定地は周知の遺跡として認識されてはいないが、工事予定地の北側には遺物散布地（吉谷遺跡・橋本遺跡）があり、吉谷遺跡[1]では古墳時代の竪穴住居跡が確認され、須恵器、土師器、砥石が出土している。また、平成10年度（1998年度）に橋本荒神前遺跡[2]において米子市教育委員会が行った試掘調査では弥生時代中期後葉と古墳時代前期の竪穴住居跡や９間×１間の掘立柱建物等が確認されており、弥生時代～奈良時代の集落が想定されている。また、工事予定地の北側に対峙する独立丘陵には中世の山城である橋本七尾城（橋本宝石城）があり、調査地の南側の丘陵にも曲輪状の平坦地が確認されている。また、この付近は古代山陰道が通過する候補地の１つとされており[3]、さらに、工事予定地内に徳道西、徳道といった小字名があることから、工事予定地内に古代山陰道とはいえないまでも、なんらかの道が存在する可能性がある。そこで、工事に先立ち、埋蔵文化財の保護と事業計画との調整について関係諸機関で協議がなされ、平成12年度（2000年度）に吉谷亀尾ノ上遺跡と橋本徳道西遺跡１区、平成13年度（2001年度）に橋本徳道西遺跡４区、５区において米子市教育委員会によって試掘調査が行われ、弥生時代から奈良時代にかけての遺構と遺物が確認された。これを受けて鳥取県土木部道路課及び鳥取県米子土木事務所（現鳥取県米子地方県土整備局）は米子市教育委員会と協議を行い、発掘調査を財団法人米子市教育文化事業団に委託した。調査の対象となった遺跡は、吉谷亀尾ノ上遺跡、橋本徳道西遺跡で、これにより、平成12・13年度（2000・2001年度）に財団法人米子市教育文化事業団が調査を実施した。

第２節　調査の経過と方法

吉谷亀尾ノ上遺跡、橋本徳道西遺跡は米子市吉谷、橋本に所在する縄文時代から近世に至る複合遺跡である。調査地は法勝寺川左岸に位置し、鳥取・島根県境に聳える母塚山（標高272ｍ）を頂点とする山塊から北東にのびる丘陵先端の低位台地上に立地している。現地形は全体的に南から北へ緩やかに傾斜しており、さらに、吉谷亀尾ノ上遺跡と橋本徳道西遺跡との境を頂点として東西へ緩やかに傾斜している。

調査地は調査の結果、橋本徳道西遺跡の１区・３区と２区・６区との間に谷が入り込んでおり、このことから旧地形的にはこれを境にして遺跡が２つに分けられるものと思われるが、調査前には、現地形での立地や試掘調査の出土遺物から同一の遺跡として認識していた。しかし、調査を行うにあたっては、便宜的に地名（米子市吉谷、同橋本）によって２つの遺跡に分けた。遺跡名は西から吉谷亀尾ノ上遺跡、橋本徳道西遺跡とし、調査はま

ず、吉谷亀尾ノ上遺跡から行い、その後、橋本徳道西遺跡の調査を行った。

調査は用地買収の進捗状況により、２年度３次にわたって行った。平成12年度（2000年度）には吉谷亀尾ノ上遺跡と橋本徳道西遺跡１区・２区（第１次調査）、平成13年度（2001年度）には橋本徳道西遺跡３区（第２次調査）と同４～６区（第３次調査）について調査を行った。

調査地は畑として利用されているところで、調査に先立って重機により耕作土を除去し、その後、グリッドを設定した。グリッドは調査が２年度３次にわたることから、各調査との整合を容易にするため、各調査で単独のグリッドを設定するのではなく、調査対象地全体に共通のグリッドを設定した。グリッドの設定にあたっては調査区が狭長な範囲であるため、国土座標軸にとらわれず、一直線上に並ぶNo.15～No.22の道路中心杭を主軸に10ｍ画のグリッドを設定した。南北軸は北からＡ～Ｄ、東西軸は西から１～24とした。グリッド名は北西側の杭の名称をとって呼称することとした。

平成12年度（2000年度）は吉谷亀尾ノ上遺跡と橋本徳道西遺跡１区・２区（第１次調査）の調査を行った。

吉谷亀尾ノ上遺跡は調査対象地の北側に東西にのびる道路とその法面があり、この部分については調査が不可能であるため、この部分の調査は行わなかった。

現地調査は平成12年（2000年）７月に着手した。

重機による表土剥ぎ作業は調査区が長いため、一度に行うのではなく、最初にＡ－１～４、Ｂ－１～４グリッドについて行い、この部分の調査が完了した後に残りのＡ－５～８、Ｂ－５～８、Ｃ－５～８グリッドについて表土剥ぎ作業を行い、その後にこの部分の調査を行った。

調査の最後には火山灰の層準を確認し、その分析を行った。この結果については第６章第１節に示す。

現地調査は平成12年（2000年）９月に終了した。

橋本徳道西遺跡第１次調査は調査対象地の北側に東西にのびる道路があり、さらに、調査地を南北に横断する道路と池があり、この部分については調査が不可能であるため、この部分の調査は行わなかった。また、調査を行うにあたっては、調査地を横断する道路によって調査区を２つに分け、西側を１区、東側を２区とした。

現地調査は平成12年（2000年）９月に着手し、平成12年（2000年）12月に終了した。

なお、両遺跡の調査と並行して出土遺物の整理作業を行い、平成12年（2000年）11月18日には現地説明会を開催し、遺跡を一般に公開し、多数の参加を得た。

平成13年度（2001年度）は橋本徳道西遺跡３区（第２次調査）と同４～６区（第３次調査）の調査を行った。第２次調査は平成13年（2001年）11月に着手した。

調査区名は第１次調査の続きとして３区とした。調査は排土置場がないため、調査区を東西に２つに分け、最初に東側の調査を行い、調査後これを埋め戻し、その後、この部分を排土置場として、西側の調査を行った。

現地調査は平成13年（2001年）12月に終了した。

第３次調査は平成14年（2002年）１月に着手した。

重機による表土剥ぎ作業は調査区が長いため、一度に行うのではなく、調査区を便宜的に３つ（４～６区）に分け、最初にＡ－22～24、Ｂ－22～24、Ｃ－22～24グリッド（４区）について表土剥ぎ作業を行い、この部分の調査が完了した後に次のＡ－20・21、Ｂ－20・21、Ｃ－20・21グリッド（５区）について表土剥ぎ作業を行い、その後にこの部分の調査を行った。５区の調査が完了した後に残りのＢ－15～19グリッド（６区）について表土剥ぎ作業を行い、その後にこの部分の調査を行った。調査に際して、４区と６区で古環境の推定と水田あるいは畑の存在を確認するために、プラント・オパール分析と花粉分析を行った。この結果については第６章第２節に示す。また、調査後にはラジコンヘリコプターにより空中写真撮影を行った。

現地調査は平成14年（2002年）３月に終了した。

なお、調査と並行して出土遺物の整理作業を行い、平成14年（2002年）３月30日には、第３次調査について現地説明会を開催し、遺跡を一般に公開し、多数の参加を得た。

平成14年度（2002年度）には出土遺物の整理作業を行い、調査成果をまとめ、発掘調査報告書を刊行した。

第３節　調査体制

発掘調査は下記の体制で行われた。

平成12年度

調査主体　財団法人　米子市教育文化事業団

理 事 長　森田隆朝（米子市長）

専務理事　山岡　宏（米子市教育委員会教育長）

事務局長　清間　勉

埋蔵文化財調査室

室　　長　古前勝茂（米子市教育委員会文化課長）

次　　長　矢倉紀夫

調査担当　財団法人　米子市教育文化事業団　埋蔵文化財調査室

調 査 員　高橋浩樹

臨時職員　遠本富代　篠田明子　福嶋昌子　森井あづさ

調査指導　鳥取県教育委員会　鳥取県埋蔵文化財センター　米子市教育委員会

下記の方々が発掘作業員、整理作業員として従事した。

（発掘作業員）

岩指　澄　梅林明子　浦上朱美　浦木　勲　遠崎礼子　大下醇子　大西暢昭　小川哲夫　加藤カホル　加藤晴己　倉敷みさ子　高木正之　高塚敬子　田中恵子　虎尾一明　野津正連　原　満留　平野昭子　福田　淳　前田光江　森安　堯　諸田美智栄　矢野早苗　山根久代　渡部安子

（整理作業員）

入澤美智子　梅林明子　大江由美子　大下醇子　加藤正子　近藤智子　濵田博美　細田恵美　前田光江　安江満つ美　矢野早苗　渡部安子

平成13年度

調査主体　財団法人　米子市教育文化事業団

理 事 長　森田隆朝（米子市長）

専務理事　山岡　宏（米子市教育委員会教育長）

事務局長　清間　勉

埋蔵文化財調査室

室　　長　妹澤佐智夫（米子市教育委員会文化課長）

次　　長　矢倉紀夫

調査担当　財団法人　米子市教育文化事業団　埋蔵文化財調査室

調 査 員　高橋浩樹

臨時職員　遠本富代　福嶋昌子

調査指導　鳥取県教育委員会　鳥取県埋蔵文化財センター　米子市教育委員会

下記の方々が発掘作業員、整理作業員として従事した。

（発掘作業員）

梅林明子　浦上朱美　遠崎礼子　大下醇子　小川哲夫　加藤カホル　加藤晴己　金山勢津子　倉敷　統　倉敷みさ子　西木　毅　西古江美子　高塚敬子　野津正連　長谷川　聡　原　満留　本田　修　前田光江　森安　堯　諸田美智栄

（整理作業員）

安部美登里　梅林明子　浦上朱美　加川　都　西山八重子　本田美雪　前田光江　安江満つ美

山澤由紀

平成14年度（整理作業・報告書作成）

事業主体　財団法人　米子市教育文化事業団

理 事 長　森田隆朝（米子市長：平成14年４月１日～平成14年５月27日）

山岡　宏（米子市教育委員会教育長：平成14年５月28日～）

専務理事　山岡　宏（平成14年４月１日～平成14年５月27日）

小林道正（財団法人米子市教育文化事業団　事務局長：平成14年５月28日～）

埋蔵文化財調査室

室　　長　妹澤佐智夫（米子市教育委員会文化課長）

次　　長　矢倉紀夫

事業担当　財団法人　米子市教育文化事業団　埋蔵文化財調査室

調 査 員　高橋浩樹

臨時職員　遠本富代　福嶋昌子

調査指導　鳥取県教育委員会　鳥取県埋蔵文化財センター　米子市教育委員会

下記の方々が整理作業員として従事した。

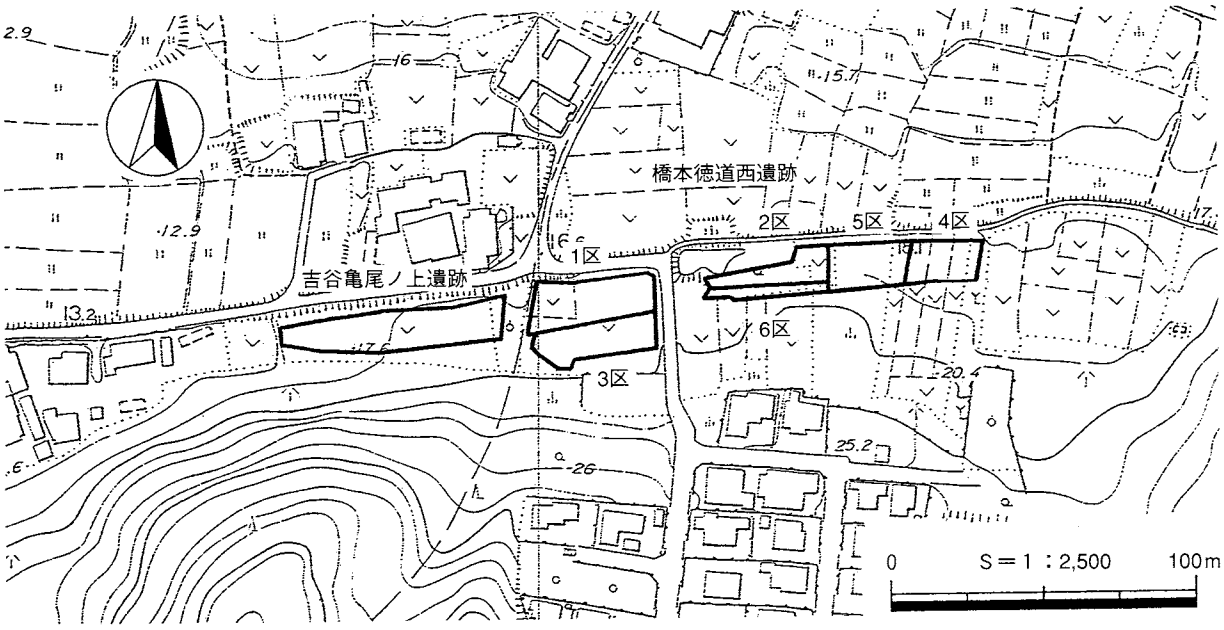
居川恵美子　植　佐知子　宇山由美子　大江由美子　野川知子　細田恵美　宮田紀子

註

1　米子市教育委員会　1994　『米子市埋蔵文化財地図』

2　下高瑞哉　1999　『米子市内遺跡発掘調査報告書』

3　中村太一　1992　「『出雲国風土記』の方位・里程記載と古代道路－意宇郡を中心として－」　『出雲古代史研究』　第二号



第１図　調査区配置図

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

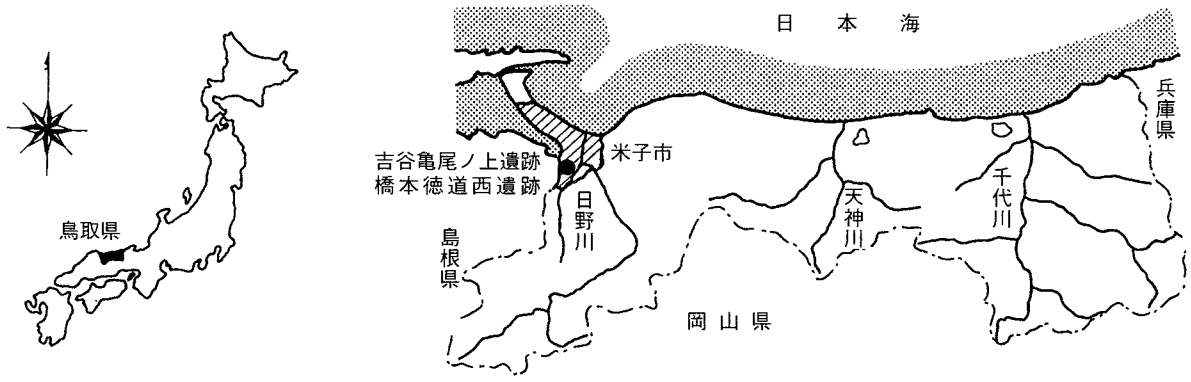
米子市は鳥取県の最西端に位置する鳥取県西部の中核都市であり、古くから「山陰の商都」と称されてきた商業都市である。

地形的には中国山地から流れる日野川の沖積作用によって形成された米子平野を中心に、それを取り囲むようにしてその周縁部には大山（標高1,729ｍ）、中国山地からつづくなだらかな山地や丘陵によって構成されている。さらに、米子平野は日野川によって形成された扇状地性の沖積湿地である日野川扇状地を中心にして、その北側の低地と発達した２条の砂州からなる日吉津低地、南西側の法勝寺川によって形成された沖積性の河谷低地である法勝寺川埋積谷低地（法勝寺平野）、西側の米子市街地の大部分をのせる米子低地（沖積地）からなっている。また、米子平野の北西には日野川からの流出土砂が北西の季節風や沿岸流の影響で堆積し、これによって形成された弓浜半島が南北にのび、その西側にはこの半島によって外海と遮断されて形成された汽水湖の中海がある。

米子市は弓浜半島南部から米子平野北部、そして大山西麓にかけて市域が拡がり、北西は境港市、北は日吉津村、東は淀江町、南東は大山町、南は岸本町、会見町、西伯町、南西は島根県能義郡伯太町、西は島根県安来市と接している。

吉谷亀尾ノ上遺跡、橋本徳道西遺跡は米子市南西部の米子市吉谷、橋本に所在する。この地は市街地から直線距離で約４㎞にある農村地帯で、南の丘陵を越えれば、西伯町と会見町、西へ約３㎞行けば島根県との県境となる。

調査地は法勝寺川左岸に位置し、鳥取・島根県境に聳える母塚山（標高272ｍ）を頂点とする山塊から北東に派生する丘陵先端裾部の低位台地上に立地している。調査地の標高は16～18ｍで、現地形は全体的に南から北へ緩やかに傾斜する台地状となっており、さらに、吉谷亀尾ノ上遺跡と橋本徳道西遺跡との境を頂点として東西に緩やかに傾斜している。



第２図　吉谷亀尾ノ上遺跡・橋本徳道西遺跡位置図

第２節　歴史的環境

縄文時代

草創期には大山北、西麓を中心に尖頭器が採集されており、米子市奈喜良遺跡[1]、会見町諸木[2]でサヌカイト製の有舌尖頭器が採集され、米子市陰田宮の谷遺跡[3]、西伯町福成石佛前遺跡[4]からもサヌカイト製の有舌尖頭器が出土している。

早期には大山西麓の台地上の小河川流域に遺跡の分布が多く見られる。米子市上福万遺跡[5]では押型文土器や石器が出土し、土坑や配石墓と考えられる集石遺構が検出されている。

一方、日野川左岸では当該期の遺跡は少なく、西伯町清水谷遺跡[6]では黄島式～高山寺式に比定される押型文土器、米子市新山山田遺跡[7]では早期中葉の押型文土器が少量出土しているのみである。

前期には大山西麓では早期から継続する遺跡が多い。一方、中海沿岸では早期末～前期初頭に集落の形成が始まり、大山西麓から海浜部の低湿地への進出が窺える。これらは中海沿岸の拠点的な集落となるものもあり、島根県美保関町崎ヶ鼻遺跡、松江市タテチョウ遺跡、西川津遺跡、米子市目久美遺跡のように中期以降も長期間継続するものもある。

この時期の周辺の遺跡には米子市目久美遺跡[8]、陰田第１遺跡[9]、陰田第７遺跡[10]、陰田第９遺跡[11]がある。目久美遺跡は縄文時代早期末～弥生時代中期の遺跡で、当該期には貝殻条痕文土器、爪形文土器、多量の石錘、動植物遺体が出土している。陰田第９遺跡では前期初頭の遺物が出土しており、轟式の影響を受けた土器も出土している。また、シカ、イノシシなどの獣骨も多く出土している。

中期には遺跡の数が減少する傾向にあり、現在のところあまり明確にされていないが目久美遺跡ではドングリ貯蔵穴が多数検出されている。また、陰田第７遺跡は前期末～中期を主体とする遺跡で、多量の石錘が出土しており、陰田第１遺跡では３基の貯蔵穴が検出されている。

後期には大山西麓や中海沿岸の低湿地に加えて米子平野南部の丘陵上にも遺跡が見られるようになる。

この時期の周辺の遺跡には米子市目久美遺跡、陰田第１遺跡、陰田第７遺跡、古市河原田遺跡[12]、古市カハラケ田遺跡、青木遺跡[13]、西伯町福成石佛前遺跡があり、古市河原田遺跡では土坑と溝、古市カハラケ田遺跡では土坑が検出され、青木遺跡では多数の落とし穴が検出されている。

晩期の遺跡は後期と同様の分布を見せ、会見町口朝金遺跡[14]では晩期前葉の土器、古市河原田遺跡では晩期後葉の突帯文土器がまとまって出土している。

晩期末になると平野部において遺跡が散見でき、これらの中には弥生時代まで継続するものもある。

この時期の周辺の遺跡には米子市目久美遺跡、青木遺跡、奈喜良遺跡、陰田第１遺跡、東宗像遺跡[15]、大袋丸山遺跡[16]、新山山田遺跡、新山下山遺跡[17]、古市河原田遺跡、西伯町福成早里遺跡[18]、福成石佛前遺跡などがある。

弥生時代

弥生時代になると海岸線が後退するとともに沖積が進み、低湿地にて農耕が開始される。

前期の遺跡には縄文時代晩期から継続あるいはこれに隣接するものが多く。中海沿岸の低湿地や扇状地端に拠点的な遺跡が形成され、河川を溯上した小平野をひかえる丘陵上にも遺跡が形成されるようになる。

目久美遺跡では低湿地水田と微高地に営む集落を形成しており、米子市長砂第１遺跡[19]でも前期後葉～中期初頭の遺構群とともに水田が確認されている。また、当地域は環濠を伴う集落が比較的集中しており、前期末～中期前葉のものには米子市尾高御建山遺跡、会見町諸木遺跡、天王原遺跡[20]、宮尾遺跡[21]、西伯町清水谷遺跡、淀江町今津岸ノ上遺跡[22]があり、いずれも断面Ｖ字状の環濠が検出されている。

この他に前期の遺跡には米子市久米第１遺跡[23]、新山山田遺跡などがある。

中期には前期の拠点的集落が継続して営まれ、農耕技術の向上、人口増加等を背景に遺跡の数が増加し、その立地範囲も拡大し、丘陵や台地上、低湿地の微高地上、高原地域にも見られるようになる。

米子市目久美遺跡、長砂第２遺跡[24]、口陰田遺跡[25]は低湿地に立地する遺跡で、目久美遺跡では中期中葉～中期後葉と中期後葉～中期末の２面の水田が検出され、長砂第２遺跡でも前期末～中期前葉、中期後葉～後期の２面の水田が検出されている。低湿地の微高地上に立地する遺跡としては米子市米子城跡下層[26]、錦町第１遺跡[27]、四日市町遺跡がある。しかし、中期後葉～後期になるとこれらの低湿地や低湿地の微高地上に立地する遺跡の多くは消滅し、これにかわって周辺の丘陵や台地上に遺跡が形成されるようになる。その背景として社会的情勢の変化等が考えられるが、目久美遺跡では後期前半に大規模な洪水によって集落及び水田が廃絶しており、自然災害的要因も影響している可能性がある。

この他に中期の遺跡には米子市久米第１遺跡、奈喜良遺跡、新山山田遺跡、吉谷上ノ原山遺跡[28]、奥谷堀越谷遺跡[29]、東宗像遺跡、西伯町清水谷遺跡などがある。

後期には前期～中期の拠点的集落は継続するものが少なく、中期後葉～後期にかけて米子市青木遺跡、福市遺跡[30]、淀江町妻木晩田遺跡、会見町・岸本町越敷山遺跡群のように新たに拠点的集落が形成される。また、この時期には遺跡は低地から低丘陵へ移動する傾向にあり、このような遺跡には米子市陰田第１遺跡、陰田第６遺跡（天坂、久幸地区）[31]、吉谷銭神遺跡、吉谷屋奈ヶ埆遺跡、西伯町福成石佛前遺跡、清水谷遺跡、北福王寺遺跡[32]などがあるが、これらは比較的短期間で廃絶する。

また、中期後葉～後期にかけて大山北西麓には環濠集落と四隅突出形墳丘墓がセットとなった遺跡が見られる。このような遺跡には米子市尾高浅山遺跡[33]、妻木晩田遺跡[34]があり、特に、妻木晩田遺跡は我国最大級の弥生集落と多数の四隅突出形墳丘墓が検出されており、これらの四隅突出形墳丘墓は山陰地域の平野部における最古のものとして注目される。

この他に後期の遺跡には米子市池ノ内遺跡[35]、奈喜良遺跡、久米第１遺跡、新山山田遺跡、吉谷上ノ原山遺跡、吉谷トコ遺跡[36]、東宗像遺跡などがあり、池ノ内遺跡では水田が検出されている。

古墳時代

前期の古墳には米子市日原６号墳[37]、会見町普段寺１号墳[38]などがある。日原６号墳は一辺21ｍの方墳で、箱形木棺３基、割竹形木棺１基、土壙墓２基が検出されている。普段寺１号墳は全長23ｍの前方後方墳で、舶載三角縁唐草文帯二神二獣鏡、碧玉製管玉、鉄剣が出土している。

青木遺跡では小形の方墳10基と円墳７基からなる古墳群とこれらとの階層差を示す方形周溝墓群が確認され、福市遺跡日焼山地区では24基からなる土壙墓群が検出されている。

この時期の集落には米子城跡第２次調査[39]、同６次調査[40]、青木遺跡、福市遺跡、諏訪西山ノ後遺跡[41]、大袋丸山遺跡、長砂第３遺跡[42]、吉谷上ノ原山遺跡、吉谷トコ遺跡、奈喜良遺跡、西伯町清水谷遺跡があり、米子城跡第２・６次調査では畿内系土器が出土している。また、池ノ内遺跡では水田が検出されている。

中期の古墳には米子市陰田41号墳[43]、水道山古墳[44]、新山山田古墳群[45]、会見町三崎殿山古墳[46]、浅井11号墳[47]、西伯町福成春日山古墳[48]、福成13号墳[49]がある。

宗像41号墳は全長32ｍの前方後円墳で、岩盤をくりぬいた特異な埋葬施設を有する。陰田41号墳は径30ｍの円墳で、若年の女性を埋葬した箱式石棺を有する。新山山田古墳群は10基からなる古墳群で、７号墳からは珠文鏡が出土している。三崎殿山古墳は全長108ｍの前方後円墳で、この地域を支配した有力な首長墓である。福成春日山古墳は全長30ｍ級の前方後円墳で、頭蓋骨を朱塗りした人骨が箱式石棺に埋葬されていた。なお、水道山古墳からは仿製斜縁八神鏡、浅井11号墳からは画文帯神獣鏡が出土している。

この時期の集落には青木遺跡、福市遺跡、奈喜良遺跡、樋ノ口第３遺跡[50]、吉谷トコ遺跡、長砂第３遺跡、新

山山田遺跡、新山研石山遺跡[51]、清水谷遺跡などがある。

後期には群集墳がつくられるようになり、木棺直葬と横穴式石室を主体とする陰田古墳群[52]、横穴式石室を主体とする宗像古墳群[53]、導入期の横穴式石室である竪穴系横口式石室と箱式石棺を主体とする東宗像古墳群[54]などがあり、この他に周辺には西伯町福成古墳群[55]、境古墳群[56]がある。

また、この地域は横穴墓の隆盛する出雲地方の影響を受けて、6世紀後半に横穴墓の築造が開始される。50基にも及ぶ鳥取県最大の米子市陰田横穴墓群[57]、大埒山横穴墓群[58]、西伯町マケン堀横穴墓群[59]などがあり、これらは後背部に墳丘を有する特色をもつ。

この時期の集落には青木遺跡、樋ノ口第4遺跡[60]、奥谷堀越谷遺跡、長砂第3遺跡、東宗像遺跡、陰田遺跡群[61]、福成早里遺跡、清水谷遺跡などがある。

飛鳥～平安時代

この時期の遺跡は法勝寺川西岸と長者原台地に多く分布している。法勝寺川西岸ではいずれも丘陵斜面を加工して平坦面をつくり、そこに掘立柱建物などを構築したもので、陰田夜坂谷遺跡[62]、陰田ハタケ谷遺跡[63]、陰田隠れが谷遺跡[64]、陰田広畑遺跡[65]、陰田宮の谷遺跡[66]、陰田第6遺跡[67]、陰田マノカンヤマ遺跡[68]、陰田荒神谷遺跡[69]、新山下山遺跡、新山研石山遺跡、新山山田遺跡、吉谷銭神遺跡[70]からは製鉄・鍛冶関連の遺構、遺物が検出されている。なかでも陰田広畑遺跡からは墨書土器、円面硯、陰田小犬田遺跡[71]からは木簡、円面硯、「館」の存在を窺わせる墨書土器、陰田マノカンヤマ遺跡、陰田荒神谷遺跡からは円面硯、陰田第6遺跡、陰田ヒチリザコ遺跡[72]からは刻書土器、吉谷銭神遺跡、新山山田遺跡からは墨書土器が出土しており、7世紀後半以降、官衙的な性格を有するようになる。また、陰田第6遺跡[73]では石敷道路が確認されており、古代山陰道の支道と考えられている。以上のことから、伯耆・出雲の国境近くに位置するこの地域は極めて重要なところであったものと考えられる。

一方、長者原台地では白鳳期の変形の法起寺式伽藍配置をもつ大寺廃寺[74]、平安時代の坂中廃寺[75]があり、これらの近くには官衙的配置をとる大形の掘立柱建物群が検出され、会見郡の郡衙あるいは駅家であると考えられる長者屋敷遺跡[76]がある。集落としては青木遺跡、樋の口第4遺跡、諏訪西山ノ後遺跡があり、樋の口第4遺跡からは石帯が出土し、諏訪西山ノ後遺跡では土師器甕に和同開珎3枚、刀子、鋤先、墨状炭化物を入れて埋納した胞衣埋納遺構が検出されている。

また、当調査地の南東約500mの米子市榎原から西伯町境に抜ける谷筋では多量の須恵器とともに瓦や緑釉陶器が採集されており、瓦窯跡の存在が想定されている。

なお、当調査地付近は古代山陰道が通過する候補地の1つとされているが、調査地の西約1.3kmに位置し、このルートが想定される古市カハラケ田遺跡ではその存在を明らかにすることができなかった。

中　　世

南北朝から戦国期の動乱を背景として米子市内には石井要害、橋本七尾城（橋本宝石城）、新山要害、戸上城、飯山城、河岡城、尾高城[77]などが築かれる。橋本七尾城は『伯耆志』によると守護山名氏の重臣行松氏が在城し、出雲からの侵攻に備えたという。

古墓は長者原台地で多く確認されており、米子市諏訪1号墳[78]、青木遺跡、別所中原地下式横穴[79]、別所長峰古墓[80]がある。諏訪1号墳、別所長峰古墓は方形の墳丘の周囲に溝を巡らせるもので、墳丘上に宝筐印塔あるいは五輪塔を立てていたものと思われる。別所中原地下式横穴では地下式の横穴墓が3基検出された。長者原台地以外では古墓は陰田第6遺跡[81]、錦町第1遺跡でも検出されている。経塚は米子市長砂町[82]と奥谷[83]で発見されているが、いずれも遺構は不明である。また、錦町第1遺跡では畠跡が検出され、米子城跡下層でも当該期の遺構、遺物が検出されており、米子城下町が形成される以前の様相も少しずつ判明している。

近世・近代

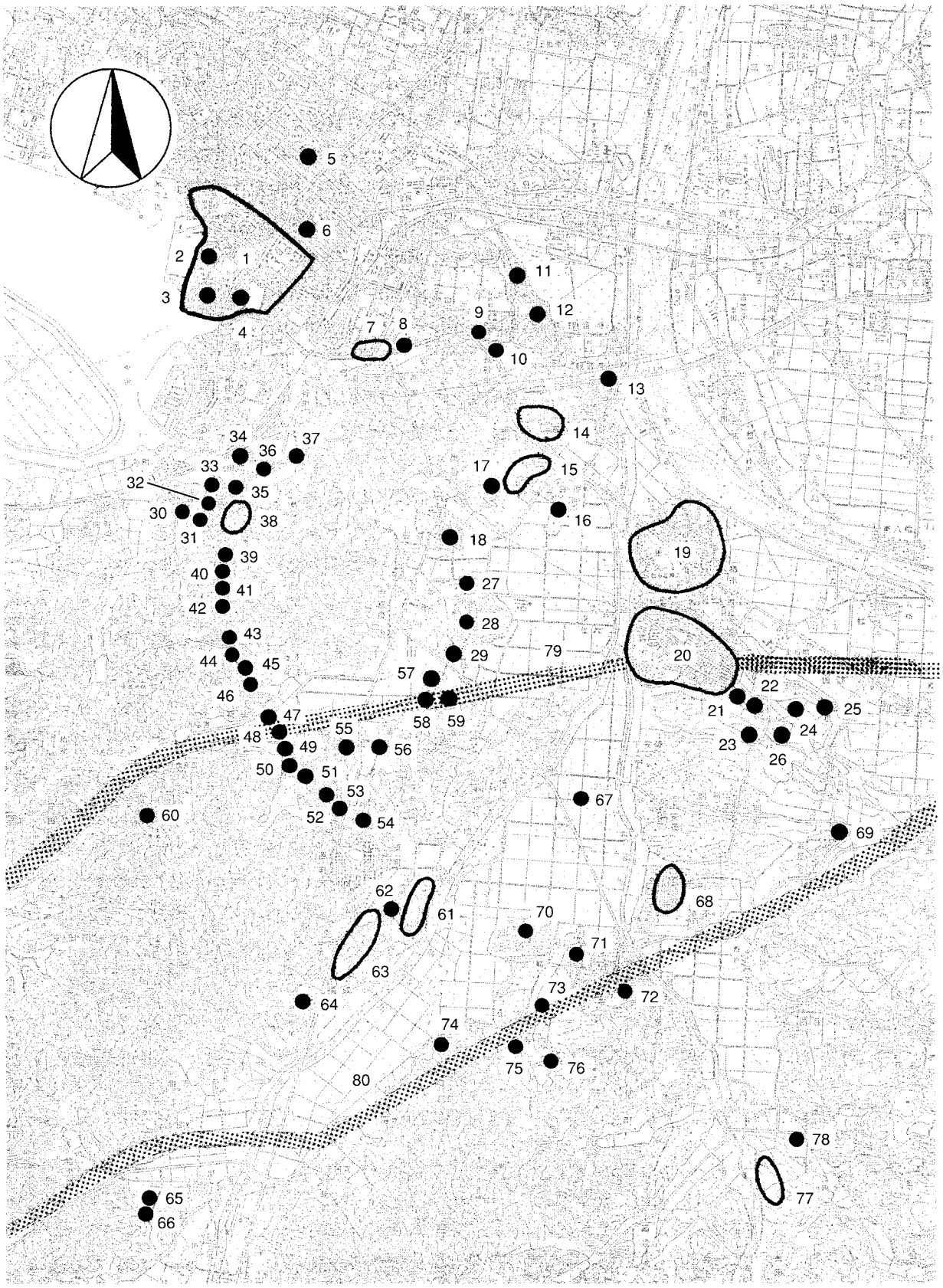
近世の城下町の米子の中心であった米子城は天正19年（1591）に東出雲・西伯耆・隠岐12万石の吉川広家によって築城が開始されるが、慶長５年（1600）には周防国岩国に転封される。かわって中村一忠が同年、伯耆18万石の領主として入城したが、慶長14年（1609）に中村家は断絶し、その後、慶長15年（1610）に加藤貞泰が伯耆国汗入・会見郡６万石を領有し、米子城主となる。やがて元和３年（1617）池田光政が因伯２国の領主となり、池田由之が米子城主となる。寛永９年（1632）の国替えによって池田光仲が鳥取藩主となると光仲の首席家老の荒尾成利が米子城を預かることとなり、その後、明治２年（1869）まで荒尾氏による自分手政治が行われた。

米子市吉谷は近世には今村と称し、また、榎原庄内にあることから、榎今村とも称した。藩政期の拝領高は142石余、本免は四ツ九分で、幕末の『六郡郷村生高竈付』には生高198石余、竈数29とあり、『伯耆志』には山林13町８反余、家数30、人数140とある。今村は明治10年（1877）に会見郡吉谷村に改称され、明治22年（1889）には会見郡成実村大字吉谷となり、昭和29年（1954）には米子市吉谷となり、現在に至っている。

米子市橋本は近世には橋本村と称した。村名の由来は『伯耆志』には、かつて南西の川（加茂川）に石橋が架けられ、この橋を渡る道は出雲富田（現島根県能義郡広瀬町）への大道であったことによるとあり、天正15・16年（1587・88）頃の『吉川広家領地付立』（吉川文書）には「橋本75貫」とみえる。藩政期の拝領高は469石余、本免は四ツ七分で、幕末の『六郡郷村生高竈付』では生高519石余、竈数45とあり、『伯耆志』には林９町６反余、家数50、人数212とある。橋本村は明治22年（1889）には会見郡成実村大字橋本となり、昭和29年（1954）には米子市橋本となり、現在に至っている。

1	米子城跡	2	久米第１遺跡	3	米子城	4	飯山城
5	錦町第１遺跡	6	四日市町遺跡	7	目久美遺跡	8	池ノ内遺跡
9	長砂第１遺跡	10	長砂第２遺跡	11	長砂第３遺跡	12	水道山古墳
13	大埼山横穴墓群	14	宗像古墳群	15	東宗像古墳群	16	日原６号墳
17	奥谷堀越谷遺跡	18	石井要害	19	福市遺跡	20	青木遺跡
21	樋ノ口第４遺跡	22	樋ノ口第３遺跡	23	別所長峰古墓	24	諏訪１号墳
25	諏訪西山ノ後遺跡	26	別所中原地下式横穴	27	奈喜良遺跡	28	橋本七尾城
29	橋本遺跡	30	陰田荒神谷遺跡	31	陰田小犬田遺跡	32	陰田ヒチリザコ遺跡
33	陰田第７遺跡	34	口陰田遺跡	35	陰田第６遺跡	36	陰田第９遺跡
37	陰田第１遺跡	38	陰田宮の谷遺跡	39	陰田広畑遺跡	40	陰田隠れが谷遺跡
41	陰田ハタケ谷遺跡	42	陰田夜坂谷遺跡	43	新山下山遺跡	44	新山研石山遺跡
45	新山山田遺跡	46	新山山田古墳群	47	古市流田遺跡	48	古市カハラケ田遺跡
49	古市河原田遺跡	50	古市コガノ木遺跡	51	古市宮ノ谷山遺跡	52	吉谷屋奈ヶ埼遺跡
53	吉谷銭神遺跡	54	吉谷中馬場山遺跡	55	吉谷上ノ原山遺跡	56	吉谷トコ遺跡
57	吉谷遺跡	**58**	**吉谷亀尾ノ上遺跡**	**59**	**橋本徳道西遺跡**	60	新山要害
61	福成早里遺跡	62	福成石佛前遺跡	63	福成古墳群	64	清水谷遺跡
65	マケン堀横穴墓群	66	北福王寺遺跡	67	大袋丸山遺跡	68	諸木遺跡
69	長者屋敷遺跡	70	三崎殿山古墳	71	宮尾遺跡	72	天万遺跡
73	天萬十井前遺跡	74	枇杷谷遺跡	75	寺内８号墳	76	普段寺１号墳
77	天王原遺跡	78	口朝金遺跡	79	古代山陰道（中村説）	80	古代山陰道（日野説）

表１　周辺遺跡一覧表



第３図　調査地及び周辺遺跡分布図

註

1 小原貴樹　1976　「奈喜良遺跡発掘調査報告」『鳥取県米子市埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ』　米子市教育委員会
2 鳥取県埋蔵文化財センター　1988　『旧石器・縄文時代の鳥取県』
3 杉谷愛象他　1998　『萱原・奥陰田Ⅱ』　（財）米子市教育文化事業団
4 松本哲他　1993　『福成石佛前遺跡』　西伯町教育委員会
5 長岡充展他　1985　『上福万遺跡・日下遺跡・石州府第１遺跡・石州府古墳群』　（財）鳥取県教育文化財団
北浦弘人他　1986　『上福万遺跡Ⅱ』　（財）鳥取県教育文化財団
6 松本哲他　1992　『清水谷遺跡』　西伯町教育委員会
7 杉谷愛象他　1994　『萱原・奥陰田Ⅰ』　（財）米子市教育文化事業団
8 小原貴樹他　1986　『日久美遺跡』　米子市教育委員会
9 杉谷愛象他　1984　『陰田』　米子市教育委員会
10 杉谷愛象他　1984　『陰田』　米子市教育委員会
11 杉谷愛象他　1984　『陰田』　米子市教育委員会
12 濱田竜彦他　1999　『古市遺跡群１』　（財）鳥取県教育文化財団
13 清水真一他　1976　『青木遺跡発掘調査報告書Ⅰ』　鳥取県教育委員会
清水真一他　1977　『青木遺跡発掘調査報告書Ⅱ』　鳥取県教育委員会
清水真一他　1978　『青木遺跡発掘調査報告書Ⅲ』　鳥取県教育委員会
14 吾郷信一他　1988　『口朝金遺跡』　会見町教育委員会
15 園俊朗他　1985　『東宗像遺跡』　（財）鳥取県教育文化財団
16 下高瑞哉　1991　『大袋丸山遺跡』　米子市教育委員会
17 杉谷愛象他　1994　『萱原・奥陰田Ⅰ』　（財）米子市教育文化事業団
18 北浦弘人他　1998　『福成早里遺跡』　（財）鳥取県教育文化財団
19 小原貴樹他　1990　『長砂第１・２遺跡』　米子市教育委員会
20 岡田龍平他　1993　『天王原遺跡発掘調査報告書』　会見町教育委員会
21 岡田龍平他　1982　「宮尾遺跡」『宮尾遺跡　天万遺跡発掘調査報告書』　会見町教育委員会
22 中山和之　1991　『今津岸ノ上遺跡』　淀江町教育委員会
23 杉谷愛象他　1989　『久米第１遺跡』　米子市教育委員会
24 小原貴樹他　1990　『長砂第１・２遺跡』　米子市教育委員会
25 永田祥一　1956　「米子市口陰田遺跡」『ひすい』25　佐々木古代文化研究室
26 高橋浩樹　1996　『米子城跡７遺跡』　（財）米子市教育文化事業団
湯村功他　1982　『米子城跡21遺跡』　（財）鳥取県教育文化財団
高橋浩樹　1999　『米子城跡　第25次調査』　（財）米子市教育文化事業団
27 平木裕子　1996　『錦町第１遺跡』　（財）米子市教育文化事業団
28 吾郷信一　1992　『吉谷上ノ原山遺跡』　米子市教育委員会
29 吾郷信一　1992　『奥谷堀越谷遺跡』　米子市教育委員会
30 大村俊夫他　1966　『福市遺跡　鳥取県米子市福市（吉塚地区）発掘調査報告書』　米子市教育委員会　米子市福市遺跡調査団
31 杉谷愛象他　1984　『陰田』　米子市教育委員会
32 松本哲他　1990　『マケン堀古墳群　北福王寺遺跡』　西伯町教育委員会
33 下高瑞哉　1994　「鳥取県米子市尾高浅山遺跡」『日本考古学年報』45　日本考古学協会
34 岩田文章他　2000　『妻木晩田遺跡　洞ノ原地区・晩田山古墳群　発掘調査報告書』　淀江町教育委員会
松本哲他　2000　『妻木晩田遺跡発掘調査報告』　大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団　大山町教育委員会
35 小原貴樹他　1986　『池ノ内遺跡』　米子市教育委員会
36 藤原裕子　1994　『吉谷トコ遺跡』　（財）米子市教育文化事業団
37 小原貴樹他　1978　『日原６号墳発掘調査報告』　米子市教育委員会
38 佐々木謙　1972　「古墳時代とその文化　伯耆の主な古墳群」『鳥取県史第１巻　原始・古代』　鳥取県
会見町誌続編編さん企画委員会　1995　『会見町誌続編』　会見町
39 杉谷愛象　1994　『米子城跡２』　米子市教育委員会
40 湯村功他　1996　『米子城跡６遺跡』　（財）鳥取県教育文化財団

41　小原貴樹他　1982　「諏訪西山ノ後遺跡」『諏訪遺跡群発掘調査報告書Ⅲ』　米子市教育委員会
42　平木裕子他　1998　『長砂第３・４遺跡』　（財）米子市教育文化事業団
　　平木裕子他　1999　『長砂第３遺跡』　（財）米子市教育文化事業団
43　杉谷愛象他　1984　『陰田』　米子市教育委員会
44　佐々木謙　1972　「古墳時代とその文化　伯耆の主な古墳群」『鳥取県史第１巻　原始・古代』　鳥取県
45　杉谷愛象他　1994　『萱原・奥陰田Ⅰ』　（財）米子市教育文化事業団
46　佐々木謙　1972　「古墳時代とその文化　伯耆の主な古墳群」『鳥取県史第１巻　原始・古代』　鳥取県
　　会見町文化財保護審議会委員　1987　『ふるさとの史跡めぐり』　会見町教育委員会
47　会見町誌続編編さん企画委員会　1995　『会見町誌続編』　会見町
48　西伯町誌編纂委員会　1975　『西伯町誌』
49　西伯町誌編纂委員会　1975　『西伯町誌』
50　小原貴樹他　1981　「樋ノ口第３遺跡」『諏訪遺跡群発掘調査報告書Ⅰ』　米子市教育委員会
51　杉谷愛象他　1994　『萱原・奥陰田Ⅰ』　（財）米子市教育文化事業団
52　杉谷愛象他　1984　『陰田』　米子市教育委員会
53　佐々木謙　1972　「古墳時代とその文化　伯耆の主な古墳群」『鳥取県史第１巻　原始・古代』　鳥取県
54　園俊朗他　1985　『東宗像遺跡』　（財）鳥取県教育文化財団
55　西伯町誌編纂委員会　1975　『西伯町誌』
56　西伯町誌編纂委員会　1975　『西伯町誌』
57　杉谷愛象他　1984　『陰田』　米子市教育委員会
58　中原斉他　1987　『大塔山横穴墓群』　（財）鳥取県教育文化財団
59　松本哲他　1990　『マケン堀古墳群　北福王寺遺跡』　西伯町教育委員会
60　小原貴樹他　1981　「樋ノ口第４遺跡」『諏訪遺跡群発掘調査報告書Ⅰ』　米子市教育委員会
61　杉谷愛象他　1998　『萱原・奥陰田Ⅱ』　（財）米子市教育文化事業団
62　杉谷愛象他　1998　『萱原・奥陰田Ⅱ』　（財）米子市教育文化事業団
63　杉谷愛象他　1998　『萱原・奥陰田Ⅱ』　（財）米子市教育文化事業団
64　杉谷愛象他　1998　『萱原・奥陰田Ⅱ』　（財）米子市教育文化事業団
65　杉谷愛象他　1998　『萱原・奥陰田Ⅱ』　（財）米子市教育文化事業団
66　杉谷愛象他　1998　『萱原・奥陰田Ⅱ』　（財）米子市教育文化事業団
67　杉谷愛象他　1998　『萱原・奥陰田Ⅱ』　（財）米子市教育文化事業団
68　北浦弘人他　1996　『陰田遺跡群』　（財）鳥取県教育文化財団
69　北浦弘人他　1996　『陰田遺跡群』　（財）鳥取県教育文化財団
70　佐伯純也　2001　『吉谷銭神遺跡Ⅰ』　（財）米子市教育文化事業団
71　北浦弘人他　1996　『陰田遺跡群』　（財）鳥取県教育文化財団
72　北浦弘人他　1996　『陰田遺跡群』　（財）鳥取県教育文化財団
73　杉谷愛象他　1998　『萱原・奥陰田Ⅱ』　（財）米子市教育文化事業団
74　遠藤喜己他　1977　『大寺廃寺第四次発掘調査報告書』　岸本町教育委員会
　　妹尾善夫他　1994　『大寺廃寺発掘調査報告書（第６次）』　岸本町教育委員会
　　赤見高好　1998　「大寺廃寺第７次調査」『平成８，９年度　町内遺跡発掘調査報告書』　岸本町教育委員会
　　赤見高好　2000　「大寺廃寺第７次調査Ⅱ」『平成10，11年度　町内遺跡発掘調査報告書』　岸本町教育委員会
75　鳥取県埋蔵文化財センター　1989　『歴史時代の鳥取県』
76　富長源十郎　1982　『長者原遺跡群発掘調査報告書』　岸本町教育委員会
77　小原貴樹他　1978　『尾高城址』　尾高城址発掘調査団　米子市教育委員会
　　小原貴樹他　1979　『尾高城址Ⅱ』　尾高城址発掘調査団　米子市教育委員会
78　小原貴樹他　1982　『諏訪遺跡群発掘調査報告書Ⅱ』　米子市教育委員会
79　小原貴樹他　1982　『諏訪遺跡群発掘調査報告書Ⅱ』　米子市教育委員会
80　小原貴樹他　1982　『諏訪遺跡群発掘調査報告書Ⅱ』　米子市教育委員会
81　杉谷愛象他　1984　『陰田』　米子市教育委員会
82　鳥取県埋蔵文化財センター　1989　『歴史時代の鳥取県』
83　佐々木謙　1955　「米子市奥谷の経筒」『ひすい』12　佐々木古代文化研究室

第３章　吉谷亀尾ノ上遺跡の調査

第１節　遺跡の概要

吉谷亀尾ノ上遺跡は米子市吉谷字亀尾ノ上に所在し、標高16～18ｍの低位台地の西側縁辺部に立地する。現況は畑・柿畑となっており、北側は道路によって大きくカットされ、崖面を形成している。

調査地は、Ｂ－４～８グリッドの南側及びＣ－４～８グリッドでは畑の耕作によって削平を受けているため、この部分は耕作土直下が基盤層となっているが、これ以外の部分は北側と西側に緩やかに傾斜する谷状地形を呈しているため、比較的堆積土が遺存しており、調査区西側の基本層序は現地表面から現耕作土及び旧耕作土（第１層）、暗黒灰色粘質土（第２層）、暗茶灰色土（第３層）、淡褐色土（第４層）、基盤層（第５層）となっている。第１層は現代の耕作土（第１－１層）と近世以降と思われる旧耕作土（第１－２層）に分けられ、第２層は主に弥生時代中期と古墳時代前期の遺物を包含する。第３層はほとんど遺物を包含しておらず、第４層は基盤層に起因する堆積土であると考えられ、主に弥生時代中期と古墳時代前期の遺物を包含する。

なお、遺構は第４層が遺存している部分では第４層上面で検出したが、第４層が削平されている部分では基盤層（第５層）上面で検出した。

検出した遺構は竪穴住居跡18棟、掘立柱建物１棟、土坑６基、溝状遺構４条、ピット600基、炭焼窯１基である。

第２節　検出した遺構と遺物

１．竪穴住居跡

ＳＩ－02～08・17（第７図～第11図）

ＳＩ－02～08・17は調査区中央のＢ－５・６グリッドに位置し、標高15.8～17.8ｍの北西に緩やかに傾斜する斜面に立地する。８棟の住居跡が重複しており、切り合い関係から古い順にＳＩ－06→ＳＩ－03→ＳＩ－04→ＳＩ－05→ＳＩ－07→ＳＩ－02の新旧関係が考えられる。なお、ＳＩ－08とＳＩ－17はこの新旧関係における詳細な位置付けは不明であるが、切り合い関係からＳＩ－17はＳＩ－05よりも古いものと考えられる。

各住居跡の時期はＳＩ－02が弥生時代中期後葉である以外は不明であるが、これらは切り合い関係から弥生時代中期後葉以前のものであると考えられる。

ＳＩ－02

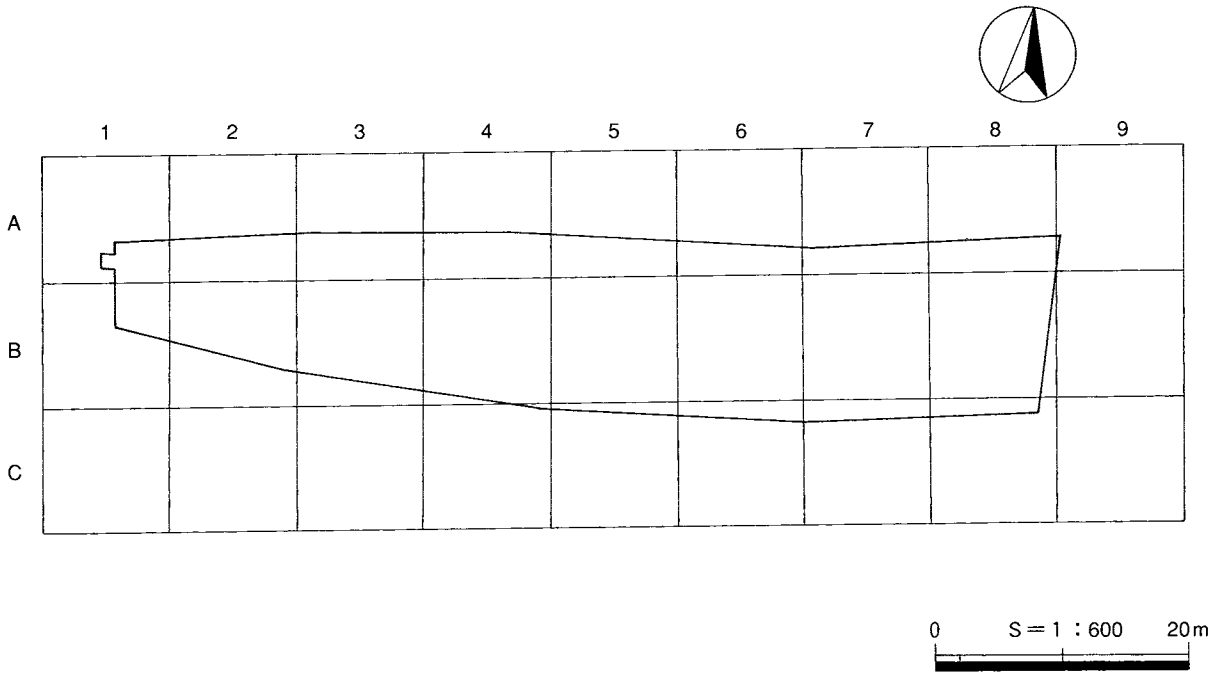
ＳＩ－02は北側が削平されているが、南側はＳＩ－03・04・05・07を切っている。

平面形態は円形を呈し、規模は径5.8ｍで、壁高は最も遺存状態のよい東壁で0.3ｍをはかる。

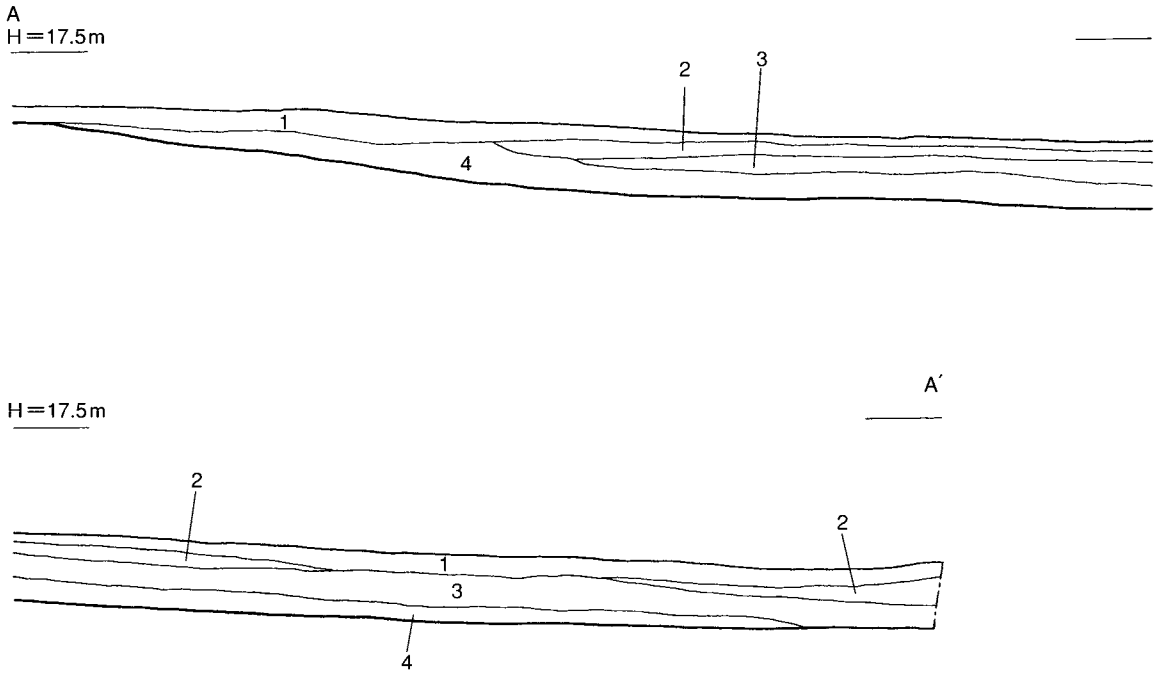
主柱穴はＰ－20～Ｐ－24の５基で、各々の規模はＰ－20（42×36－32）㎝、Ｐ－21（37×37－60）㎝、Ｐ－22（36×36－67）㎝、Ｐ－23（32×30－60）㎝、Ｐ－24（47×47－５）㎝をはかる。柱間距離はＰ－20～Ｐ－21は2.2ｍ、Ｐ－21～Ｐ－22は2.1ｍ、Ｐ－22～Ｐ－23は2.3ｍ、Ｐ－23～Ｐ－24は2.3ｍ、Ｐ－24～Ｐ－20は2.3ｍである。北側を除く壁には周壁溝が巡っており、その規模は幅0.1～0.4ｍ、深さ0.1～0.2ｍをはかる。

また、住居跡のほぼ中央には中央ピットがあり、規模は115×93㎝、床面からの深さ29㎝をはかる。

遺物は弥生土器（１～５）が出土した。１～３は甕で、１は口縁がく字状に外反し、胴部外面下部には貝殻腹縁による刺突文が施されている。２の口縁端部には３条の凹線が巡り、３の口縁端部には２条の凹線、頸部外面



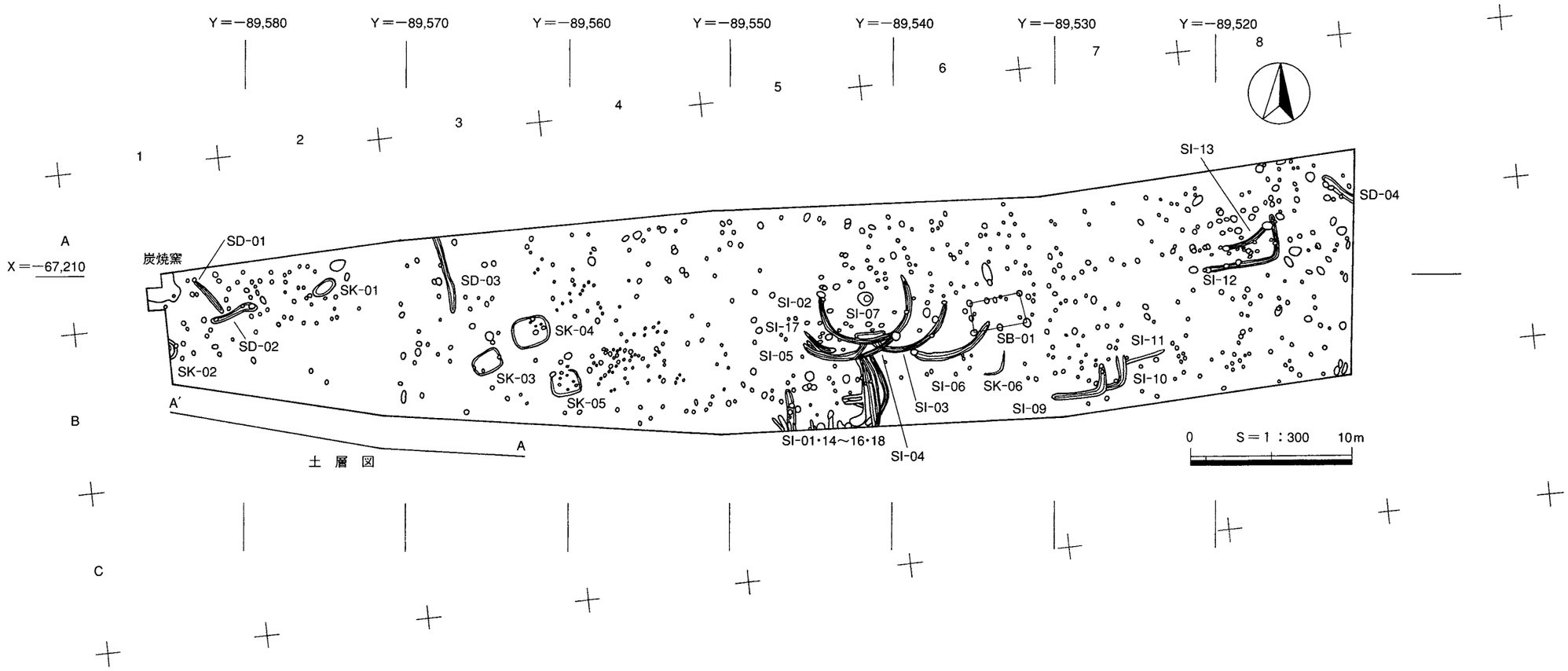
第４図　グリッド設定図



1　暗茶灰色粘質土（第１－１層：現耕作土）
2　灰褐色粘質土（第１－２層：旧耕作土）
3　暗黒灰色粘質土（第２層：遺物包含層）
4　暗茶灰色土（第３層）

0　S＝1：80　2 m

第５図　土層図


Y＝−89,580
Y＝−89,570
Y＝−89,560
Y＝−89,550
Y＝−89,540
Y＝−89,530
Y＝−89,520
1
2
3
4
5
6
7
8
A
X＝−67,210
B
C
炭焼窯
SD-01
SD-02
SD-03
SD-04
SK-01
SK-02
SK-03
SK-04
SK-05
SK-06
SI-01・14～16・18
SI-02
SI-03
SI-04
SI-05
SI-06
SI-07
SI-09
SI-10
SI-11
SI-12
SI-13
SI-17
SB-01
A′
A
土 層 図
0
S＝1：300
10m

第６図　遺構配置図

には指頭圧痕突帯が巡っている。４、５は底部である。

時期は出土遺物から弥生時代中期後葉頃のものと考えられる。

ＳＩ－03

ＳＩ－03は南側が残存するのみで、西側はＳＩ－02・04・07に切られているが、東側はＳＩ－06を切っている。

平面形態は円形を呈するものと思われ、規模は径6.6ｍで、壁高は最も遺存状態のよい東壁で0.2ｍをはかる。

主柱穴はＰ－１～Ｐ－６の６基で、各々の規模はＰ－１（44×40－５）㎝、Ｐ－２（46×61－47）㎝、Ｐ－３（70×54－59）㎝、Ｐ－４（52×61－16）㎝、Ｐ－５（44×38－60）㎝、Ｐ－６（37×32－48）㎝をはかる。柱間距離はＰ－１～Ｐ－２は2.3ｍ、Ｐ－２～Ｐ－３は2.2ｍ、Ｐ－３～Ｐ－４は2.3ｍ、Ｐ－４～Ｐ－５は2.3ｍ、Ｐ－５～Ｐ－６は2.4ｍ、Ｐ－６～Ｐ－１は2.6ｍである。南側と東側の壁には周壁溝が巡っており、その規模は幅0.2～0.3ｍ、深さ0.1～0.2ｍをはかる。

遺物は図示できないが、弥生土器が出土した。

時期は出土遺物と切り合い関係から弥生時代中期後葉以前のものと考えられる。

ＳＩ－04

ＳＩ－04は南側が残存するのみで、南側はＳＩ－01・14・15・16、西側はＳＩ－05、北側はＳＩ－02に切られているが、東側はＳＩ－03を切っている。

平面形態は円形を呈するものと思われ、規模は径6.6ｍをはかる。

主柱穴はＰ－７～Ｐ－11の５基で、各々の規模はＰ－７（40×37－52）㎝、Ｐ－８（28×32－47）㎝、Ｐ－９（34×33－61）㎝、Ｐ－10（51×45－62）㎝、Ｐ－11（26×26－62）㎝をはかる。柱間距離はＰ－７～Ｐ－８は2.7ｍ、Ｐ－８～Ｐ－９は3.3ｍ、Ｐ－９～Ｐ－10は2.6ｍ、Ｐ－10～Ｐ－11は2.7ｍ、Ｐ－11～Ｐ－７は2.5ｍである。南壁には周壁溝が巡っており、その規模は幅0.1～0.3ｍ、深さ0.1～0.2ｍをはかる。

遺物は図示できないが、弥生土器が出土した。

時期は出土遺物と切り合い関係から弥生時代中期後葉以前のものと考えられる。

ＳＩ－05

ＳＩ－05は南側が残存するのみで、北側はＳＩ－02・07に切られているが、東側はＳＩ－04、西側はＳＩ－17を切っている。

平面形態は円形を呈するものと思われ、規模は径6.2ｍで、壁高は最も遺存状態のよい南壁で0.1ｍをはかる。

主柱穴はＰ－12～Ｐ－14の３基を確認し、各々の規模はＰ－12（24×25－19）㎝、Ｐ－13（26×25－23）㎝、Ｐ－14（28×34－13）㎝をはかる。柱間距離はＰ－12～Ｐ－13は1.5ｍ、Ｐ－13～Ｐ－14は1.5ｍである。南壁には周壁溝が巡っており、その規模は幅0.2～0.4ｍ、深さ0.1ｍをはかる。

遺物は弥生土器（６）が出土した。

時期は出土遺物と切り合い関係から弥生時代中期後葉以前のものと考えられる。

ＳＩ－06

ＳＩ－06は南側が残存するのみで、さらに西側はＳＩ－03に切られている。

平面形態は円形を呈するものと思われ、規模は径7.2ｍで、壁高は最も遺存状態のよい南壁で0.1ｍをはかる。

主柱穴は確認できなかったが、南壁には周壁溝が巡っており、その規模は幅0.2～0.7ｍ、深さ0.1ｍをはかる。

遺物は出土しなかったが、時期は切り合い関係から弥生時代中期後葉以前のものと考えられる。

ＳＩ－07

ＳＩ－07は南側の周壁溝の一部が残存するのみで、さらにＳＩ－02に切られているが、ＳＩ－03・04・05を切るものと思われる。

平面形態は円形を呈するものと思われ、規模は径6.2ｍが想定され、周壁溝は幅0.3～0.4ｍ以上、深さ0.1ｍをはかる。

主柱穴はＰ－15～Ｐ－19の５基で、各々の規模はＰ－15（25×28－８）㎝、Ｐ－16（26×24－23）㎝、Ｐ－17（28×22－36）㎝、Ｐ－18（22×22－11）㎝、Ｐ－19（48×49－73）㎝をはかる。柱間距離はＰ－15～Ｐ－16は2.7ｍ、Ｐ－16～Ｐ－17は2.6ｍ、Ｐ－17～Ｐ－18は2.8ｍ、Ｐ－18～Ｐ－19は2.5ｍ、Ｐ－19～Ｐ－15は2.7ｍである。

遺物は出土しなかったが、時期は切り合い関係から弥生時代中期後葉以前のものと考えられる。

ＳＩ－08

ＳＩ－08は東側の周壁溝の一部が残存するのみで、平面形態及び規模は不明である。周壁溝は幅0.2～0.4ｍ、深さ0.1ｍをはかる。主柱穴は確認できなかった。

遺物は図示できないが、弥生土器あるいは土師器が出土した。時期は不明である。

ＳＩ－17

ＳＩ－17は南側の周壁溝の一部が残存するのみで、さらにＳＩ－05に切られている。

平面形態は円形を呈するものと思われ、規模は不明であるが、周壁溝は幅0.1～0.2ｍ、深さ0.1ｍをはかる。

遺物は出土しなかったが、時期は切り合い関係から弥生時代中期後葉以前のものと考えられる。

ＳＩ－09～11（第12図～第14図）

ＳＩ－09～11は調査区東側のＢ－７、Ｃ－７グリッドに位置し、標高17.7～18.3ｍのほぼ平坦面に立地する。３棟の住居跡が重複しており、切り合い関係から古い順にＳＩ－11→ＳＩ－10→ＳＩ－09の新旧関係が考えられる。

ＳＩ－09

ＳＩ－09は東側と南側の周壁溝の一部が残存するのみで、東側はＳＩ－10を切っている。

平面形態は方形を呈するものと思われ、規模は一辺約5.5ｍが想定され、周壁溝は幅0.3～0.4ｍ、深さ0.1ｍをはかる。

主柱穴はＰ－５～Ｐ－７の３基を確認し、各々の規模はＰ－５（46×40－17）㎝、Ｐ－６（24×26－11）㎝、Ｐ－７（36×30－71）㎝をはかる。柱間距離はＰ－５～Ｐ－６は2.4ｍ、Ｐ－６～Ｐ－７は2.3ｍである。

遺物は図示できないが、土師器が出土した。

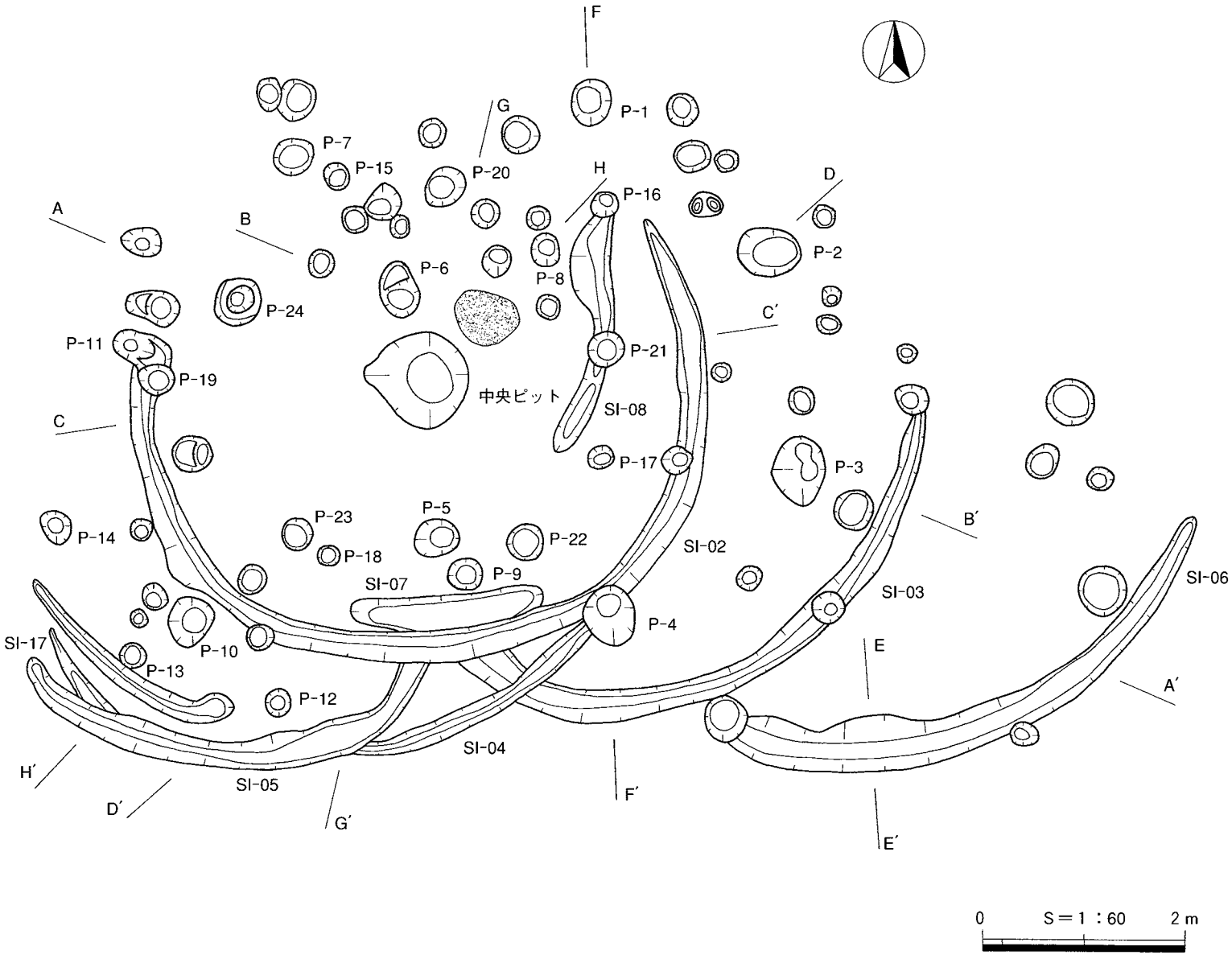
時期は切り合い関係からＳＩ－10よりも新しいものと考えられる。

ＳＩ－10

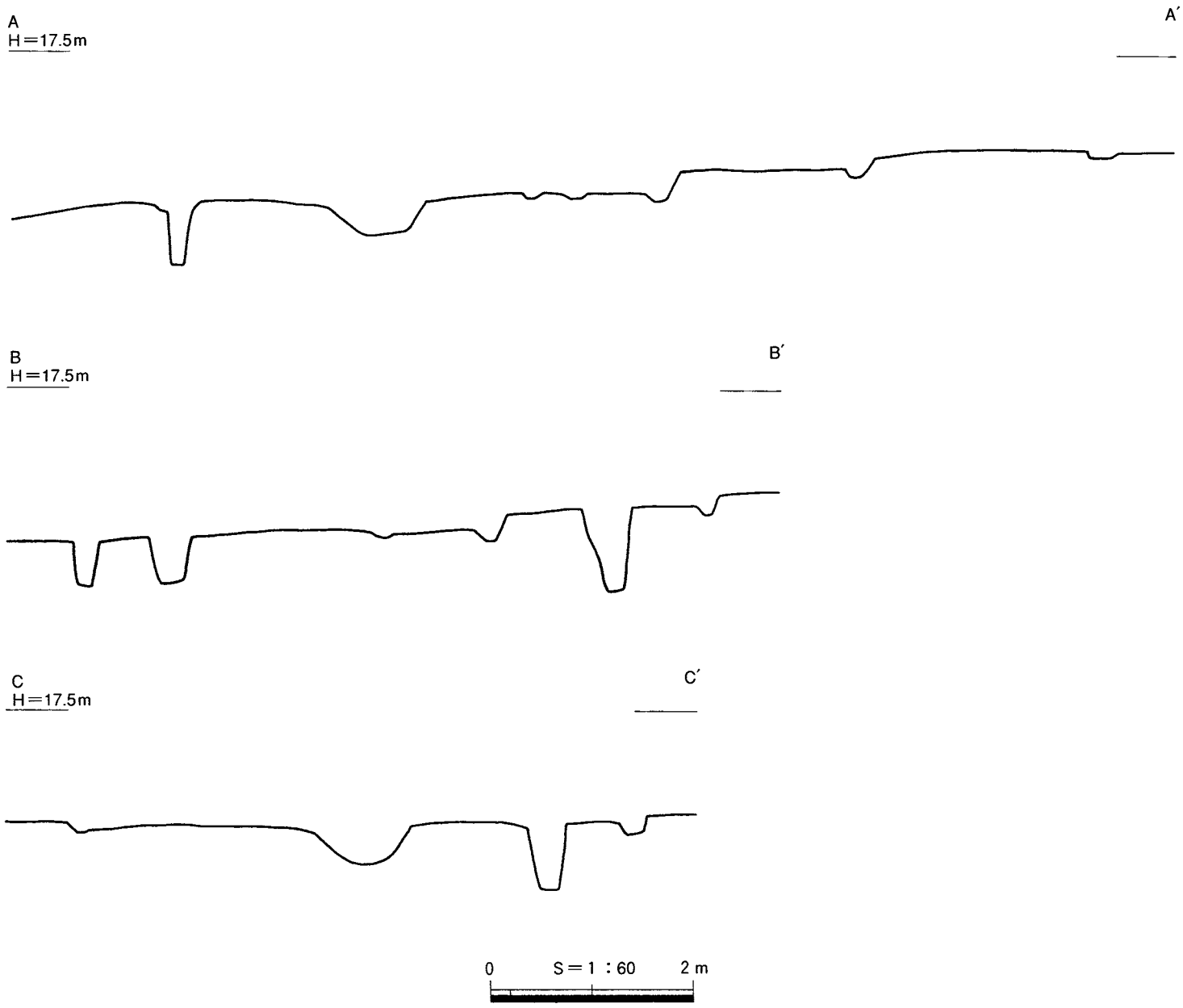
ＳＩ－10は東側と南側の周壁溝の一部が残存するのみで、西側はＳＩ－09に切られているが、東側はＳＩ－11を切っている。

平面形態は方形を呈するものと思われ、規模は一辺約6.0ｍが想定され、周壁溝は幅0.3～0.6ｍ、深さ0.1ｍをはかる。

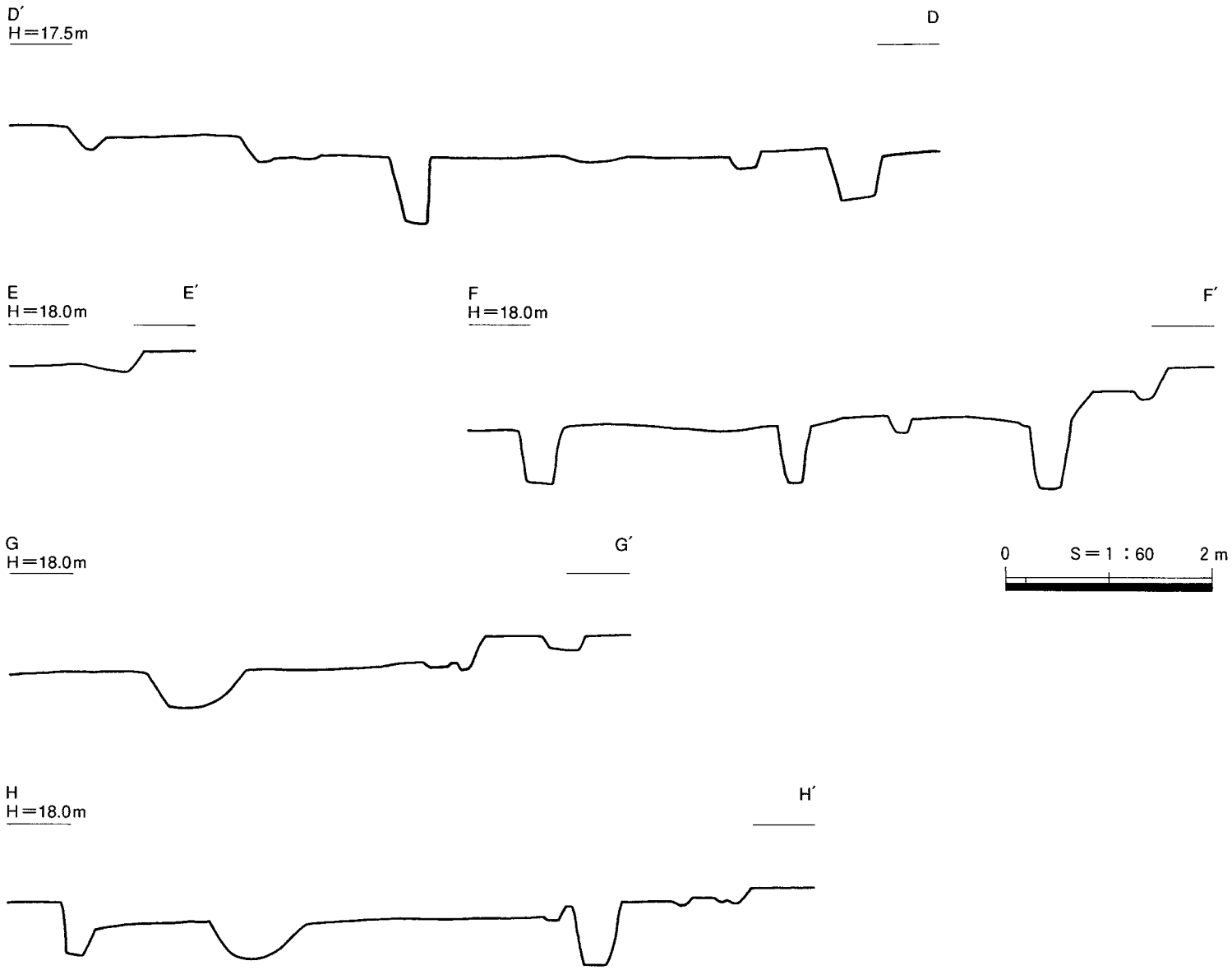
主柱穴はＰ－１～Ｐ－４の４基で、各々の規模はＰ－１（31×29－20）㎝、Ｐ－２（25×30－57）㎝、Ｐ－３（36×32－109）㎝、Ｐ－４（40×31－22）㎝をはかる。柱間距離はＰ－１～Ｐ－２は2.8ｍ、Ｐ－２～Ｐ－３は2.9ｍ、Ｐ－３～Ｐ－４は2.7ｍ、Ｐ－４～Ｐ－１は3.1ｍである。



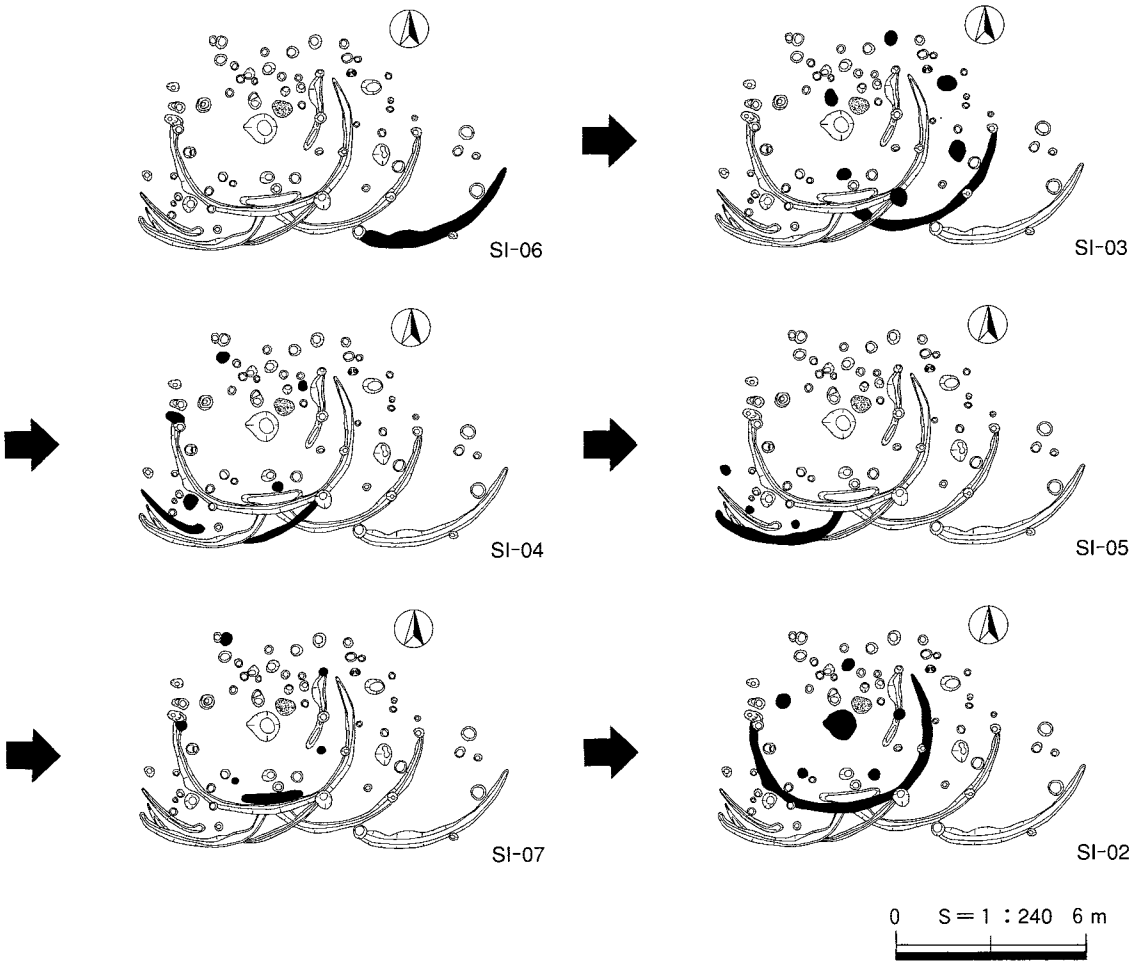
第７図　ＳＩ―02～08・17遺構図（１）



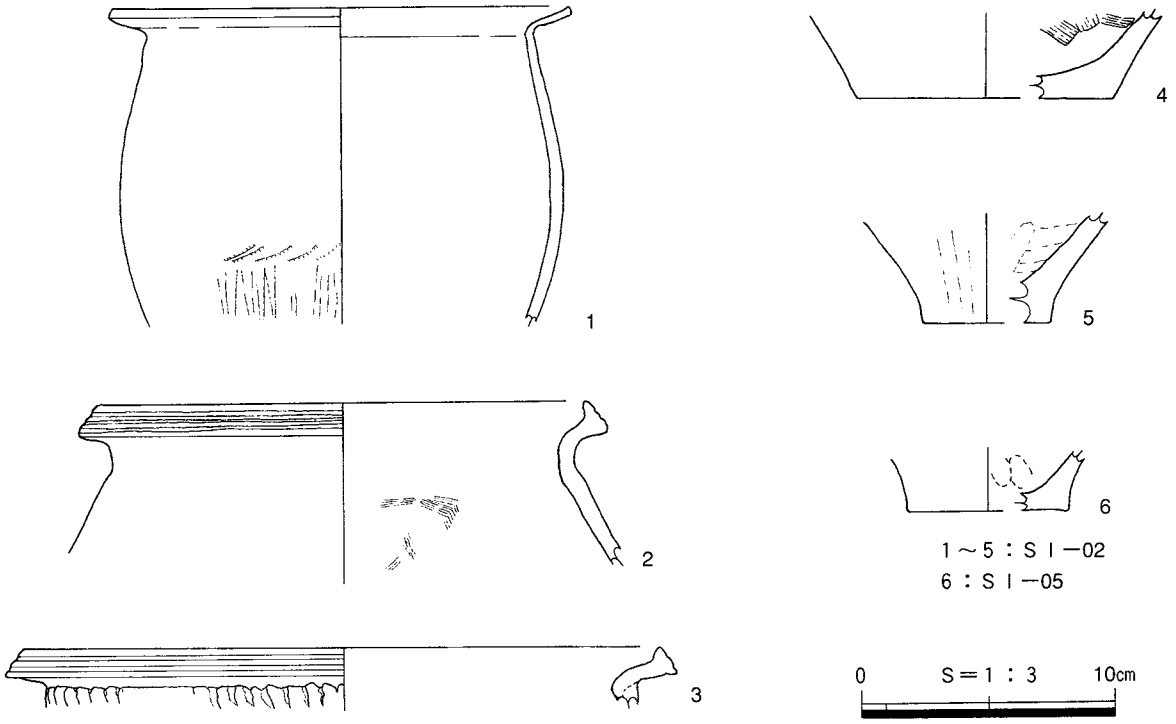
第８図　ＳＩ―02～08・17遺構図（２）



第９図　ＳＩ―02～08・17遺構図（３）



第10図　ＳＩ―02～08・17変遷図



第11図　ＳＩ―02・05出土遺物実測図

遺物は周壁溝から土師器（７）が出土した。７は甕で、口縁がく字状に外反する。
時期は出土遺物から古墳時代中期後葉～後期頃のものと考えられる。

ＳＩ－11

ＳＩ－11は南側の周壁溝の一部が残存するのみで、さらに西側はＳＩ－10に切られている。
平面形態は方形を呈するものと思われ、規模は一辺2.7ｍ以上で、周壁溝は幅0.2ｍ以上、深さ0.1ｍをはかる。主柱穴は確認できなかった。
遺物は出土しなかったが、時期は切り合い関係からＳＩ－10よりも古いものと考えられる。

ＳＩ－12・13（第15図）

ＳＩ－12・13は調査区東側のＢ－８グリッドに位置し、標高17.8～18.2ｍのほぼ平坦面に立地する。２棟の住居跡が重複しており、切り合い関係は不明であるが、平面形態からＳＩ－13→ＳＩ－12の新旧関係が考えられる。

ＳＩ－12

ＳＩ－12は南側と東側の周壁溝の一部が残存するのみである。
平面形態は方形を呈するものと思われ、規模は一辺約5.9ｍが想定され、周壁溝は幅0.2～0.3ｍ、深さ0.1ｍをはかる。
主柱穴はＰ－１～Ｐ－３の３基を確認し、各々の規模はＰ－１（28×24－11）㎝、Ｐ－２（18×20－53）㎝、Ｐ－３（20×18－27）㎝をはかる。柱間距離はＰ－１～Ｐ－２は2.9ｍ、Ｐ－２～Ｐ－３は3.1ｍである。
遺物は周壁溝から弥生土器、土師器（８、９）が出土した。８は注口土器の注口部、９は高坏の脚部である。
時期は出土遺物から古墳時代前期頃のものと考えられる。

ＳＩ－13

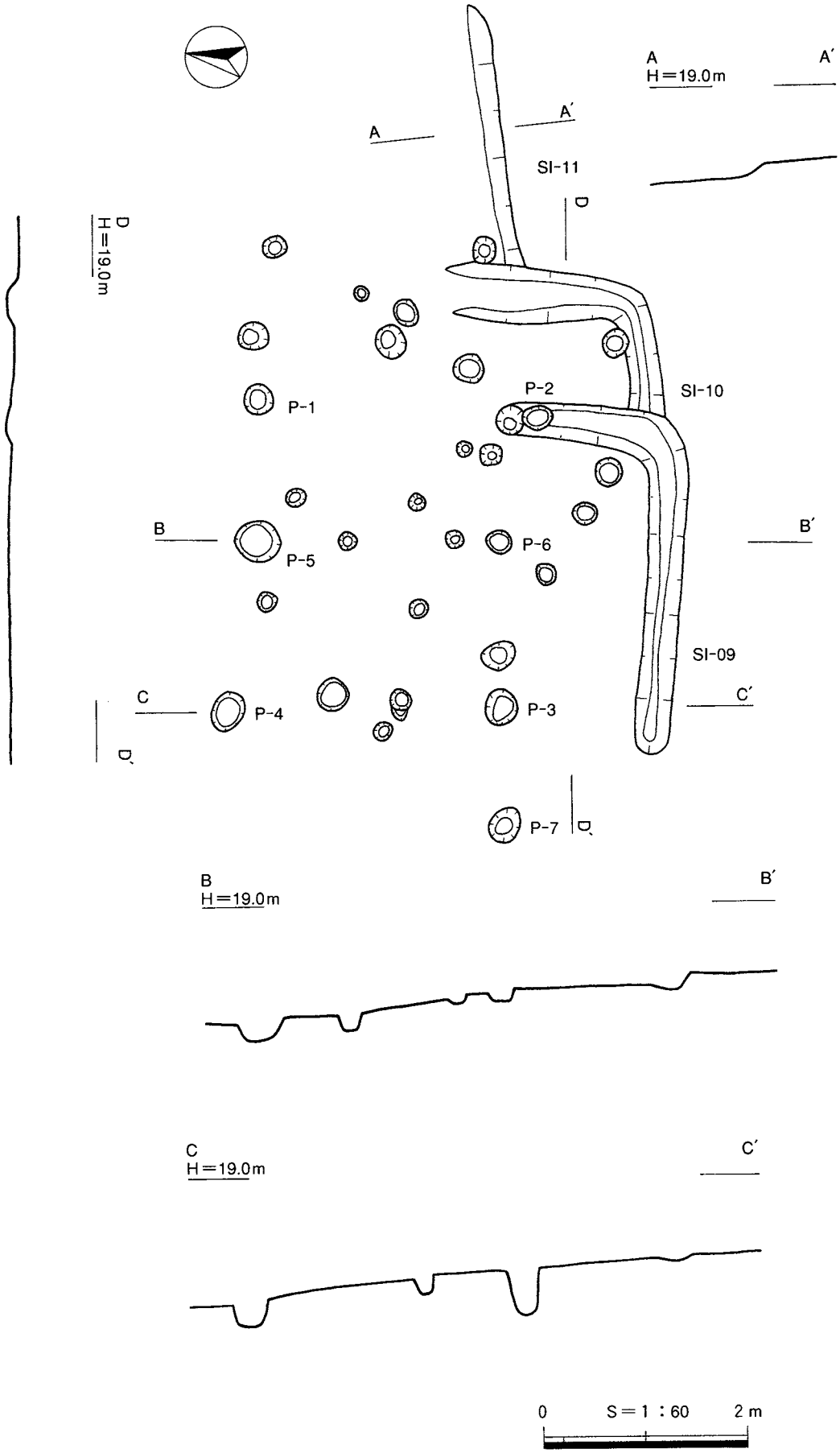
ＳＩ－13は南側の周壁溝の一部が残存するのみである。
平面形態は円形を呈するものと思われ、規模は径6.2ｍで、周壁溝は幅0.1～0.3ｍ、深さ0.1ｍをはかる。
主柱穴はＰ－４～Ｐ－６の３基を確認し、各々の規模はＰ－４（45×32－29）㎝、Ｐ－５（27×38－16）㎝、Ｐ－６（41×36－12）㎝をはかる。柱間距離はＰ－４～Ｐ－５は1.7ｍ、Ｐ－５～Ｐ－６は1.7ｍである。
遺物は図示できないが、弥生土器が出土した。
時期は出土遺物と平面形態からＳＩ－02～07・17と同時期のものと考えられる。

ＳＩ－01・14～16・18（第16図、第17図）

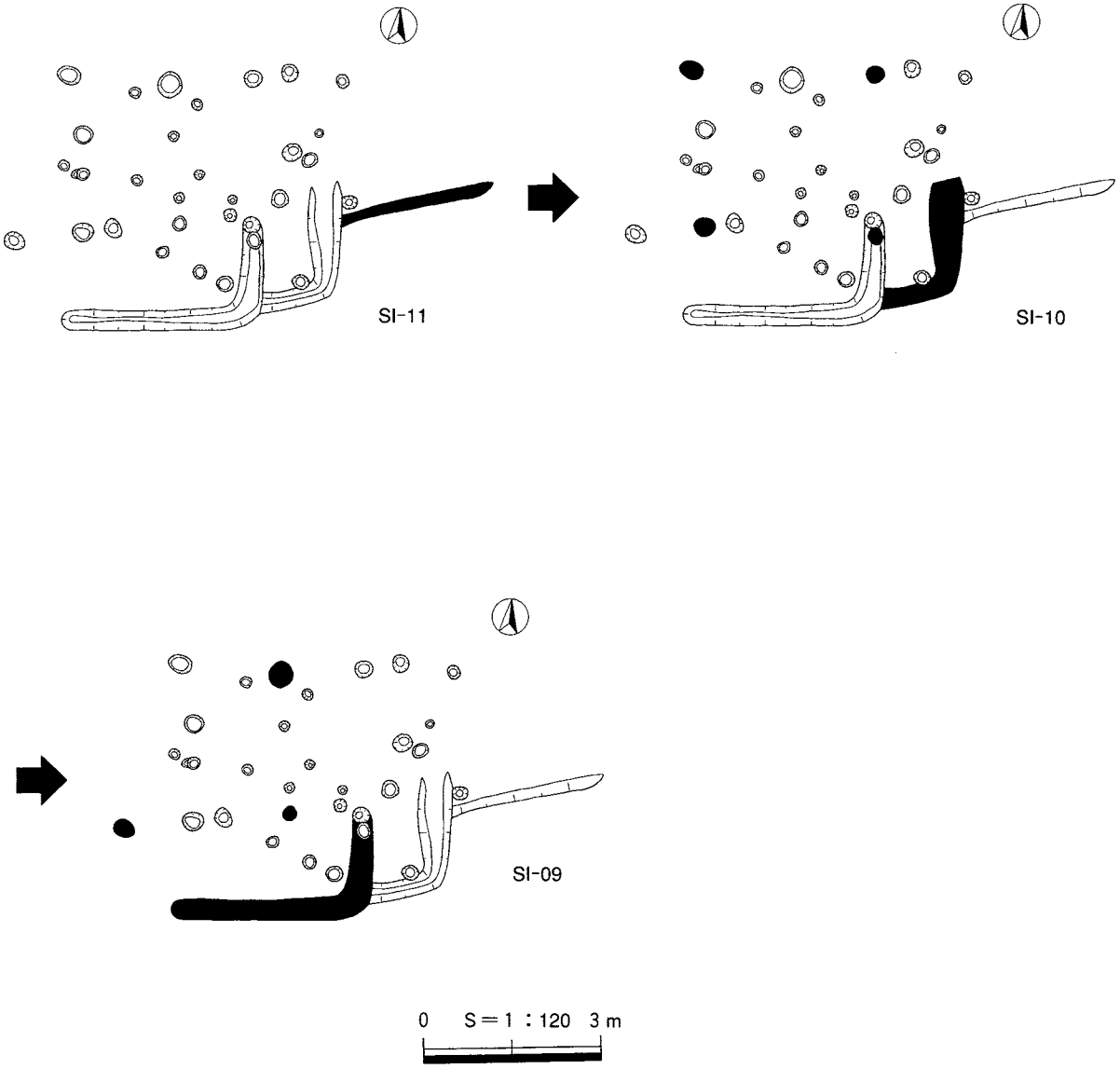
ＳＩ－01・14～16・18は調査区中央のＢ－５、Ｃ－５グリッドに位置し、標高17.4～17.8ｍのほぼ平坦面に立地する。５棟の住居跡が重複しており、切り合い関係から古い順にＳＩ－16→ＳＩ－15→ＳＩ－14→ＳＩ－01→ＳＩ－18の新旧関係が考えられる。
各住居跡の時期はＳＩ－01が古墳時代前期、ＳＩ－14～16が弥生時代後期末～古墳時代前期前葉、ＳＩ－18が古墳時代中期後葉～後期前葉であると考えられる。

ＳＩ－01

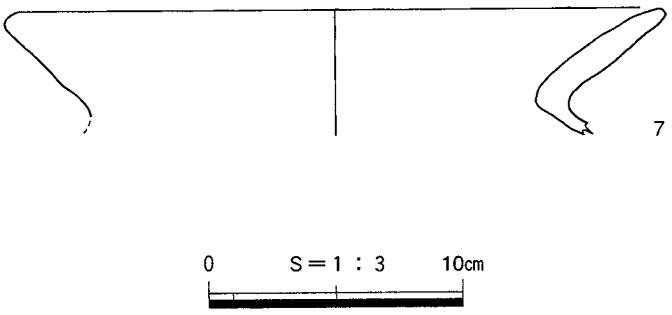
ＳＩ－01は東側と南側の周壁溝の一部が残存するのみであるが、ＳＩ－14・15・16を切っている。
平面形態は方形を呈するものと思われ、規模は南北4.3ｍ以上で、周壁溝は幅0.2～0.6ｍ、深さ0.1ｍをはかる。
主柱穴は確認できなかったが、東側の周壁溝から西へのびる長さ1.2ｍ、幅0.2～0.3ｍ、深さ0.1ｍと長さ1.2ｍ、



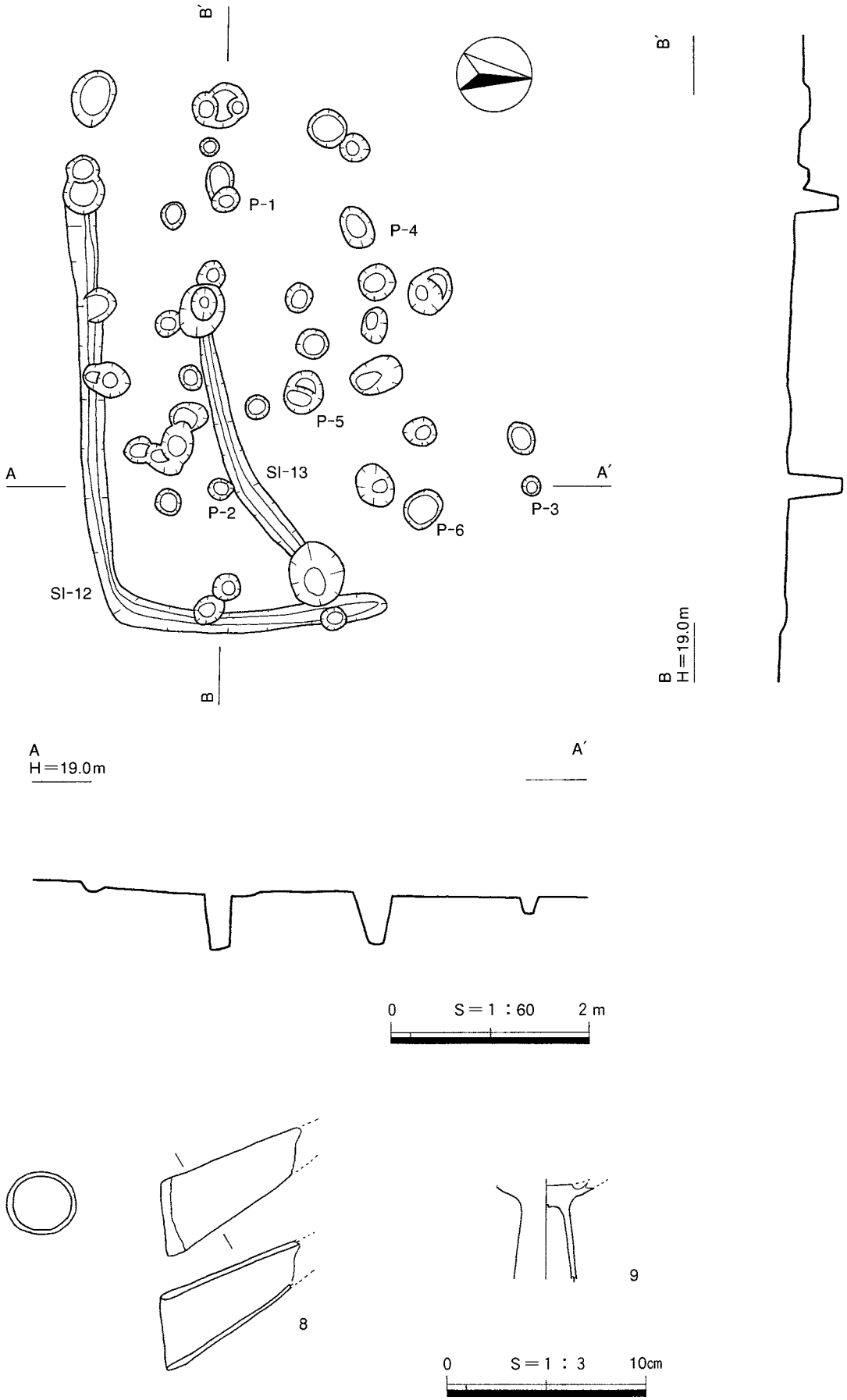
第12図　ＳＩ—09・10・11遺構図



第13図　ＳＩ—09・10・11変遷図



第14図　ＳＩ—10出土遺物実測図



第15図　ＳＩ―12・13遺構図及びＳＩ―12出土遺物実測図

幅0.1～0.2ｍ、深さ0.1ｍをはかる溝がある。

遺物は図示できないが、土師器が出土した。

時期は出土遺物と切り合い関係から古墳時代前期頃のものと考えられる。

ＳＩ－14

ＳＩ－14は東側と西側の周壁溝の一部が残存するのみで、ＳＩ－01に切られているが、ＳＩ－15・16を切っている。

平面形態は多角形を呈するものと思われ、規模は径6.4ｍが想定され、周壁溝は東側で幅0.3～0.4ｍ、深さ0.1ｍ、西側で幅0.2～0.3ｍ、深さ0.1ｍをはかる。

主柱穴はＰ－４～Ｐ－９の６基を確認し、さらに、Ｐ－６～Ｐ－７間にもう１基存在するものと思われる。各々の規模はＰ－４（38×35－51）㎝、Ｐ－５（24×26－44）㎝、Ｐ－６（36×33－52）㎝、Ｐ－７（47×40以上－43）㎝、Ｐ－８（38×26以上－26）㎝、Ｐ－９（44×42－５）㎝をはかる。柱間距離はＰ－４～Ｐ－５は1.8ｍ、Ｐ－５～Ｐ－６は1.7ｍ、Ｐ－７～Ｐ－８は2.2ｍ、Ｐ－８～Ｐ－９は1.7ｍ、Ｐ－９～Ｐ－４は2.1ｍである。

遺物は弥生土器、土師器（10）が出土した。10は複合口縁を有する甕で、Ｐ－４から出土した。

時期は出土遺物から弥生時代後期末～古墳時代前期前葉頃のものと考えられる。

ＳＩ－15

ＳＩ－15は東側と西側の周壁溝の一部が残存するのみで、ＳＩ－14に切られているが、ＳＩ－16を切っている。

平面形態は多角形を呈するものと思われ、規模は径6.4ｍが想定され、周壁溝は東側で幅0.3～0.4ｍ、深さ0.1～0.2ｍ、西側で幅0.2ｍ、深さ0.1ｍをはかる。

主柱穴はＰ－１～Ｐ－３の３基を確認し、各々の規模はＰ－１（35×31－６）㎝、Ｐ－２（30×20－35）㎝、Ｐ－３（52×50－52）㎝をはかる。柱間距離はＰ－１～Ｐ－２は2.3ｍ、Ｐ－２～Ｐ－３は2.3ｍである。

遺物は土師器が出土した。

時期は出土遺物と切り合い関係から弥生時代後期末～古墳時代前期前葉頃のものと考えられる。

ＳＩ－16

ＳＩ－16は東側の周壁溝が残存するのみで、ＳＩ－14・15に切られている。

平面形態は多角形を呈するものと思われ、規模は径6.4ｍが想定され、周壁溝は幅0.2～0.4ｍ、深さ0.1ｍをはかる。

遺物は土師器が出土した。

時期は出土遺物と切り合い関係から弥生時代後期末～古墳時代前期前葉頃のものと考えられる。

ＳＩ－18

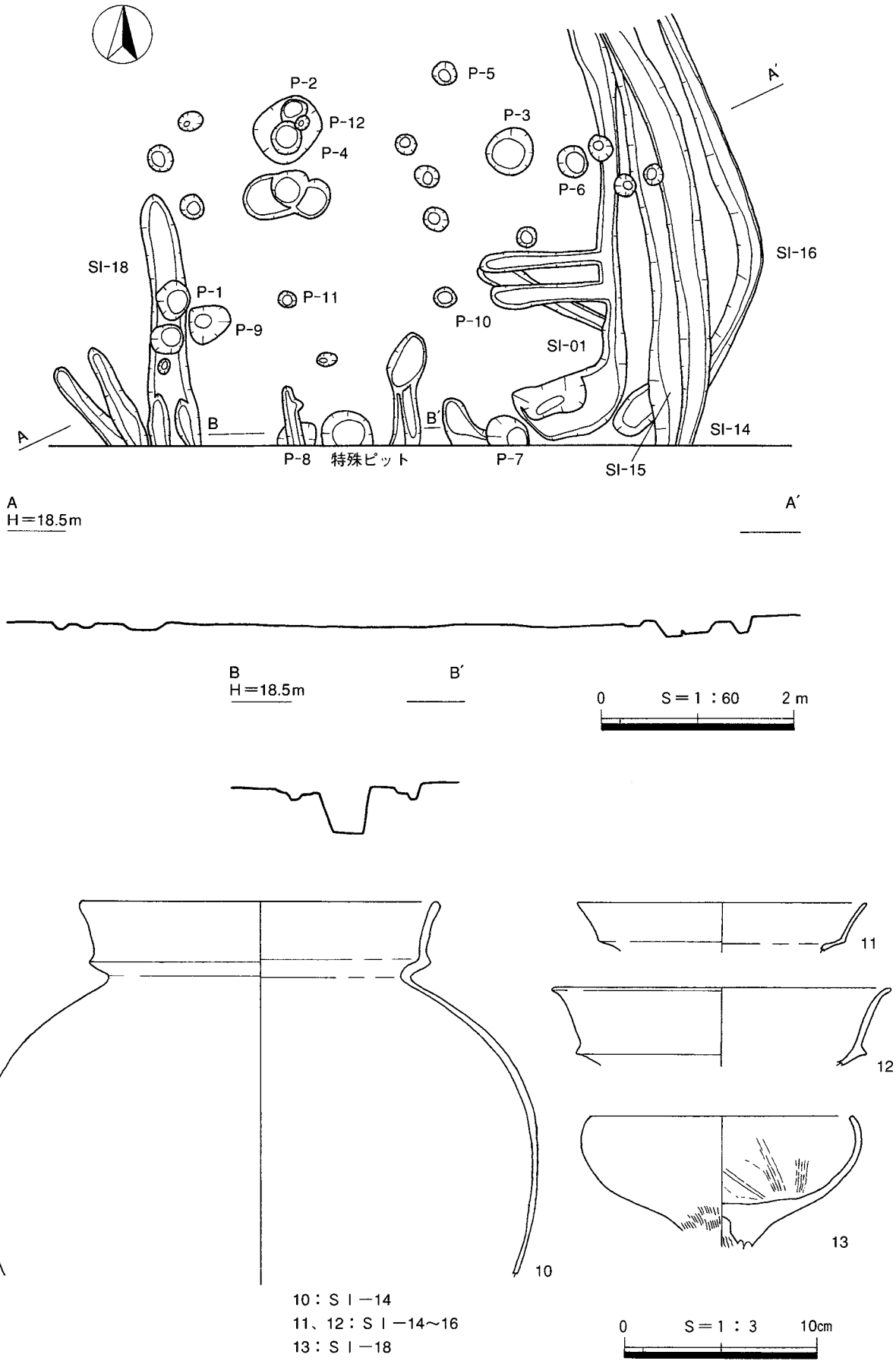
ＳＩ－18は西側の周壁溝が残存するのみであるが、平面形態は方形を呈するものと思われる。規模は一辺約4.5ｍが想定され、周壁溝は幅0.3～0.5ｍ、深さ0.1ｍをはかる。

主柱穴はＰ－10～Ｐ－12の３基を確認し、各々の規模はＰ－10（24×23－54）㎝、Ｐ－11（17×17－13）㎝、Ｐ－12（13×18－27）㎝をはかる。柱間距離はＰ－10～Ｐ－11は1,6ｍ、Ｐ－11～Ｐ－12は1.9ｍである。

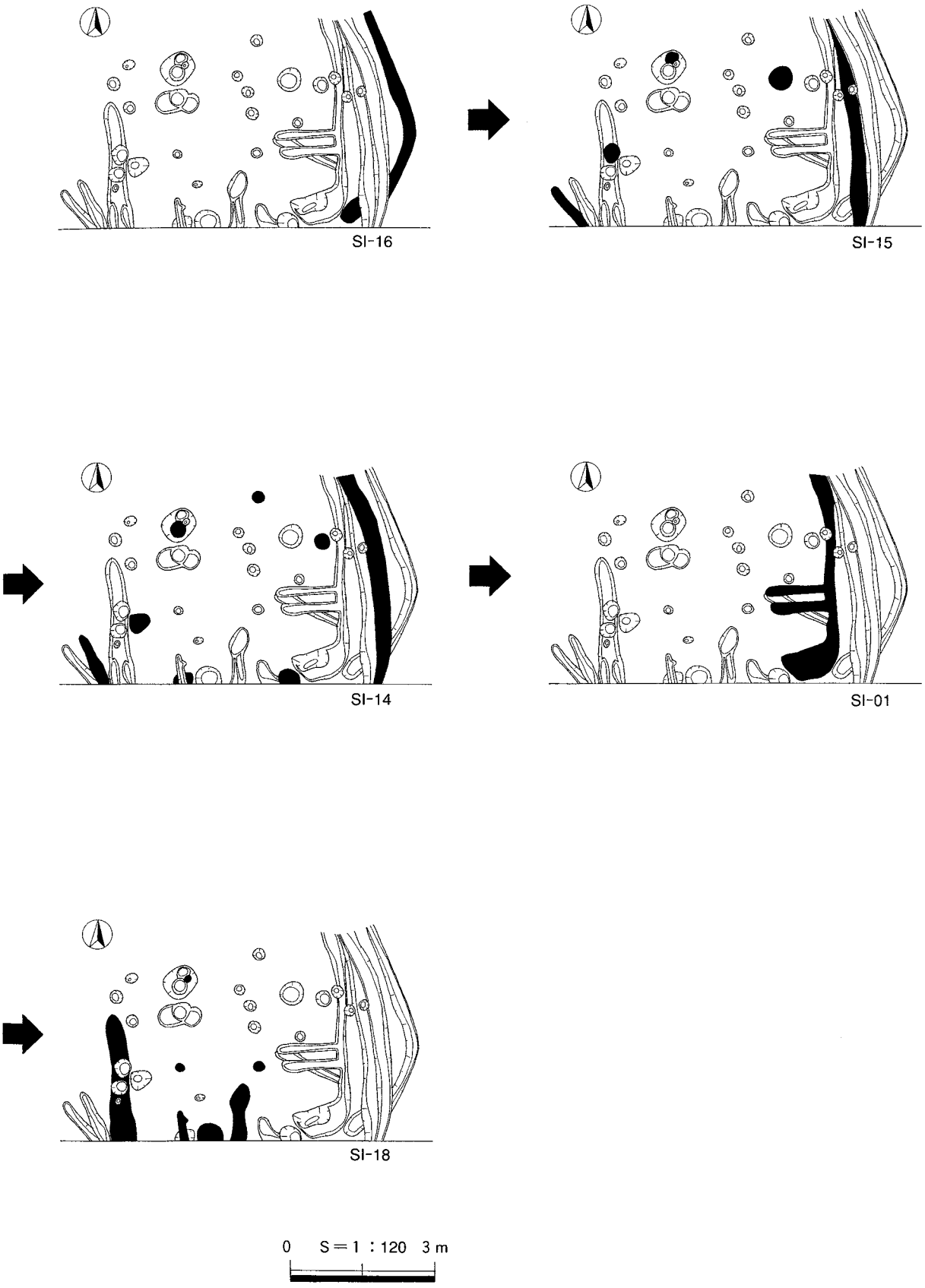
住居跡の南側には51×37以上㎝、深さ49㎝をはかる特殊ピットがあり、その両側には南北にのびる溝がある。

遺物は特殊ピットから土師器（13）が出土した。13は高坏の坏部で、口縁が内湾する。

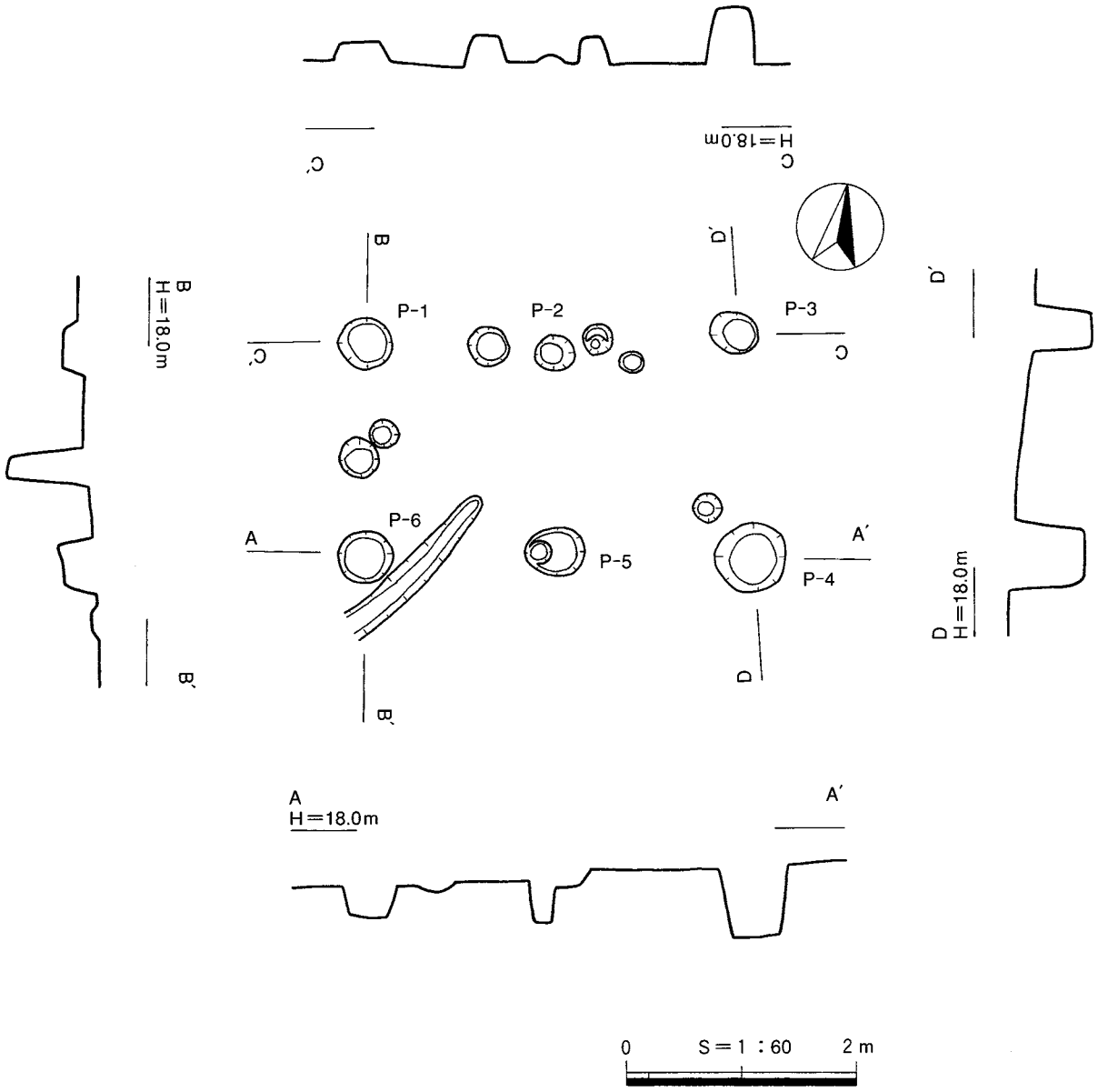
時期は出土遺物から古墳時代中期後葉～後期前葉頃のものと考えられる。



第16図　ＳＩ－01・14・15・16・18遺構図及びＳＩ－14～16・18出土遺物実測図



第17図　ＳＩ—01・14・15・16・18変遷図



第18図　ＳＢ―01遺構図

2．掘立柱建物

ＳＢ－01（第18図）

ＳＢ－01は調査区中央やや東寄りのＢ－６グリッドに位置し、標高17.4～17.7ｍの北西に緩やかに傾斜する斜面に立地する。

桁行２間（3.3～3.4ｍ）、梁行１間（1.9～2.0ｍ）の建物で、主軸方向はＮ－78°－Ｅである。

柱穴の規模はＰ－１（44×48－14）㎝、Ｐ－２（35×33－51）㎝、Ｐ－３（43×36－62）㎝、Ｐ－４（62×60－59）㎝、Ｐ－５（51×43－32）㎝、Ｐ－６（48×48－25）㎝をはかり、柱間距離はＰ－１～Ｐ－２は1.6ｍ、Ｐ－２～Ｐ－３は1.6ｍ、Ｐ－３～Ｐ－４は2.0ｍ、Ｐ－４～Ｐ－５は1.7ｍ、Ｐ－５～Ｐ－６は1.7ｍ、Ｐ－６～Ｐ－１は1.9ｍで、桁行、梁行とも各々はほぼ等間であるが、梁行は桁行よりもやや広くなっている。

遺物は図示できないが、Ｐ－１から弥生土器（櫛描沈線を施した複合口縁の小片）が出土した。

時期は出土遺物から弥生時代後期末頃のものであると考えられる。

3．土　　坑

ＳＫ－01（第19図）

ＳＫ－01は調査区西側のＡ－２グリッドに位置し、標高15.7～15.8ｍの谷状地形部に立地する。

平面形態は不整形の楕円形を呈し、規模は長軸1.6ｍ、短軸0.8ｍ、深さ0.1ｍをはかる。

遺物は弥生土器（14～21）が出土した。14～19は甕で、14、15は口縁がく字状に外反し、その端部を上方へつまみ出す。16の口縁端部には１条、17の口縁端部には２条の凹線が巡っている。18、19は口縁端部を上下に大きく拡張させたもので、いずれも口縁端部には３条の凹線、頸部外面には指頭圧痕突帯が巡っている。20～22は壺で、20は直口壺、22は台付壺の台部で、長方形の透かし孔が穿たれている。

時期は弥生時代中期後葉頃のものであると考えられる。

ＳＫ－02（第20図）

ＳＫ－02は調査区西側のＢ－１グリッドに位置し、標高15.0ｍの谷状地形部に立地する。

西側は調査区外にのびているが、平面形態は不整形の円形を呈するものと思われる。また、２段掘りになっており、外側の掘り込みは南北長1.2ｍ、東西長0.6ｍ以上、深さ0.1～0.2ｍ、内側の掘り込みは南北長1.0ｍ、東西長0.4ｍ以上、深さ0.3ｍをはかる。

遺物は出土しなかった。

ＳＫ－03（第20図）

ＳＫ－03は調査区西側のＢ－３グリッドに位置し、標高16.1～16.3ｍの北西に緩やかに傾斜する斜面に立地する。

平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は長軸1.9ｍ、短軸1.4ｍ、深さ0.1～0.2ｍをはかる。

遺物は弥生土器（23～25）が出土した。24は口縁端部に４条の凹線が巡り、刺突文が施されている。

時期は弥生時代中期後葉頃のものであると考えられる。

ＳＫ－04（第21図）

ＳＫ－04は調査区西側のＢ－３グリッドに位置し、標高16.2～16.3ｍの北西に緩やかに傾斜する斜面に立地する。

平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は長軸2.4ｍ、短軸2.0ｍ、深さ0.1～0.2ｍをはかる。なお、埋土には炭が混じっている。

遺物は土師器（26～32）が出土した。26、27は壺で、26の頸部外面には突帯が巡っている。28～32は甕で、28、29は口縁下端の突出度が小さく、口縁端部は丸くおさまる。30、31の口縁端部は平坦気味となっており、32の口縁端部は平坦面をなし、さらに、外方へ僅かにつまみ出している。33は高坏の坏部、34は低脚坏の脚部である。

時期は古墳時代前期後葉頃のものであると考えられる。

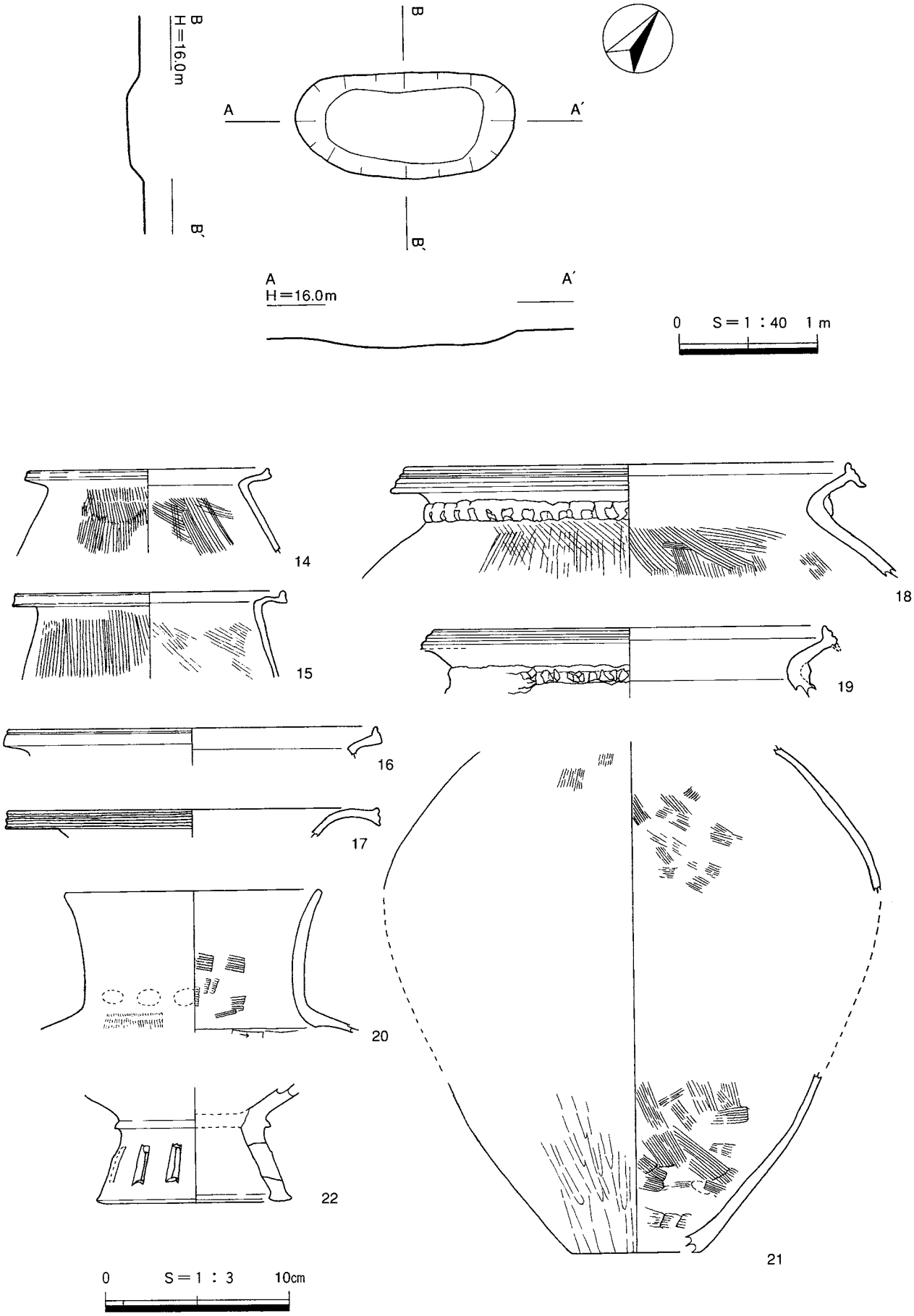
ＳＫ－05（第22図）

ＳＫ－05は調査区西側のＢ－３・４グリッドに位置し、標高16.6～16.9ｍの北西に緩やかに傾斜する斜面に立地する。

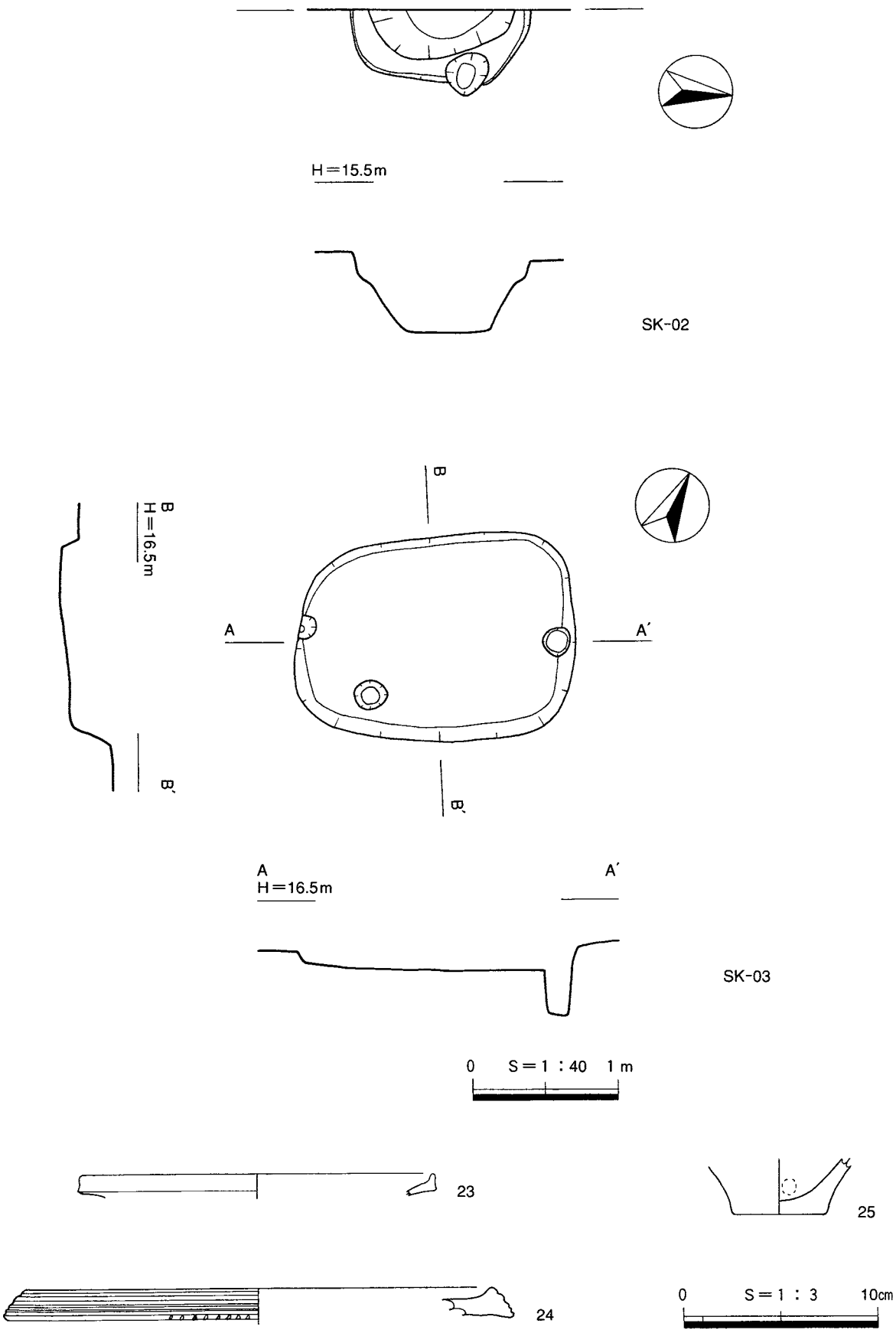
平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は長軸1.9ｍ、短軸1.6ｍ、深さ0.1ｍをはかる。なお、床面は熱を受け、埋土には炭が混じっている。

遺物は土師器（35）が出土した。

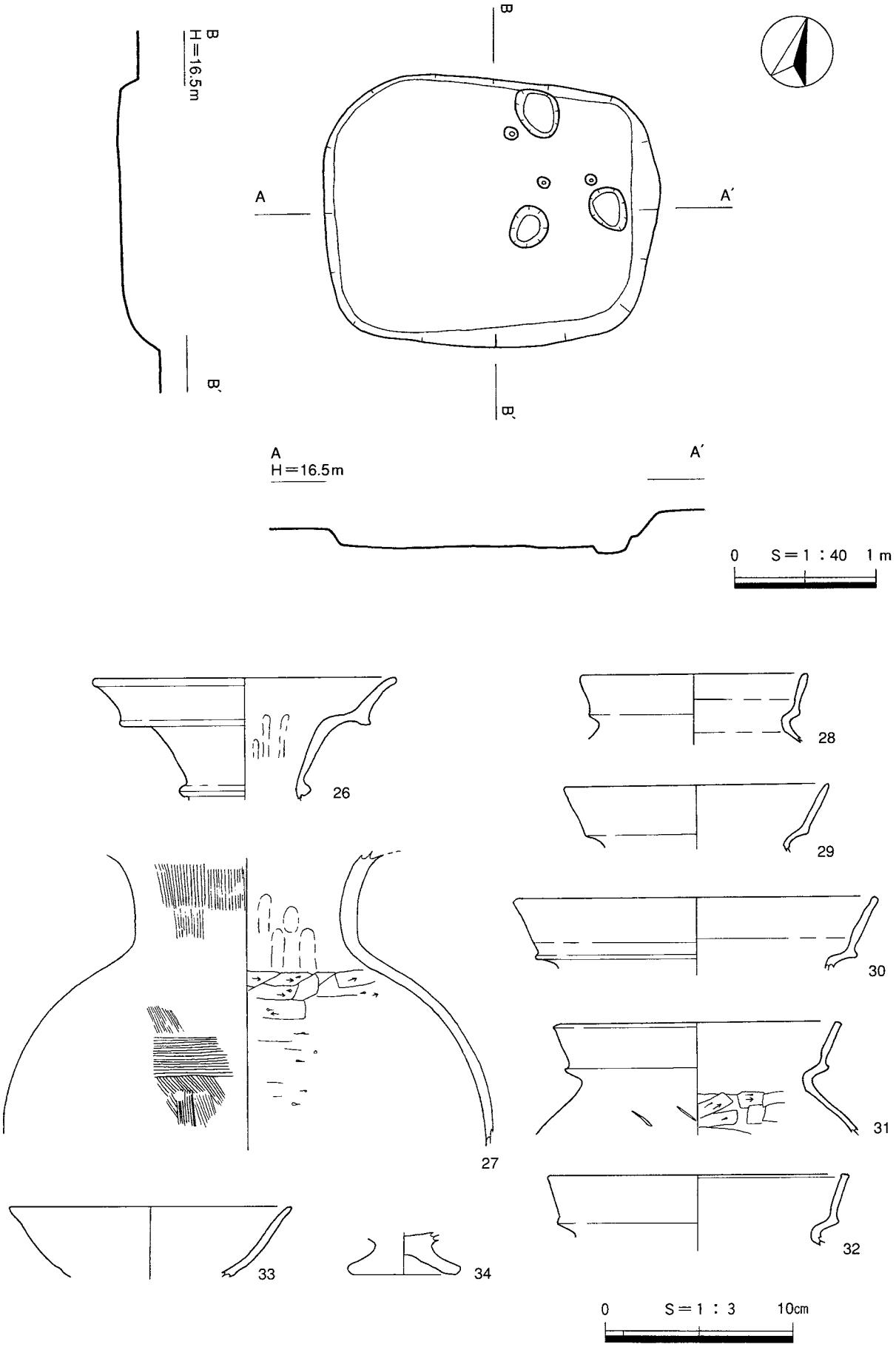
時期は古墳時代前期後葉頃のものであると考えられる。



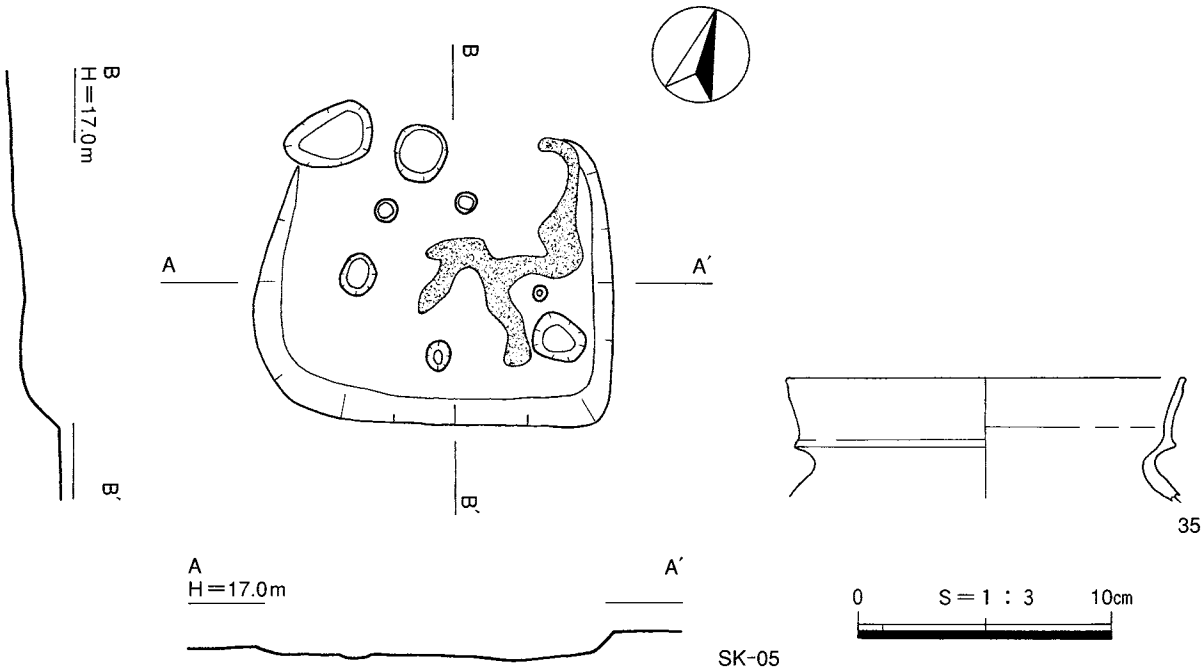
第19図　ＳＫ—01遺構図及び出土遺物実測図

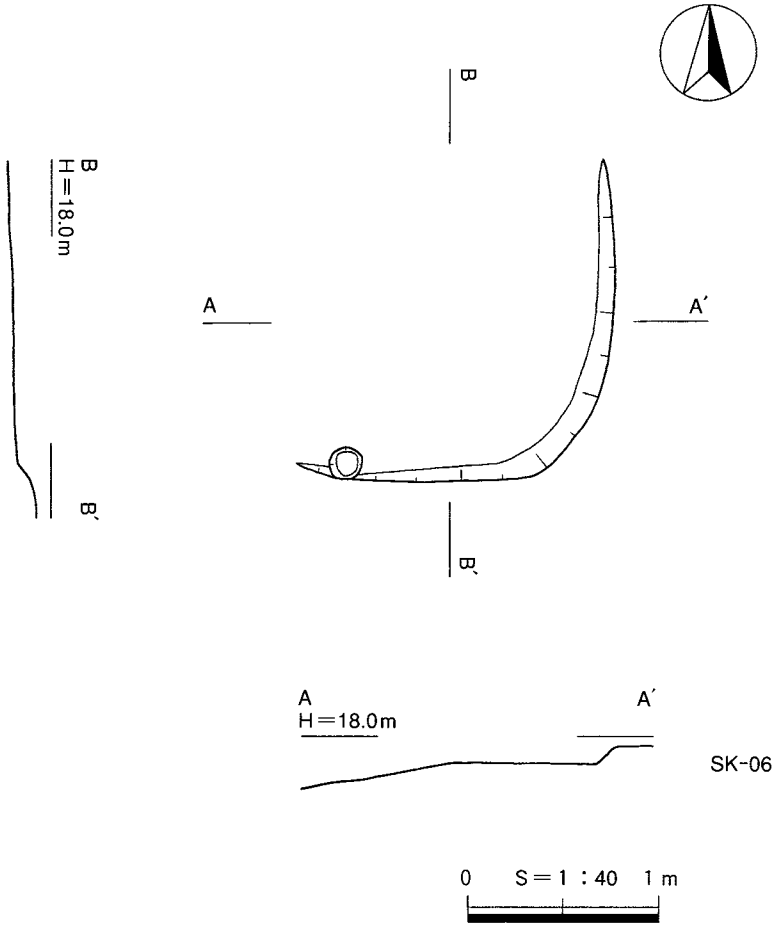


第20図　ＳＫ―02・03遺構図及びＳＫ―03出土遺物実測図



第21図　ＳＫ―04遺構図及び出土遺物実測図





第22図　ＳＫ―05・06遺構図及びＳＫ―05出土遺物実測図

ＳＫ－06（第22図）

ＳＫ－06は調査区中央やや東寄りのＢ－６グリッドに位置し、標高17.8～17.9ｍのほぼ平坦面に立地する。平面形態は隅丸長方形を呈するものと思われ、規模は長軸1.8ｍ以上、短軸1.7ｍ以上、深さ0.1ｍをはかる。

遺物は出土しなかった。

４．溝状遺構

ＳＤ－01（第23図）

ＳＤ－01は調査区西側のＡ－１グリッドに位置し、標高14.9～15.1ｍの谷状地形部に立地する。規模は長さ2.8ｍ以上、幅0.3～0.4ｍ、深さ0.1ｍをはかり、主軸方向はＮ－44°－Ｗである。

遺物は出土しなかった。

ＳＤ－02（第23図）

ＳＤ－02は調査区西側のＡ－１・２グリッドに位置し、標高15.1～15.2ｍの谷状地形部に立地する。規模は長さ3.0ｍ、幅0.3～0.5ｍ、深さ0.1ｍをはかり、主軸方向はＮ－64°－Ｅである。

遺物は出土しなかった。

ＳＤ－03（第23図）

ＳＤ－03は調査区西側のＡ－３、Ｂ－３グリッドに位置し、標高15.3～15.8ｍの谷状地形部に立地する。規模は長さ4.8ｍ以上、幅0.3～0.4ｍ、深さ0.1ｍをはかり、主軸方向はＮ－16°－Ｗである。

遺物は出土しなかった。

ＳＤ－04（第23図）

ＳＤ－04は調査区東側のＡ－８グリッドに位置し、標高17.9～18.0ｍのほぼ平坦面に立地する。規模は長さ2.3ｍ以上、幅0.4～0.5ｍ、深さ0.1ｍをはかり、主軸方向はＮ－50°－Ｗである。

遺物は出土しなかった。

５．炭　焼　窯（第24図）

炭焼窯は調査区西側のＡ－１グリッドに位置し、標高15.8ｍの谷状地形部に立地する。窯の北側には東西にのびる生活道路が隣接し、西側にはその生活道路から南の山へ入る小道が隣接しており、窯はこれらの道が分岐する部分に位置している。

掘り方の平面形態は瓢箪形を呈し、窯体の掘り方の規模は径2.2ｍ、深さ0.9ｍ、煙道の掘り方の規模は1.1×0.6ｍをはかる。

窯体の平面形態は円形を呈し、規模は径1.8ｍ、深さ0.8ｍをはかる。

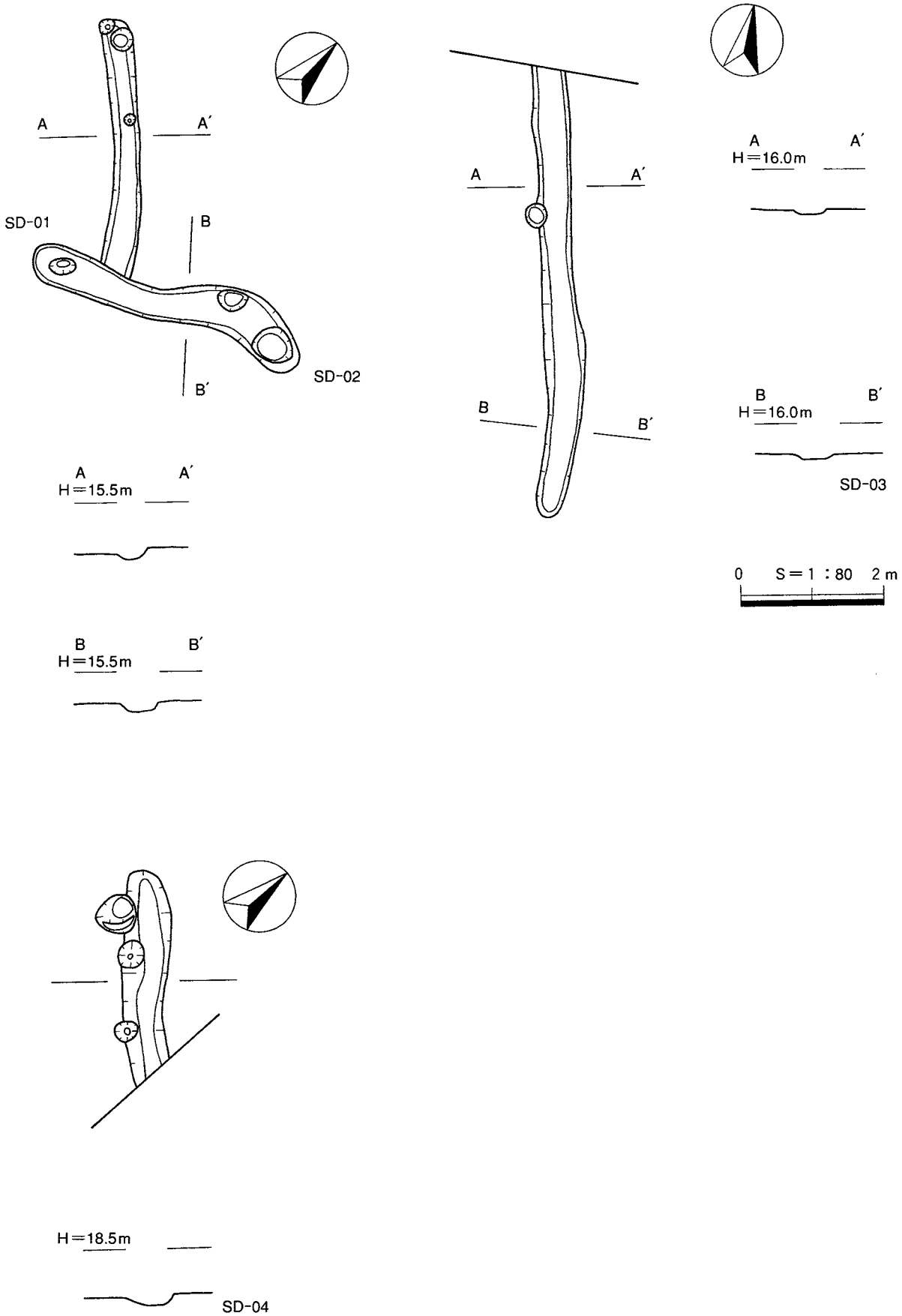
壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁面は２次的な被熱を受け、厚さ３～５㎝にわたって硬化している。なお、奥壁と煙道には黒褐色のタールが付着しているが、奥壁以外の壁面にはタールが付着していない。

床面は水平で、あまり被熱を受けていないが、比較的固くしまっている。また、床面には木炭や炭片は認められず、廃窯後、窯内を清掃したものと思われる。

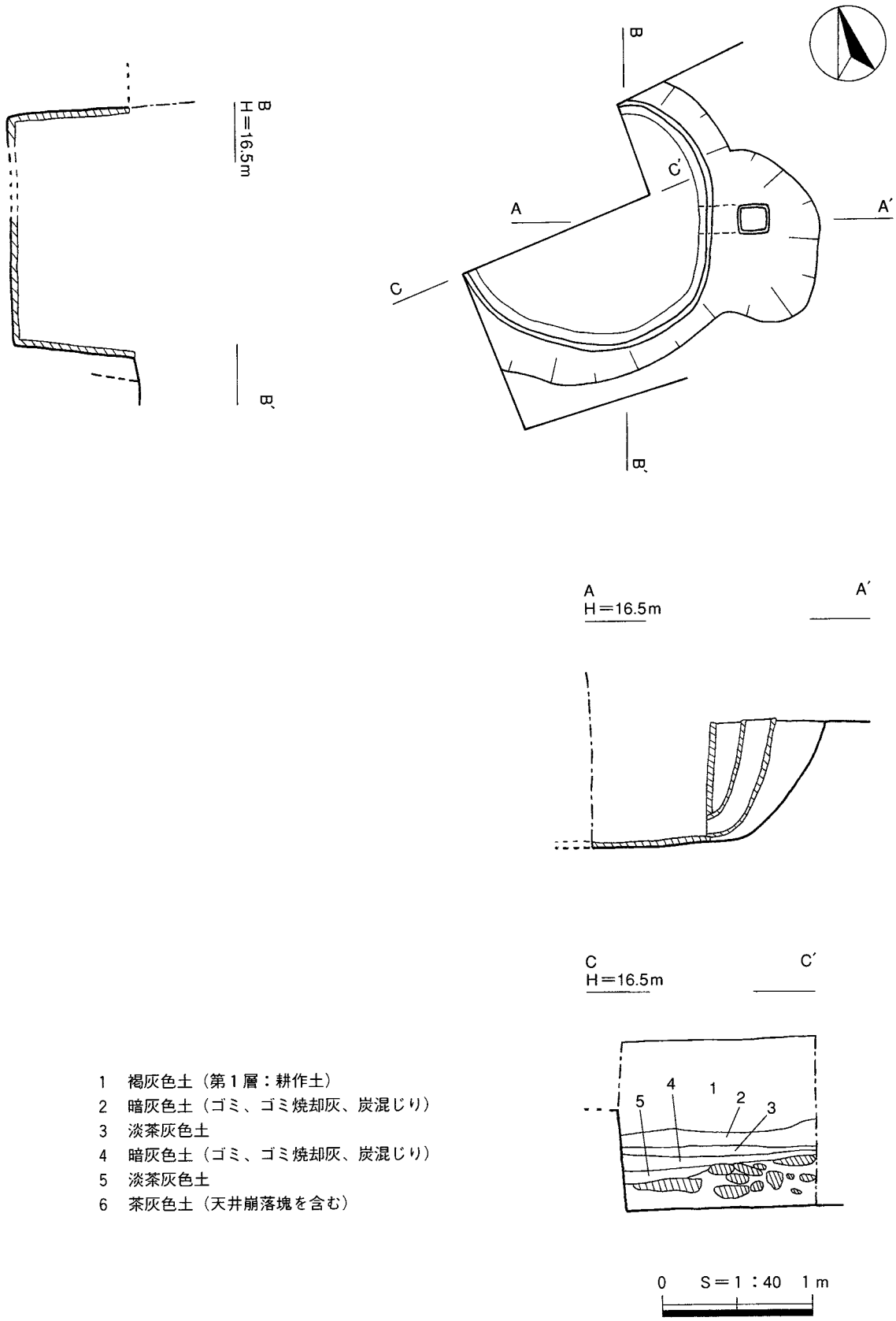
煙道は鉄製で、奥壁の窯底から奥壁中央の最上部へのびており、窯体と接続する部分では断面半楕円形を呈するが、排気部分では断面方形を呈している。煙道の規模は20×22㎝で、底面近くの下端部から上端部までは0.8ｍをはかる。

廃窯後、天井部が崩落しており、その崩落塊内にはスサとして用いた藁がみられる。

なお、窯の元所有者によれば、約20年前まで操業していたらしい。

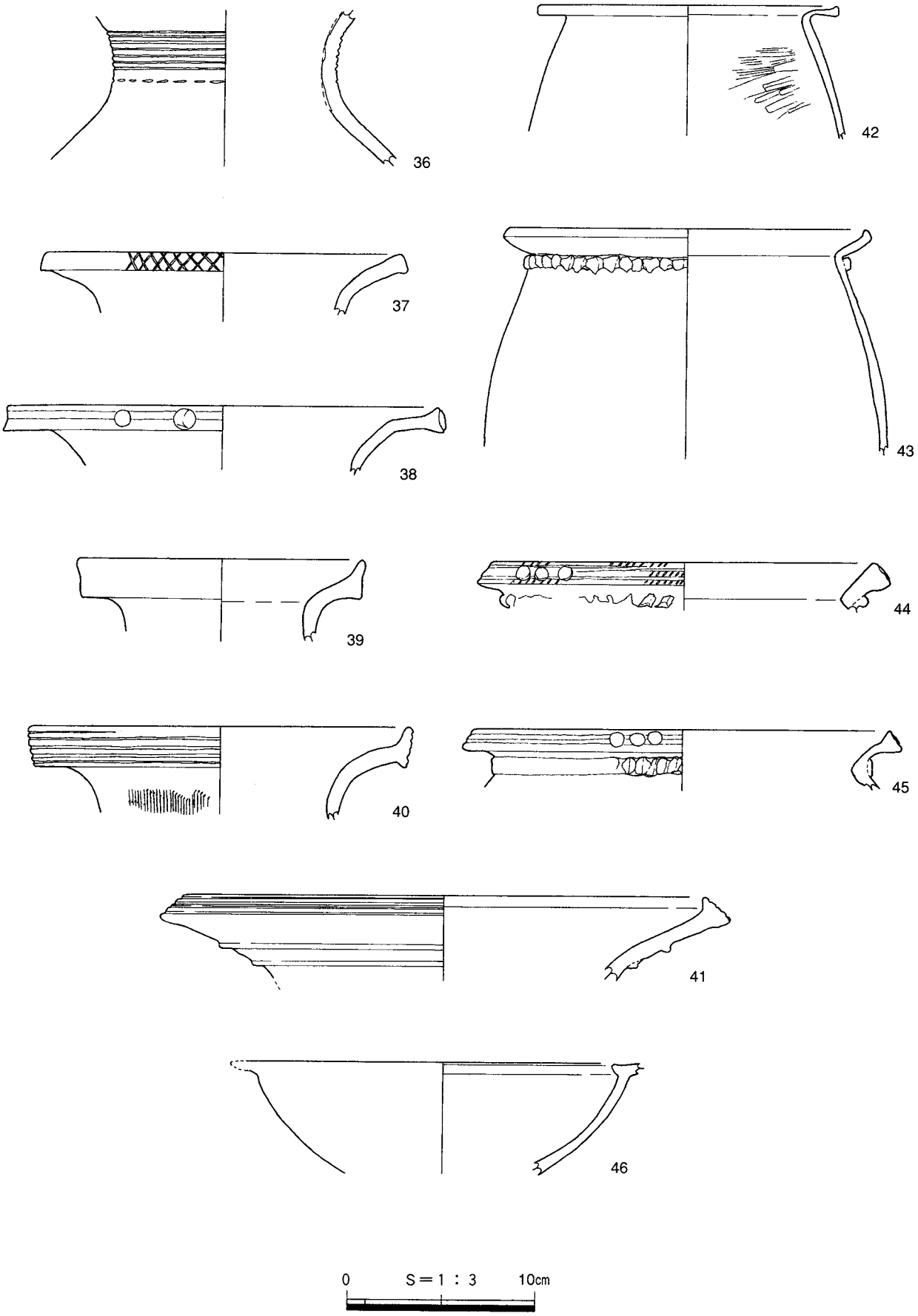


第23図　ＳＤ―01～04遺構図

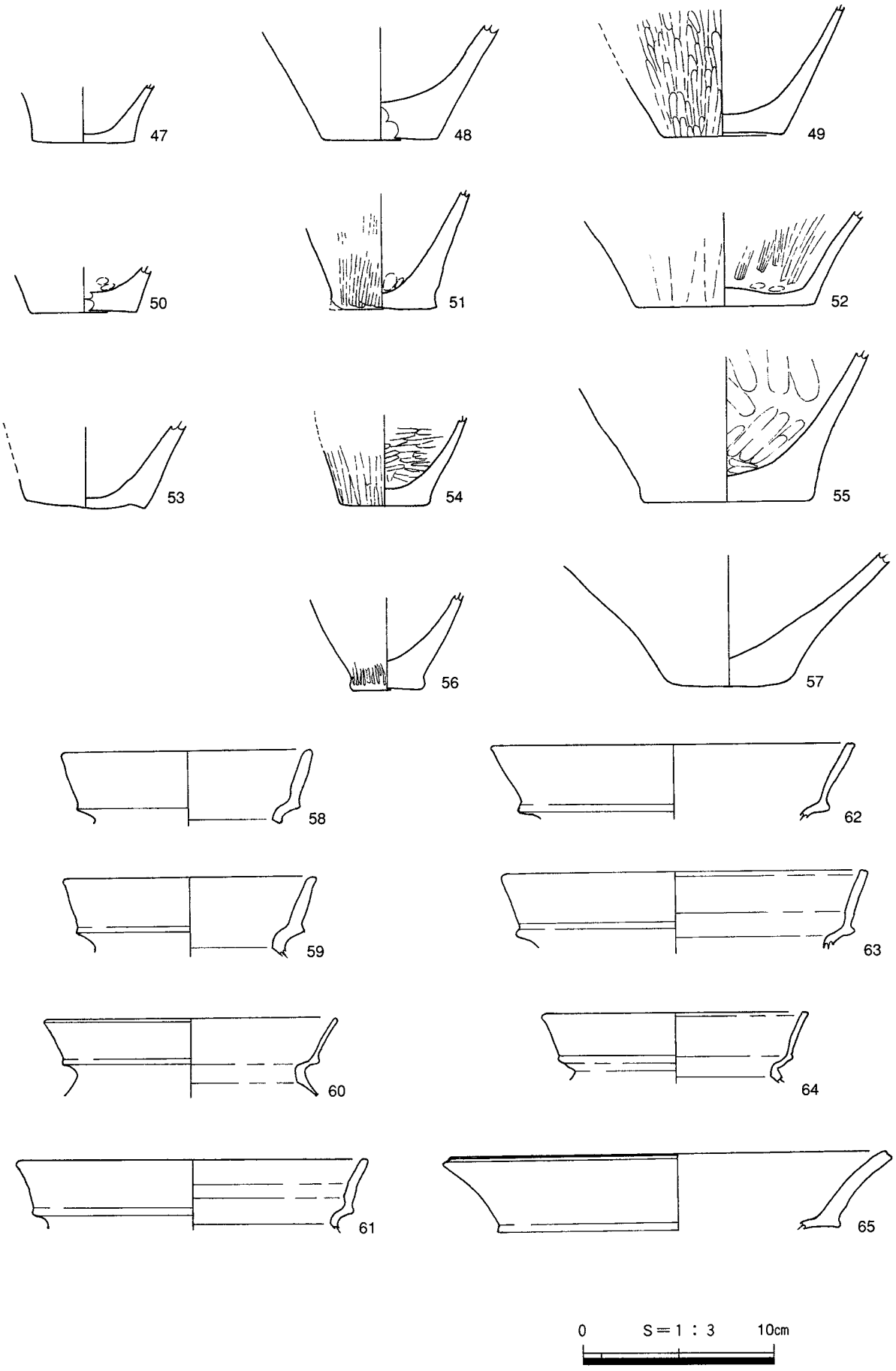


1　褐灰色土（第１層：耕作土）
2　暗灰色土（ゴミ、ゴミ焼却灰、炭混じり）
3　淡茶灰色土
4　暗灰色土（ゴミ、ゴミ焼却灰、炭混じり）
5　淡茶灰色土
6　茶灰色土（天井崩落塊を含む）

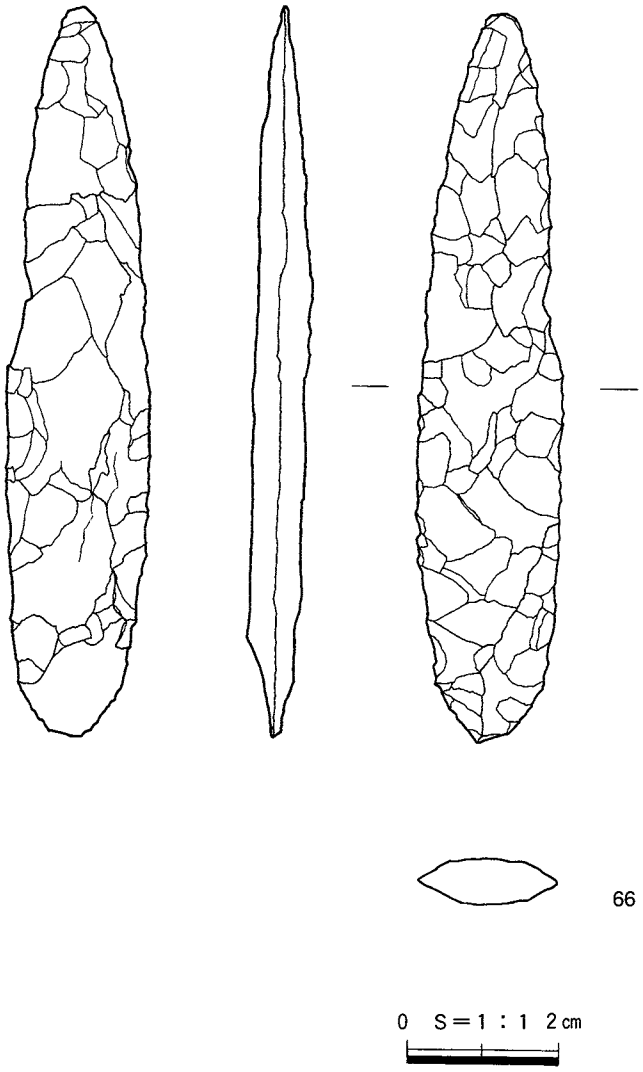
第24図　炭焼窯遺構図



第25図　遺構外出土遺物実測図（1）



第26図　遺構外出土遺物実測図（２）



第27図　遺構外出土遺物実測図（3）

第3節　遺構外出土遺物（第25図～第27図）

36～57は弥生土器である。36～41は壺で、36の頸部外面には7条の櫛描文と刺突文が巡り、37の口縁端部には斜格子文が施されている。38は口縁端部を上下につまみ出し、端部は僅かに窪む面をなしている。また、口縁端部には円形浮文が施されている。39、40は複合口縁化したもので、40の口縁端部には5条の擬凹線が巡っている。41は口縁端部を上方へ拡張させたもので、口縁端部には4条の凹線、口縁外面には2条の断面三角形の突帯が巡っている。42～45は甕である。42、43は口縁がく字状に外反し、口縁端部を上方へつまみ出している。43の頸部外面には指頭圧痕突帯が巡っている。44、45はいずれも口縁端部には凹線と円形浮文、頸部外面には指頭圧痕突帯が巡っているもので、凹線の条数は44が3条、45が2条で、44の口縁端部にはさらに刻目が施されている。46は高坏で、口縁端部はT字状を呈している。47～57は底部である。

58、59は弥生土器あるいは土師器である。いずれも複合口縁を有する甕で、器壁が厚く、口縁端部が肥厚している。

60～65は土師器である。いずれも複合口縁を有する甕で、60、61の口縁端部は丸くおさまる。62、63の口縁端部は平坦面をなしているが、面内に沈線状の窪みが認められる。64の口縁端部は平坦面をなしている。

66は尖頭器で、B－7グリッドの第2層（包含層）から出土した。66は柳葉形を呈しており、長さ9.7cm、最大幅1.9cm、最大厚0.7cmをはかる。風化が著しいが、押圧剥離で調整している。安山岩製である。

第４章　橋本徳道西遺跡の調査

第１節　遺跡の概要

橋本徳道西遺跡は米子市橋本字徳道西、同字徳道に所在し、標高17～19ｍの低位台地に立地する。現況は畑・原野となっているが、調査区内には池があり、池の周囲には笹や雑木が繁茂している。また、池の西側には調査区を南北に横断する道路があり、調査区の北側は段々状の畑によって大きくカットされている。

調査は２年度３次にわたり、第１章で前述したように、調査区を６つに分けているが、ここでは、調査次数、調査区にとらわれず、１つの遺跡として一括して報告する。

調査地の基本層序は１・３区の９～12グリッド、２・４～６区の18～22グリッドでは後世の耕作によって削平を受けており、現地表面から現耕作土（第１層）→旧耕作土（第２層）→基盤層となっている。また、１・３区の13グリッド、４区の23・24グリッド、６区の15～17グリッドでは谷状地形となっているために、後世の耕作による削平は下層まで及んでおらず、層序は現地表面から現耕作土（第１層）→旧耕作土（第２層）→暗黒灰色～黒灰色粘質土からなる遺物包含層（第４層）→基盤層となっている。しかし、６区の15～17グリッドでは第４層以下にさらに谷の堆積が認められ、基盤層は確認できなかった。また、２区の西側の15～17グリッドでは第２層が残存しておらず、さらに、第１層と第４層との間に遺物包含層（第３層）が認められる。層序は現地表面から現耕作土（第１層）→暗茶灰色粘質土からなる遺物包含層（第３層）→暗黒灰色～黒灰色粘質土からなる遺物包含層（第４層）となっているが、第４層以下にさらに谷の堆積が認められ、基盤層は確認できなかった。

遺構は主に基盤層上面で検出したが、４区の23・24グリッドでは第３層上面で溝状遺構３条（ＳＤ－48～50）を検出した。

検出した遺構は竪穴住居跡３棟、道路状遺構５条、溝状遺構84条、土坑169基、井戸11基、石組遺構１基である。

第２節　検出した遺構と遺物

１．竪穴住居跡

ＳＩ－01（第35図）

ＳＩ－01は調査区西側のＢ－10グリッドに位置し、標高17.5～17.9ｍのほぼ平坦面に立地する。東側の周壁溝が残存するのみで、北側はＳＩ－02に切られている。

平面形態は方形あるいは長方形を呈するものと思われ、規模は南北長3.3ｍ以上をはかる。

主柱穴はＰ－３の１基を確認し、その規模は、27×27－14㎝である。なお、周壁溝は幅0.2～0.5ｍ、深さ0.1～0.2ｍをはかる。

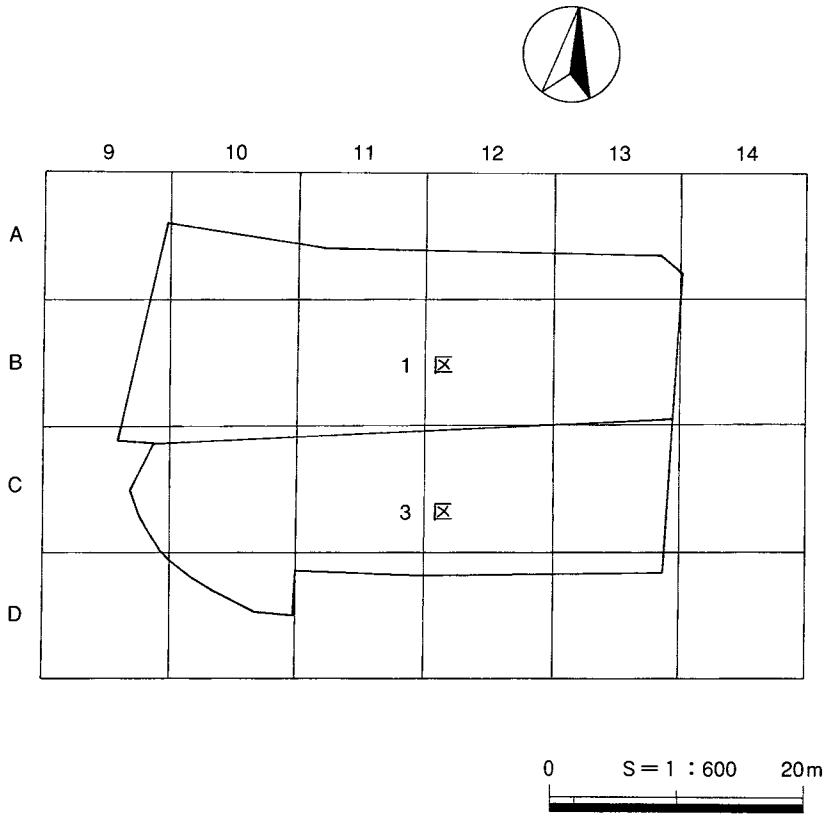
遺物は出土しなかったが、平面形態と包含層出土遺物から古墳時代前期頃のものと推測される。

ＳＩ－02（第35図）

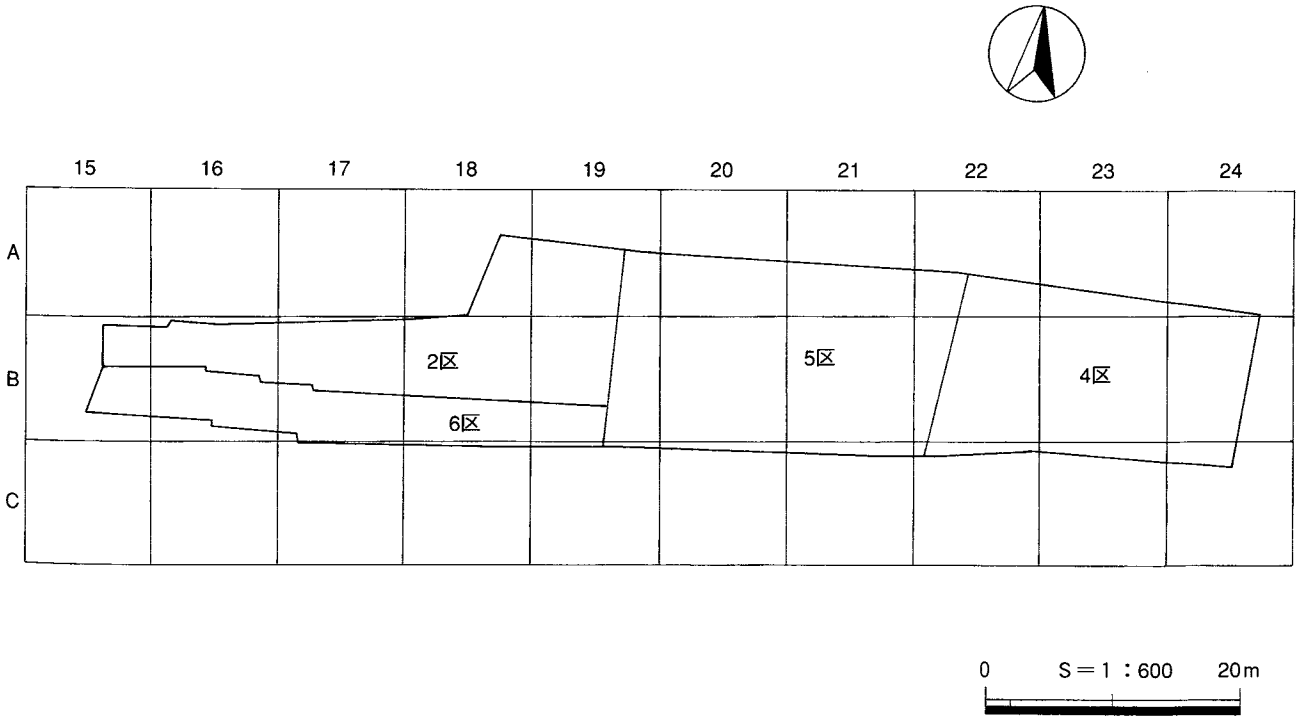
ＳＩ－02は調査区西側のＡ－10、Ｂ－10グリッドに位置し、標高17.4～17.6ｍのほぼ平坦面に立地する。東側の周壁溝が残存するのみで、南側はＳＩ－01を切っている。

平面形態は方形あるいは長方形を呈するものと思われ、規模は南北長3.8ｍ以上をはかる。

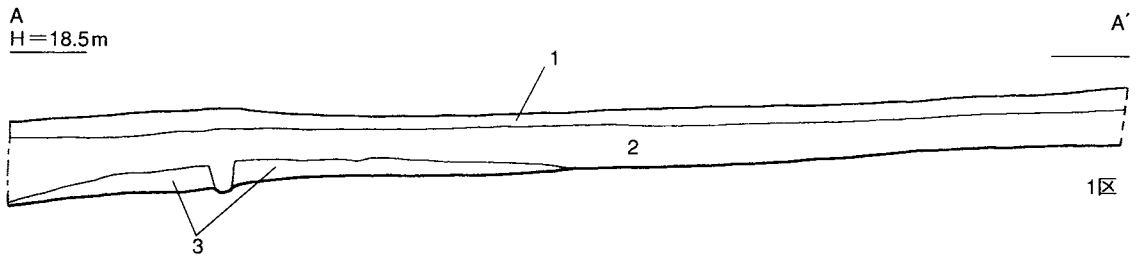
主柱穴はＰ－１、Ｐ－２の２基を確認し、各々の規模は、Ｐ－１（28×30－19）㎝、Ｐ－２（23×24－16）㎝である。なお、周壁溝は幅0.4～0.5ｍ、深さ0.1～0.2ｍをはかる。



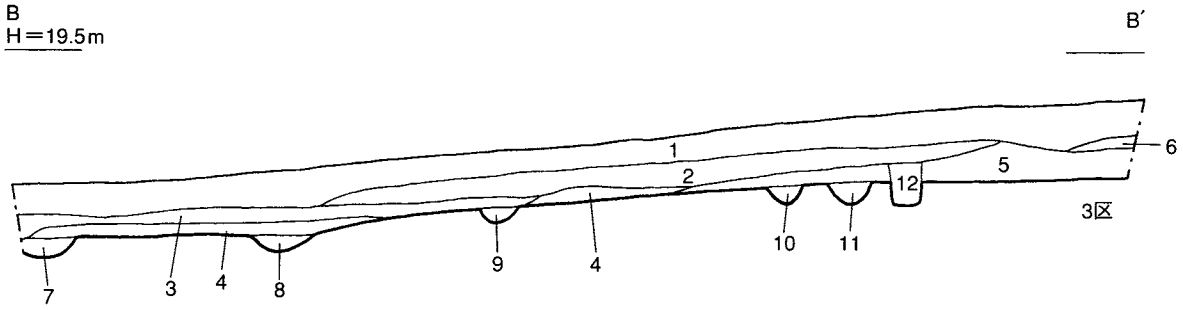
第28図　1・3区グリッド設定図



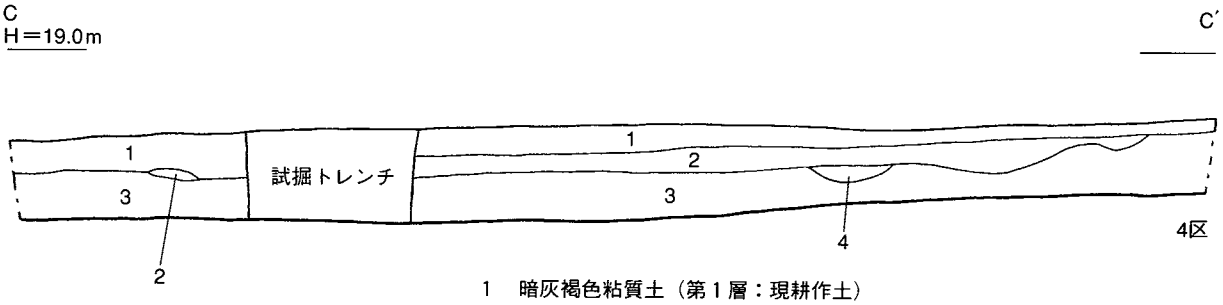
第29図　2・4～6区グリッド設定図



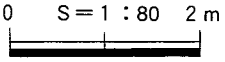
1　暗茶灰色粘質土（第１層：現耕作土）
2　灰褐色粘質土（第２層：旧耕作土）
3　暗黒灰色粘質土（第４層：遺物包含層）



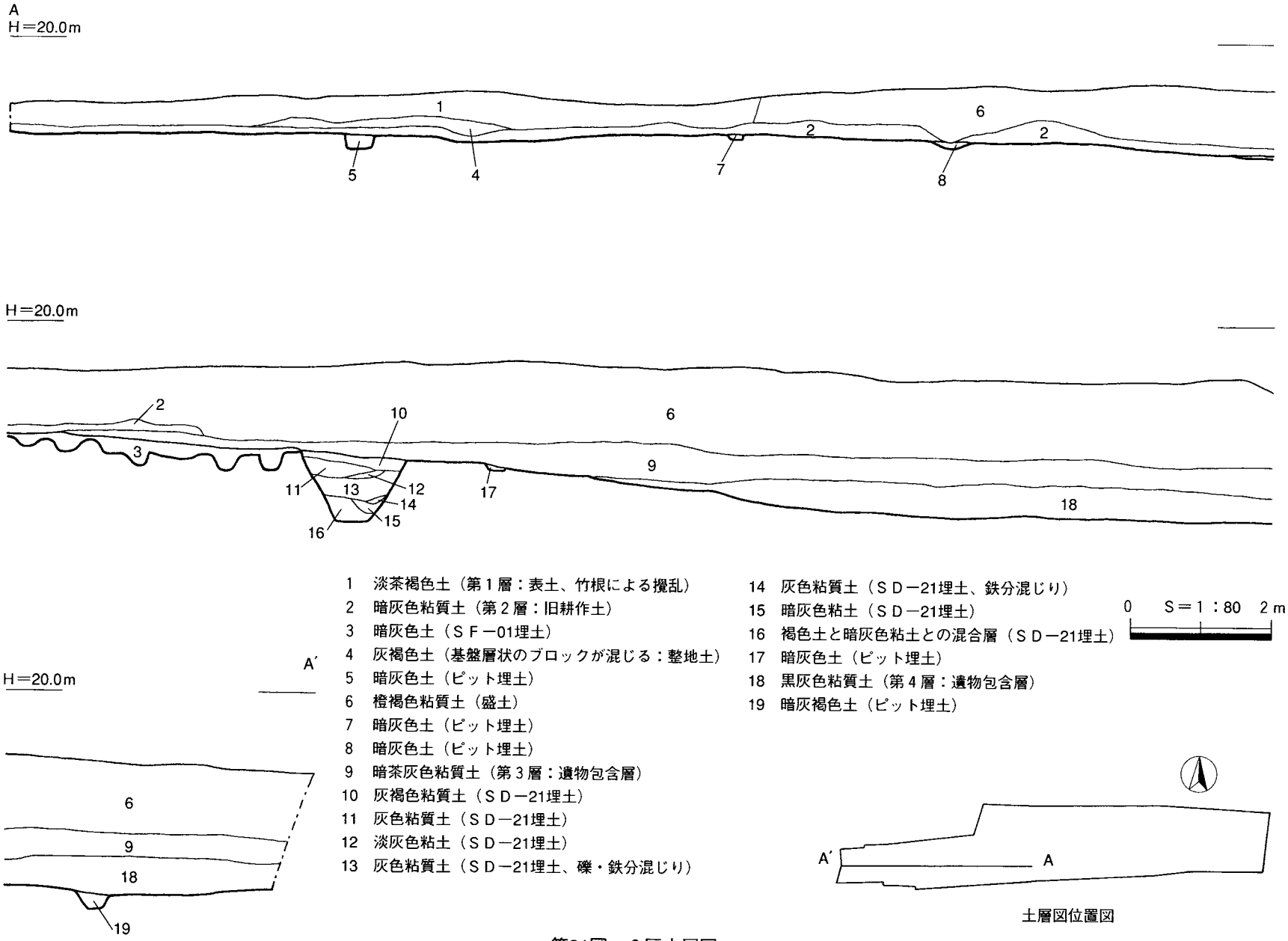
1　暗茶灰色粘質土（第１層：現耕作土）
2　灰茶色土（第２層：旧耕作土）
3　灰褐色粘質土（第２層：旧耕作土）
4　暗灰色粘質土（石、礫混じり）
5　暗黒灰色粘質土（第４層：遺物包含層）
6　灰色砂質土（石、礫混じり）
7　暗灰色粘質土（ＳＤ－34埋土）
8　灰色粘土（ＳＤ－35埋土：暗渠排水）
9　暗灰色粘質土（ピット埋土）
10　茶灰色粘質土（ピット埋土）
11　暗灰褐色粘質土（ＳＤ－36埋土）
12　暗灰色粘質土（ピット埋土）



1　暗灰褐色粘質土（第１層：現耕作土）
2　暗灰色粘質土（第２層：旧耕作土）
3　黒灰色粘質土（第４層：遺物包含層）
4　灰褐色粘質土（ＳＤ－50埋土）



第30図　１・３・４区土層図



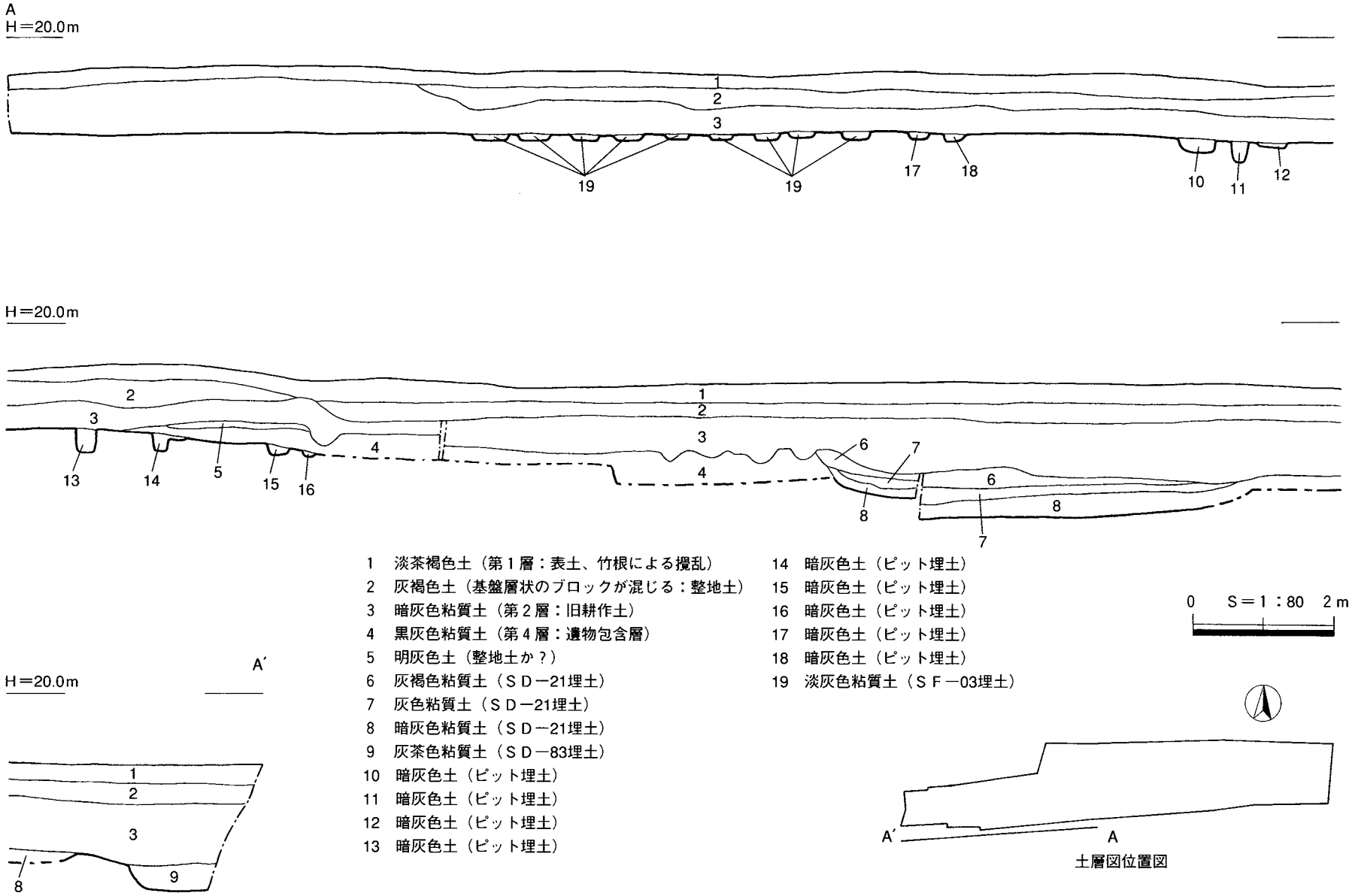
1　淡茶褐色土（第１層：表土、竹根による攪乱）
2　暗灰色粘質土（第２層：旧耕作土）
3　暗灰色土（ＳＦ－01埋土）
4　灰褐色土（基盤層状のブロックが混じる：整地土）
5　暗灰色土（ピット埋土）
6　橙褐色粘質土（盛土）
7　暗灰色土（ピット埋土）
8　暗灰色土（ピット埋土）
9　暗茶灰色粘質土（第３層：遺物包含層）
10　灰褐色粘質土（ＳＤ－21埋土）
11　灰色粘質土（ＳＤ－21埋土）
12　淡灰色粘土（ＳＤ－21埋土）
13　灰色粘質土（ＳＤ－21埋土、礫・鉄分混じり）
14　灰色粘質土（ＳＤ－21埋土、鉄分混じり）
15　暗灰色粘土（ＳＤ－21埋土）
16　褐色土と暗灰色粘土との混合層（ＳＤ－21埋土）
17　暗灰色土（ピット埋土）
18　黒灰色粘質土（第４層：遺物包含層）
19　暗灰褐色土（ピット埋土）

0　Ｓ＝１：80　2 m

A′　A

土層図位置図

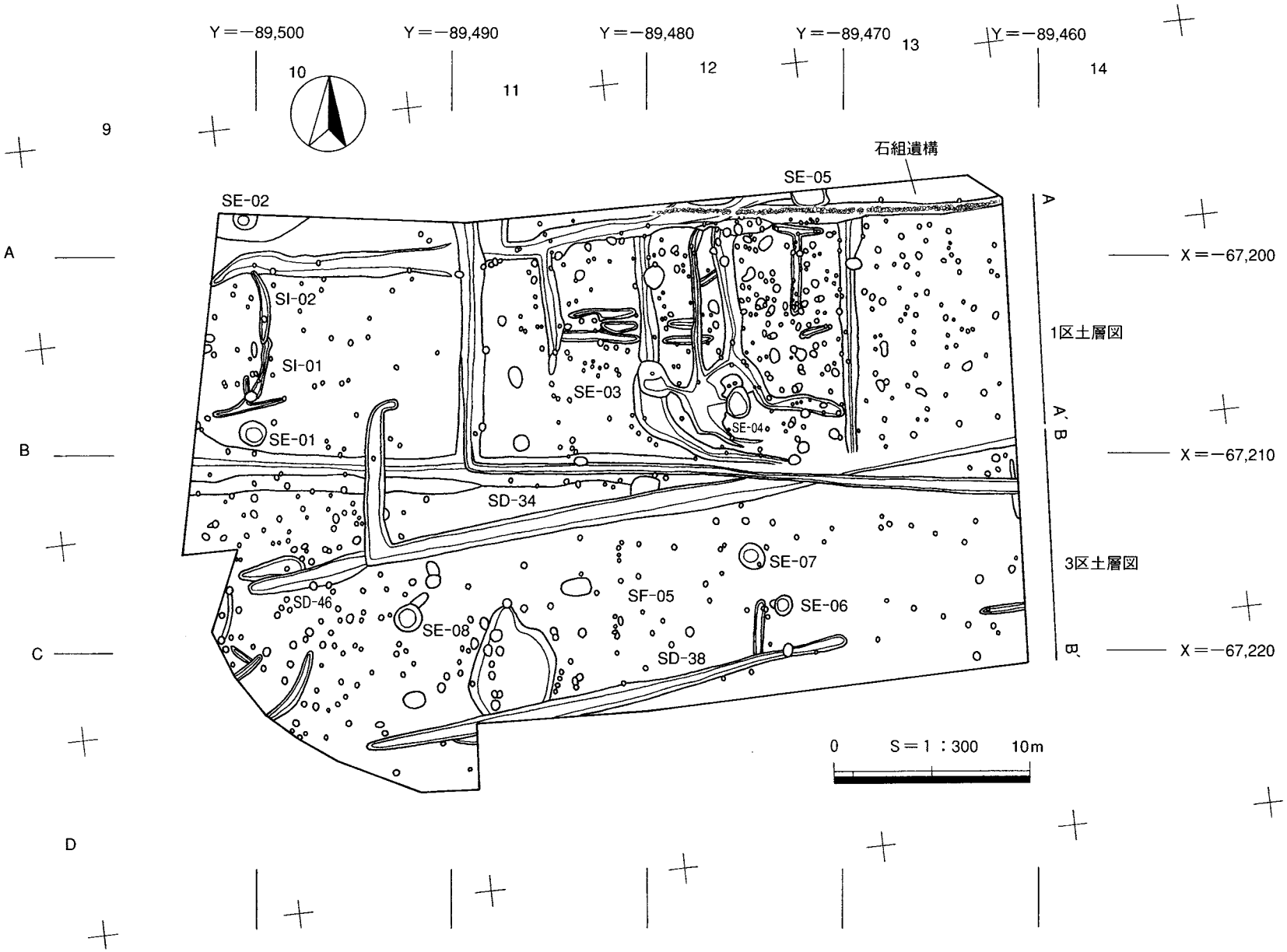
第31図　２区土層図



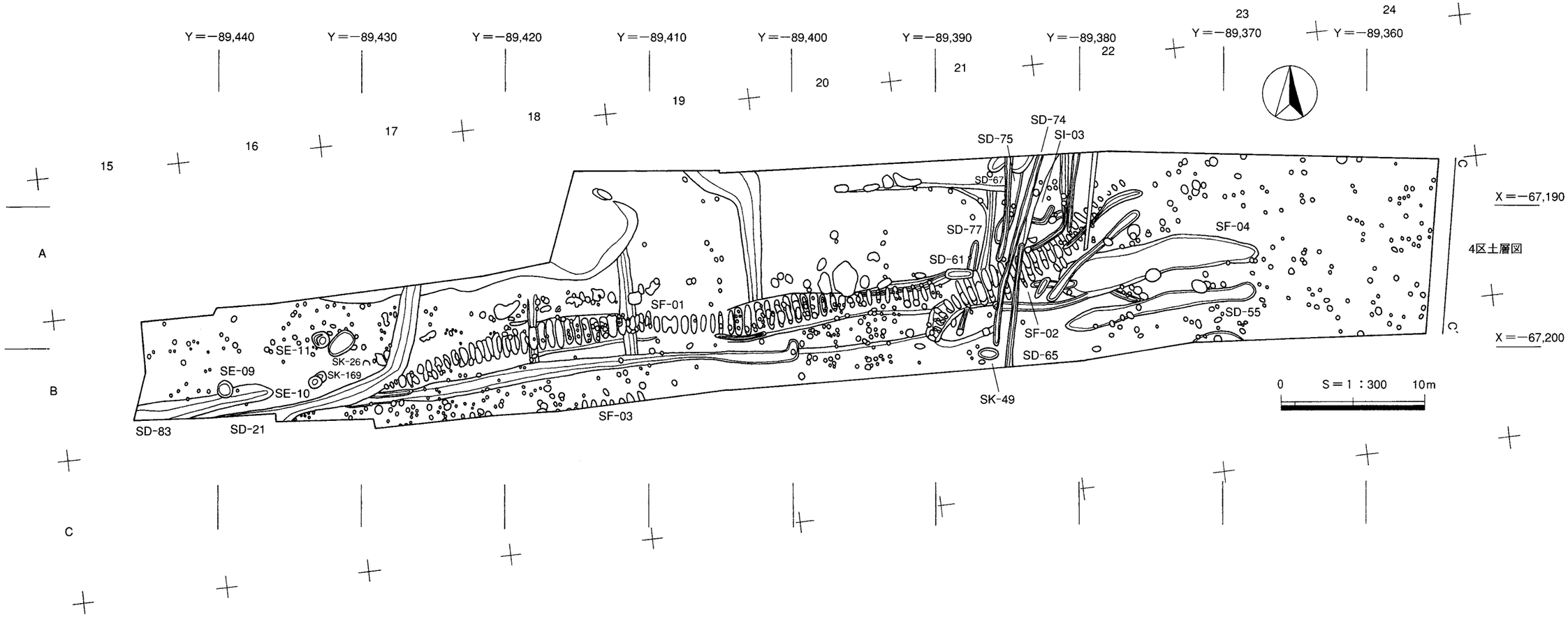
1　淡茶褐色土（第１層：表土、竹根による攪乱）
2　灰褐色土（基盤層状のブロックが混じる：整地土）
3　暗灰色粘質土（第２層：旧耕作土）
4　黒灰色粘質土（第４層：遺物包含層）
5　明灰色土（整地土か？）
6　灰褐色粘質土（ＳＤ－21埋土）
7　灰色粘質土（ＳＤ－21埋土）
8　暗灰色粘質土（ＳＤ－21埋土）
9　灰茶色粘質土（ＳＤ－83埋土）
10　暗灰色土（ピット埋土）
11　暗灰色土（ピット埋土）
12　暗灰色土（ピット埋土）
13　暗灰色土（ピット埋土）
14　暗灰色土（ピット埋土）
15　暗灰色土（ピット埋土）
16　暗灰色土（ピット埋土）
17　暗灰色土（ピット埋土）
18　暗灰色土（ピット埋土）
19　淡灰色粘質土（ＳＦ－03埋土）

土層図位置図

第32図　６区土層図



第33図　1・3区遺構配置図



第34図　2・4～6区遺構配置図

遺物は出土しなかったが、平面形態と包含層出土遺物から古墳時代前期頃のものと推測される。

ＳＩ－03（第36図）

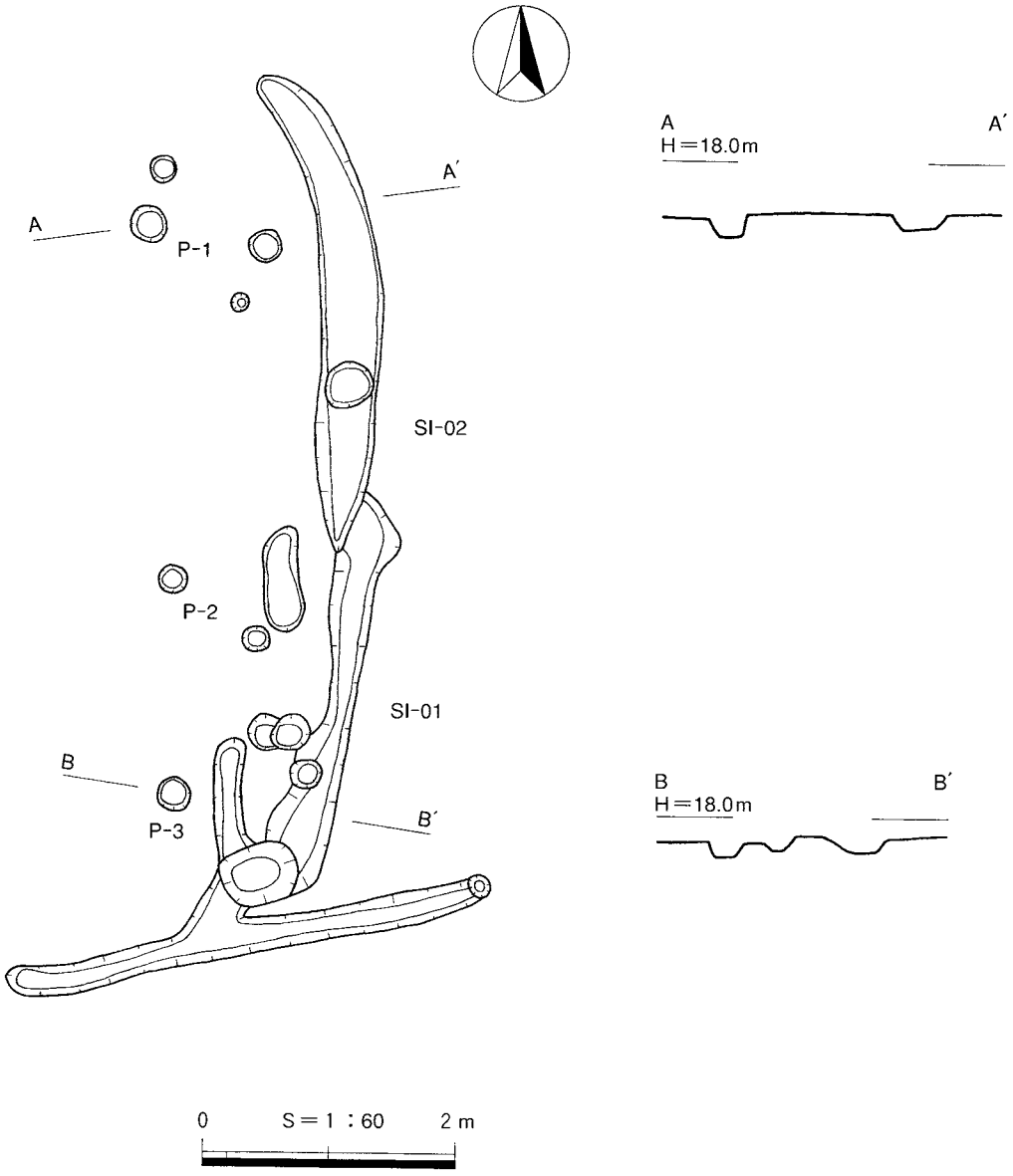
ＳＩ－03はＢ－21・22グリッドに位置し、標高17.7～18.1ｍのほぼ平坦面に立地する。

平面形態は南東隅の周壁溝が残存するのみであるが、方形あるいは長方形を呈するものと思われ、規模は東西長0.9ｍ以上、南北長1.7ｍ以上をはかる。

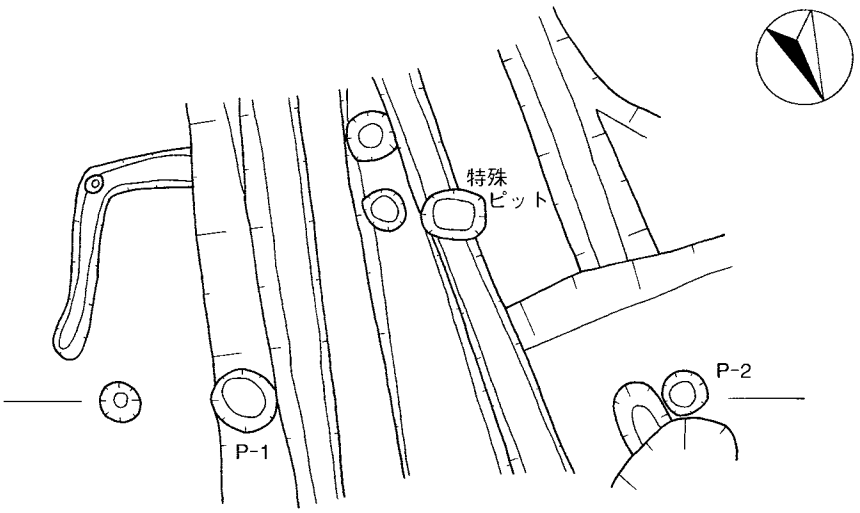
主柱穴はＰ－１、Ｐ－２の２基を確認し、各々の規模は、Ｐ－１（52×51－43）㎝、Ｐ－２（36×36－38）㎝である。なお、周壁溝は幅0.2～0.3ｍ、深さ0.1～0.2ｍをはかる。また、南側には特殊ピットがあり、その規模は51×40－45㎝をはかる。

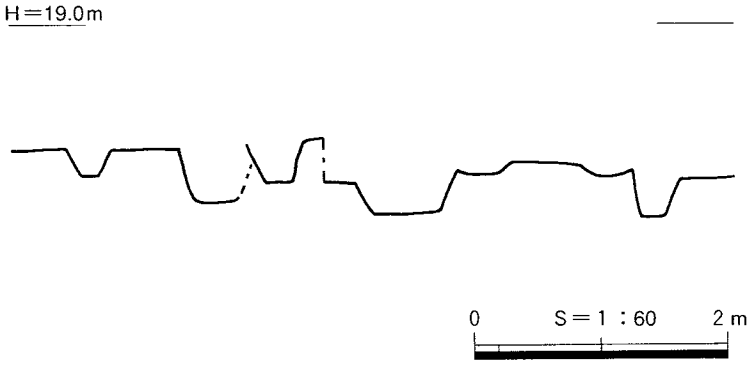
遺物は特殊ピットから土師器（１～３）とミニチュア土器（４）が出土した。

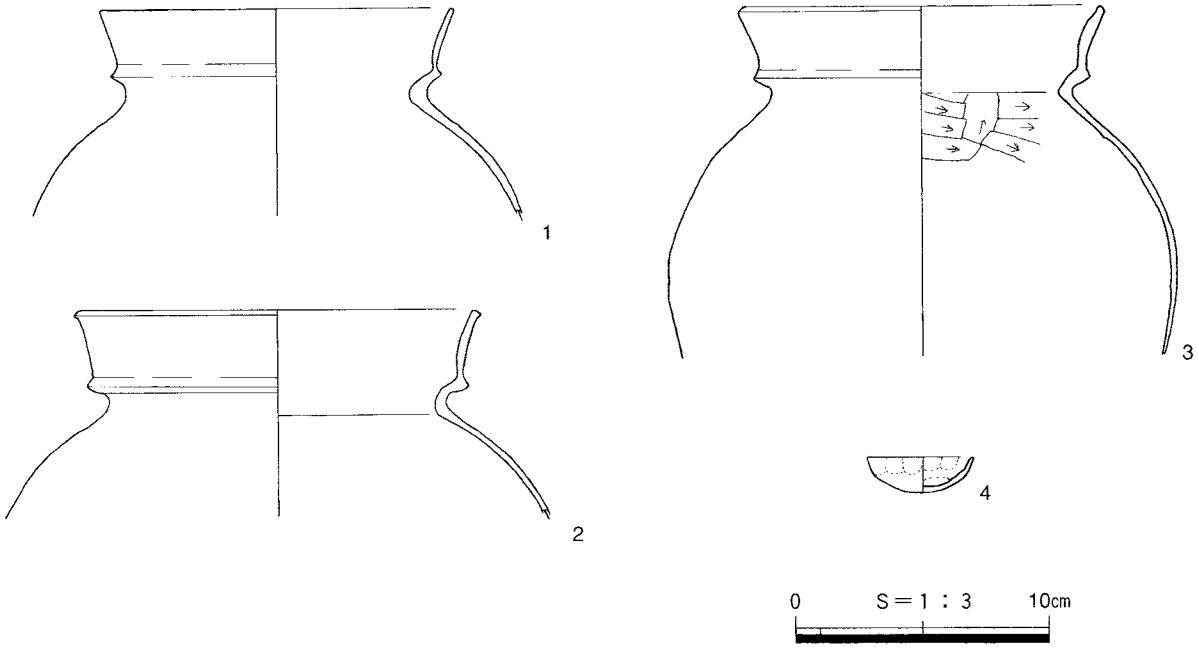
時期は出土遺物から古墳時代前期後葉頃のものと考えられる。



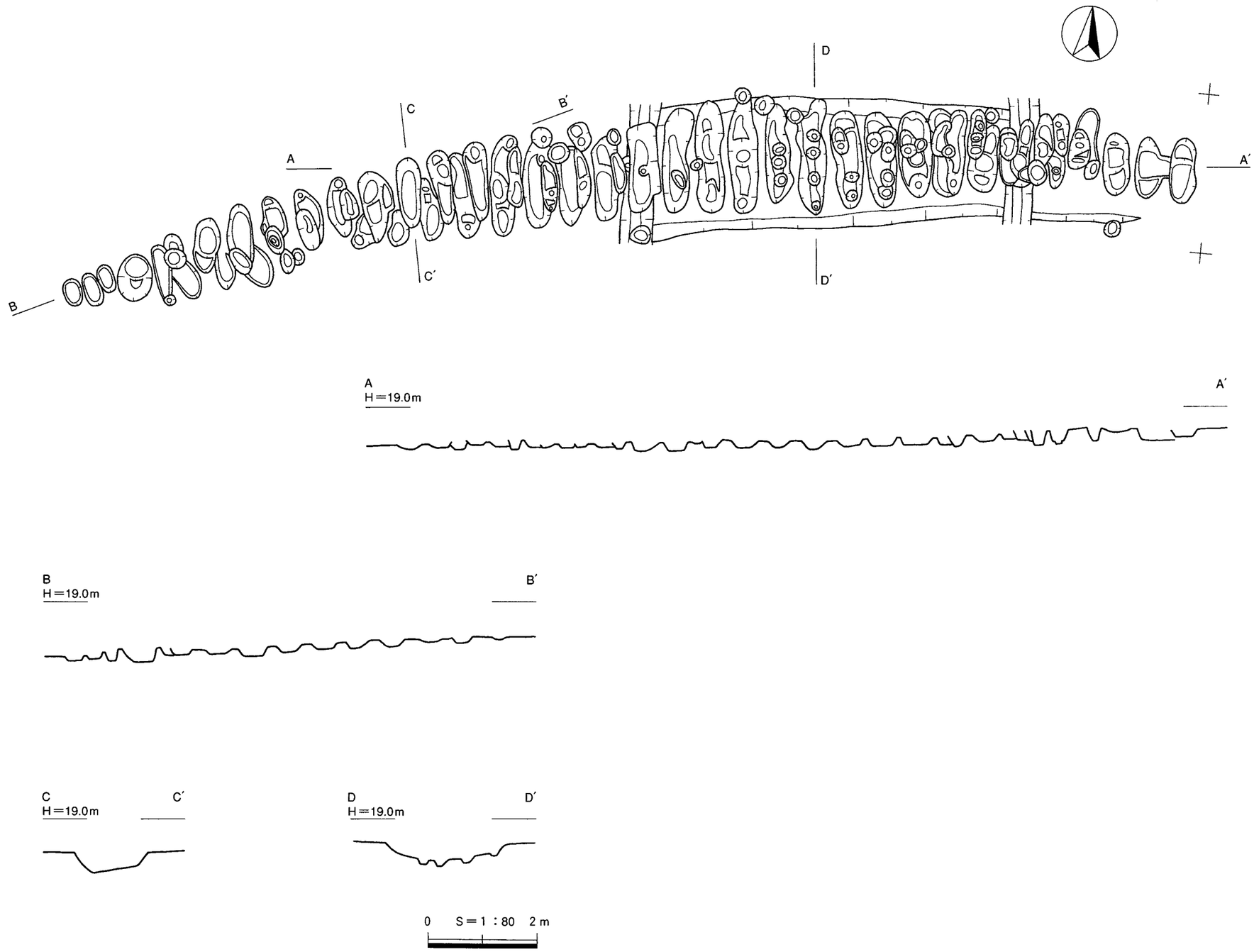
第35図　ＳＩ－01・02遺構図



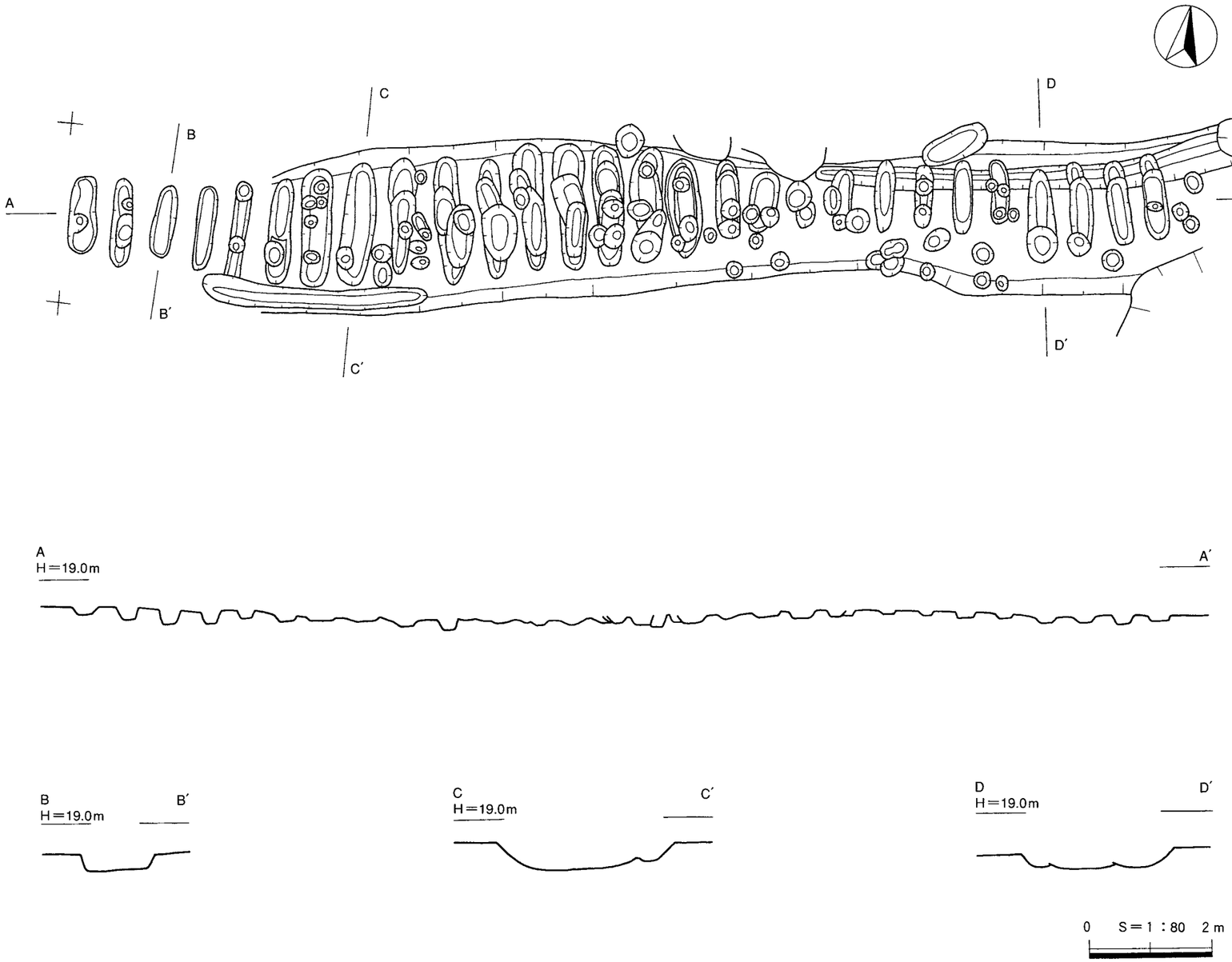




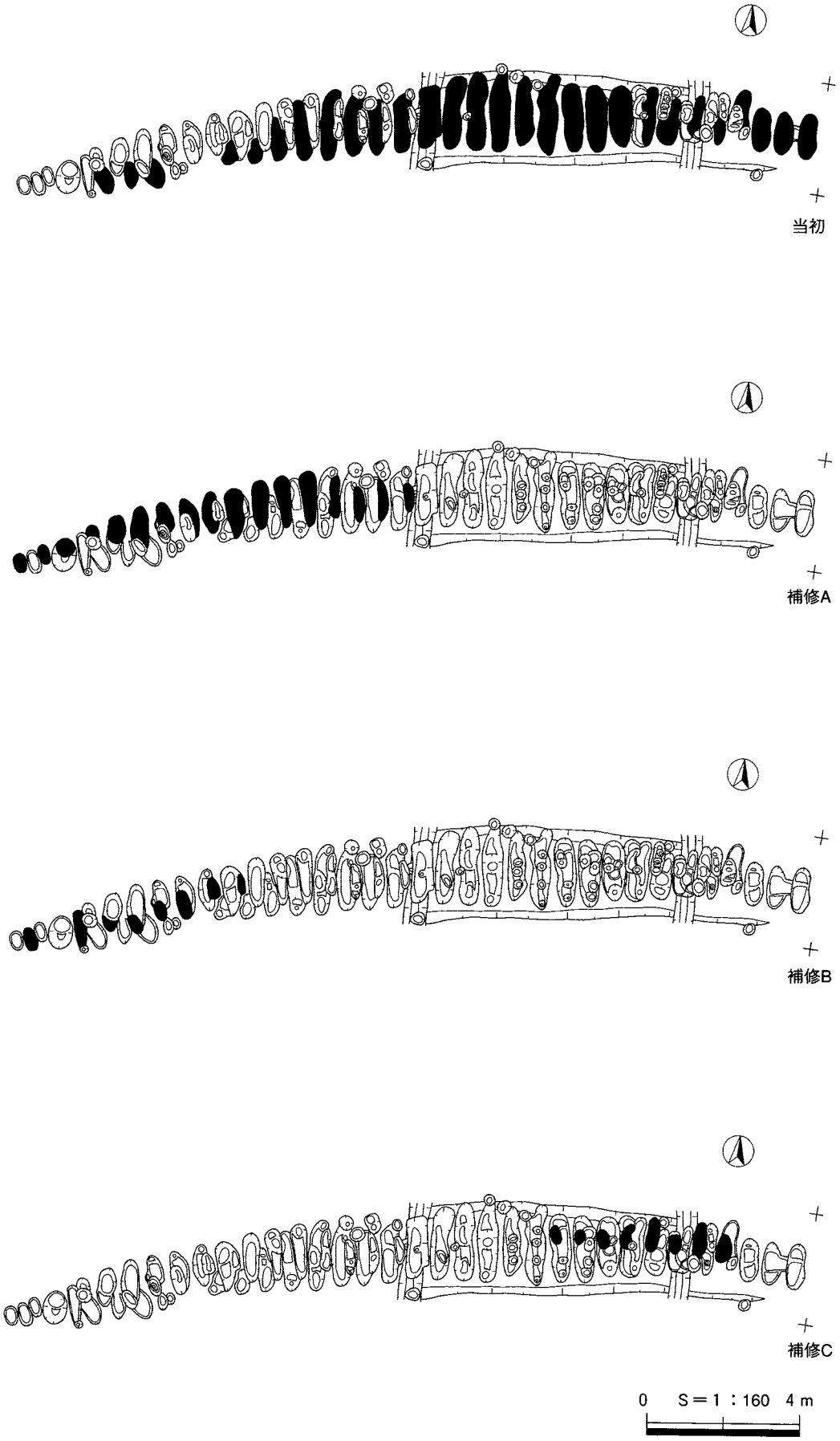
第36図　ＳＩ—03遺構図及び出土遺物実測図



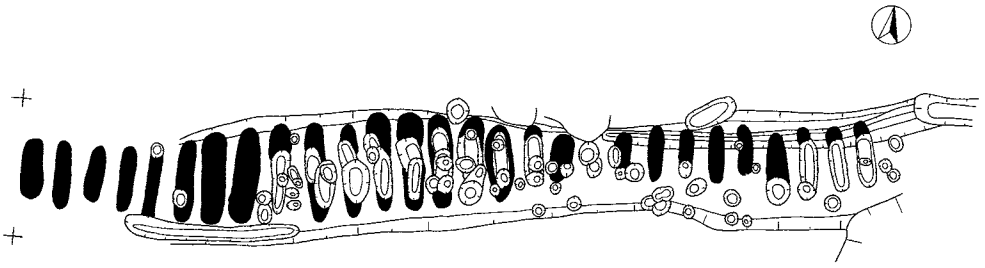
第37図　ＳＦ－01西側遺構図



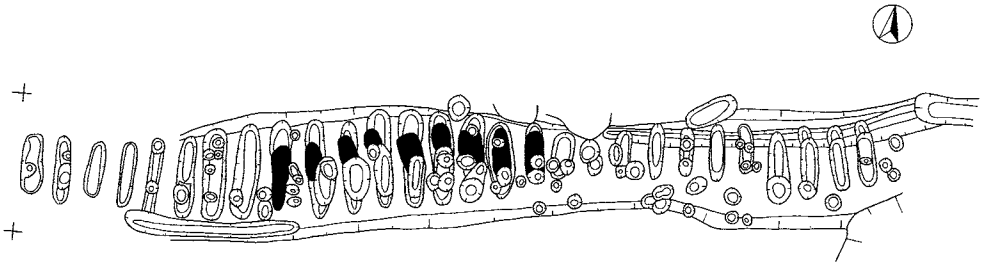
第38図　ＳＦ－01東側遺構図



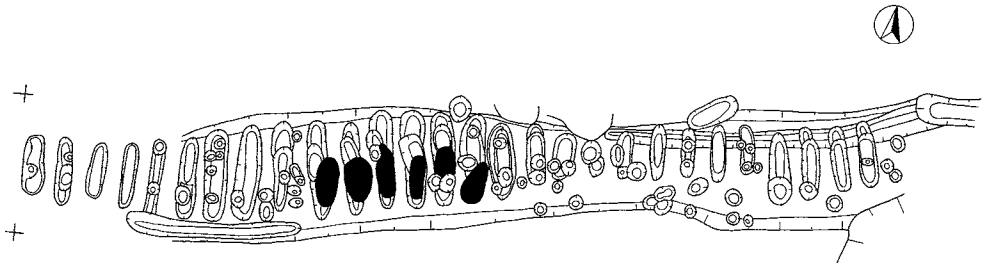
第39図　ＳＦ―01西側補修位置図



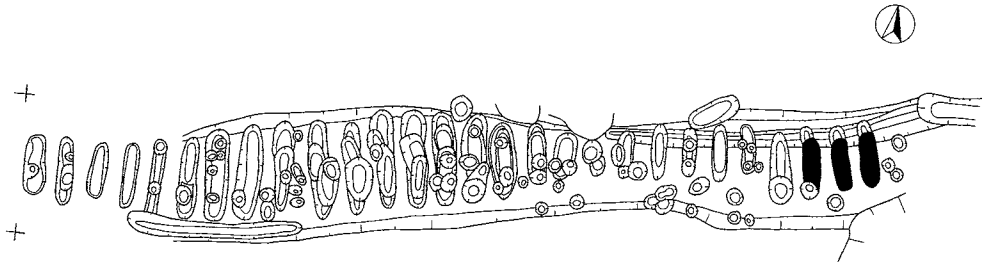
当初



補修D



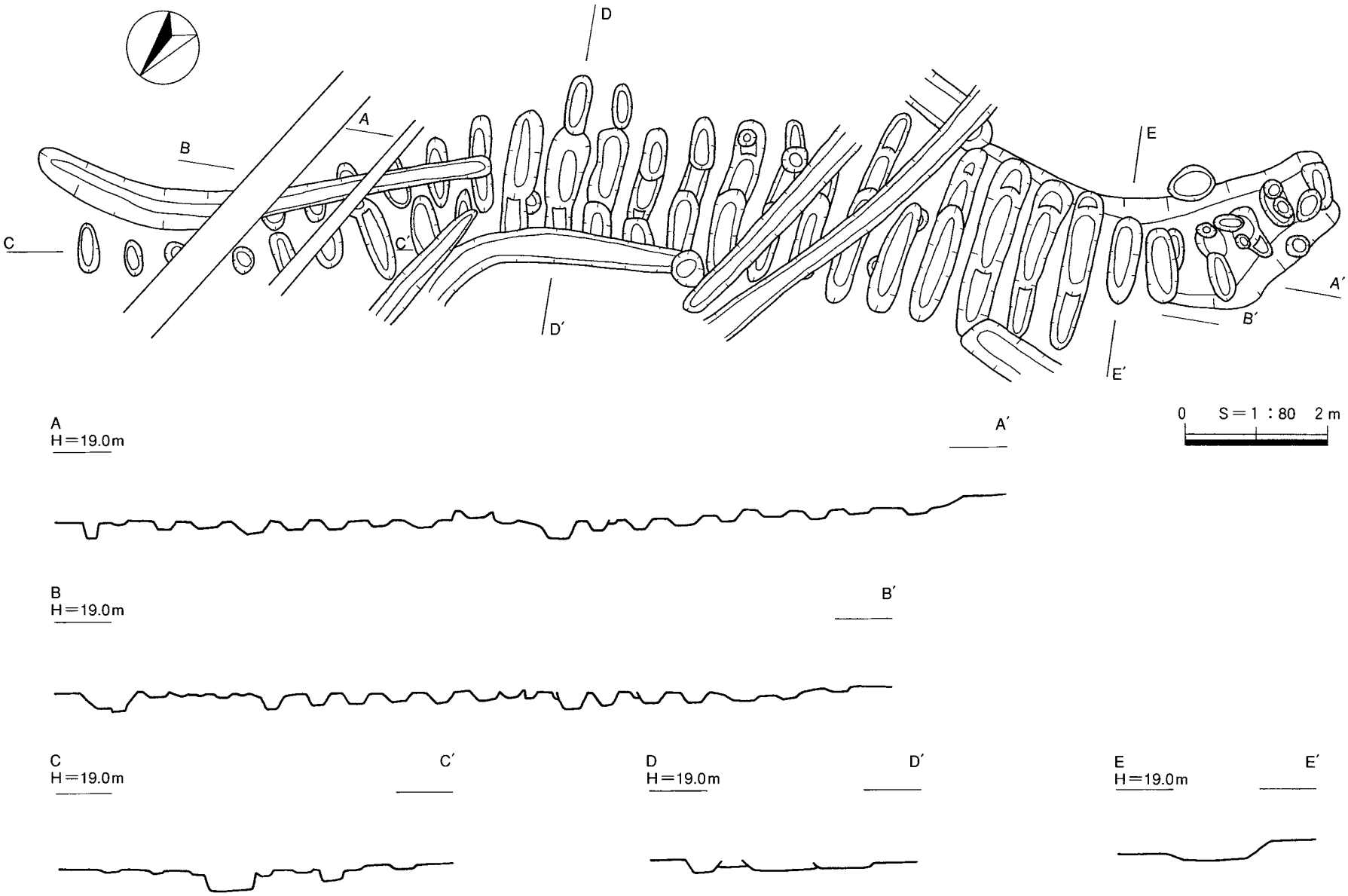
補修E



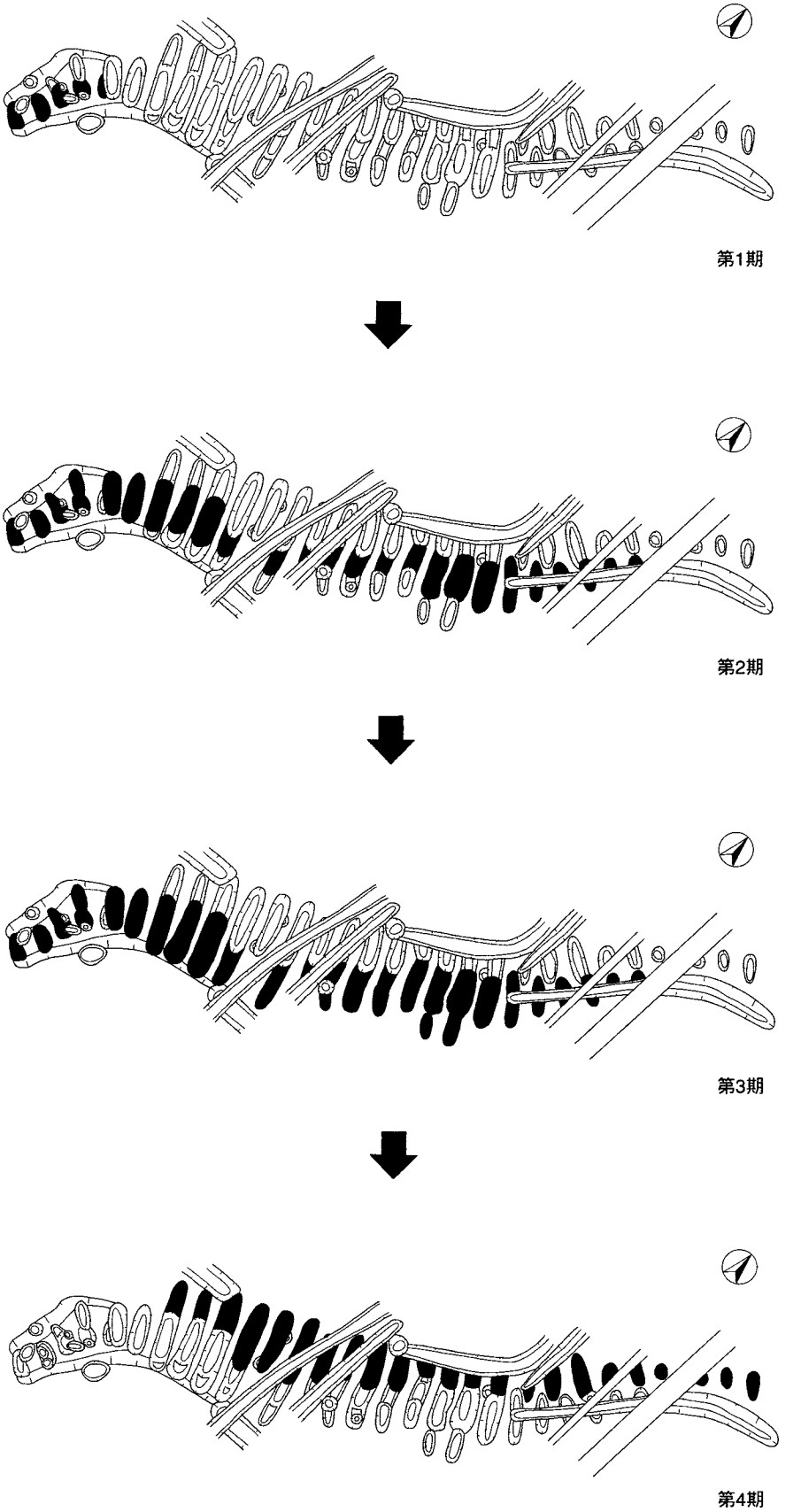
補修F

0　S＝1：160　4 m

第40図　ＳＦ―01東側補修位置図



第41図　ＳＦ―02遺構図



第42図　ＳＦ―02変遷図

2．道路状遺構

ＳＦ－01（第37図～第40図）

ＳＦ－01はＢ－17～21グリッドに位置し、Ｂ－19～21グリッドではほぼ平坦となっているが、Ｂ－17～18グリッドでは西へ緩やかに傾斜している。

ＳＦ－01はＳＦ－04の一部と重複しており、ほぼ東西にのびるが、西側は南へ緩やかに湾曲している。また、東側ではＳＦ－02に合流している。全長は39.4ｍをはかる。

構造的には、ＳＦ－04の溝状の掘り込みを再利用あるいは再掘削して、その底面には溝状の掘り込みと直交して楕円形の土坑が約60㎝間隔で並んでいる。いわゆる波板状凹凸面を形成している。溝状の掘り込みは幅1.8～2.7ｍ、深さ0.2～0.4ｍ、底面の土坑は長さ0.5～2.3ｍ、幅0.3～0.6ｍ、深さ0.1～0.3ｍをはかり、埋土はいずれも第２層（旧耕作土）と同質の土であり、硬化はしていない。なお、溝状の掘り込みと底面の土坑は平面、断面とも切合関係は認められなかった。また、土坑内には若干であるが、20～30㎝大の石が認められるものがあり、当初は土坑内に石を充填していたものと考えられるが、廃道後に石が抜き取られたものと理解する。

なお、補修した痕跡が少くとも６単位（補修Ａ～Ｆ）認められ、平坦面では既存の土坑と重複させ、その一部を補修しているのに対して西側の斜面部では既存の土坑とは位置を少しずらして補修している。

遺物は図示できないが、須恵器、土師器、鉄滓が出土した。

時期を特定できる遺物は出土していないが、７世紀末～８世紀初頭に埋没したＳＤ－21を切っていることから、７世紀末～８世紀初頭以降のものであると考えられる。

ＳＦ－02（第41図、第42図）

ＳＦ－02はＡ－22、Ｂ－21・22グリッドに位置し、標高17.6～18.4ｍのほぼ平坦面に立地する。

ＳＦ－02は南西から北東へのび、全長は17.8ｍをはかる。

構造的にはＳＦ－01と同様であるが、溝状の掘り込みは南西側の2.8ｍ分が残存するのみで、それ以外は後世の削平を受けており、残存していない。南西側の溝状の掘り込みは幅1.2～1.8ｍ、深さ0.2～0.3ｍ、底面の土坑は長さ0.4～1.9ｍ、幅0.3～0.6ｍ、深さ0.1～0.2ｍをはかる。底面の土坑の埋土は第２層（旧耕作土）と同質の土であり、硬化はしていない。また、土坑内には若干であるが、20～30㎝大の石が認められるものがあり、当初は土坑内に石を充填していたものと考えられるが、廃道後に石が抜き取られたものと理解する。

ＳＦ－02は大きく４時期（古い順に第１期～第４期）に分けられるものと思われる。第１期には幅0.6～0.7ｍで、ＳＦ－04に取り付くように南西の2.8ｍ分が構築され、第２期にはさらに北西へのびるとともに、幅0.6～1.9ｍに拡幅がなされる。第３期には南東側に0.2～0.6ｍ拡幅したものと思われ、第４期には北西側に拡幅あるいは付け替えを行ったものと考えられる。

遺物は図示できないが、須恵器、土師器が出土した。

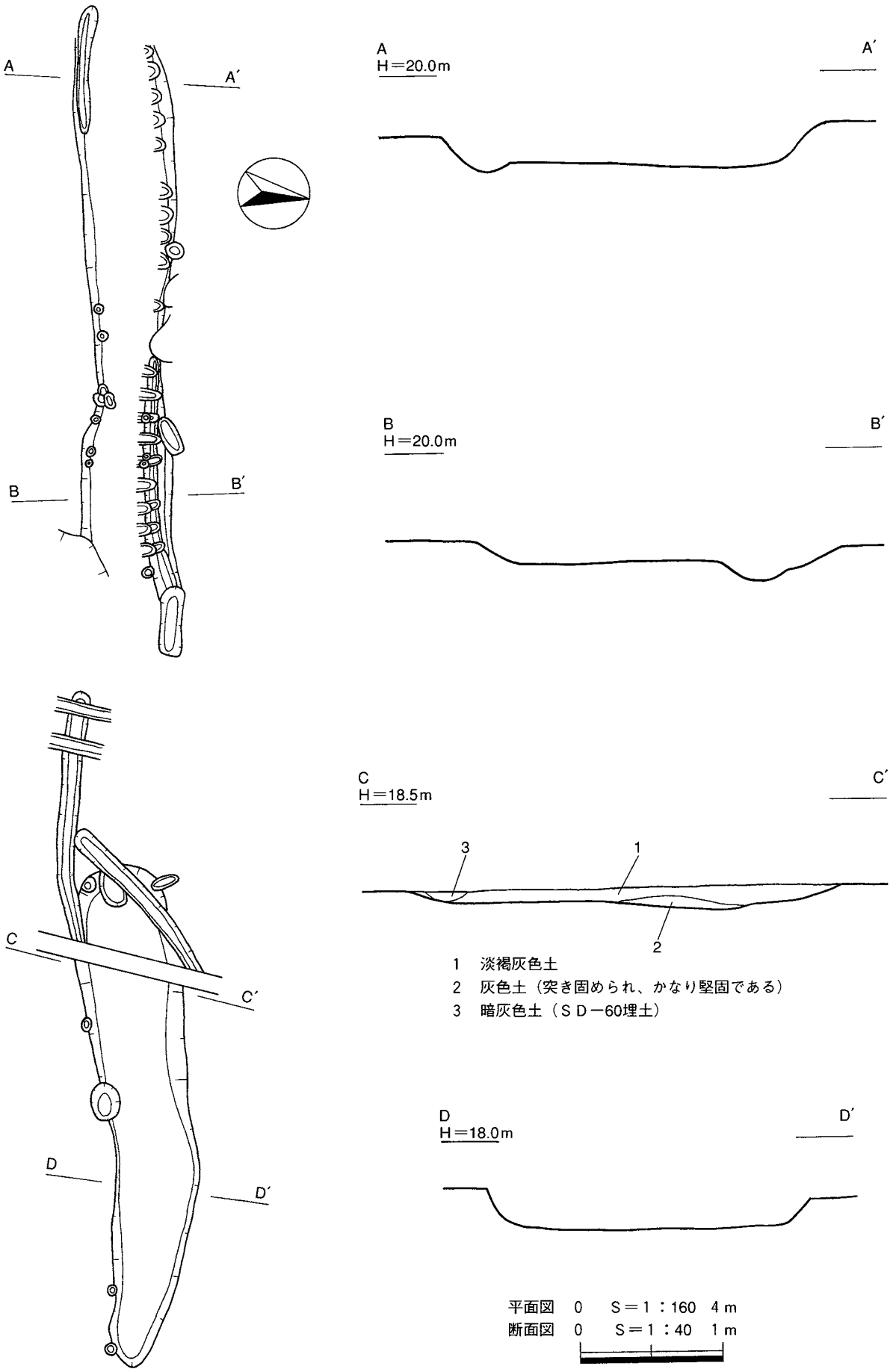
時期を特定できる遺物が出土していないため時期は不明であるが、切合関係からＳＦ－01よりも古いものと考えられる。

ＳＦ－04（第43図）

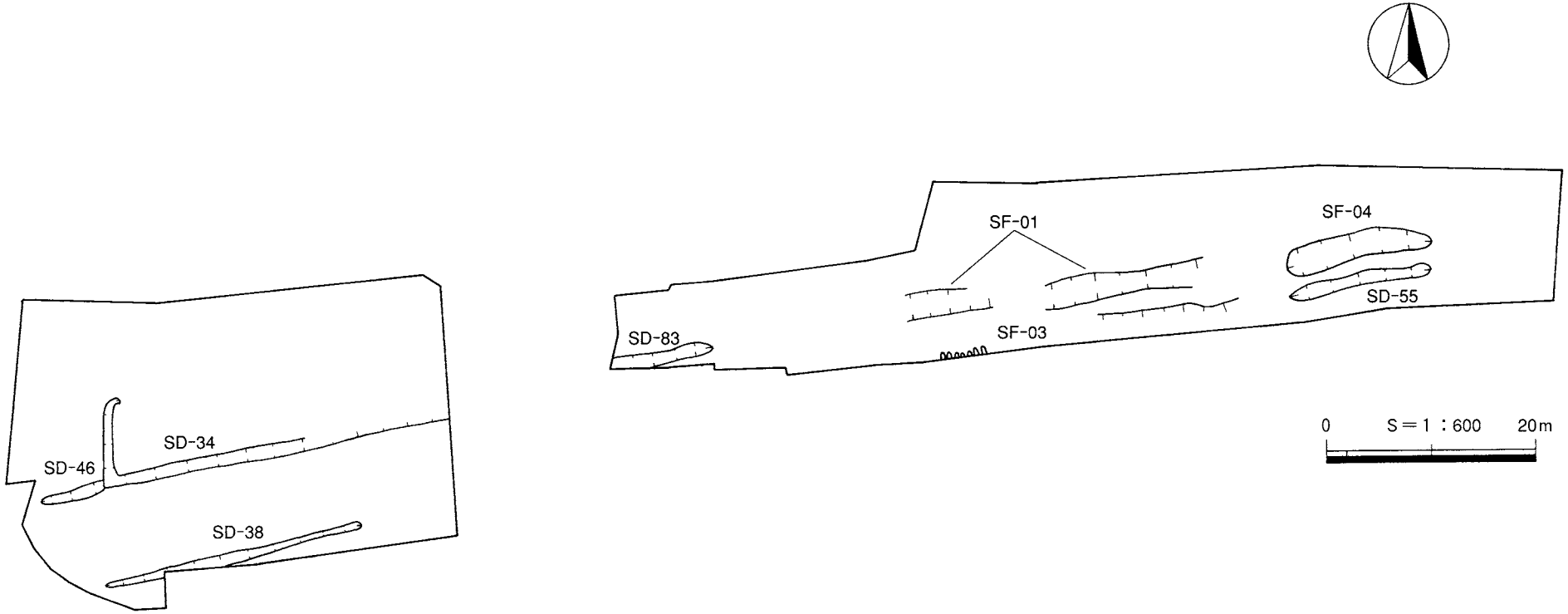
ＳＦ－04はＢ－19～23グリッドに位置し、標高17.4～19.6ｍのほぼ平坦面に立地する。

ＳＦ－04はＳＦ－05の北側側溝と重複するものと思われ、廃道後はＳＦ－01として再整備されている。全長は38.0ｍをはかる。

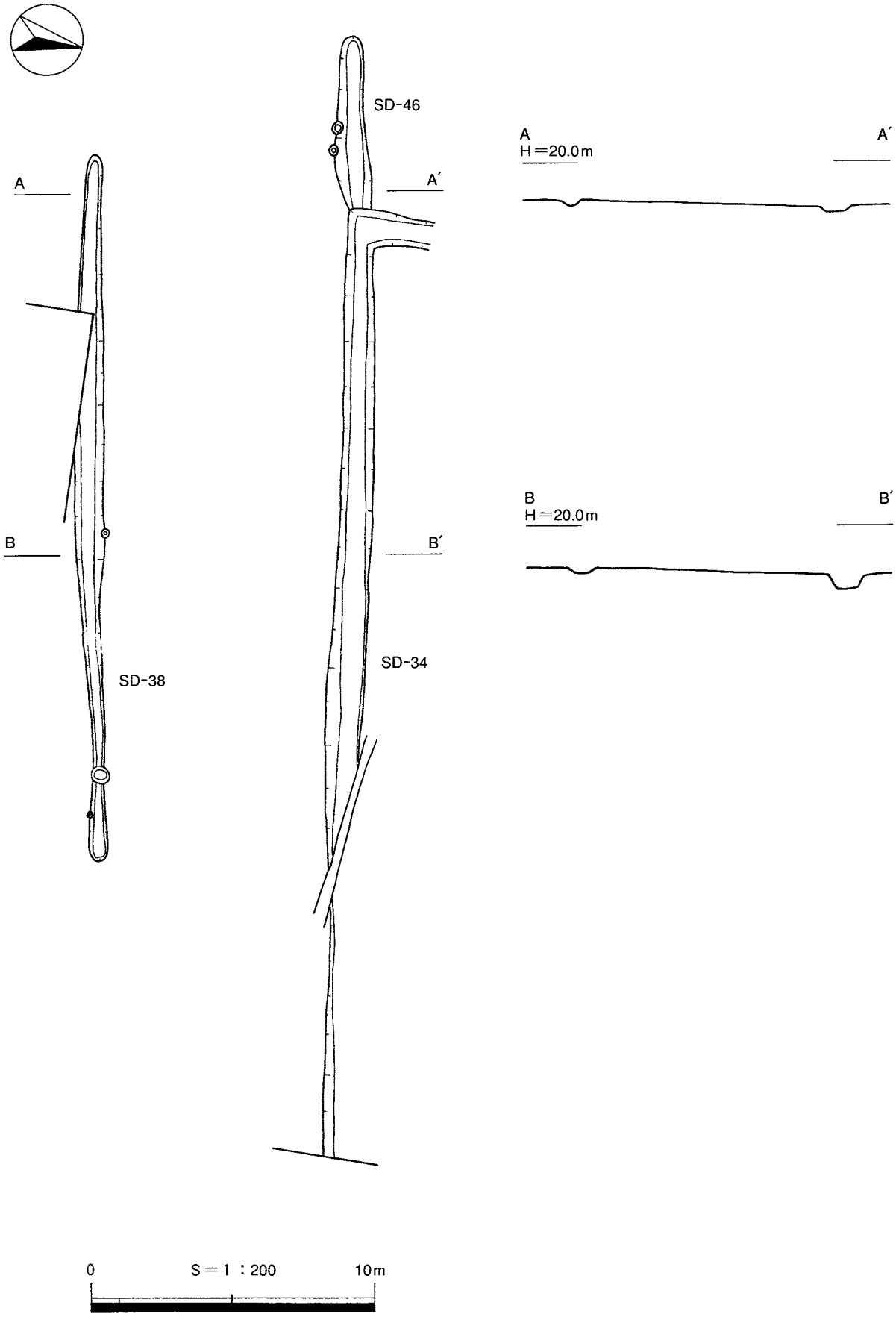
構造的にはＳＦ－05の北側側溝を拡幅、再掘削し、さらに、東側のＢ－22・23グリッドでは、溝状の掘り込みの底面に厚さ10㎝程、基盤層状の土を入れ、突き固めて硬化面を形成している。一方、Ｂ－19～21グリッドでは、ＳＦ－01の構築によって削平された可能性もあるが、Ｂ－22・23グリッドのような硬化面は認められない。溝状



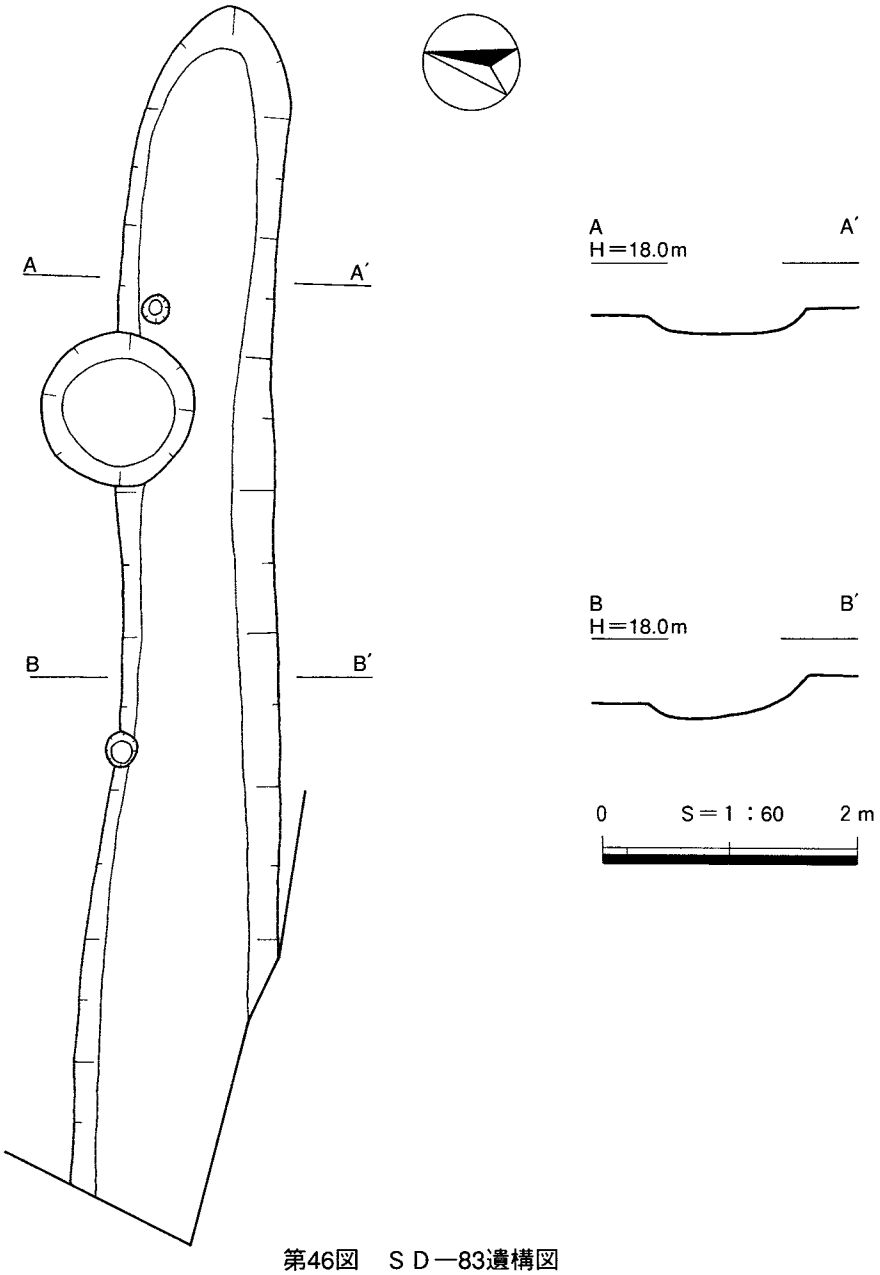
第43図　ＳＦ－04遺構図



第44図　ＳＦ―05全体図



第45図　1・3区ＳＦ—05遺構図



第46図　ＳＤ－83遺構図

の掘り込みはＢ－19～21グリッドでは幅1.8～2.7ｍ、深さ0.2～0.4ｍ、Ｂ－22・23グリッドでは幅1.5～2.8ｍ、深さ0.1～0.2ｍ、Ｂ－22・23グリッドの硬化面は幅0.9ｍをはかる。主軸方向はＮ－84°－Ｅである。

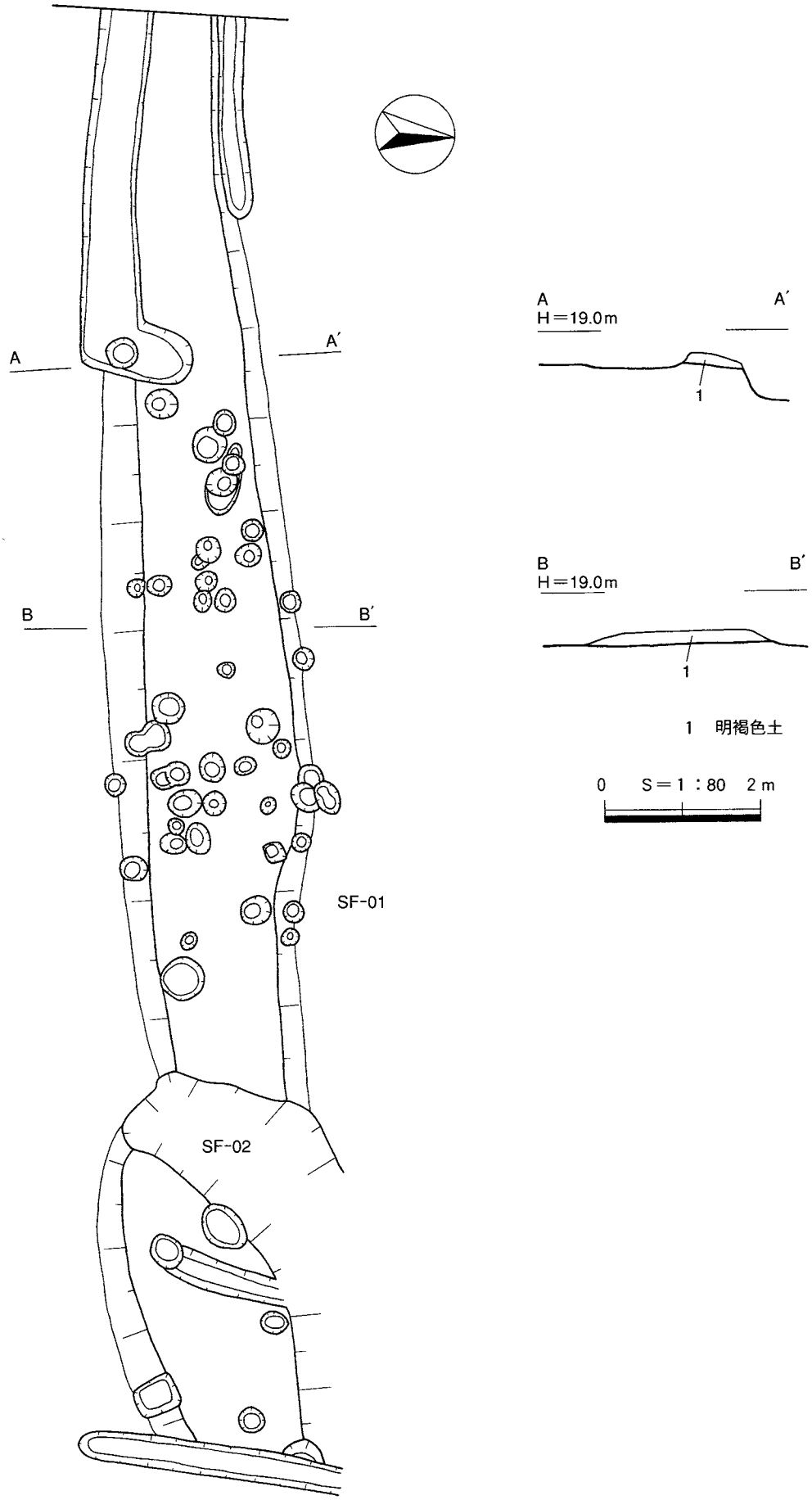
遺物は出土しておらず、時期は不明であるが、切合関係からＳＦ－01・02よりも古いものと考えられる。

ＳＦ－05（第44図～第49図）

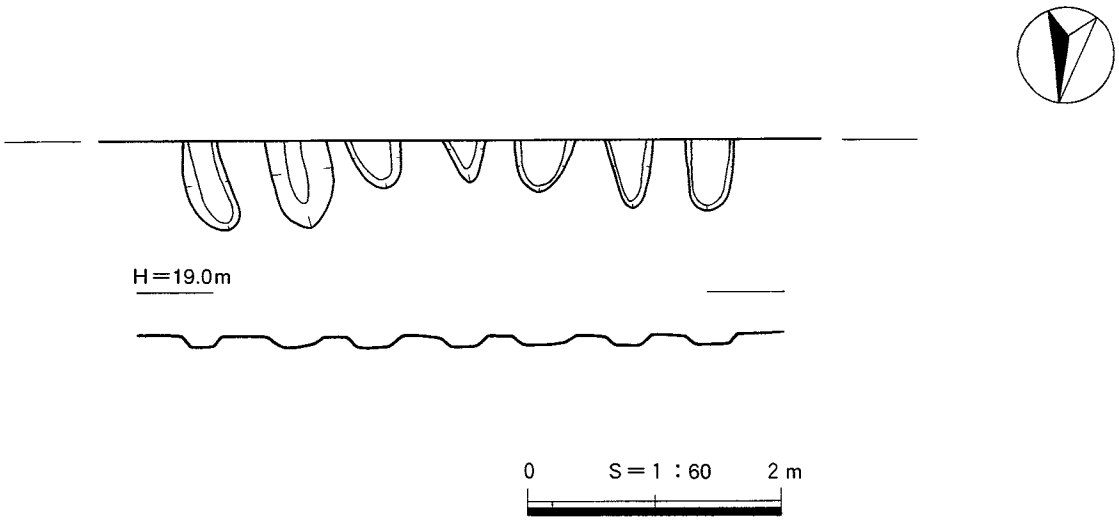
ＳＦ－05は両側に側溝を有する道路である。

３区では南側溝（ＳＤ－38）と北側溝（ＳＤ－46）を確認した。ＳＤ－38は長さ25.3ｍ、幅0.4～1.1ｍ、深さ0.2～0.3ｍ、ＳＤ－46は長さ6.2ｍ以上、幅0.9～1.4ｍ、深さ0.1～0.2ｍをはかり、いずれも主軸方向はＮ－78°－Ｅで、遺物は出土しなかった。なお、ＳＤ－46の東側は後世にＳＤ－34によって改変を受けている。側溝の心々間距離は9.2ｍで、路盤及び路面は削平されており残存していない。

２・４～６区では南側溝は調査区外に位置するが、北側溝は断続的ではあるがその痕跡を確認できる。北側溝は廃道後、ＳＦ－04、ＳＦ－01によって改変を受けており、ＳＤ－83のみが当初の姿で残存する。ＳＤ－83は長



第47図　ＳＦ―05路盤遺構図



第48図　ＳＦ－03遺構図

さ9.5ｍ以上、幅1.2～1.6ｍ、深さ0.2～0.3ｍをはかり、主軸方向はＮ－80°－Ｅである。遺物は出土しなかった。

路盤及び路面は大部分が削平されているが、Ｂ－19～21グリッドにおいて長さ18.8ｍ、幅1.9～2.5ｍにわたって路盤を確認した。路盤は基盤層上に、基盤層状の土を厚さ0.1～0.2ｍ盛土したものであるが、版築や突き固めた状況は認められない。また、路面は既に削平されたものと思われる。なお、東側のＳＦ－04とＳＤ－55の間には路盤が崩壊した土が認められる。

また、Ｃ－18・19グリッドの道路中央部においていわゆる波板状凹凸面（ＳＦ－03）を確認した。ＳＦ－03は道路として単独で存在した可能性もあるが、ＳＦ－05の補修に伴うものとも考えられる。

ＳＦ－03は南側が調査区外にかかるが、ほぼ東西へのび、全長は4.5ｍをはかる。溝状の掘り込みは削平されており、底面の土坑が残存するのみである。底面の土坑は幅0.3～0.7ｍ、深さ0.1ｍをはかる。遺物は出土しなかった。

ＳＦ－05は後に道路幅が縮小される。このような状況は当調査地の東側に隣接する橋本徳道遺跡でも認められ、北側溝は原位置を保つが、南側溝は北へと移動し（ＳＤ－55)、側溝の心々間距離は約３ｍとなる。

ＳＤ－55はＢ－22・23グリッドに位置し、長さ13.7ｍ、幅0.9～1.5ｍ、深さ0.1～0.2ｍをはかり、主軸方向はＮ－79°－Ｅである。遺物は出土しなかった。

なお、ＳＦ－05からは遺物は出土しておらず、時期は不明であるが、切合関係からＳＦ－01・02・04よりも古いものと考えられる。

３．井　　戸

ＳＥ－01（第50図）

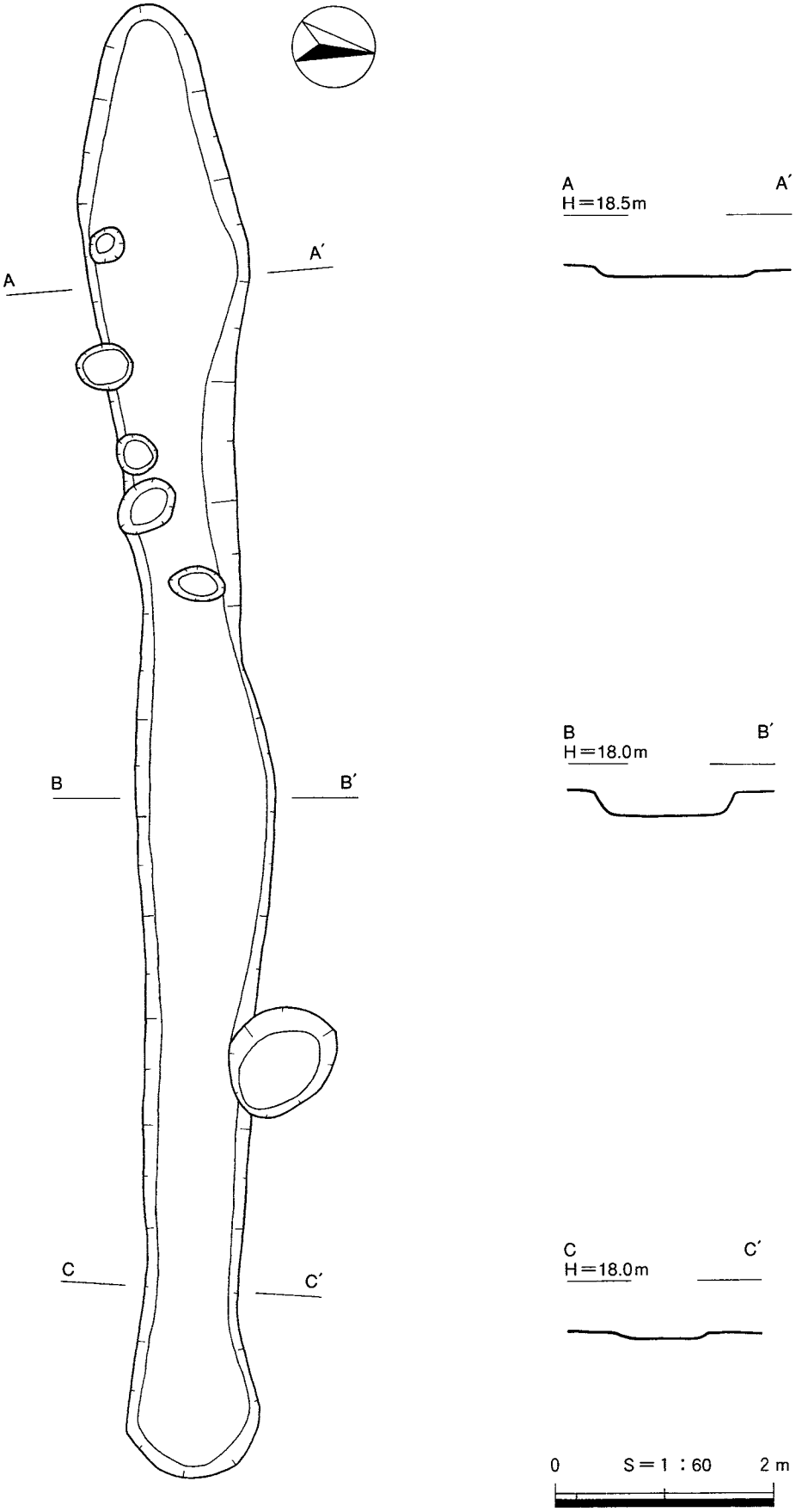
ＳＥ－01はＢ－９・10グリッドに位置し、標高17.9～18.0ｍのほぼ平坦面に立地する。平面形態は円形を呈し、規模は長軸1.4ｍ、短軸1.3ｍ、深さ0.8ｍをはかる。

遺物は出土しなかった。

ＳＥ－02（第50図）

ＳＥ－02はＡ－10グリッドに位置し、標高17.1～17.4ｍのほぼ平坦面に立地する。平面形態は円形を呈し、規模は長軸1.2ｍ、短軸0.9ｍ以上、深さ1.1ｍをはかる。

遺物は出土しなかった。



第49図　ＳＤ―55遺構図

ＳＥ－03（第51図）

ＳＥ－03はＢ－12グリッドに位置し、標高17.4～17.6ｍのほぼ平坦面に立地する。平面形態は不整形な楕円状を呈し、規模は長軸2.1ｍ、短軸1.5ｍ、深さ0.1ｍをはかる。

遺物は出土しなかった。

ＳＥ－04（第51図）

ＳＥ－04はＢ－12グリッドに位置し、標高17.5～17.7ｍのほぼ平坦面に立地する。平面形態は不整形な楕円状を呈し、規模は長軸1.6ｍ、短軸1.3ｍ、深さ1.4ｍをはかる。

遺物は出土しなかった。

ＳＥ－05（第51図）

ＳＥ－05はＡ－12・13グリッドに位置し、標高16.8～17.0ｍのほぼ平坦面に立地する。平面形態は楕円形を呈するものと思われ、規模は長軸1.9ｍ、短軸1.0ｍ以上、深さ0.4ｍをはかる。

遺物は出土しなかった。

ＳＥ－06（第52図）

ＳＥ－06はＣ－12グリッドに位置し、標高18.2～18.3ｍのほぼ平坦面に立地する。平面形態は円形を呈し、規模は長軸1.1ｍ、短軸1.0ｍ、深さ0.6ｍをはかる。

遺物は出土しなかった。

ＳＥ－07（第52図）

ＳＥ－07はＣ－12グリッドに位置し、標高18.2～18.3ｍのほぼ平坦面に立地する。平面形態は円形を呈し、規模は長軸1.4ｍ、短軸1.3ｍ、深さ0.5ｍをはかる。

遺物は出土しなかった。

ＳＥ－08（第53図）

ＳＥ－08はＣ－10グリッドに位置し、標高18.5～18.6ｍのほぼ平坦面に立地する。平面形態は円形を呈し、規模は長軸1.4ｍ、短軸1.3ｍ、深さ2.1ｍをはかる。

遺物は出土しなかった。

ＳＥ－09（第53図）

ＳＥ－09はＢ－16グリッドに位置し、標高17.4～17.5ｍの谷状地形部に立地する。平面形態は円形を呈し、規模は長軸1.2ｍ、短軸1.2ｍ、深さ0.9ｍをはかる。

遺物は出土しなかった。

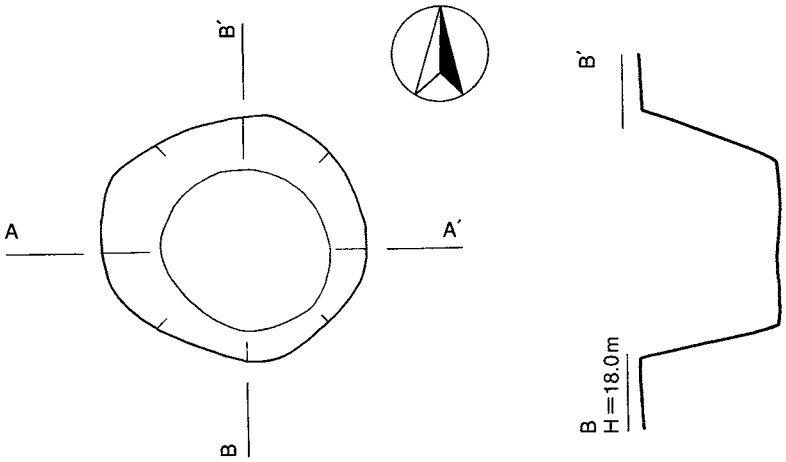
ＳＥ－10（第54図）

ＳＥ－10はＢ－16グリッドに位置し、標高17.3～17.5ｍの谷状地形部に立地する。平面形態は円形を呈し、規模は長軸0.9ｍ、短軸0.9ｍ、深さ0.2ｍをはかる。

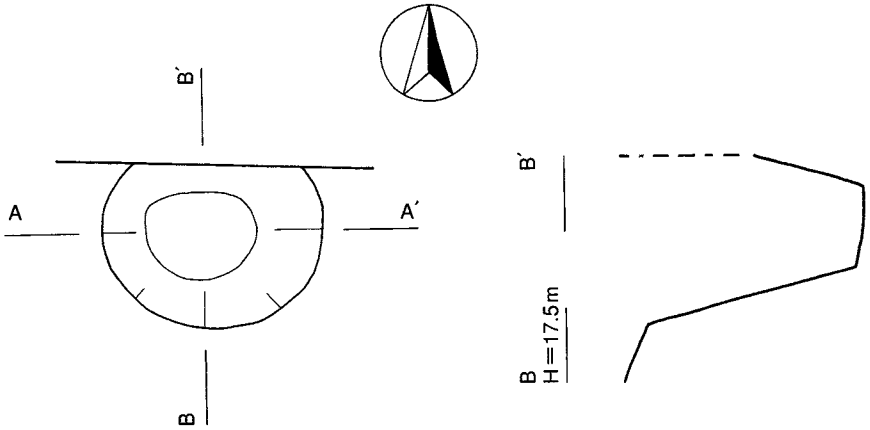
遺物は出土しなかった。

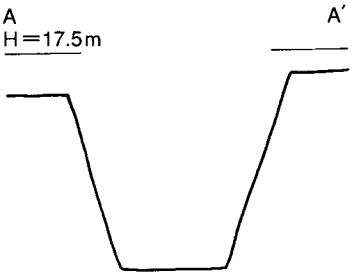
ＳＥ－11（第54図）

ＳＥ－11はＢ－16グリッドに位置し、標高17.5～17.7ｍの谷状地形部に立地する。平面形態は円形を呈し、規模

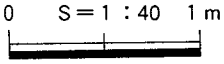


SE-01

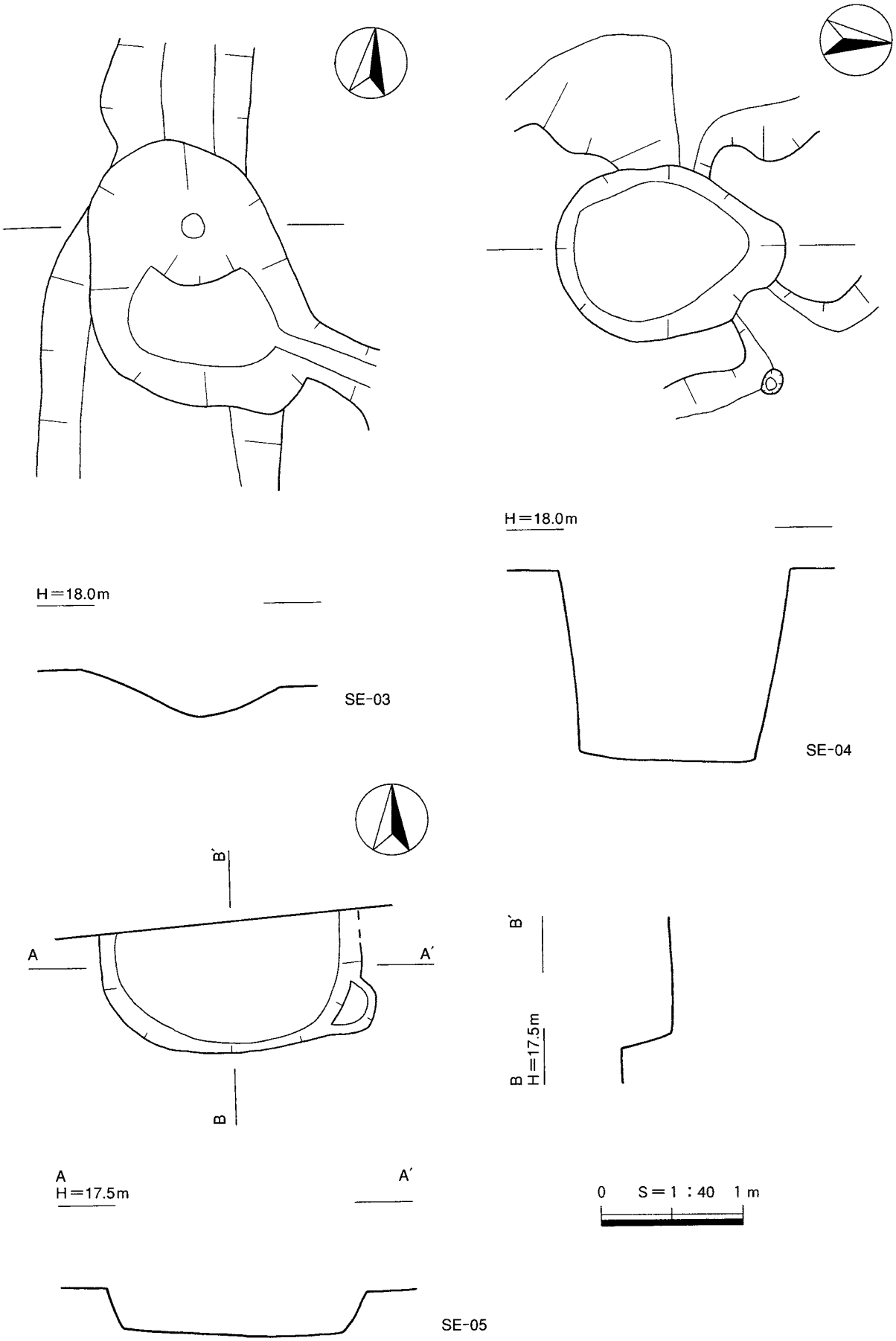




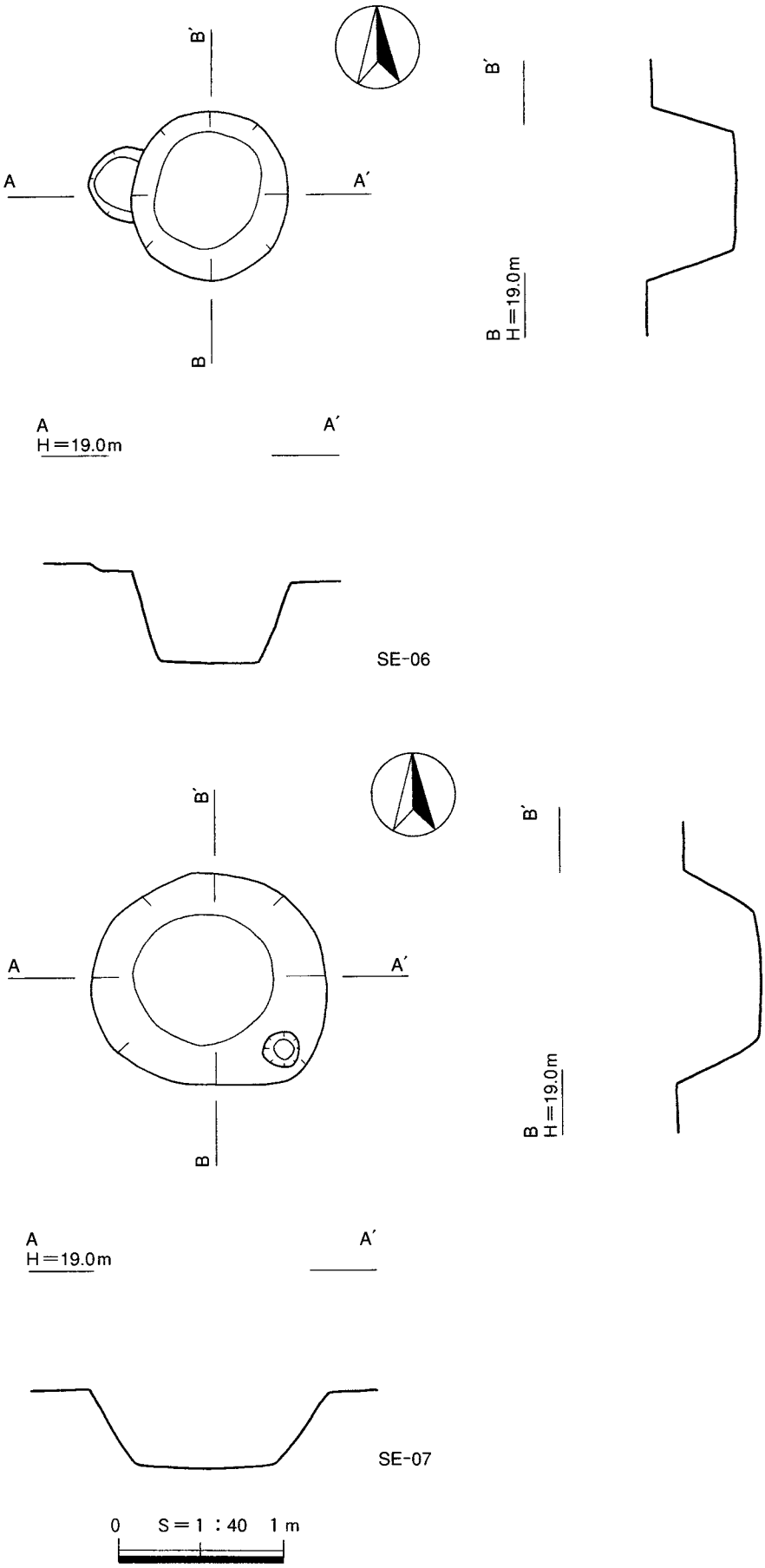
SE-02



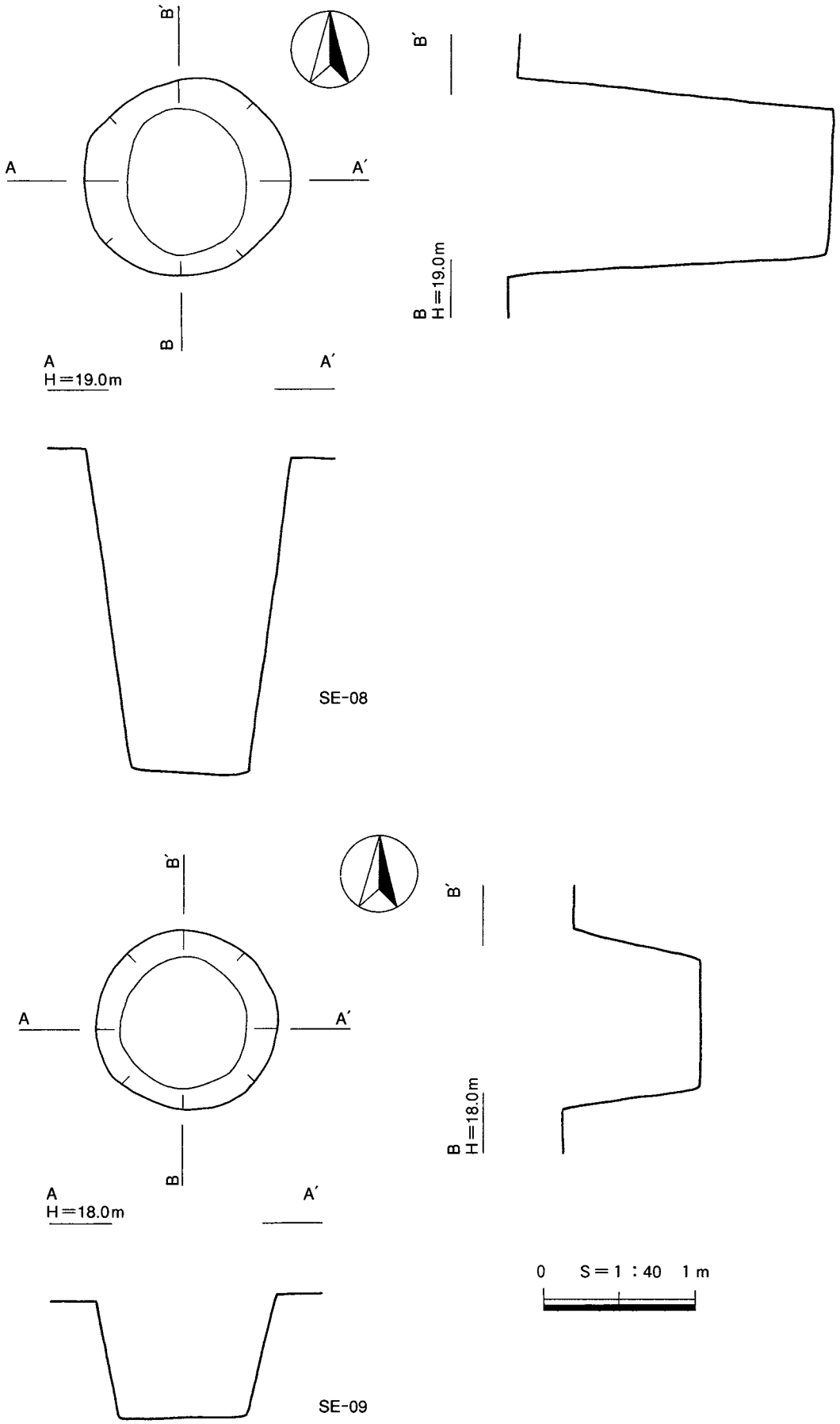
第50図　ＳＥ—01・02遺構図



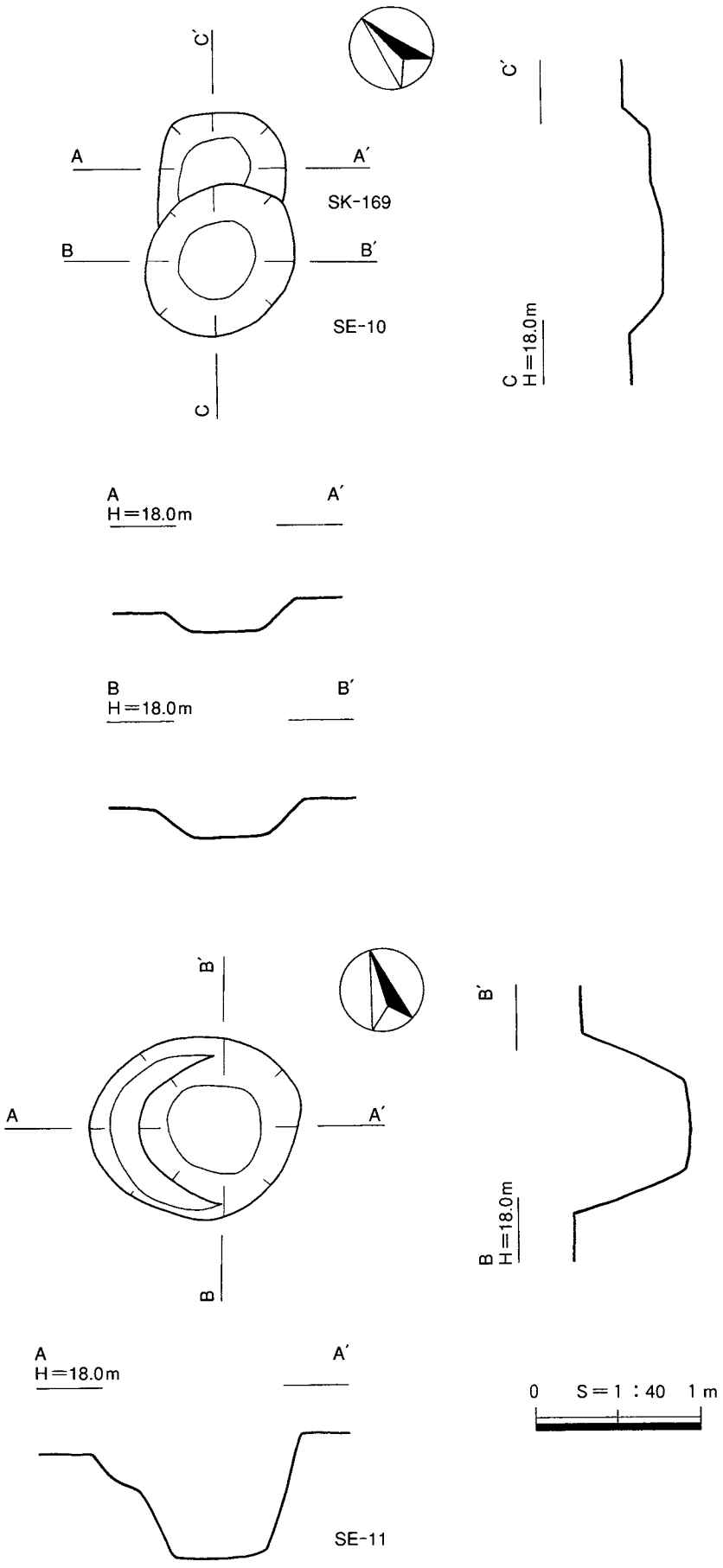
第51図　ＳＥ―03・04・05遺構図



第52図　ＳＥ—06・07遺構図



第53図　ＳＥ―08・09遺構図



第54図　ＳＥ—10・11、ＳＫ—169遺構図

は長軸1.8m、短軸1.1m、深さ0.8mをはかる。

遺物は出土しなかった。

4．土　　坑

土坑は169基検出したが、ここでは時期が特定できるＳＫ－26・49・169についてのみ報告する。

ＳＫ－26（第55図）

ＳＫ－26はＢ－16・17グリッドに位置し、標高17.6～17.9mの谷状地形部に立地する。平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は長軸2.0m、短軸1.3m、深さ0.1mをはかる。

遺物は弥生土器（５）が出土した。

時期は出土遺物から弥生時代中期中葉頃のものと考えられる。

ＳＫ－49（第55図）

ＳＫ－49はＢ－21、Ｃ－21グリッドに位置し、標高18.2mのほぼ平坦面に立地する。平面形態は楕円形を呈し、規模は長軸1.4m、短軸1.0m、深さ0.2mをはかる。

遺物は鉄刀（６）が出土した。６は長さ36.7cm、最大幅6.3cm、最大厚1.8cmをはかり、刀身には鞘の痕跡は認められないが、その片面には塗膜が施されている。塗膜の種類は不明であるが、４層くらい塗布されており、その色は黒色、茶色、褐色を呈する。また、塗膜の下には布状のものが観察される。

時期は鉄刀の塗膜の^{14}Ｃ年代測定から12世紀後半頃のものと考えられる。

ＳＫ－169（第54図）

ＳＫ－169はＢ－16グリッドに位置し、標高17.4～17.5mの谷状地形部に立地する。南西側はＳＥ－10に切られているが、平面形態は隅丸長方形を呈するものと思われ、規模は長軸0.7m以上、短軸0.8m、深さ0.2mをはかる。

遺物は図示できないが、弥生土器が出土した。

時期は出土遺物から弥生時代のものと考えられる。

5．溝状遺構

溝状遺構は84条検出したが、ここでは時期がほぼ特定できるＳＤ－21・48・49・50・61・65・67・74・75・77についてのみ報告する。なお、ＳＤ－48～50は第３層上面、それ以外は基盤層上面で検出した。

ＳＤ－21（第56図）

ＳＤ－21はＢ－16・17グリッドに位置し、標高17.7～18.2mの台地とその西側の谷状地形部との傾斜変換点付近に立地する。南西－北東方向から屈曲して北へのびており、断面の形態は逆台形を呈する。

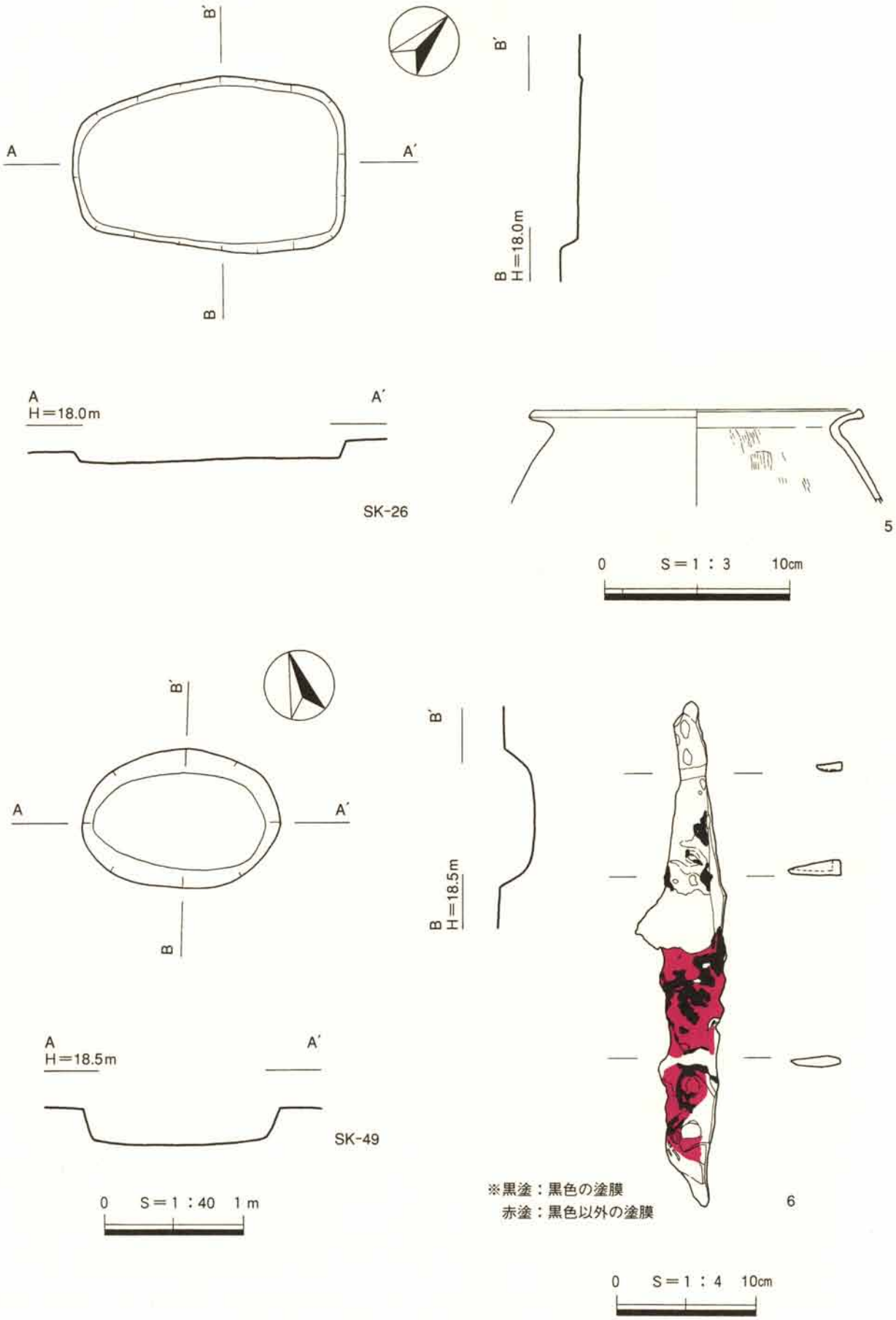
規模は長さ21.3m以上、上部幅0.8～1.5m、下部幅0.3～0.6m、深さ0.8～1.0mをはかる。

遺物は埋土上層（灰褐色粘質土、灰色粘質土）から須恵器（７、８）、鉄斧（９）、砥石（10）が出土した。

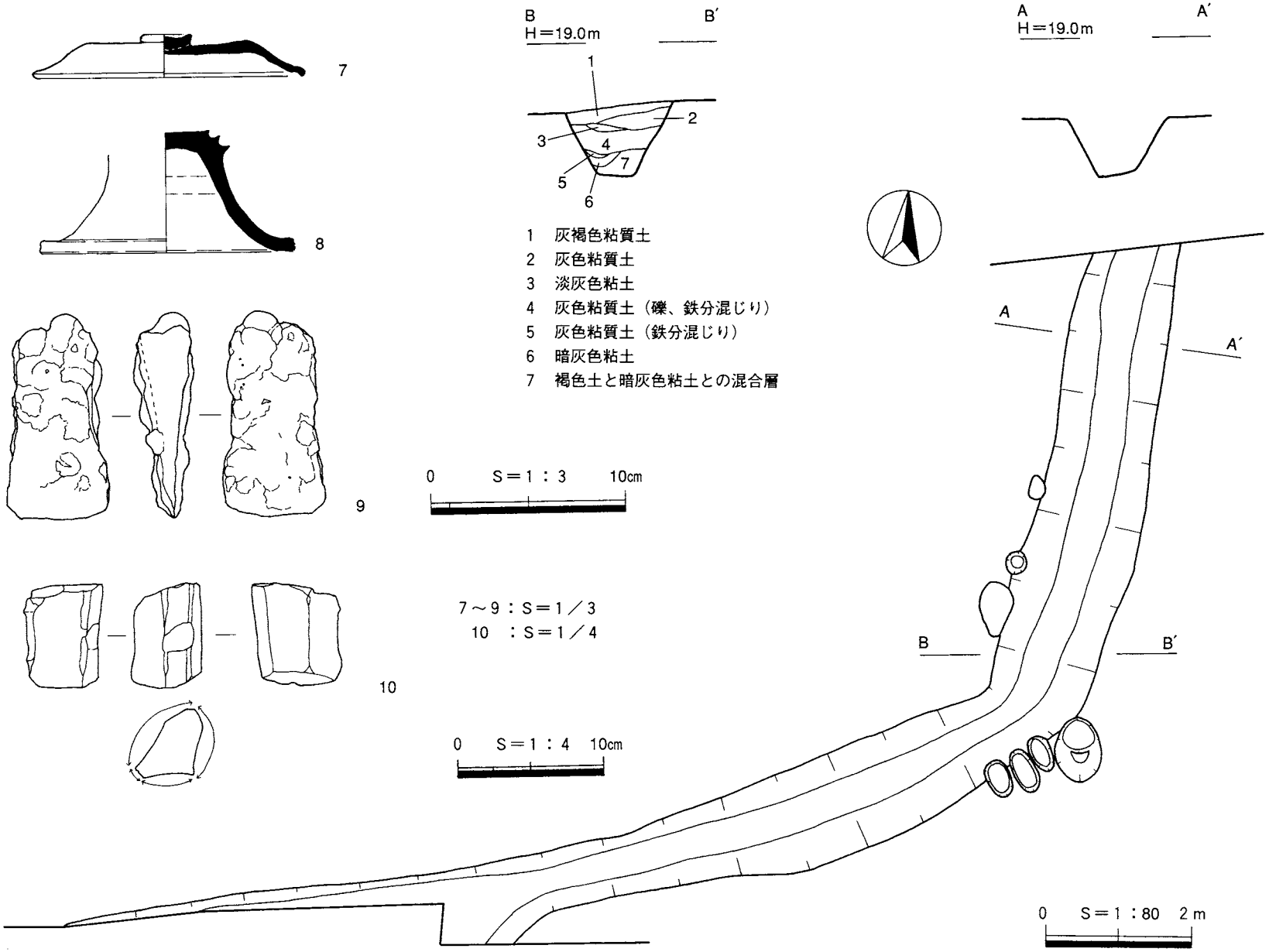
遺構の形成開始時期は不明であるが、出土遺物から７世紀末～８世紀初頭頃にほぼ埋没したものと考えられる。

ＳＤ－48～50（第57図、第58図）

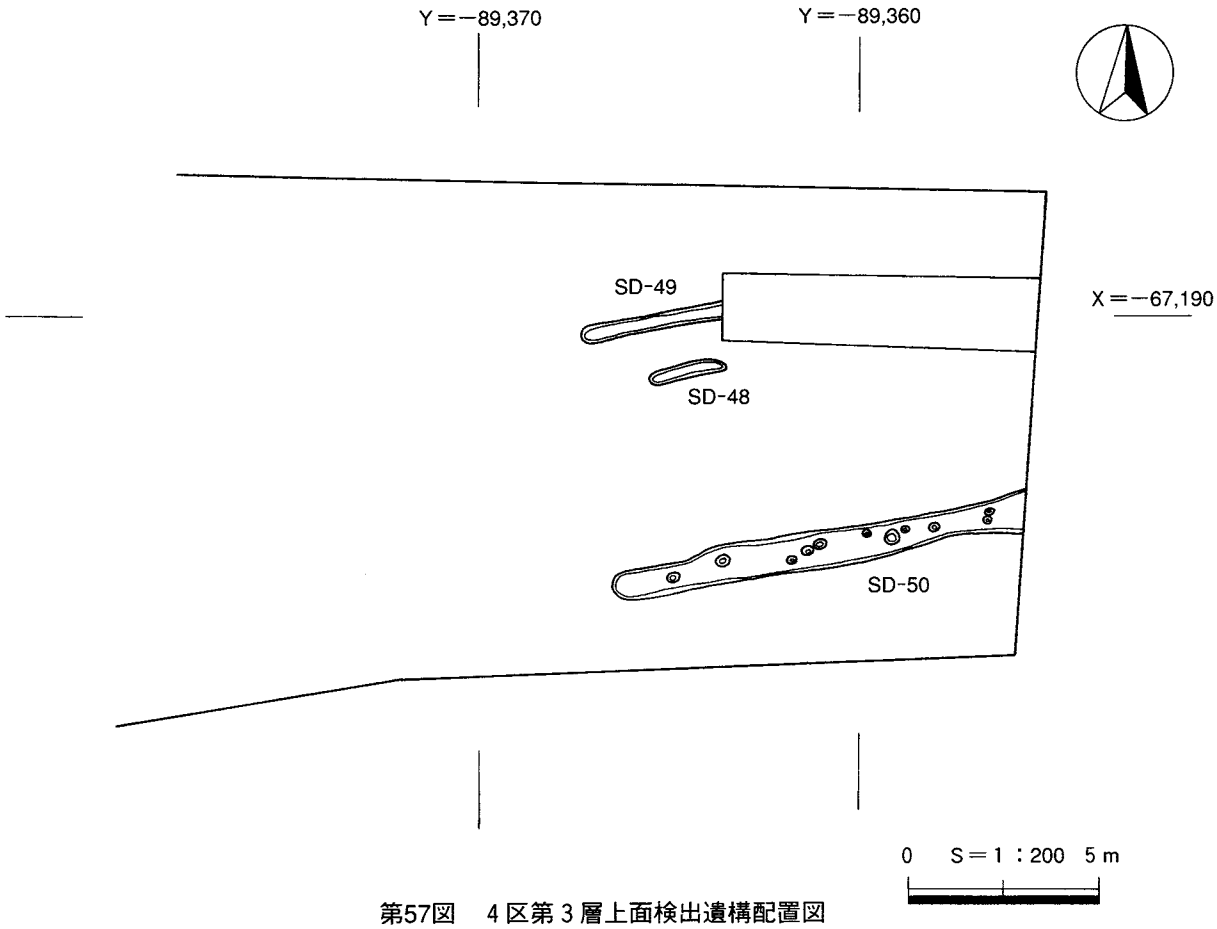
ＳＤ－48～50は第３層上面で検出したもので、Ｂ－23・24グリッドに位置し、標高17.2～17.6mの東に緩やかに傾斜する斜面に立地する。これらはいずれもＮ－78～79°－Ｅの主軸方向をとり、ほぼ平行してのびている。なお、プラント・オパール分析と花粉分析の結果から、これらの溝は畑耕作と関係があるものと考えられる。



第55図　ＳＫ―26・49遺構図及び出土遺物実測図



第56図　ＳＤ―21遺構図及び出土遺物実測図



第57図　4区第3層上面検出遺構配置図

ＳＤ－48

ＳＤ－48は長さ2.0ｍ、幅0.3～0.4ｍ、深さ0.1ｍをはかり、主軸方向はＮ－78°－Ｅである。

遺物は出土しなかった。

ＳＤ－49

ＳＤ－49は長さ3.8ｍ以上、幅0.4～0.5ｍ、深さ0.1ｍをはかり、主軸方向はＮ－79°－Ｅである。

遺物は出土しなかった。

ＳＤ－50

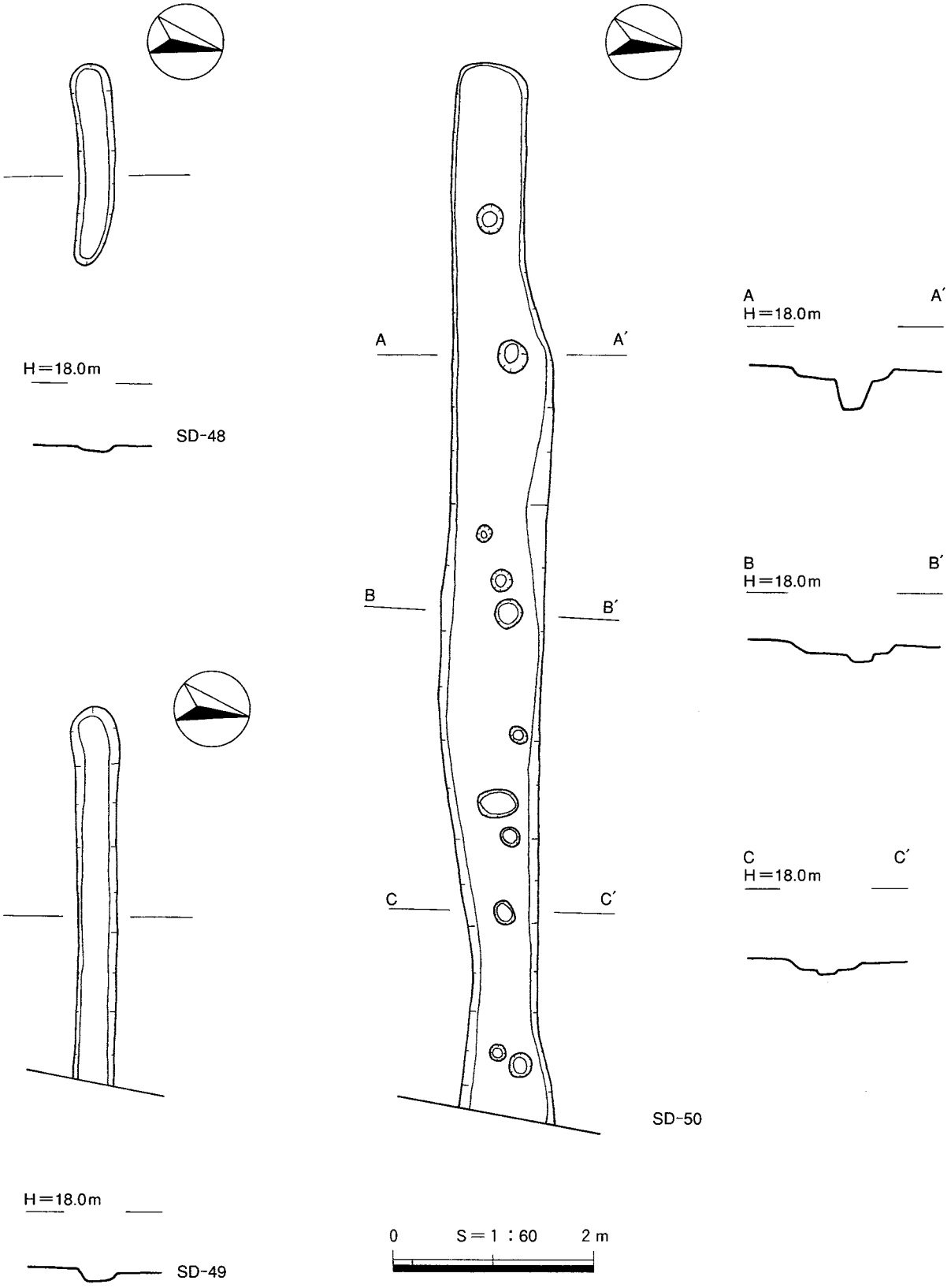
ＳＤ－50は長さ10.7ｍ以上、幅0.7～1.0ｍ、深さ0.1ｍをはかり、主軸方向はＮ－79°－Ｅである。また、溝内には径0.2～0.3ｍ、深さ0.1～0.3ｍのピットがある。

遺物は出土しなかった。

ＳＤ－61・65・67・74・75・77（第59図）

ＳＤ－61・65・67・74・75・77はＡ－21、Ｂ－21、Ｃ－21グリッドに位置し、標高17.7～18.3ｍのほぼ平坦面に立地する。

これらは、橋本字徳道西と同字徳道との小字境界付近に位置しており、ＳＤ－67とＳＤ－75以外は遺物が出土していないために詳細な時期は不明であるが、同じような位置に形成されていることから、ほぼ同時期であるものと考えられる。



第58図　ＳＤ—48～50遺構図

ＳＤ－61

ＳＤ－61は長さ6.8ｍ、幅0.3～0.5ｍ、深さ0.1～0.2ｍをはかり、主軸方向はＮ－10°－Ｅである。
遺物は出土しなかった。

ＳＤ－65

ＳＤ－65は長さ9.0ｍ以上、幅0.3～0.4ｍ、深さ0.1～0.2ｍをはかり、主軸方向はＮ－８°－Ｅである。
遺物は出土しなかった。

ＳＤ－67

ＳＤ－67は長さ7.4ｍ以上、幅0.3～0.5ｍ、深さ0.1～0.2ｍをはかり、主軸方向はＮ－３°－Ｅである。
遺物は陶器（11）が出土した。

ＳＤ－74

ＳＤ－74は長さ13.8ｍ以上、幅0.4～0.6ｍ、深さ0.1～0.2ｍをはかり、主軸方向はＮ－16°－Ｅである。
遺物は出土しなかった。

ＳＤ－75

ＳＤ－75は長さ5.4ｍ以上、幅0.6～1.0ｍ、深さ0.1～0.2ｍをはかり、主軸方向はＮ－11°－Ｅである。
遺物は図示できないが、陶器が出土した。

ＳＤ－77

ＳＤ－77は長さ5.6ｍ以上、幅0.3～0.5ｍ、深さ0.1～0.2ｍをはかり、主軸方向はＮ－６°－Ｅである。
遺物は出土しなかった。

６．石組遺構（第60図）

石組遺構はＡ－12・13グリッドに位置し、標高17.0～17.3ｍのほぼ平坦面に位置する。石組遺構は幅0.3～0.9ｍ、深さ0.1ｍの溝内に構築されたもので、石組の規模は長さ17.8ｍ以上、幅0.2～0.4ｍをはかり、主軸方向はＮ－88°－Ｅである。

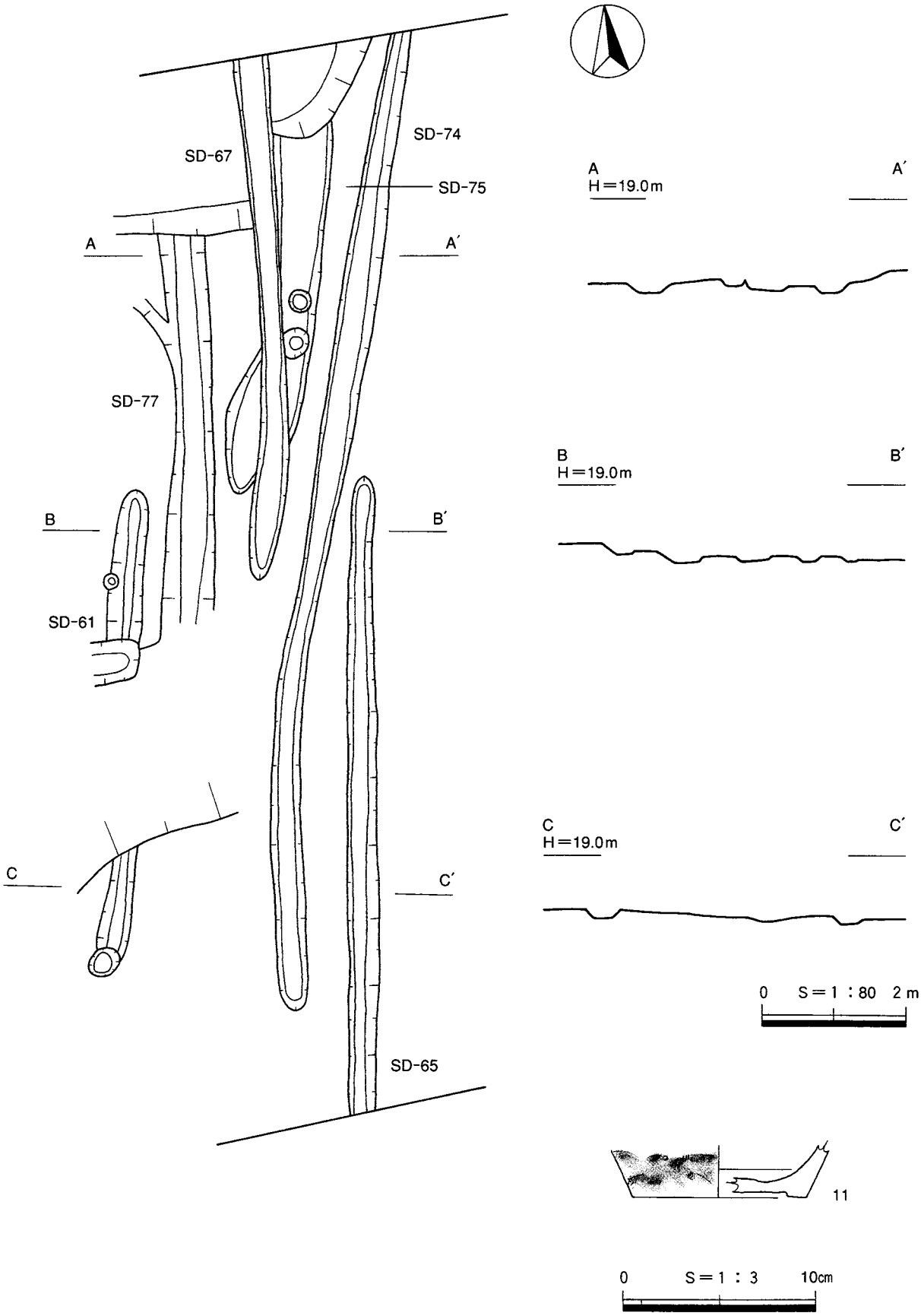
遺物は出土しなかった。

第３節　遺構外出土遺物

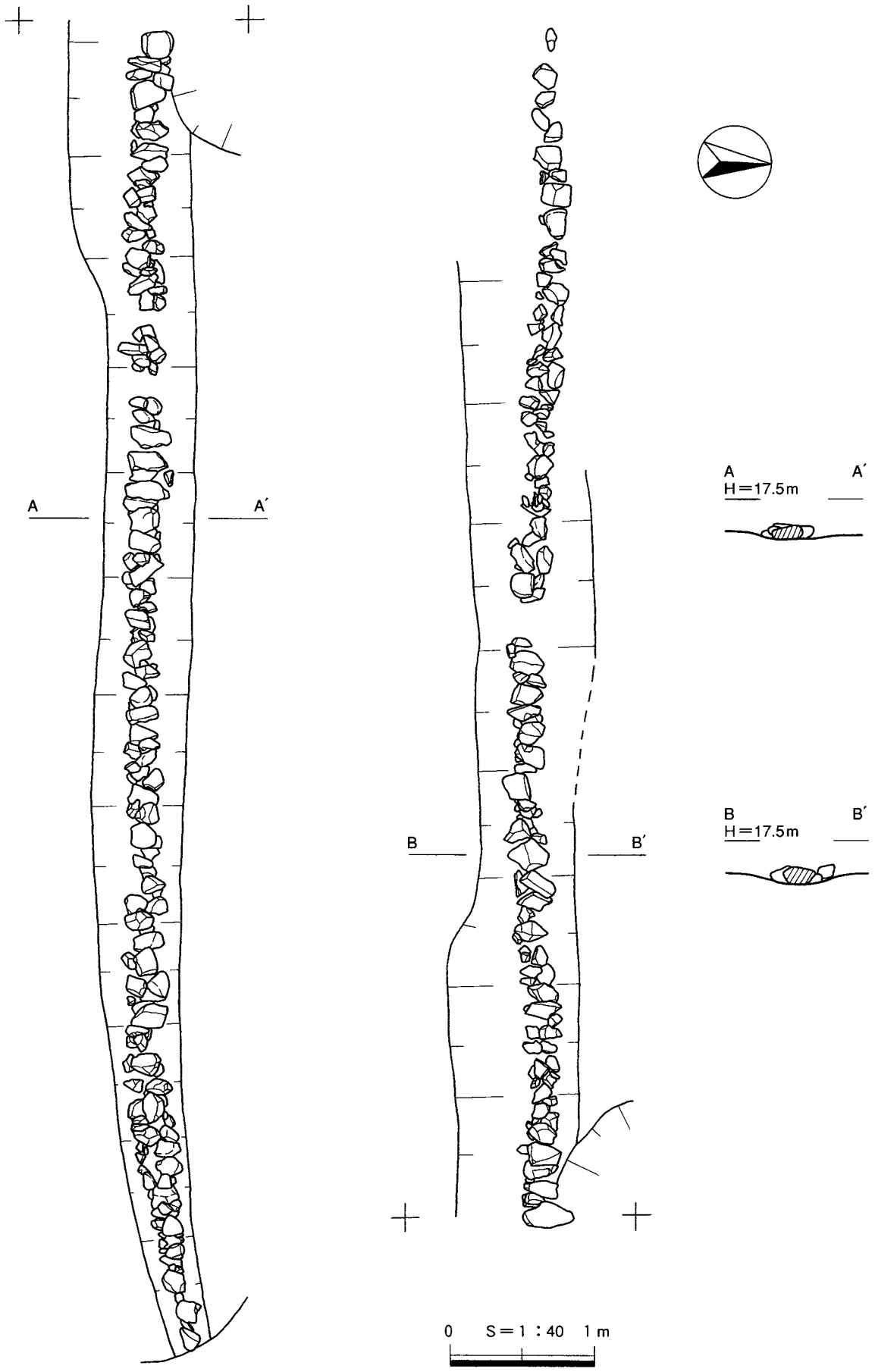
当遺跡は第１章で前述したように１・３区と２・４～６区との間に谷が入り込んでおり、旧地形的にはこの谷によって遺跡が分けられるものと思われる。そこで、本節では両調査区の出土遺物の様相を比較するために１・３区と２・４～６区とに分けて報告する。

１．１・３区遺構外出土遺物（第61図、第62図）

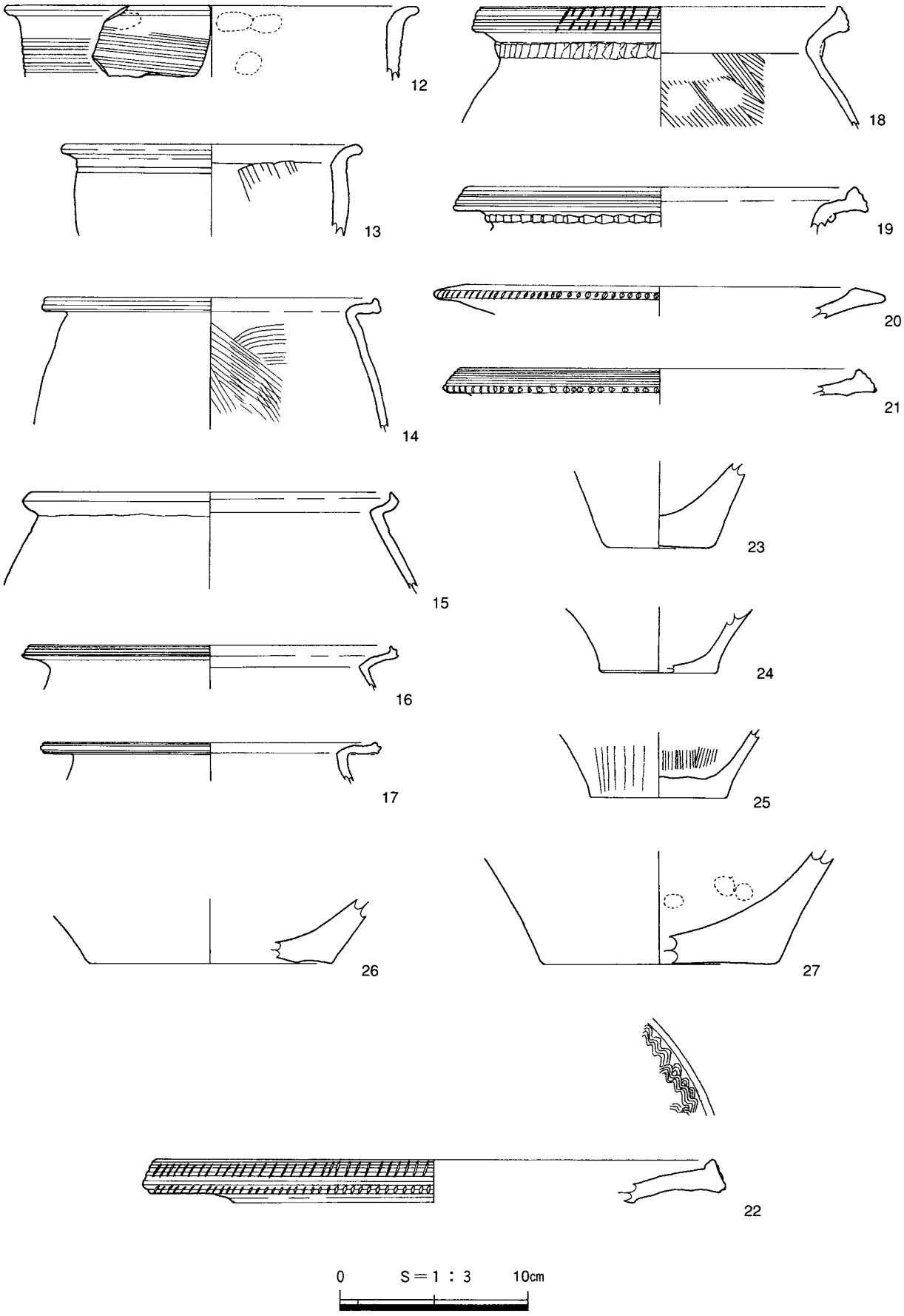
12～27は弥生土器である。12～19は甕で、12、13は口縁が外反し、12の外面には現状で６条の櫛描文が巡っている。14～17は口縁がく字状に外反し、端部を上方へつまみ出しており、14の口縁端部には１条の凹線、16、17の口縁端部には２条の凹線が巡っている。18、19は口縁がく字状に外反し、端部を上下にやや拡張させるもので、



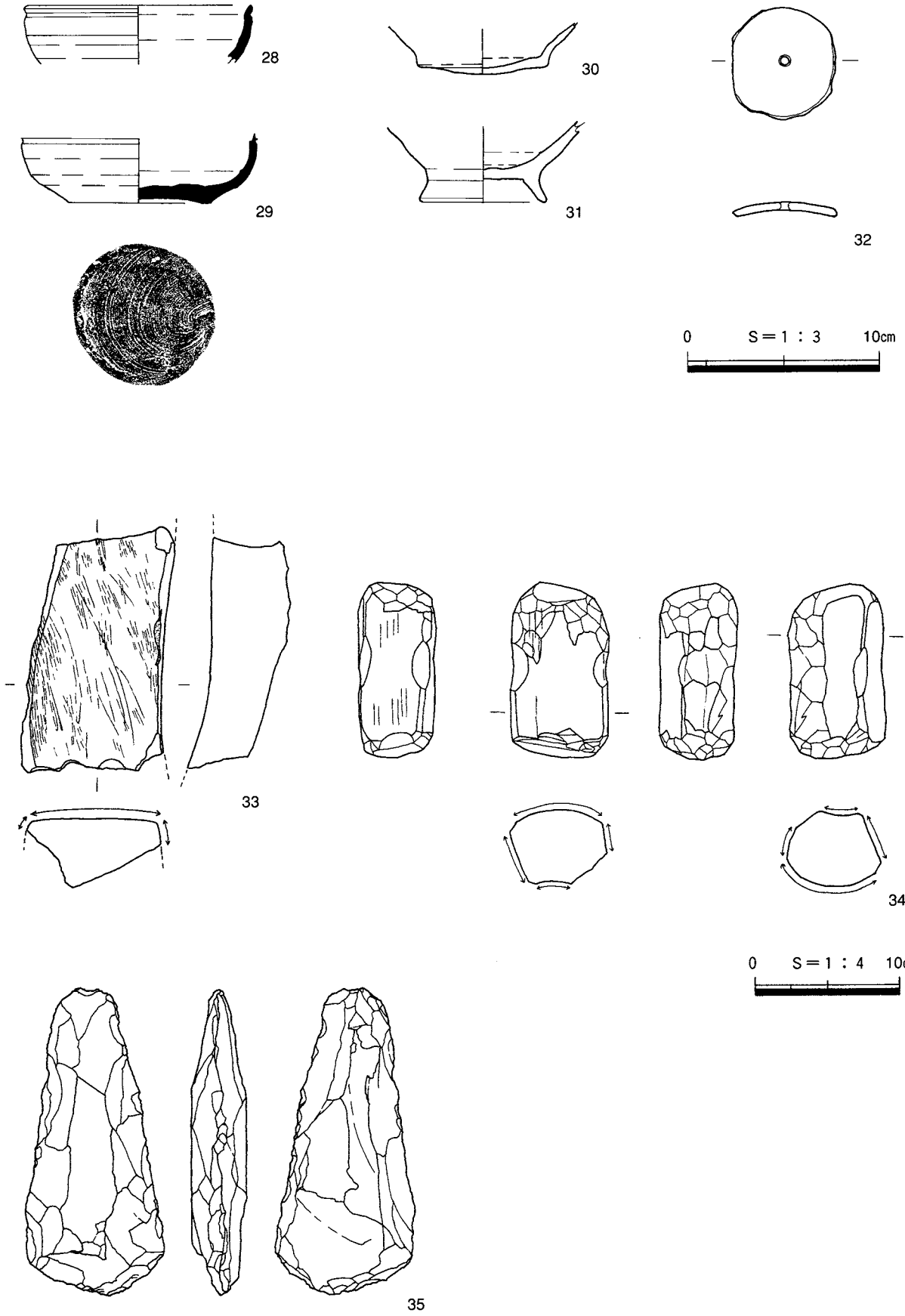
第59図　ＳＤ―61・65・67・74・75・77遺構図及びＳＤ―67出土遺物実測図



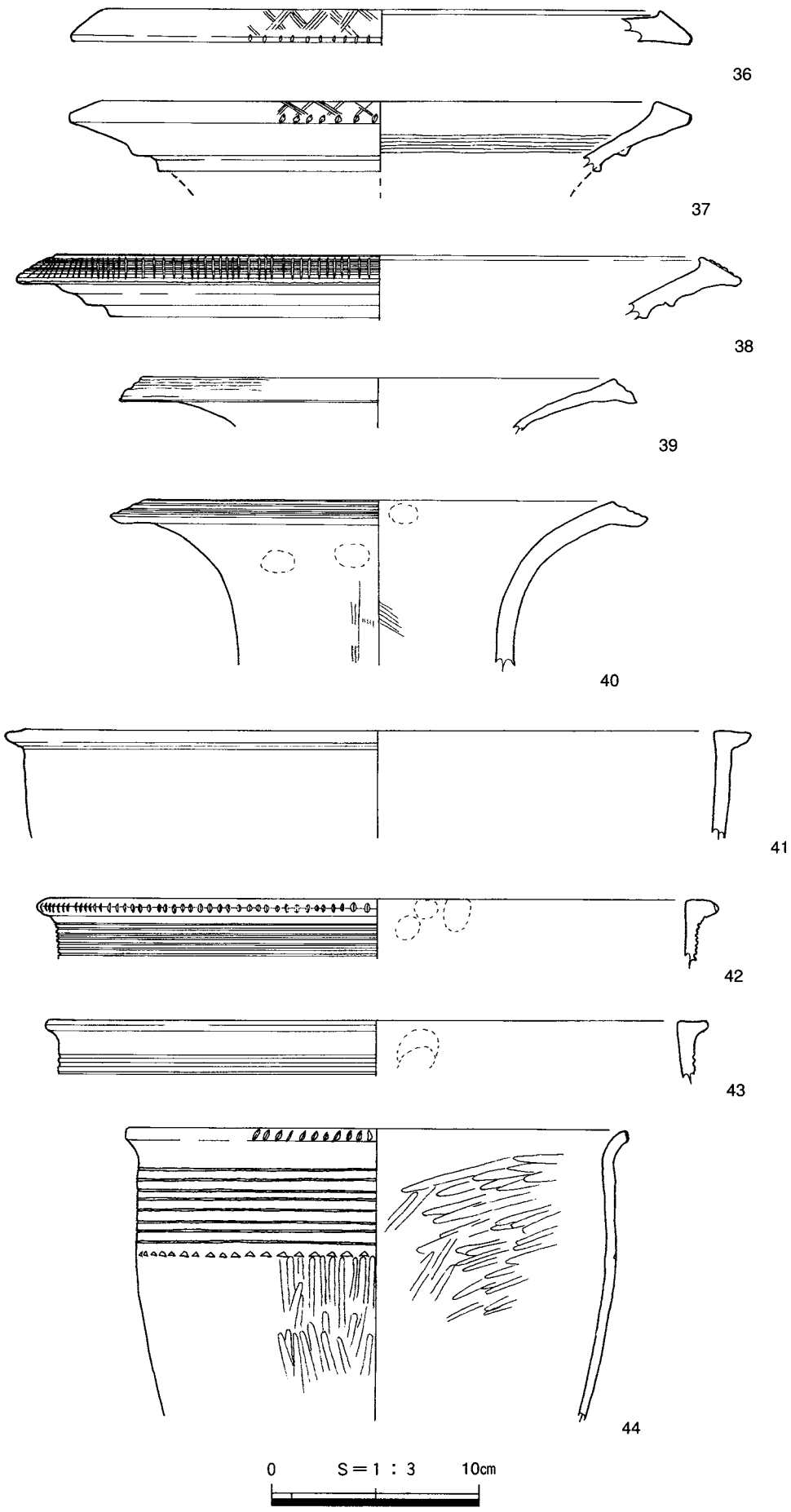
第60図　石組遺構遺構図



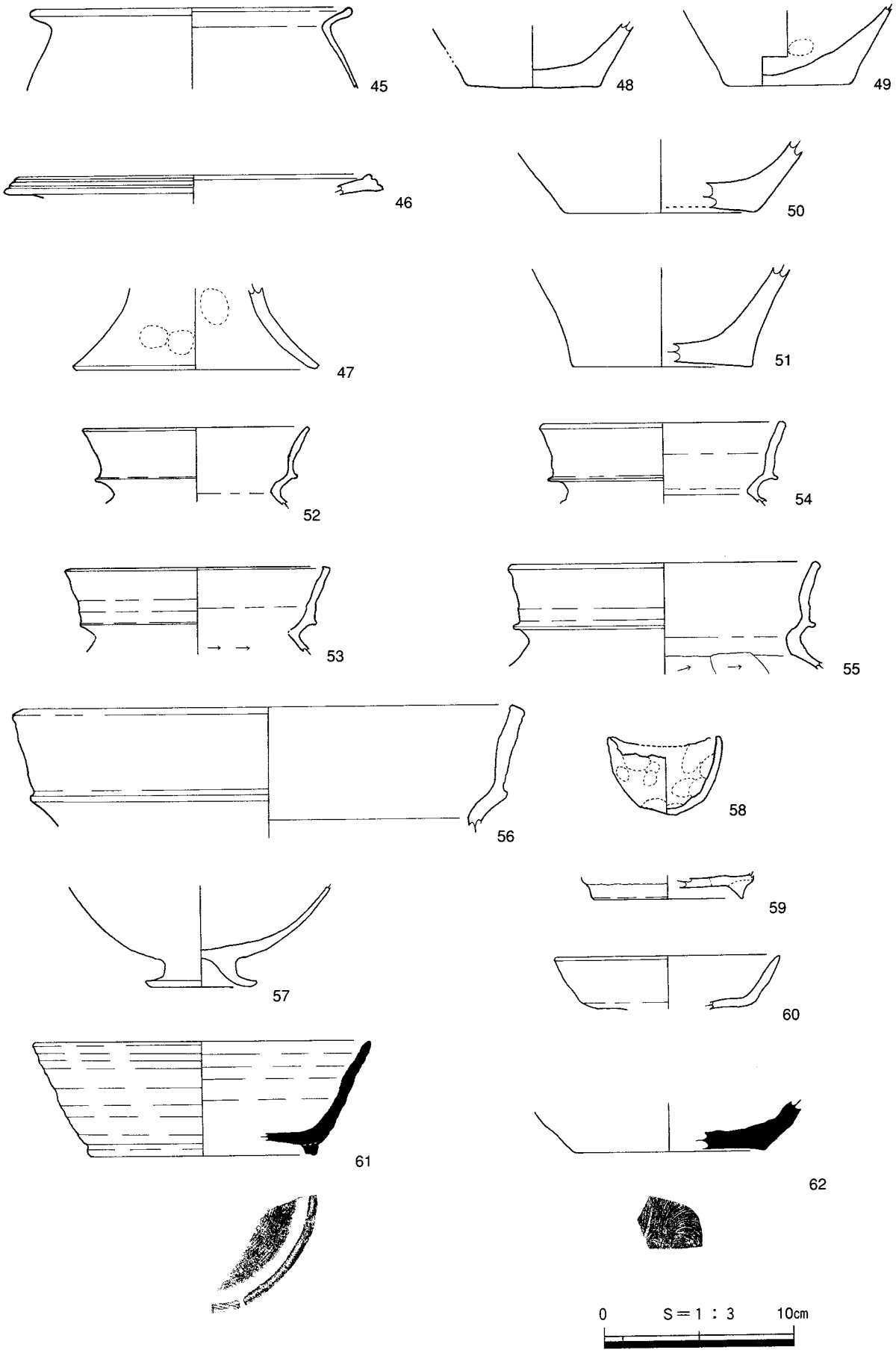
第61図　1・3区遺構外出土遺物実測図（1）



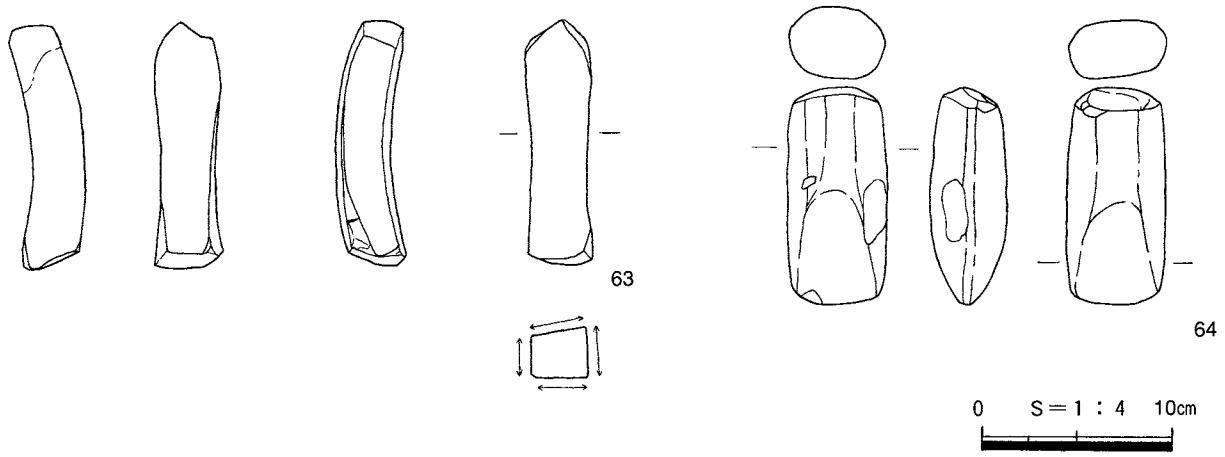
第62図　1・3区遺構外出土遺物実測図（2）



第63図　2・4～6区遺構外出土遺物実測図（1）



第64図　2・4～6区遺構外出土遺物実測図（2）



第65図　2・4～6区遺構外出土遺物実測図（3）

いずれも口縁端部には3条の凹線、頸部外面には指頭圧痕突帯が巡り、18の口縁端部にはさらに刻目が施されている。20は高坏で、口縁端部が水平方向へのび、広い口唇部をなしている。口縁端部には刺突文が施されている。21、22は壺で、21の口縁端部には4条の凹線が巡り、さらに、刺突文が施されている。22の口縁端部には4条の凹線が巡り、さらに、その上には刻目が施されている。また、口縁内面には波状文が施されている。23～27は底部である。

28、29は須恵器である。いずれも坏身で、28は内湾気味に立上がり、口縁が僅かに外反する。29は口縁端部を欠損するが、28と同様の形態を呈するものと思われる。底部外面には回転糸切りが施されている。

30、31は土師器である。いずれも坏身で、31はハ字に開く高台を有する。

32は有孔円盤である。土器の胴部を転用したもので、縁辺部を打ち欠いて円板状に加工している。断面はレンズ状の曲面を呈する。

33、34は砥石、35は石鍬である。

2．2・4～6区遺構外出土遺物（第63図～第65図）

36～51は弥生土器である。36～40は壺で、36、37の口縁端部には斜格子文と刺突文が施されている。また、37の口縁外面には2条の突帯が巡っている。38～40は口縁端部に凹線が巡るもので、38には5条、39には3条、40には4条の凹線が巡っている。なお、38の凹線の上には刻目が施され、口縁外面には2条の突帯が巡っている。41～46は甕で、41～43は口縁が逆L字状を呈している。42の外面には現状で7条の櫛描文が巡り、口縁端部には刺突文が施されている。43の外面には現状で3条の櫛描文が巡っている。44は口縁がゆるやかに外反するもので、その端部には刺突文が施されている。また、外面には8条の櫛描文と三角形の刺突文が巡っている。45は口縁がく字状に外反し、その端部は丸くおさまる。46の口縁端部には2条の凹線が巡っている。47は高坏の脚部、48～51は底部である。

52～60は土師器である。52～56は複合口縁を有する甕で、52、54、55の口縁端部は丸くおさまり、53の口縁端部は平坦面をなしている。57は低脚坏、58はミニチュア土製品である。59、60は坏身で、59は断面三角形の高台を有する。

61、62は須恵器である。61は坏身で、外傾して立上がり、高台を有する。底部外面には回転糸切りを施している。62は壺の底部で、底部外面には回転糸切りを施している。

63は砥石、64は石斧である。

第5章　ま　と　め

第1節　遺構の変遷

吉谷亀尾ノ上遺跡と橋本徳道西遺跡では、調査の結果、縄文時代、弥生時代中期、弥生時代後期末～古墳時代前期、古墳時代中期～後期、古代～中世、近世以降の6時期に大別できる。弥生時代中期～古墳時代後期までは断続的ではあるが集落が形成される。しかし、古代～中世になると集落の形成は認められず、道路の通過点となる。なお、中近世以降は耕作地となっている。

以下、時期毎に概観したい。

1．縄文時代

縄文時代の遺構、土器は確認できなかったが、B－7グリッドの第2層（旧耕作土）から尖頭器が出土した。尖頭器は県内では大山山麓を中心に確認されており、米子平野では大山山麓、平野南部の丘陵、法勝寺川左岸の丘陵及び台地に分布しており、当遺跡以外に、岸本町久古、会見町諸木、市山[1]、米子市奈喜良遺跡[2]、陰田宮の谷遺跡[3]で確認されている。

米子平野における草創期～早期の状況は、現在のところ草創期の遺跡は確認されてはいないが、前述したように大山山麓、平野南部の丘陵、法勝寺川左岸の丘陵及び台地で尖頭器が確認されていることから、これらの地域で今後草創期の遺跡が確認される可能性がある。

早期の遺跡は大山西麓に多く、特に米子市上福万遺跡[4]が有名であるが、日野川西岸では米子市新山山田遺跡[5]から高山寺式、西伯町清水谷遺跡[6]から黄島式～高山寺式の土器が僅かながら出土しているのみである。現状では当該期の考古学的資料は少ないが、吉谷亀尾ノ上遺跡と吉谷銭神遺跡[7]では約6,300年前の鬼界アカホヤ火山灰（K－Ah）が確認されており、大山山麓以外でも当該期の遺跡が存在するものと推測される。

草創期～早期中葉には平野縁辺部の丘陵及び台地に遺跡が展開するものと思われる。なお、早期後葉については現在のところ不明であるが、早期末～前期初頭になると中海沿岸の低湿地への進出が顕著となり、総じて早期には平野縁辺部の丘陵及び台地から中海沿岸の低湿地へという遺跡の立地の変化が窺える。しかし、いつこのような変化が生じるのかは今後の課題である。

2．弥生時代中期

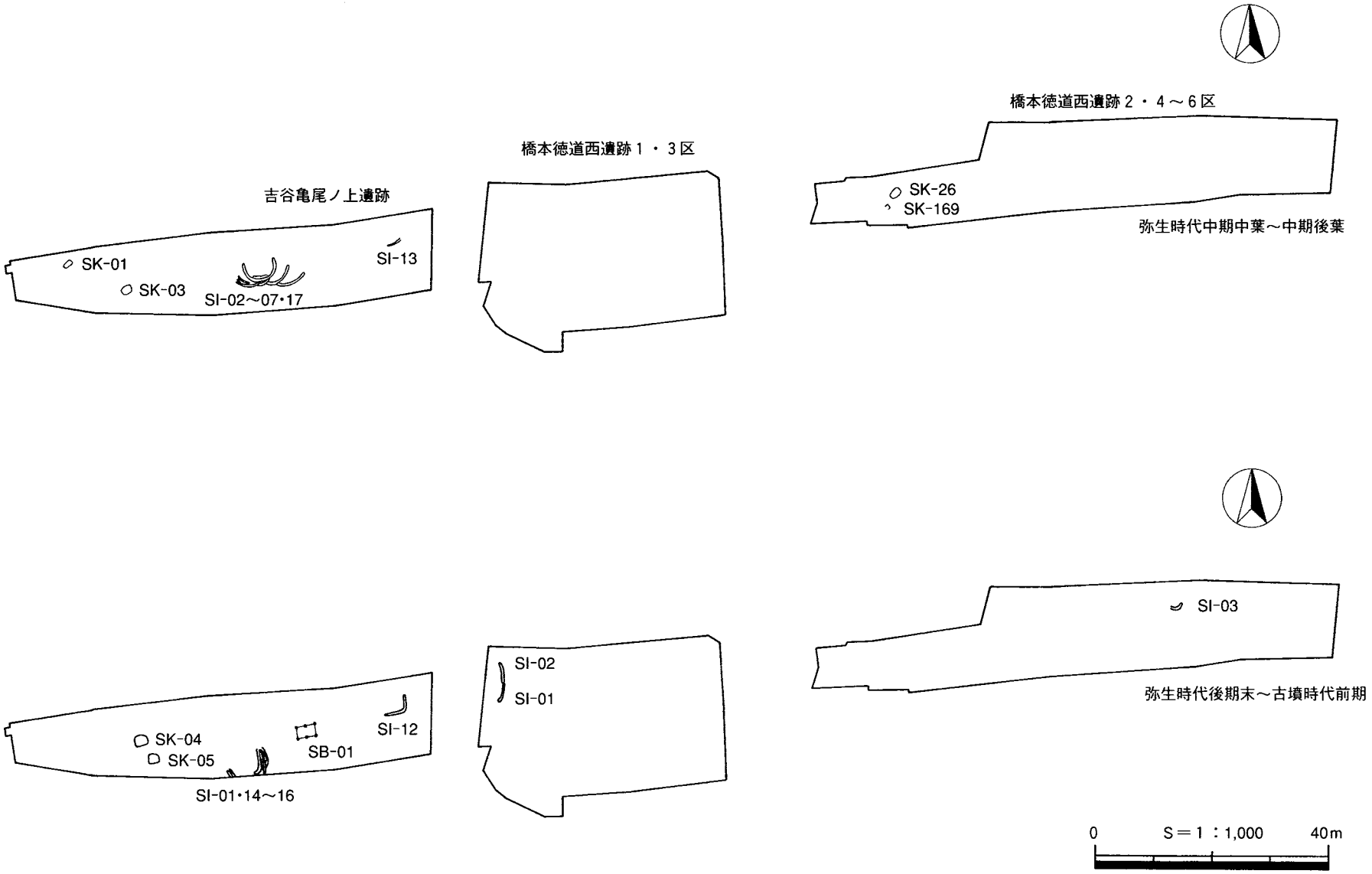
中期前葉の遺構は確認できなかったが、吉谷亀尾ノ上遺跡の1～5グリッド、橋本徳道西遺跡の13・15・16グリッドの谷状地形部に堆積した包含層から当該期の土器が出土しており、周辺に当該期の遺構が存在するものと推測される。

中期中葉～後葉は、当遺跡の主体をなす時期の一つである。

竪穴住居跡は吉谷亀尾ノ上遺跡の5～8グリッドの台地上に位置し、吉谷亀尾ノ上遺跡のＳＩ－02～07・13・17の8棟を検出した。いずれも平面形態は円形を呈し、主柱穴はＳＩ－02・04・07が5基、ＳＩ－03が6基である。また、ＳＩ－02では中央ピットを検出し、その北東側は被熱している。

ＳＩ－02～07・17は6回の建替えが行われているものと思われ、ＳＩ－02以外は、詳細な時期を特定できないが、切合関係から当該期に属するものと考えられる。なお、このうち古い段階の住居跡は中期前葉まで遡る可能性もあるが、現時点では積極的には肯定できない。

ＳＩ－13も詳細な時期を明らかにし得ないが、平面形態から当該期に属するものと考えられる。また、ＳＩ－


吉谷亀尾ノ上遺跡
SK-01
SK-03
SI-02～07・17
SI-13
橋本徳道西遺跡１・３区
橋本徳道西遺跡２・４～６区
SK-26
SK-169
弥生時代中期中葉～中期後葉
SK-04
SK-05
SB-01
SI-12
SI-01・14～16
SI-02
SI-01
SI-03
弥生時代後期末～古墳時代前期
0
S＝1：1,000
40m

第66図　遺構変遷図（１）

13はＳＩ－02～07・17のうち、いずれの住居跡と併存するのかは不明であるが、調査区内に限れば、東西約60ｍの台地上にＳＩ－02～07・17のうちのいずれかとＳＩ－13の２棟が存在したものと思われる。

土坑は吉谷亀尾ノ上遺跡でＳＫ－01・03、橋本徳道西遺跡でＳＫ－26・169の４基を検出した。吉谷亀尾ノ上遺跡のＳＫ－03、橋本徳道西遺跡のＳＫ－26・169はいずれも台地の西側縁辺部に位置し、平面形態が隅丸長方形を呈している。土器が少量出土しただけで、これらの性格及び住居跡との関係については明らかにできなかったが、立地的、形態的特徴から後述する弥生時代後期末～古墳時代前期の吉谷亀尾ノ上遺跡のＳＫ－05と同様の性格が考えられる。

弥生時代後期前葉～後葉には当遺跡では遺物がほとんど認められない。周辺では当該期に集落が低地から丘陵上へ移動する傾向があり、当遺跡でも調査地南側の丘陵上へ集落が移動したものと思われる。

３．弥生時代後期末～古墳時代前期

当該期の遺構は竪穴住居跡８棟、掘立柱建物１棟、土坑２基を検出した。

竪穴住居跡は吉谷亀尾ノ上遺跡の５～８グリッドから橋本徳道西遺跡の９～11グリッドにかけての台地上で主に検出され、橋本徳道西遺跡の17～22グリッドの台地上でも１棟を検出した。平面形態は吉谷亀尾ノ上遺跡のＳＩ－14～16が多角形である以外は方形あるいは長方形を呈するものと思われ、切合関係から多角形→方形あるいは長方形という変遷が窺える。なお、橋本徳道西遺跡のＳＩ－03の特殊ピットからは土師器甕の上半部が３点とミニチュア土器１点が出土しており、特殊ピットの性格を考えるうえで大変興味深いものである。

掘立柱建物は１×２間の東西棟で、出土遺物から吉谷亀尾ノ上遺跡のＳＩ－14～16に伴うものと考えられる。

土坑はいずれも吉谷亀尾ノ上遺跡の５～８グリッドの台地の西側縁辺部に位置し、平面形態は隅丸長方形を呈している。当遺跡では、このような立地的、形態的特徴は弥生時代中期中葉～後葉にも認められるものであり、後期前葉～後葉には当遺跡が立地する台地上での集落形成は隔絶するものの、このような特徴は弥生時代中期中葉～後葉以来継承される可能性があり、集落構成を考えるうえで大変興味深い。なお、吉谷亀尾ノ上遺跡のＳＫ－05は埋土に炭と焼土が混じり、床面が被熱しており、何かを焼成したものと思われる。

当該期の遺構はさらに２時期に大別できるものと思われ、弥生時代後期末～古墳時代前期前葉古段階には吉谷亀尾ノ上遺跡のＳＩ－14～16と吉谷亀尾ノ上遺跡のＳＢ－01がセットとなるものと考えられる。一方、古墳時代前期前葉新段階～前期後葉には調査区内に限れば、吉谷亀尾ノ上遺跡のＳＩ－01とＳＩ－12、橋本徳道西遺跡のＳＩ－01・02の３棟が併存し、集落の縁辺部に土坑（吉谷亀尾ノ上遺跡のＳＫ－04・05）が展開するものと考えられる。

４．古墳時代中期～後期

古墳時代中期～後期の遺構は竪穴住居跡４棟を検出した。いずれも平面形態は方形あるいは長方形を呈するものと思われ、調査区内に限れば、吉谷亀尾ノ上遺跡のＳＩ－09～11とＳＩ－18の２棟が併存するものと考えられる。

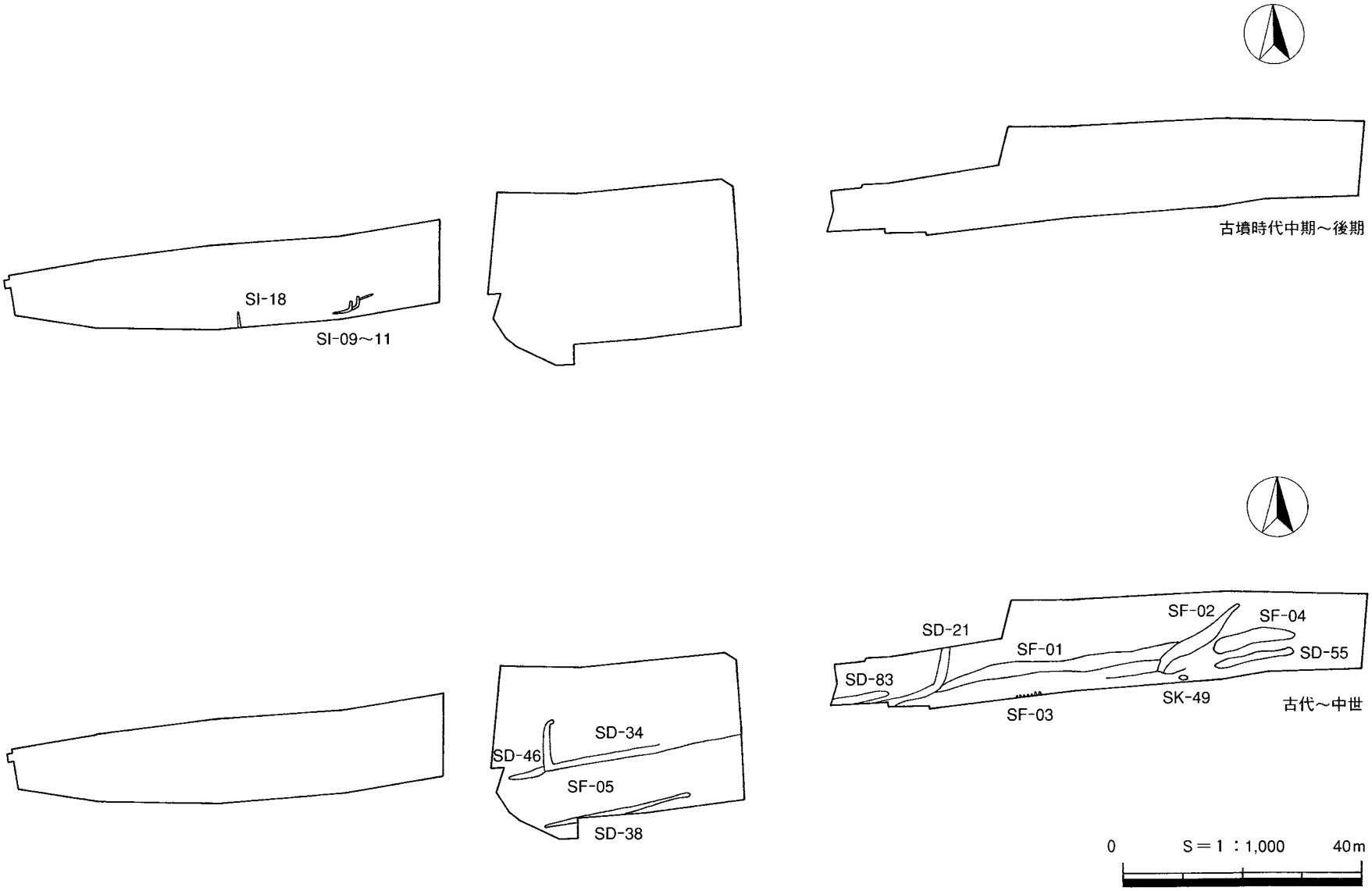
当該期の遺物は古墳時代前期以前と比べると、極端に少なくなり、これ以降、集落の形成は認められなくなる。

５．古代～中世

古代～中世は古墳時代以前とは異なり、集落の形成が行われなくなり、道路の通過点となる。

当該期の遺構は道路状遺構５条、溝状遺構１条、土坑１基を検出した。このうち確実に時期を特定できるものは橋本徳道西遺跡のＳＤ－21とＳＫ－49だけであり、これ以外の遺構は時期を特定できる遺物は出土していないが、切合関係等から当該期に属するものと思われる。

橋本徳道西遺跡のＳＤ－21は台地と谷状地形部との傾斜変換点に沿ってのびており、断面は逆台形を呈してい


古墳時代中期～後期
SI-18
SI-09～11
古代～中世
SF-02
SF-04
SD-21
SF-01
SD-55
SD-83
SK-49
SF-03
SD-34
SD-46
SF-05
SD-38
0
S＝1：1,000
40m

第67図　遺構変遷図（2）

る。断面形態を見る限りでは、弥生時代の環濠を想起するが、弥生時代の遺物は認められず、上層から７世紀末～８世紀初頭頃の土器が出土していることから、遺構の形成開始時期は不明であるが、７世紀末～８世紀初頭頃にほぼ埋没したものと思われる。

また、ＳＤ－21は東側の台地と西側の谷状地形部とを画する水路的な溝であるということを前提とし、これによって画された台地と谷状地形部の堆積環境及び土地利用状況の相違を想定してプラント・オパール分析と花粉分析を行った。分析の結果、台地、谷状地形部とも乾燥した畑地であったものと推測され、両者間には有意な差異は認められなかった。

橋本徳道西遺跡のＳＫ－49からは鉄刀が出土した。鉄刀は鞘の木質部分が残存していないが、刀身部に４層程の塗膜が見られ、塗膜の下には布状のものが認められる。

なお、道路状遺構については第２節で後述する。

６．近世以降

中世以降、調査地は耕作地化されたものと思われる。

近世以降の遺構は溝状遺構と井戸を検出した。このうち確実に時期を特定できるものは橋本徳道西遺跡のＳＤ－67とＳＤ－75だけであるが、溝状遺構のなかには調査前の土地区画と一致、あるいは主軸方向を同一にするものもあり、当該期に属するものと考えた。また、井戸も耕作に伴うもので、当該期に属するものと考えた。

橋本徳道西遺跡のＳＤ－61・65・67・74・75・77は橋本字徳道西と同字徳道との境界付近に位置していることから、小字境界を示すものと考えられる。

橋本徳道西遺跡１・３区の東西溝と、南北溝は畑を区画する溝であると考えられ、石組遺構も同様の性格が考えられる。また、橋本徳道西遺跡１・３区のＡ－12、Ｂ－12グリッドには南から北へ自然流路がのびており、ＳＥ－03は自然流路から導水した溜井的なものであると考えられる。なお、橋本徳道西遺跡１・３区のＢ－11・12グリッドには畝状の溝がみられる。

井戸はいずれも素掘りで、深さは0.2～2.1ｍであり、水脈の関係からか橋本徳道西遺跡の10、12、16グリッドに集中する。

第２節　道路状遺構について

橋本徳道西遺跡では５条の道路状遺構を検出した。ここでは、これらの道路状遺構の構造、時期、性格について若干の検討を行ってみたい。

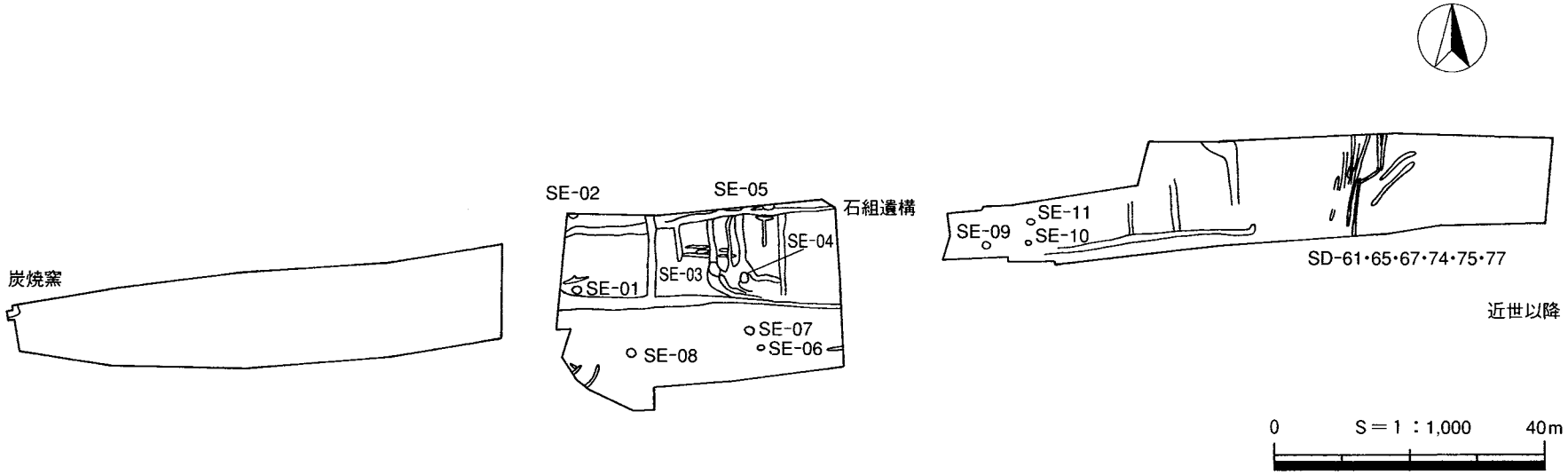
１．構造について

今回検出した道路状遺構は構造的に大きく分けると、両側に側溝を有するもの（ＳＦ－05古段階、ＳＦ－05新段階）と、溝状に掘り込んだもの（ＳＦ－01・02・04）があり、後者はさらに波板状凹凸面を有するもの（ＳＦ－01・02）と、持たないもの（ＳＦ－04）とがある。

ＳＦ－01・02は溝状の掘り込みの底部に波板状凹凸面を有するもので、ＳＦ－01はＳＦ－04の溝状の掘り込みを再利用あるいは再掘削したものである。

ＳＦ－01・02はいずれも溝状の掘り込みの底部の土坑の埋土は硬化しておらず、第２層（旧耕作土）と同質の土が堆積している。また、底部の土坑の底面及び壁面は硬化した状況はそれほど窺えず、調査時の認識不足のため、棒状の工具による圧痕や鍬による掘削痕の有無は不明である。

土坑内には若干であるが、20～30㎝大の石が認められるものがあり、特にＳＦ－01からは須恵器甕や鉄滓等が


炭焼窯
SE-02
SE-05
石組遺構
SE-04
SE-03
SE-01
SE-07
SE-06
SE-08
SE-11
SE-09
SE-10
SD-61・65・67・74・75・77
近世以降
0
S＝1：1,000
40m

第68図　遺構変遷図（3）

出土しており、このことから、土坑内には石が充填され、その裏込めとして須恵器甕や鉄滓等が使われたものと考えられる。土坑内に石が充填された例としては島根県西郷町東船遺跡[8]がある。この遺跡では溝状の掘り込みの底部にピット列があり、このピット内に拳大の石が充填され、さらに部分的ではあるが、溝内にも敷石が認められる。当遺跡のＳＦ－01・02は石の検出数が少なく、溝状の掘り込みの底部まで敷石が施されていたかは不明であるが、土坑内に石が充填されていた可能性がある。なお、土坑の埋土は硬化しておらず、第２層（旧耕作土）と同質の土が堆積していることから後世に石が抜き取られたものと理解する。

ＳＦ－01・02はいずれも補修の痕跡が認められる（第39図、第40図）。ＳＦ－01は少なくとも６単位の補修が認められ、その時期の前後関係は不明であるが、全線にわたって補修の痕跡が認められる。補修の傾向としては東側のほぼ平坦面では既存の土坑と重複させて、その一部を補修しているのに対して、西側の斜面部では既存の土坑とは位置を少しずらして補修を行っている。なお、ＳＦ－02は主に拡幅と付け替えを行ったものと考えられる。

ＳＦ－04はＳＦ－05の北側溝を再掘削したもので、東側のＢ－22・23グリッドではその底部に基盤層状の土を厚さ10㎝程入れて突き固めて硬化面を形成している。また、硬化面の断面は皿状を呈し、溝状の掘り込みの底面にはそれほど顕著ではないが、僅かな凹凸が認められる。これは抵抗をつけて上層の硬化層のなじみを良くしたものと思われる。なお、硬化面上には波板状凹凸は認められなかった。

ＳＦ－05は両側に側溝を有するもので、Ｂ－19～21グリッドでは基盤層状の土を約10～20㎝盛土して路盤を形成しているが、版築やつき固めた状況は認められなかった。路面及び硬化面は既に削平されたものと思われる。また、ＳＦ－03はＳＦ－05古段階の中央に位置しており、調査区の関係や後世の削平等の影響も考えられるが、部分的にしか検出されていないことから、ＳＦ－05古段階の補修に伴うものであると考えられる。

２．波板状凹凸面について

山陰では管見する限りでは18遺跡20数例の波板状凹凸面を確認している。これらの時期については不明なものが多いが、古墳時代中期から近世まで存在し、特に古墳時代後期～平安時代に多くみられる。

次に波板状凹凸面の機能についてであるが、これには枕木痕説[9]、路床説[10]、補修痕説[11]、牛馬歩行痕説[12]がある。

当遺跡ではＳＦ－01～03で波板状凹凸面が認められ、ここでは上記の諸説と比較を行いながら、当遺跡のＳＦ－01～03の波板状凹凸面について若干の見解を述べてみたい。

枕木痕説については、ＳＦ－01・02における補修が既存の土坑の一部にしか及ばず、さらに、その底面の高さが揃っていないことから、枕木の痕跡の可能性は低いものと考えられる。

路床説については、ＳＦ－01・02では地形や地盤にほとんど関係なく全線にわたって波板状凹凸面が認められ、さらに、土坑内から少量であるが石、須恵器甕、鉄滓等が出土していることから、土坑内には石が充填され、その裏込めとして須恵器甕、鉄滓等が用いられたものと思われる。つまり、波板状凹凸面上の硬化面の有無については削平のため不明であるが、ＳＦ－01・02の波板状凹凸面は路面あるいは路盤の保護、維持をするための路床ではないかと考えられる。なお、ＳＦ－01・02の作道後には部分的に補修のための波板状凹凸が認められる。

補修痕説については、ＳＦ－03は調査区と後世の削平の影響も考えられるが、ＳＦ－05古段階の中央部（通行が最も頻繁な部分）に位置し、全線ではなく、部分的にみられるものである。波板状凹凸面上の硬化面の有無は削平のため不明であるが、以上のことから、ＳＦ－03はＳＦ－05の補修痕と考えたい。

牛馬歩行痕説については、ＳＦ－01・02の底面の土坑は深いもので20～30㎝の深さがあり、牛馬の往来の頻度にもよるが、果たしてこれほどの痕跡が残るのであろうか。また、これほどの痕跡が路面上に存在する場合、人や牛馬の歩行が困難ではないだろうか。なお、ＳＦ－01・02の底面の土坑内には石が充填されていた可能性があり、以上のことから牛馬の歩行に起因するものではないものと考えられる。

以上、当遺跡の波板状凹凸面について若干の検討を行った。ＳＦ－01・02は路床と補修痕、ＳＦ－03は補修痕

であるという一応の推論を得たが、調査時の認識不足もあり、さらに詳細な観察ができなかった。今後は土木工学、歴史地理学、民俗学等、他分野からの検討が必要である。

3．時期について

道路状遺構からは時期を特定できる遺物は出土しておらず、詳細な時期については不明である。なお、橋本徳道西遺跡のＢ－21～23グリッドの包含層から８世紀後半～９世紀の須恵器が出土しており、いずれかの道路状遺構に伴うものであると思われるが、時期については考古学的にはこれ以上は言及できないのが現状である。

遺構の切合関係から道路状遺構の新旧関係をみてみると、ＳＦ－01は７世紀末～８世紀初頭頃に埋没したＳＤ－21を切っていることから、７世紀末～８世紀初頭以降のものであると考えられる。また、ＳＦ－01との切合関係からＳＦ－02～05はＳＦ－01よりも古いものと考えられる。しかし、ＳＦ－02～05とＳＤ－21との切合関係は認められず、これらの時期については不明である。なお、道路状遺構の新旧関係は切合関係から古い順にＳＦ－05古段階→ＳＦ－05新段階→ＳＦ－04→ＳＦ－02→ＳＦ－01である（第69図～第71図）。

ここで、敢えて各道路状遺構の時期を推測してみると、ＳＦ－01からは須恵器甕と鉄滓が出土しており、周辺では古墳時代後期～平安時代に米子市陰田町、新山、古市、吉谷で鉄生産が行われている。これから類推するとＳＦ－01の作道時期は古墳時代後期～平安時代であると考えられるが、ＳＦ－01に先行するＳＦ－05の存続時期から考えると、ＳＦ－01の作道時期は平安時代以降であると推測される。

ＳＦ－02はＳＦ－01よりも若干古いが、ＳＦ－01と併存しており、これらの下限については、考古学的には確認できなかったが、後述するように、近世頃まで存続あるいは廃道後もルートだけが踏襲された可能性がある。

ＳＦ－05はＳＤ－21との切合関係が認められず、新旧関係は不明であるが、後述するようにＳＦ－05は官道としての性格が考えられ、全国的に７世紀後半に官道が整備されたという類例から、ＳＦ－05の成立時期は７世紀末～８世紀初頭を前後する時期であると考えたい。

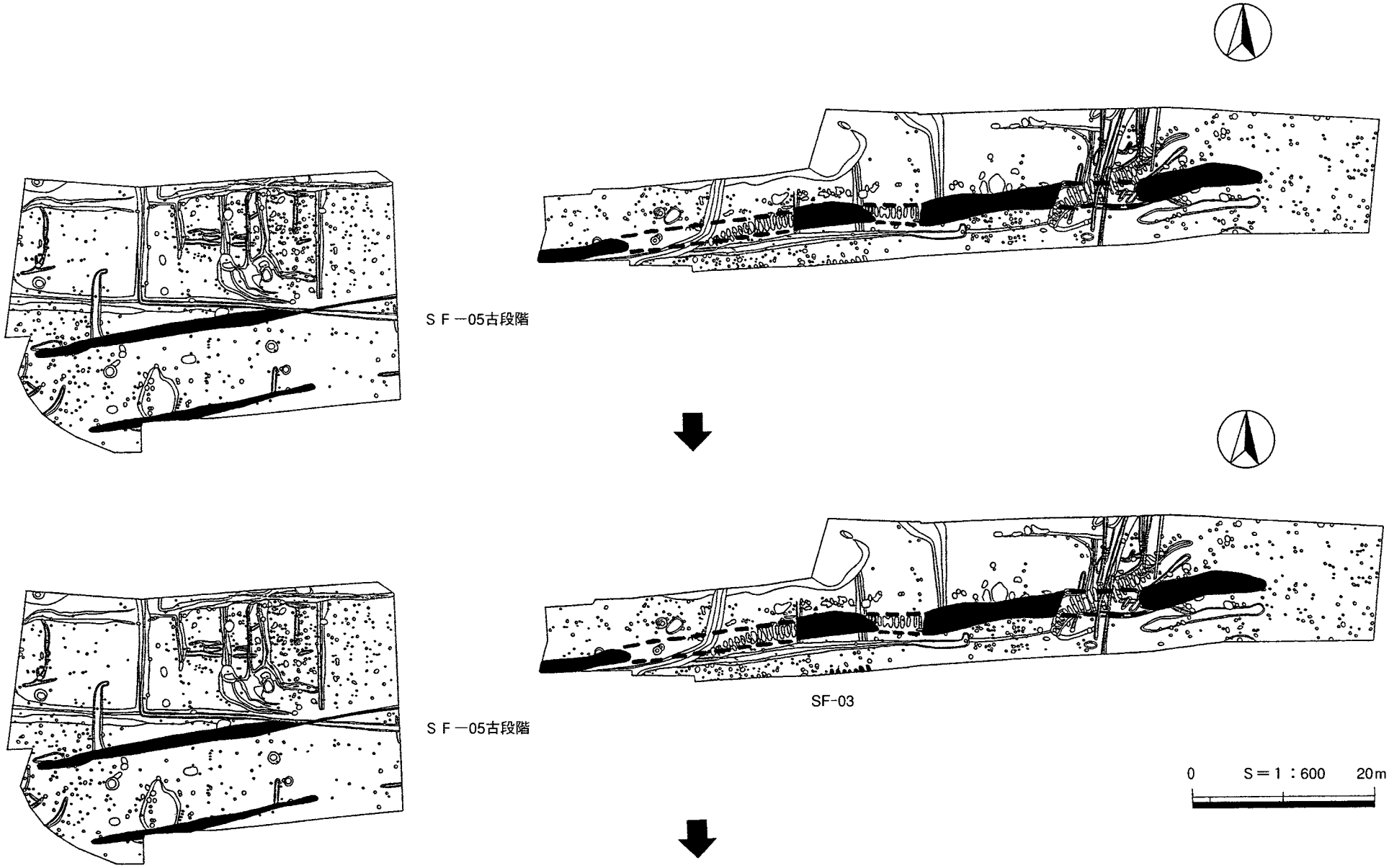
次にＳＦ－05古段階からＳＦ－05新段階へ移行する時期、すなわちＳＦ－05の道路幅が縮小する時期については明らかにし得なかったが、ＳＦ－05古段階の道路敷内に12世紀後半のＳＫ－49が存在しており、^{14}Ｃの測定結果を信用するならば、ＳＦ－05古段階の下限は12世紀後半となる。しかし、ＳＦ－05新段階よりも後出するＳＦ－01の成立時期から、12世紀後半まで下るものとは考えられず、また、全国的には９世紀以降官道の道路幅が縮小することから、全国的な現象と連動してＳＦ－05も９世紀頃に道路幅が縮小した可能性がある。

以上、考古学的資料が乏しいことから状況証拠に欠け、各道路状遺構の詳細な成立時期及び廃絶時期を明らかにできなかったが、７世紀後半～９世紀の間に５基の道路が作道されたものと考えられ、また、その位置的な重複性からいかに重要な道路であったことが窺える。

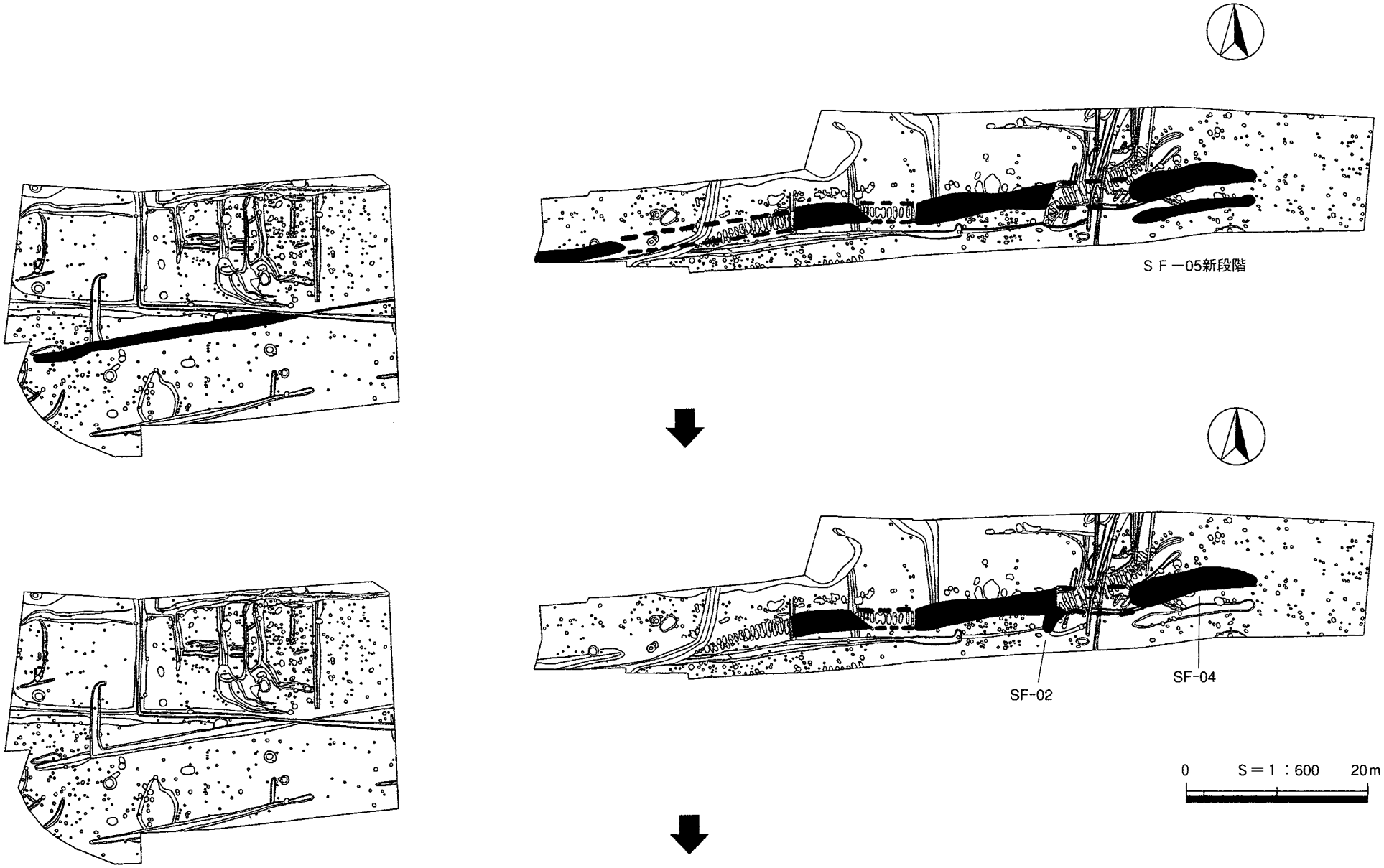
4．性格について

ＳＦ－01は東側のほぼ平坦面では東西にのびているが、西側では東側の台地と西側の谷状地形部との傾斜変換点に沿って南側へ湾曲している。ＳＦ－01が作道された時点では谷状地形部はほぼ埋没しており地形によって規制を受けたものとは考えにくい。また、プラント・オパール分析と花粉分析の結果から、谷状地形部が埋没した部分は比較的乾燥した状態であったことが推測されるが、地盤の脆弱な部分を避けたのかもしれない。

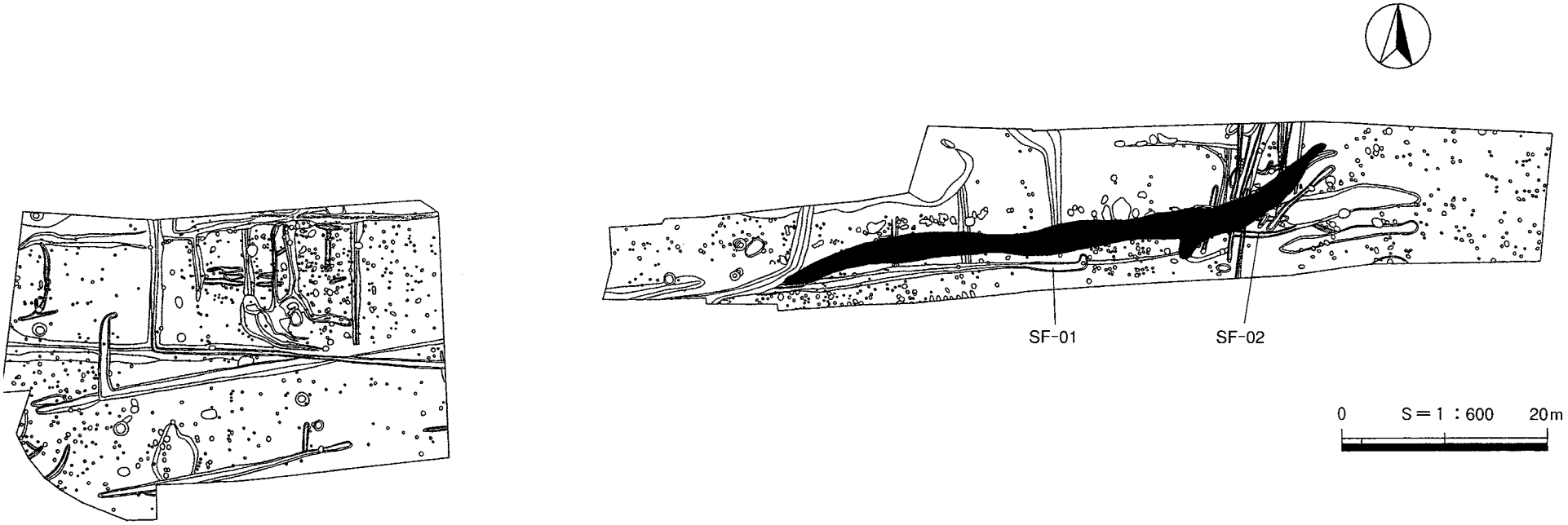
次にＳＦ－01のルートであるが、ＳＦ－01はほぼ東西へのび、東側でＳＦ－02と合流した後は、北へ緩やかに湾曲している。それでは、この道の北側はどこへ通じていたのであろうか。調査地の北約200ｍには「石橋ノ上」、「石橋ノ下」という小字名があり、その境界付近には石橋が架かっていたものと想像される。幕末に記された『伯耆志』[13]には「かつて（橋本集落の）南西の川（加茂川）に石橋が架けられ、この橋を渡る道は出雲富田（現島根県広瀬町）への大道であった」とある。現在加茂川は橋本集落の西側を流れているが、かつては集落の南側を流れていた可能性があり、集落の南西側に石橋が架けられていたものと推測される。この石橋と小字名から存在



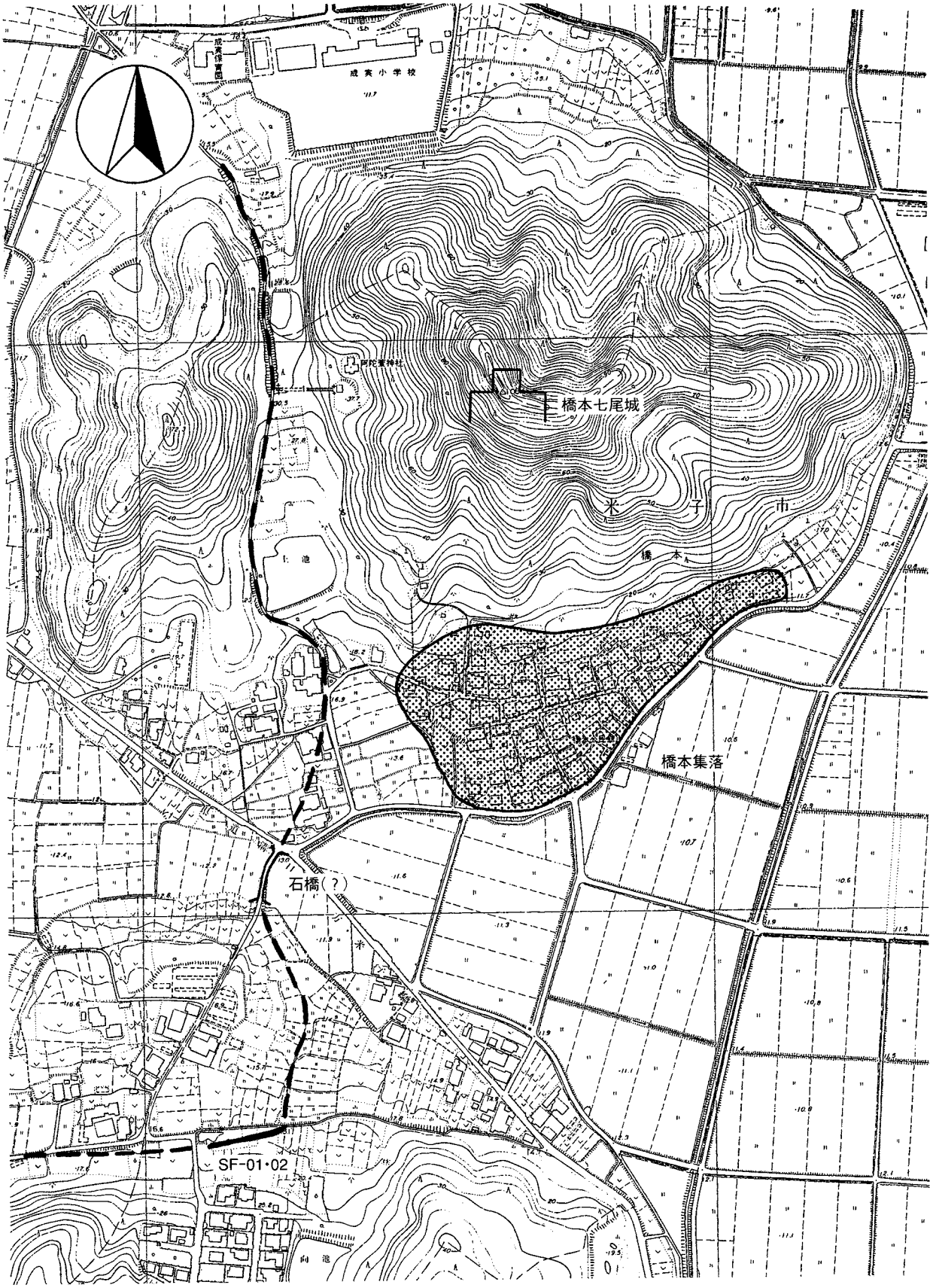
第69図　道路状遺構変遷図（１）



第70図　道路状遺構変遷図（２）



第71図　道路状遺構変遷図（3）



0　S＝1：5,000　200m

第72図　ＳＦ－01・02路線想定図

第73図　ＳＦ－05路線図

が窺える石橋とは同一なものかは不明であるが、もし、同一なものであると仮定したならばこの石橋を通り、さらに、橋本集落の西側を抜けて北（現在の米子市街地方面）へのびる道の存在を窺うことができる。しかし、ここで問題となるのは、ＳＦ－01・02そのものが近世頃まで存続していたかということである。ＳＦ－01・02の時期の下限については明らかにはできなかったが、廃道後にも同じ位置にルートが存在した可能性があり、状況証拠が欠如するもののＳＦ－01・02はそのルートだけが『伯耆志』に記された大道へと最終的には踏襲されたものと考えたい。

ＳＦ－01・02の作道当初の性格については現時点では不明であり、時期の下限についても不明であるが、中世には出雲富田（現島根県広瀬町）と橋本七尾城、石井要害とを結び、近世頃まで米子と出雲富田とを結ぶ主要幹道として踏襲されたものと考えられる。

ＳＦ－05は直線的で、両側に側溝を有し、当初は幅約９ｍもあることから、官道である可能性が高い。なお、ＳＦ－05は詳細な時期を把握できなかったが、ＳＦ－01との切合関係等から古代に属するものと考えられる。

米子平野における古代山陰道のルートについては、３つのルートが想定されている。中林保氏[14]は米子市尾高付近を経て日野川を渡り、米子平野の南側を迂回し、岸本町大殿・坂長付近→岩屋谷→会見町諸木・天万を経て手間剡の推定地である島根県伯太町安田関に至るルートを想定し、日野尚志氏[15]は米子市尾高・福万→岸本町岩屋谷→会見町諸木・天万・寺内を経て渡田峠を超えて出雲へ至るルートを想定している。また、中村太一氏[16]は米子市福万→諏訪→青木→榎原・橋本→古市・新山を経て島根県伯太町安田関に至るルートを想定しており、大きく分けると米子平野の南側を迂回するルートと米子平野の中央を東西にほぼ直線的に通るルートがある。前者は会見郡家の推定地である長者屋敷遺跡、白鳳期の大寺廃寺、平安時代の坂中廃寺付近を通り、周辺には『古事記』の伝承が残り、前方後円墳が比較的多く分布している。中村氏は駅路が郡家に沿うか否かはケースバイケースであり、島根県伯太町安田関付近に比定される手間剡は駅路の通過地点として捨象できない要素として、このルートは大化以前の交通路であり、律令制下においては伝路として位置付けている。

一方、後者は会見郡家の推定地である長者屋敷遺跡付近を通らない。中村氏は駅路は必ずしも郡家付近を通過するものではなく、前述したように駅路が手間剡を通過するということと、条里制地割等から直線的な路線を想定できることから、このルートを駅路として位置付けている。なお、米子平野における古代山陰道に関する学史をまとめた加納真人氏[17]は、このルート上に遺跡が少ないなどの問題点があるとしながらも、中村説を支持している。このように、古代駅路は直線的路線をとる計画道路であり[18]、このルートは島根県から米子平野を抜けて東へ行くのには最短距離であることから、中村、加納両氏の説を支持したい。

当遺跡は中村氏が想定した古代山陰道駅路のルート付近に位置し、ＳＦ－05は官道としての性格が考えられることから、ＳＦ－05は古代山陰道駅路である可能性が高い。

古代山陰道が発掘調査で確認されたのは県内では初めてで、島根県でも松江市松本遺跡[19]で確認されたのみである。松本遺跡は丘陵の谷部を整形した切り通し状の道路で、道路幅は８～10ｍが想定され、両側には側溝は認められない。

古代山陰道の道路幅については文献と地割から窺うことができる。『出雲国風土記』[20]には古代山陰道についての記述があり、その中で古代山陰道には野城橋、野代橋、来待橋の３つの橋が架けられており、各橋の幅が記載されている。これによると各橋の幅は野城橋が約9.3ｍ、野代橋が約5.3ｍ、来待橋が約4.6ｍとなっており、野城橋の幅は当遺跡のＳＦ－05古段階の幅とほぼ同じである。野代橋と来待橋については通行量、通行規制、架橋技術等から考えて、実際の道路幅よりも狭かったものと思われる。また、島根県東部では遺存する地割から古代山陰道のルートの想定が行われており[21]、幅６～16ｍの道路幅が推定されている。以上のことから、山陰道は小路でありながらも側溝を含めた幅が約６～16ｍあったことが窺える。

最後に、当遺跡の道路状遺構の変遷から窺える事象の１つとして、当初は東西の交通路が重要視されて、道路が作道、存続していたが、ＳＦ－01・02作道時には東西の往来はさほど重要ではなくなり、その重要性は北へと

転換している。その要因としては、各道路状遺構の詳細な時期を明らかにできなかったが、律令体制の崩壊による道路維持の低下、古代山陰道駅路が米子平野の南側を迂回する古代山陰道伝路へ吸収されたこと、橋本七尾城の築城・橋本集落の形成等が考えられる。

註

1　鳥取県埋蔵文化財センター　1988　『旧石器・縄文時代の鳥取県』

2　小原貴樹　1976　「奈喜良遺跡発掘調査報告」　『鳥取県米子市埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ』　米子市教育委員会

3　濵田竜彦他　1997　『陰田第６遺跡　陰田宮の谷遺跡３区・４区』　（財）米子市教育文化事業団

4　北浦弘人他　1986　『上福万遺跡Ⅱ』　（財）鳥取県教育文化財団

5　杉谷愛象他　1994　『奥陰田・萱原Ⅰ』　（財）米子市教育文化事業団

6　松本哲他　1992　『清水谷遺跡』　西伯町教育委員会

7　佐伯純也　2001　『吉谷銭神遺跡Ⅰ』　（財）米子市教育文化事業団

8　原田敏照他　2002　『東船遺跡』　島根県教育委員会

9　早川泉　1991　「古代道路遺構に残された圧痕」　『東京考古』第９号

　早川泉　1997　「道路遺構の虚像と実像」　『古代交通研究』第６号

10　飯田充晴　1993　「道路築造方法について」　『古代交通研究』第２号

11　小鹿野亮　2002　「筑紫野市岡田地区遺跡の調査」　『平成14年度奈良文化財研究所　埋蔵文化財発掘調査技術者専門研修　交通遺跡調査課程』　奈良文化財研究所

12　東和幸　2002　「波板状凹凸面牛馬歩行痕説」　『日本考古学協会第68回総会　研究発表要旨』　日本考古学協会

　東和幸　2002　「波板状凹凸面に関する第三の見解」　『犬飼徹夫先生古稀記念論集　四国とその周辺の考古学』

13　景山粛　幕末　『伯耆志』

14　中林保　1971　「駅家を中心とした古代山陰道の歴史地理学的考察－特に、但馬、因幡、伯耆の三国について－」　『人文地理』vol 23の１

15　日野尚志　1991　「伯耆国の駅路について」　『佐賀大学教育学部研究論文集』vol 38－２－Ⅰ

16　中村太一　1992　「『出雲国風土記』の方位・里程記載と古代道路－意宇郡を中心として－」　『出雲古代史研究』第二号

17　加納真人　1994　「古代山陰道と新山」　『萱原・奥陰田Ⅰ』　（財）米子市教育文化事業団

18　木下良　1990　「日本古代律令期に敷設された直線的計画道の復元的研究」　国学院大学

19　足立克己他　1997　『松本古墳群　大角山古墳群　すべりざこ古墳群』　島根県教育委員会

20　加藤義成　1957　『修訂出雲国風土記参究』

21　中村太一　1992　「『出雲国風土記』の方位・里程記載と古代道路－意宇郡を中心として－」　『出雲古代史研究』第二号

第６章　自然科学分析

第１節　吉谷亀尾ノ上遺跡の火山灰分析

株式会社　古環境研究所

１．はじめに

中国地方には、大山や三瓶山など中国地方に分布する火山や、九州地方の火山などから噴出したテフラ（tephra，火山砕屑物，いわゆる火山灰）が多く分布している。テフラの中には、すでに噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、それらとの関係を求めることによって、地層の堆積年代や地形や土譲の形成年代のみならず、遺構や遺物の年代などについても知ることができるようになっている。

そこで、年代が不明な土層が認められた米子市吉谷亀尾ノ上遺跡においても、地質調査を行って土層の層序を記載するとともに、採取された試料を対象にテフラ分析を行い、示標テフラとの層位関係の把握により土層の年代に関する資料を収集することになった。調査の対象となった地点は、東深掘トレンチおよび西深掘トレンチの２地点である（第74図）。

２．土層の層序

⑴　東深掘トレンチ

東深掘トレンチでは、下位より褐色土（層厚34㎝以上）、風化が進んだ黄色風化軽石層（層厚76㎝，軽石の最大径13㎜，上部19㎝が灰褐色に風化）、若干黄色がかった褐色土（層厚25㎝）、黄褐色砂層（層厚10㎝）、黄褐色土（層厚17㎝）、砂混じり黄褐色土（層厚７㎝）が認められる。（第74図）

⑵　西深掘トレンチ

西深掘トレンチでは、下位より褐色土（層厚15㎝以上）、若干桃色がかった褐色土（層厚６㎝）、灰色粘質土（層厚４㎝）、灰色砂層（層厚29㎝）、灰色粘質土（層厚15㎝）、鉄分を比較的多く含む黄色土（層厚21㎝）、黄灰色土（層厚30㎝）、砂混じり黄色土（層厚７㎝）、黄灰色土（層厚８㎝）、砂混じり黄色土（層厚15㎝）、暗褐色土（層厚10㎝，第４層）、黒褐色土（層厚16㎝，第３層）、黒色土（層厚28㎝，第２層）、暗褐色土（層厚12㎝）、暗褐色作土（層厚14㎝，以上第１層）が認められる（第74図）。発掘調査では、第２層より縄文時代から古墳時代にかけての遺物が検出されている。

３．火山ガラス比分析

⑴　分析方法

東深掘トレンチおよび西深掘トレンチの２地点において採取された試料のうち、28点を対象に火山ガラス比分析を行うことにした。分析処理の手順は次の通りである。

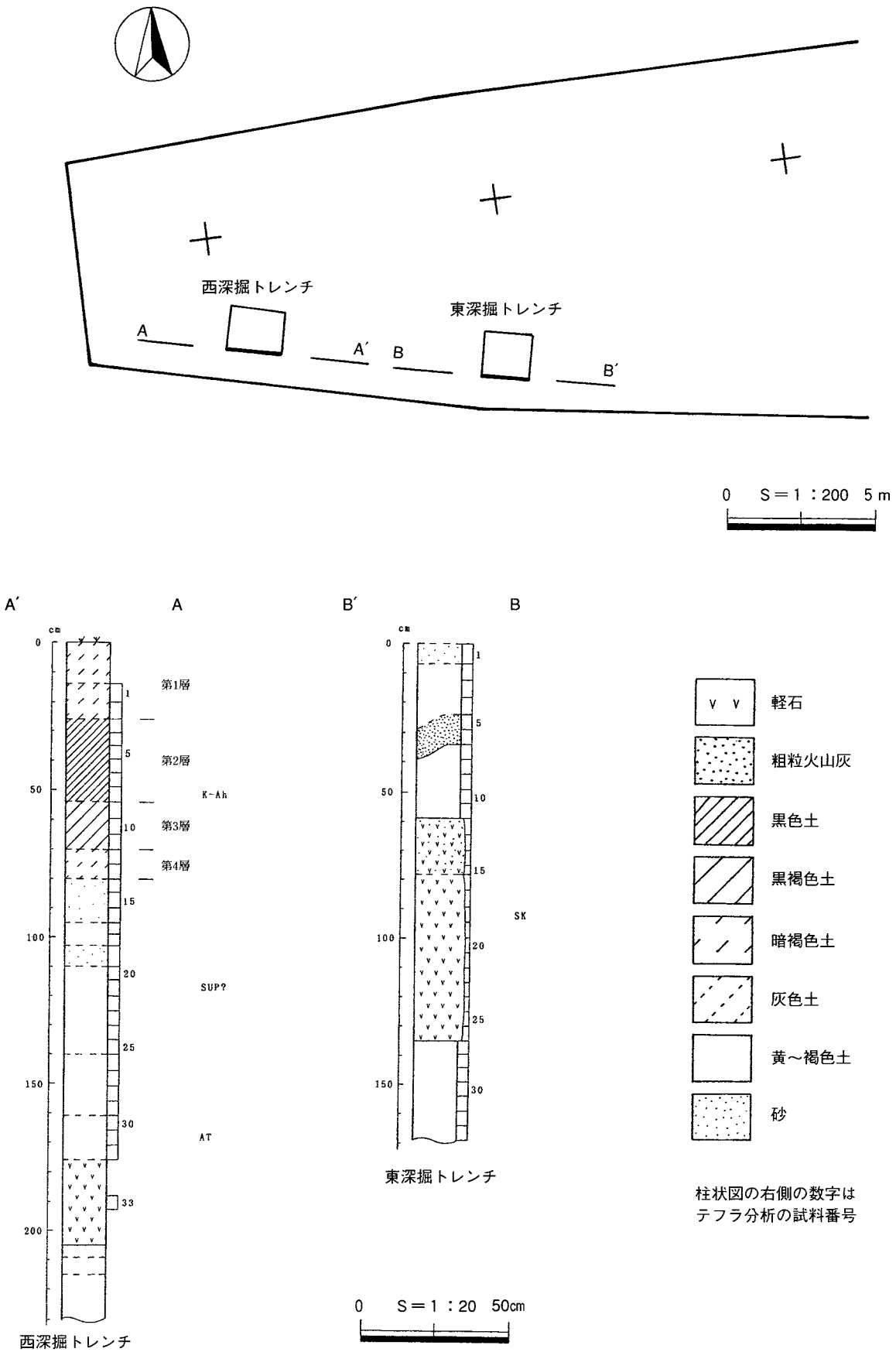
１）試料15ｇを秤量。

２）超音波洗浄装置により泥分を除去。

３）恒温乾燥器により80℃で乾燥。

４）分析篩により1/4-1/8㎜の粒子を篩別。

５）偏光顕微鏡下で250粒子を検鏡し、火山ガラスの色調・形態別組成を求める。



第74図　火山灰分析試料採取位置図及び土層柱状図

(2) 分析結果

火山ガラス比分析の結果を表2に示す。東深掘トレンチでは、試料21および試料17と、試料5より上位の試料から、火山ガラスが検出される（第75図）。試料21および試料17に含まれる火山ガラスは、無色透明で分厚い中間型ガラスである。量は非常に少ない。試料5より上位の試料に含まれる火山ガラスは、無色透明のバブル型（平板状）ガラスである。

西深掘トレンチでは、試料33を除く試料31より上位の試料から、火山ガラスが検出される（第75図）。とくに試料36には、無色透明のバブル型（平板状）ガラスが多く含まれている（14.4%）。試料21には、無色透明のバブル型ガラス（4.4%）のほかに、中間型ガラス（0.4%）やスポンジ状に発泡した軽石型ガラス（0.8%）が含まれている。試料9および試料5には、特徴的に淡褐色や褐色のバブル型ガラスが少量含まれている。以上のことから、この地点では、試料31、試料21、試料9付近に、テフラの降灰層準のある可能性が高いと考えられる。

4．屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

テフラ層および火山ガラス比分析により降灰層準のある可能性が考えられた試料4点について、示標テフラとの同定を行うために、温度一定型屈折率測定法（新井，1972, 1993）により屈折率を測定した。

(2) 測定結果

屈折率測定の結果を表3に示す。東深掘トレンチ試料25の風化した黄色風化軽石層には、黒雲母が多く含まれている。ほかに高温型石英も比較的多く認められる。本来含まれていたと思われる火山ガラスは、風化のために消失しているようである。

西深掘トレンチの試料31に含まれる火山ガラスの屈折率（n）は、1.498-1.501（modal range:1.499-1.500）である。重鉱物としては、斜方輝石のほかに少量の黒雲母が含まれている。角閃石（n_2）の屈折率は、1.671-1.680（modal range:1.671-1.676）である。試料21に含まれる火山ガラスの屈折率（n）は、1.499-1.501である。重鉱物としては、角閃石が含まれている。角閃石（n_2）の屈折率は、1.671-1.676である。さらに試料9に含まれる火山ガラスの屈折率（n）は、1.499-1.513（modal range:1.510-1.513）である。重鉱物としては、斜方輝石や角閃石が少量含まれている。

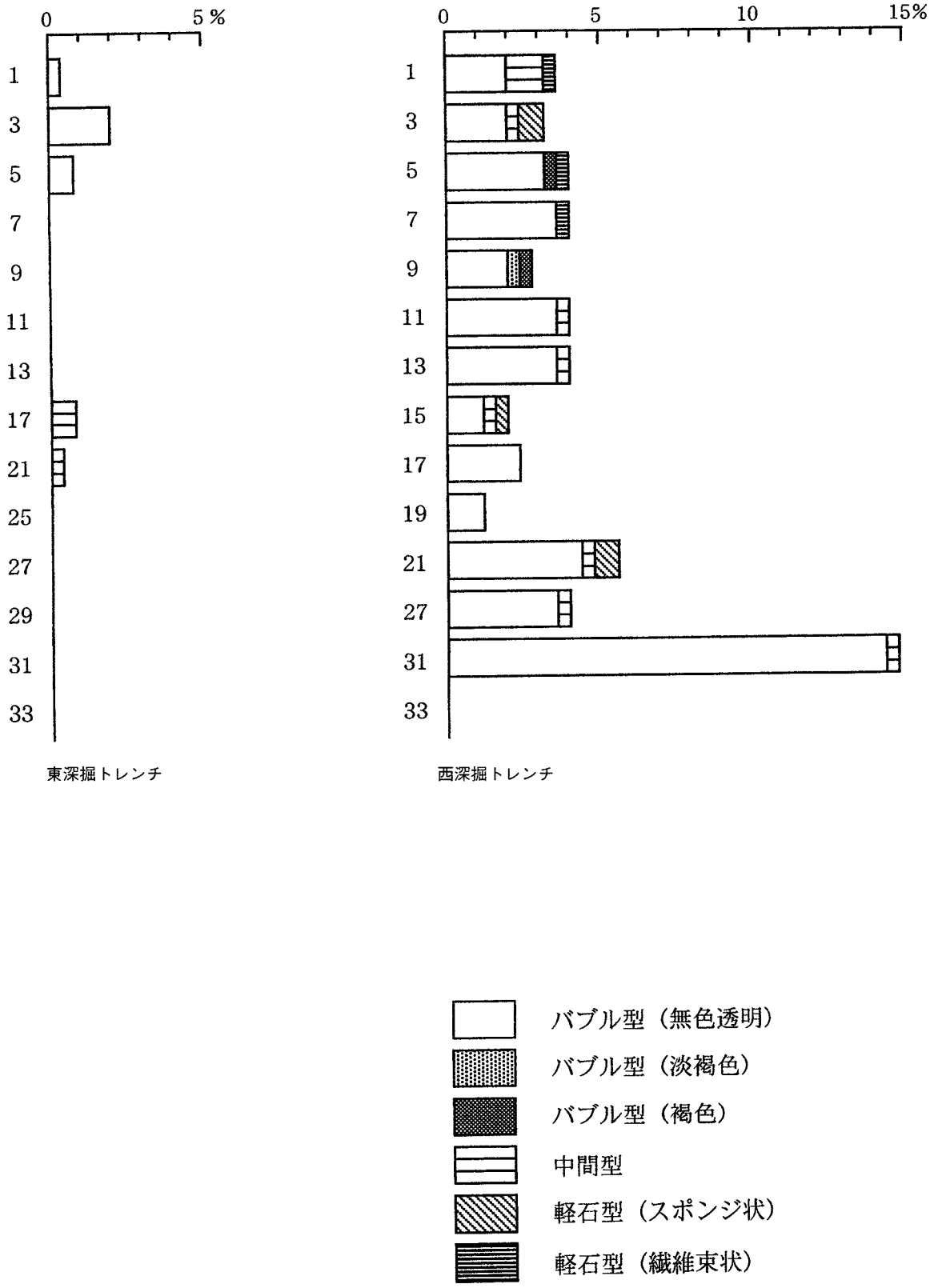
5．考　　察

東深掘トレンチ試料25の風化した黄色風化軽石層は、層相のほか黒雲母や高温型石英が多く含まれていることなどから、約9.5～11万年前に三瓶火山から噴出した三瓶木次テフラ（SK，松井・井上，1971，津久井・柵山，1981，豊蔵ほか，1991, Machida, 1999）の可能性が考えられる。

西深掘トレンチの試料31に含まれる火山ガラスは、その形態や色調さらに屈折率などから、約2.4～2.5万年前*1に姶良カルデラから噴出した姶良Tn火山灰（AT，町田・新井，1976，1992，松本ほか，1987，池田ほか，1995）に由来すると考えられる。角閃石については、その屈折率から約4万年前以前に三瓶火山から噴出した三瓶雲南軽石（SUn，林・三浦，1986，三浦・林，1991）や、約4万年前に三瓶火山から噴出した三瓶池田テフラ（SI，松井・井上，1971，林，1991，佐藤・町田，1996）に由来すると思われる。

試料21に含まれる火山ガラスの多くも、その形態や色調さらに屈折率などから、ATに由来すると考えられる。しかしながら、わずかながら中間型ガラスや軽石型ガラスが含まれていることを重視し、ここにテフラの降灰層準があるとするならば、角閃石の屈折率や層位などから、約1,6万年前以降に三瓶火山から噴出した三瓶浮布軽石（SUP，林・三浦，1987，三浦・林，1991）に由来するのかも知れない。

試料9に含まれる火山ガラスのうち淡褐色や褐色の火山ガラスは、その特徴や屈折率などから、約6,300年前*1



第75図　火山ガラス比ダイアグラム

表2　火山ガラス比分析結果

地点	試料	bw(cl)	bw(pb)	bw(br)	md	pm(sp)	pm(fb)	その他	合計
東深掘	1	1	0	0	0	0	0	249	250
トレンチ	3	5	0	0	0	0	0	245	250
	5	2	0	0	0	0	0	248	250
	7	0	0	0	0	0	0	250	250
	9	0	0	0	0	0	0	250	250
	11	0	0	0	0	0	0	250	250
	13	0	0	0	0	0	0	250	250
	17	0	0	0	2	0	0	248	250
	21	0	0	0	1	0	0	249	250
	25	0	0	0	0	0	0	250	250
	27	0	0	0	0	0	0	250	250
	29	0	0	0	0	0	0	250	250
	31	0	0	0	0	0	0	250	250
	33	0	0	0	0	0	0	250	250
西深掘	1	5	0	0	3	0	1	239	250
トレンチ	3	10	0	0	1	2	0	240	250
	5	8	0	1	0	0	1	241	250
	7	9	0	0	0	0	1	246	250
	9	5	1	1	0	0	0	243	250
	11	9	0	0	1	0	0	240	250
	13	9	0	0	1	0	0	240	250
	15	3	0	0	1	1	0	245	250
	17	6	0	0	0	0	0	244	250
	19	3	0	0	0	0	0	247	250
	21	11	0	0	1	2	0	236	250
	27	9	0	0	0	0	1	240	250
	31	36	0	0	1	0	0	213	250
	33	0	0	0	0	0	0	250	250

数字は粒子数．bw：バブル型，md：中間型，pm：軽石型，cl：透明，pb：淡褐色，br：褐色，sp：スポンジ状，fb：繊維束状．

表3　屈折率測定結果

トレンチ	試料	火山ガラスの屈折率 (n)	重鉱物	
			組成	角閃石 (n_2)
東深掘	25	-	bi	-
西深掘	9	1.499-1.513(1.510-1.513)	(opx,ho)	-
西深掘	21	1.499-1.501	ho	1.671-1.676
西深掘	31	1.498-1.501(1.499-1.500)	ho,(bi)	1.671-1.680(1.671-1.676)

屈折率の測定は，温度一定型屈折率測定法（新井，1972，1993）による．(): modal range.
opx：斜方輝石，ho：角閃石，bi：黒雲母．()は量が少ないことを示す．

に鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰（K－Ah，町田・新井，1978）に由来すると考えられる。この試料には、屈折率からほかにATに由来する火山ガラスが含まれていると考えられる。

これらのことから、東深掘トレンチの試料5の砂層やその上位の土層に含まれる火山ガラスは、ATに由来すると考えられる。東深掘トレンチと西深掘トレンチでは、土層層序やテフラの層位に大きな違いが認められた。土層の層相やテフラの層位などから、東深掘トレンチで認められた土層が、遺跡が位置する緩斜面を覆う土層の標準的なものと思われる。西深掘トレンチでは、この土層を切って発達した谷を埋めた堆積物や土層が認められたと考えられる。

6．まとめ

米子市吉谷亀尾ノ上遺跡において、地質調査、火山ガラス比分析、屈折率測定を行った。その結果、下位より三瓶木次テフラ（SK，約9.5～11万年前）、姶良Tn火山灰（AT，約2.4～2.5万年前*1）、鬼界アカホヤ火山灰（K－Ah，約6,300年前*1）などの示標テフラおよび降灰層準を認めることができた。

＊1　放射性炭素（^{14}C）年代.

文　献

新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石によるテフラの同定ーテフロクロノロジーの基礎的研究．第四紀研究，11，p. 254-269.

新井房夫（1993）温度一定型屈折率測定法．日本第四紀学会編「第四紀試料分析法２－研究対象別分析法」，p. 138-149.

林　正久・三浦　清（1986）三瓶雲南軽石層の鉱物特性と分布の広域性．島根大山陰地域研究（自然環境），２，p. 17-26.

林　正久・三浦　清（1987）三瓶火山のテフラ層序とその分布．島根大山陰地域研究（自然環境），３，p. 43-66.

池田晃子・奥野　充・中村俊夫・小林哲夫（1995）南九州，姶良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器^{14}C年代．第四紀研究，34，p. 377-379.

Machida, H.（1999）Quaternary widespread tephra catalog in and around Japan:recent progress. Quat. Res., 38, p. 194-201.

町田　洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰ー姶良Tn火山灰の発見とその意義ー．科学，46，p. 339-347.

町田　洋・新井房夫（1978）南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラーアカホヤ火山灰．第四紀研究，17，p. 143-163.

町田　洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス．東京大学出版会，276p.

松井整司・井上多津男（1971）三瓶火山の噴出物と層序．地球科学，25，p. 147-163.

松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗（1987）姶良Tn火山灰（AT）の^{14}C年代．第四紀研究，26，p. 79-83.

三浦　清・林　正久（1991）中国・四国地方の第四紀テフラー広域テフラを中心としてー．第四紀研究，30，p. 339-351.

佐藤浩一・町田　洋（1996）三瓶山東方地域における更新世後期テフラ．日本第四紀学会編「第四紀研究露頭集ー日本のテフラ」p. 282-283.

津久井雅志・柵山雅則（1981）大山山麓における三瓶火山起源の降下軽石層の発見とその意義．地質雑，87，p. 559-562.

豊蔵　勇・大村一夫・新井房夫・町田　洋・高瀬信一・中平啓二・伊藤　孝（1991）北陸海岸段丘における三瓶木次テフラの同定とその意義．第四紀研究，30，p. 79-90.

第２節　橋本徳道西遺跡における自然科学分析

株式会社　古環境研究所

１．はじめに

橋本徳道西遺跡の発掘調査では、調査区東側において耕作にともなうとみられる溝状遺構（ＳＤ－48～50）と東側の台地と西側の谷との傾斜変換点を巡る溝状遺構（ＳＤ－21）が検出された。ここでは、耕作痕とみられる溝状遺構における農耕（水田、畑）の可能性ならびに西側の台地部と谷部における土地利用（耕作地、非耕作地）について、プラント・オパール分析と花粉分析から検討を行う。

２．試　　料

分析試料は、調査区東側の４区東壁第３層（試料１，試料２）の２点と調査区西側の６区南壁第３層（試料３，試料４）の２点の計４点である。試料１と試料２の採取層の上面には溝状遺構（ＳＤ－48～50）が確認されており、試料３と試料４の採取地点の間には台地と谷の傾斜変換点に沿う溝状遺構（ＳＤ－21）が存在する。

３．分析方法

(1) プラント・オパール分析

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の手順で行った。

１）試料を105°Ｃで24時間乾燥する（絶乾）。

２）試料約１ｇに直径約40μｍのガラスビーズを約0.02ｇ添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）する。

３）電気炉灰化法（550℃・６時間）により脱有機物処理を行う。

４）超音波水中照射（300W・42KHz·10分間）による試料を分散する。

５）沈底法により20μｍ以下の微粒子を除去する。

６）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラートを作成する。

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来するプラント・オパールを同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料１ｇ中のプラント・オパール個数（試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重，単位：10^{-5}ｇ）を乗じて、単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、ネザサ節は0.48およびクマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75である。

(2) 花粉分析

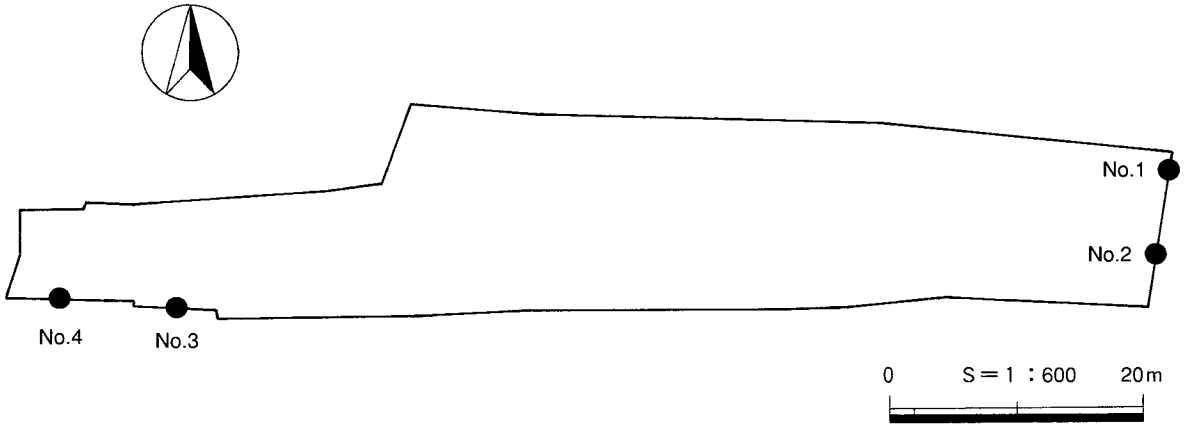
花粉粒の分離抽出は、基本的には中村（1973）を参考にして、試料に以下の物理化学処理を施して行った。

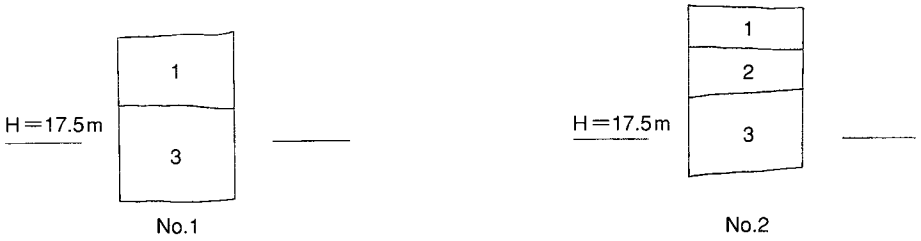
１）５％水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。

２）水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈殿法を用いて砂粒の除去を行う。

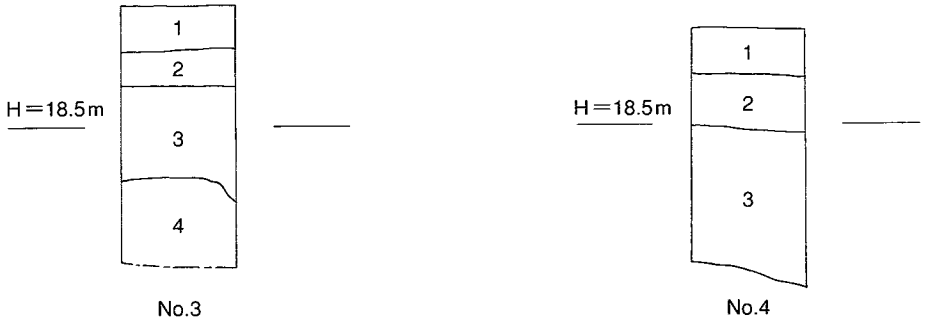
３）25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。

４）水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１のエルドマン氏液を加え１





1　暗灰褐色粘質土（第１層：現耕作土）
2　暗灰色粘質土（第２層：旧耕作土）
3　黒灰色粘質土（第３層、試料採取）



1　淡茶褐色土（第１層：表土、竹根による攪乱）
2　灰褐色土（基盤層状のブロックが混じる：整地土）
3　暗灰色粘質土（第２層：旧耕作土）
4　黒灰色粘質土（第３層、試料採取）

0　S＝1：40　1 m

第76図　プラント・オパール分析、花粉分析試料採取位置図及び土層柱状図

分間湯煎）を施す。

5）再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。

6）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作成する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、遠心分離（1500rpm、2分間）の後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作成後直ちに生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村（1974、1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類しているが、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

4．結　　果

(1) プラント・オパール分析

分析試料から検出されたプラント・オパールは、イネ、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科（ネザサ節型、クマザサ属型、その他）および未分類である。これらの分類群について定量を行い、その結果を表4、第77図に示す。また主要な分類群の顕微鏡写真を図版41に示す。以下に、プラント・オパールの検出状況を記す。

イネは試料1、試料2および試料4より検出されている。ヨシ属は試料2～試料4、ススキ属型、ネザサ節型およびクマザサ属型はすべての試料から検出されている。このうち、試料1～試料3ではネザサ節型が高い密度であり、ススキ属型も比較的高い密度である。なお、ヨシ属、クマザサ属型は低い密度である。

表4　プラント・オパール分析結果

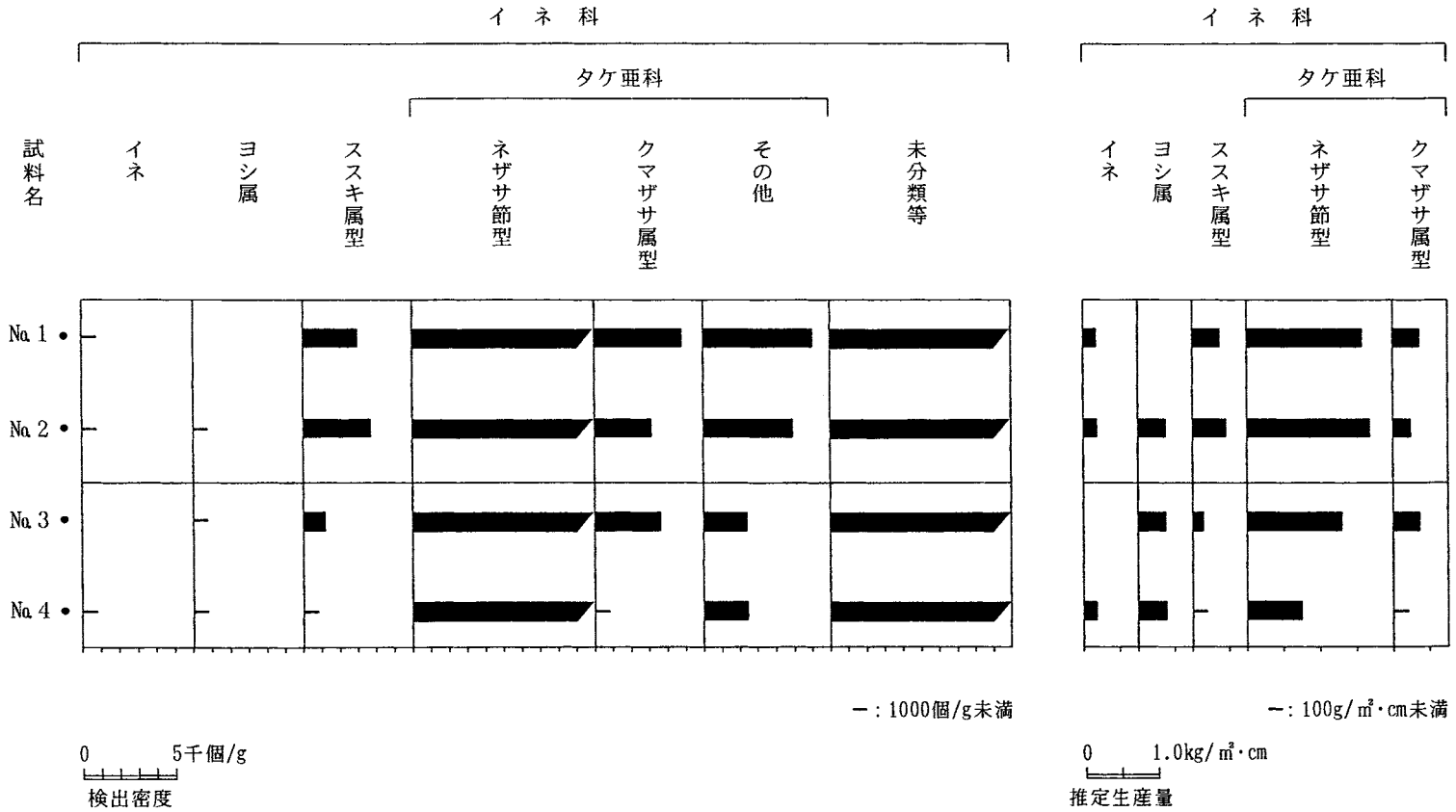
検出密度（単位：×100個/g）

分類群（和名・学名）		試料	4区東壁 No.1	4区東壁 No.2	6区南壁 No.3	6区南壁 No.4
イネ科	Gramineae (Grasses)					
イネ	*Oryza sativa* (domestic rice)		6	6		6
ヨシ属	*Phragmites* (reed)			6	6	6
ススキ属型	*Miscanthus* type		30	37	12	6
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)					
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. *Nezasa* type		328	349	269	155
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*) type		48	31	36	6
その他	Others		60	49	24	24
未分類等	Unknown		507	398	358	394
プラント・オパール総数			973	870	705	591

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡・cm）

イネ	*Oryza sativa* (domestic rice)		0.18	0.18		0.18
ヨシ属	*Phragmites* (reed)			0.39	0.38	0.38
ススキ属型	*Miscanthus* type		0.37	0.46	0.15	0.07
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. *Nezasa* type		1.58	1.68	1.29	0.74
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*) type		0.36	0.23	0.27	0.04

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。



第77図　プラント・オパール分析結果

(2) 花粉分析

1）分類群

出現した分類群は、樹木花粉８、樹木花粉と草本花粉を含むもの１、草本花粉13、シダ植物胞子２形態の計24である。これらの学名と和名および粒数を表５に示し、花粉数が200個以上計数できた試料は、花粉総数および樹木花粉数を基数とする花粉ダイアグラムを第78図に示す。なお、200個未満であっても100個以上の試料については傾向をみるため参考に図示した。主要な分類群は写真に示した。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

マツ属複維管束亜属、スギ、クリ、シイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属ーケヤキ、エノキ属ームクノキ

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

マメ科

〔草本花粉〕

イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、タデ属、ソバ属、アカザ科ーヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、ササゲ属、セリ亜科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

2）花粉群集の特徴

いずれの試料も花粉密度は低く、草本花粉が優占する。試料１と試料３はとくに低いが、試料３からはササゲ属が出現する。試料２ではヨモギ属がやや多く、イネ科とソバ属が検出される。試料４ではイネ科、ヨモギ属が優占し、ソバ属、アブラナ科、ササゲ属が出現する。

5．考　　察

いずれの試料も花粉密度が低く、試料１～試料３ではとくに低い。一方、これらではネザサ節型のプラント・オパールが優占し、ススキ属型も多い。こうしたことから、台地部では第３層堆積時は花粉などの有機質が分解されやすい、乾燥あるいは乾湿を繰り返すような堆積環境が示唆される。また、谷部も湿地的な環境ではなく、比較的乾いた状態であったようである。なお、畑作物あるいは畑作物を含むソバ属、アブラナ科、ササゲ属の花粉が検出されていることから、第３層の上面で確認された溝状遺構（ＳＤ－48～50）は畑作に伴う遺構であると考えられる。ところで、４区東壁第３層と６区谷部第３層からはイネのプラント・オパールが検出されているが、密度はいずれも600個／ｇと低い値である。したがって、これらは他所から混入したものである可能性が高く、ここで稲作が行われていたことを積極的に支持することはできない。仮に稲作が行われていたとするならば、栽培形態は畑作であり、なおかつ極めて短期間であったとみられる。

試料３と試料４が採取された地点は、台地と谷の傾斜変換点に沿う溝状遺構（ＳＤ－21）の両側にあるが、いずれも乾燥した畑地であった可能性が考えられる。

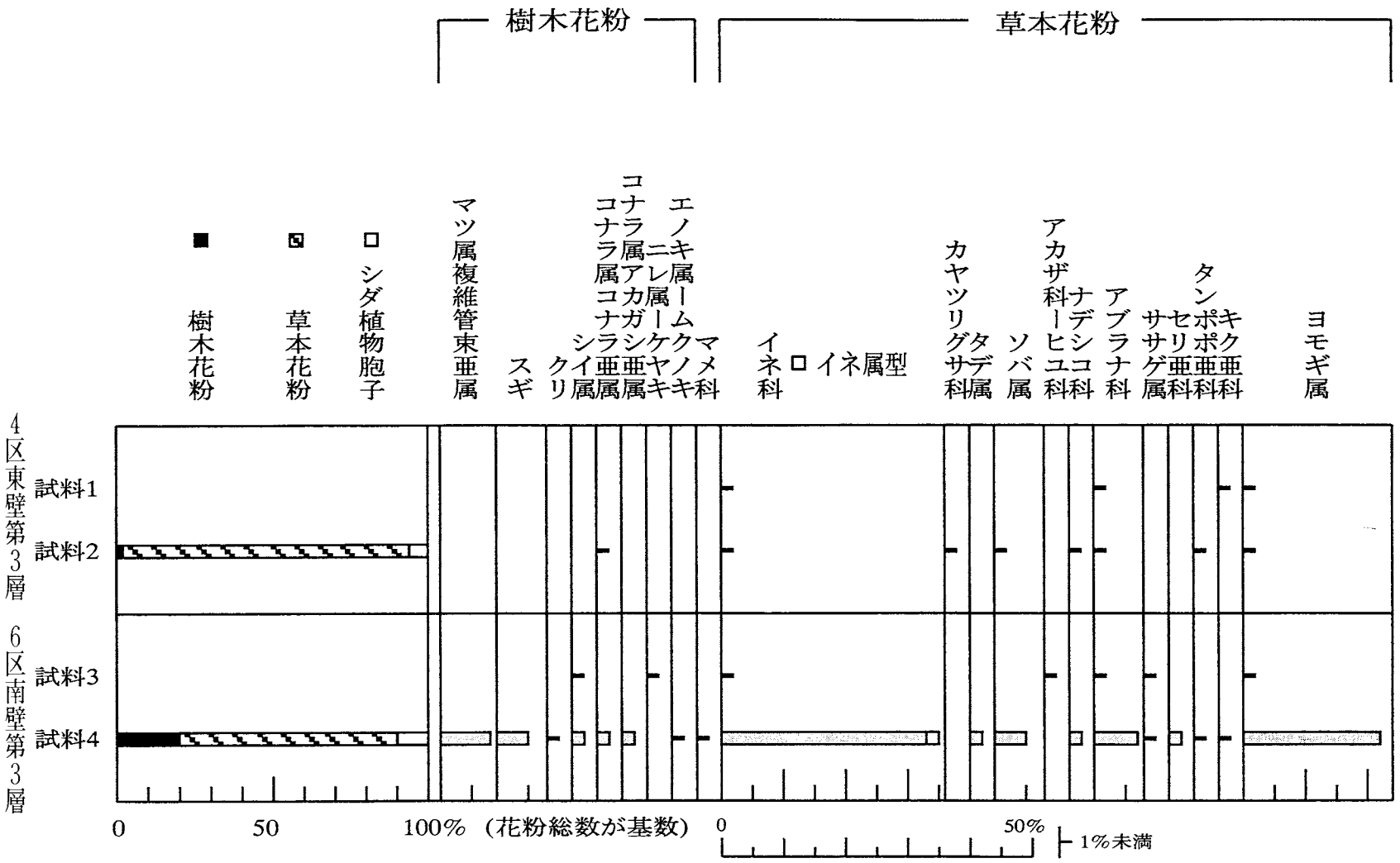
試料によって花粉密度が異なるが、これは堆積保存環境の軽微な差によるもので、試料採取地点の状況の差までは反映されていないと考えられる。

6．まとめ

橋本徳道西遺跡においてプラント・オパール分析と花粉分析を行い、農耕の可能性と土地利用について検討した。その結果、調査区は乾燥あるいは乾湿をくり返すような堆積環境が示唆され、東側の溝状遺構（ＳＤ－48～50）ではソバ属、アブラナ科、ササゲ属などを栽培する畑作が営まれていた可能性が推定された。また、西側の台地部と谷部についてもともに畑地と推定された。

表5　花粉分析結果

分類群		4区東壁第3層		6区南壁第3層	
学名	和名	試料1	試料2	試料3	試料4
Arboreal pollen	樹木花粉				
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属				9
Cryptomeria japonica	スギ				6
Castanea crenata	クリ				1
Castanopsis	シイ属			1	2
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属		1		3
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属				2
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属-ケヤキ			1	
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属-ムクノキ				1
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉				
Leguminosae	マメ科				1
Nonarboreal pollen	草本花粉				
Gramineae	イネ科	1	14	2	37
Oryza type	イネ属型		1		2
Cyperaceae	カヤツリグサ科		1		
Polygonum	タデ属				2
Fagopyrum	ソバ属		2		5
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科			1	
Caryophyllaceae	ナデシコ科		1		2
Cruciferae	アブラナ科	1	2	1	8
Vigna	ササゲ属			1	1
Apioideae	セリ亜科				3
Lactucoideae	タンポポ亜科		1		1
Asteroideae	キク亜科	1			1
Artemisia	ヨモギ属	2	41	7	25
Fern spore	シダ植物胞子				
Monolate type spore	単条溝胞子		3		6
Trilate type spore	三条溝胞子		1	2	5
Arboreal pollen	樹木花粉	0	1	2	24
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	0	0	1
Nonarboreal pollen	草本花粉	5	63	12	87
Total pollen	花粉総数	5	64	14	112
Unknown pollen	未同定花粉	1	0	0	1
Fern spore	シダ植物胞子	0	4	2	11
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)
	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)



第78図　花粉ダイアグラム

文　献

杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．富士竹類植物園報告，第31号，p. 70-83.

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p. 189-213.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）ー数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法ー．考古学と自然科学，9，p. 15-29.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）ープラント・オパール分析による水田址の探査ー．考古学と自然科学，17，p. 73-85.

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p. 248-262.

中村　純（1973）花粉分析．古今書院，p. 82-110.

中村　純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（Oryza sativa）を中心として．第四紀研究，13，p. 187-193.

中村　純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第10号，p. 21-30.

中村　純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集，60p.

第３節　ＳＫ－49出土鉄刀塗膜の放射性炭素年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

米子市橋本徳道西遺跡では、古代～中世頃のものとされる刀が出土しており、その鞘には種類は不明であるが塗膜が確認されている。今回の分析調査では、鞘の塗膜片を対象として放射性炭素年代測定を行い、その年代資料を得る。

１．試　　料

試料は刀の鞘に塗られていた塗膜の細片（重さ約0.02ｇ）１点である。

２．分析方法

微量試料であることから、加速器（AMS）による放射性炭素年代測定を行う。測定は株式会社加速器研究所の協力を得た。なお、放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,570年を使用した。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma）に相当する年代である。

３．結　　果

測定結果を表６に示す。得られた年代は約800年前およそ12世紀頃である。この年代は、この刀の鞘が、古代～中世とされることと矛盾しない。今後は、さらに共伴遺物の時代・時期や出土遺構の評価など、考古学的所見との検討を行うことで、詳細な年代観の把握ができるものと期待される。

表６　放射性炭素年代測定結果

試 料 名	種類	測定年代BP	δ^{13}C（‰）	測定年代BP	Code.No.
刀の鞘の塗膜	不明	860±20	−30.22±0.72	820±30	IAAA-11582

（１）測定年代および補正年代は、1950年を基点に何年前であるかを示した値。
（２）誤差は、標準偏差（ONE SIGMA）に相当する年代。

なお、今後に本測定結果を資料として評価する際には、暦年代と放射性炭素年代とのずれについても考慮しておく必要がある。放射性炭素年代は、測定法自体が持つ誤差や、測定の前提条件である大気中の^{14}Cの濃度が過去において一定ではなかったことなどから、年輪などから測定されたいわゆる暦年代とは一致しない。この問題については、年輪年代による暦年代既知の年輪の材について放射性炭素年代測定を実施することにより、暦年代と放射性炭素年代を両軸とする補正曲線が作られている（Stuiver, M. et al, 1998）。この補正曲線によって、測定された放射性炭素年代を暦年代に補正することが可能である。ここでは、詳細な補正計算は行わないが、補正曲線から読み取れることとして、今回の放射性炭素年代はおよそ100年程度、若い暦年代に補正される。したがって、今後、100年単位の年代を議論することになった場合には、できるだけ多くの関連試料について放射性炭素年代を得た上で、それらの集中あるいは拡散する傾向から判断することが適当と思われる。

引用文献

Stuiver, M.Reimer, P.J., Bard, E., Beck, J.W., Burr, G.S., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, F.G., V.d.Plicht, J., and Spurk, M.（1998）:INTCAL98 radiocarbon age calibration, 24,000-0calBP. Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

第４節　橋本徳道西遺跡出土製鉄関連遺物の分析調査

安来市体育文化振興財団　和鋼博物館
村川義行

橋本徳道西遺跡発掘調査で出土した製鉄関連遺物について分析調査した結果を報告する。

１．遺跡の概要

橋本徳道西遺跡は米子平野の西部に位置し、法勝寺川左岸の南から北へのびる丘陵の先端裾部の台地上に立地する。当遺跡では道路状遺構を５基確認しており、このうち、３基（ＳＦ－01・04・05）はほぼ東西へのびており、出雲国や山陰でも有数の製鉄遺跡が密集する県境地域へ続くものと考えられる。また、特にＳＦ－01からは鉄滓が出土していることから、この道路遺構を用いて県境地域あるいは当遺跡周辺で生産された鉄あるいは鉄製品を運搬していた可能性がある。

なお、当遺跡からの出土鉄滓は、遺構から出土したものはＳＦ－01（７世紀末以降）からの２点のみで、これ以外は遺物包含層と旧表土から出土した。これらの鉄滓の帰属時期は特定しがたいが、周辺の遺跡の状況や共伴する土器から古墳時代～奈良時代のものと推定されている。

２．供試材明細および分析調査方法

２－１．供試材

表７に資料明細を示す。

表７　資料明細および外観所見

No.	取上番号	種　類	地区名	層位・遺構名	重量（ｇ）
1	2	鉄　滓	４区　Ｂ－24	第２層(*)	35
2	19	鉄　滓	２区	ＳＦ－01	235
3	26	鉄　滓	５区　Ｂ－22	第３層	280
4	30	銑鉄？	５区　Ｂ－20	第３層	214＋28
5	36	鉄　滓	５区　Ａ－21	第３層	200
6	58	鉄　滓	５区	ＳＦ－01	220

（＊）第２層：旧表土あるいは旧耕作土、第３層：弥生時代中期～奈良時代の遺物包含層

２－２．調査項目および方法

(1)　目視観察

目視による外観形状、色調などの観察。

(2)　顕微鏡組織

切出して樹脂に埋め込み、エメリー研磨紙の＃150、＃240、＃320、＃600、＃1000と順を追って研磨し、最終はダイヤモンドの３μ～１μで仕上げてから金属組織および鉱物相を観察した。

(3)　化学組成分析

供試材の化学組成分析は次の方法で実施した。

全鉄分（Ｔ・Fe）、金属鉄（Ｍ・Fe）、酸化第一鉄（FeO）：容量法。

硫黄（Ｓ）：燃焼赤外線吸収法。

二酸化珪素（SiO_2）、酸化アルミニウム（Al_2O_3）、酸化カルシウム（CaO）、酸化マグネシウム（MgO）、酸化マ

ンガン（MnO）、二酸化チタン（TiO_2）、五酸化燐（P_2O_5）、酸化バナジウム（V_2O_5）：誘導結合プラズマ発光分光分析（ICP法）。

(4) **SEM－EDX定性分析**

顕微鏡組織観察試料にカーボン蒸着を施した後、走査型電子顕微鏡（SEM）により電子線を照射し、発生する2次電子、反射電子を検出し、表面組織形態の観察と、電子線を照射した微小部から発生する特性X線をエネルギー分散型X線検出器（EDX）で検出して定性元素分析を行い鉱物相の組成を同定した。

3．調査結果

3－1．No.1：鉄滓

(1) **目視観察**

外観を図版43に示す。平面、不整三角形をした含鉄鉄滓である。すべて自然面と思われ、上面はやや流動性ながら凹凸が大である。下面は尖った凹凸状で多数の気孔を有する。側部は大きな気孔状に袂られている。磁着は弱い。色調は表面が鉄銹色で地は黒褐色である。

(2) **顕微鏡組織**

図版44①、②に示す。灰白色球形および樹枝状の結晶はウスタイト（FeO）、灰色の木ずれ状の結晶はファイヤライト（$2FeO \cdot SiO_2$）、白色部分は金属鉄、黒灰色の基地はガラス質である。

(3) **化学組成分析**

表8に示す。また、主成分についてまとめた結果を表9に示す。全鉄分（T・Fe）は47.53%、金属鉄（M・Fe）は0.27%、酸化第1鉄（FeO）45.71%、酸化第2鉄（Fe_2O_3）は16.77%である。ガラス質成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO）は30.38%、このうち塩基性成分（CaO＋MgO）を2.57%含む。全鉄分とガラス質成分値からでは製錬滓と鍛冶滓の判別はし難く、また、酸化第2鉄（Fe_2O_3）が比較的少なく、酸化第1鉄（FeO）が多めであることから還元性雰囲気下で形成されたものと推定されるが、同様に製錬滓と精錬鍛冶滓の判別は難しい。一方、砂鉄特有の二酸化チタン（TiO_2）、酸化バナジウム（V_2O_5）についてみると、夫々0.46%、0.042%で始発原料は砂鉄系と推定されるが、製錬滓としては比較的低い値であることから精錬鍛冶滓に分類するのが妥当と思われる。

(4) **SEM－EDX定性分析**

図版46No.1に示す。点在する白色物（A）は金属鉄である。灰白色球形および樹枝状の結晶（B）は僅かにTiを含有するウスタイト（FeO）、灰色の木ずれ状の結晶（C）はファイヤライト（$2FeO \cdot SiO_2$）、黒灰色の基地（D）はガラス質（SiO_2－Al_2O_3－CaO－K_2O－Na_2O－FeO）である。

3－2．No.2：鉄滓

(1) **目視観察**

外観を図版43に示す。椀形状の鉄滓が三片に分割されている。椀の厚さ10～15㎜程度でそれぞれが不整三角形をなしている。上下面は自然面で、凸面は光沢がなく滑らかな感じで色調は淡茶褐色。凹面も滑らかで部分的に黒褐色・ガラス化している。磁着は非常に弱い。

(2) **顕微鏡組織**

図版44③、④に示す。灰白色樹枝状の結晶はウスタイト（FeO）、灰色の木ずれ状および板状の結晶はファイヤライト（$2FeO \cdot SiO_2$）、白色部分は金属鉄、黒灰色の基地はガラス質である。

(3) **化学組成分析**

表8に示す。また、主成分についてまとめた結果を表9に示す。全鉄分（T・Fe）は45.63%、金属鉄（M・Fe）は0.68%、酸化第1鉄（FeO）39.57%、酸化第2鉄（Fe_2O_3）は20.29%である。ガラス質成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO）は33.68%、このうち塩基性成分（CaO＋MgO）を1.13%含む。試料No.1と類似の化学成分系であ

り、同様に全鉄分とガラス質成分値からでは製錬滓と鍛冶滓の判別はし難く、また、酸化第２鉄（Fe_2O_3）、酸化第１鉄（FeO）からも製錬滓と精錬鍛冶滓の判別は難しい。一方、砂鉄特有の二酸化チタン（TiO_2）、酸化バナジウム（V_2O_5）についてみると、夫々0.60％、0.13％で始発原料は砂鉄系と推定されるが、砂鉄系の製錬滓としては比較的少い値であることから精錬鍛冶滓に分類するのが妥当と思われる。

(4) SEM－EDX定性分析

図版46No.２に示す。灰白色の樹枝状の結晶（Ｂ）は僅かにTiを含有するウスタイト（FeO）、灰色で大型の木ずれ状の結晶（Ｃ）はファイヤライト（$2FeO \cdot SiO_2$）、黒灰色の基地（Ｄ）はガラス質（$SiO_2-Al_2O_3-CaO-K_2O-Na_2O-FeO$）である。濃灰色の多角形板状結晶（Ｅ）はムライト（$FeO \cdot Al_2O_3$）でTi、Ｖを含有している。点在する白色物（Ａ）は金属鉄である。

３－３．No.３：鉄滓

(1) 目視観察

外観を図版43に示す。Ｌ字状に屈曲した含鉄鉄滓である。側部に大きな破面が残り、破面には大小の気泡が散在する。また、上面に１箇所、および自然面である側面には２～３箇所の引け巣状のやや大きな気泡が認められる。全体にごつごつした感じで、色調は茶褐色から黒褐色である。磁着はややある。

(2) 顕微鏡組織

図版44⑤、⑥に示す。灰白色球形および樹枝状の結晶はウスタイト（FeO）、灰色の板状の結晶はファイヤライト（$2FeO \cdot SiO_2$）、白色部分は金属鉄、黒灰色の基地はガラス質である。

(3) 化学組成分析

表８に示す。また、主成分についてまとめた結果を表９に示す。全鉄分（Ｔ・Fe）は51.99％、金属鉄（Ｍ・Fe）は0.39％、酸化第１鉄（FeO）41.44％、酸化第２鉄（Fe_2O_3）は27.72％である。ガラス質成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO$）は24.50％、このうち塩基性成分（$CaO+MgO$）を1.59％含む。全鉄分は高め、ガラス質成分はやや低い値で鍛冶滓に近い成分系であるが、酸化第２鉄（Fe_2O_3）が比較的少なく、酸化第１鉄（FeO）が多めであることから還元性雰囲気下で形成されたものと推定され、製錬滓に近い組成であることから精錬鍛冶滓に分類される。砂鉄特有の二酸化チタン（TiO_2）は0.76％、酸化バナジウム（V_2O_5）も0.20％で始発原料は砂鉄系であると推定される。

(4) SEM－EDX定性分析

図版46No.３に示す。点在する白色物（Ａ）は金属鉄である。灰白色球形の結晶（Ｂ）はウスタイト（FeO）、灰色の大きな結晶（Ｃ）はファイヤライト（$2FeO \cdot SiO_2$）、黒灰色の基地（Ｄ）はルーサイト（$SiO_2-Al_2O_3-K_2O$）である。

３－４．No.４：銑鉄

(1) 目視観察

外観を図版43に示す。大小２片あり、それぞれ側部に破面を１箇所ずつ有し、元は同一の固体の可能性がある。大片（Ａ）は全体に丸みを帯び上面は淡茶褐色で１ケ所盛り上がりがある。下面はややごつごつした面であるが鉄銹色の個所があり、その部分は磁着も強い。側面の破面は灰黒色で気孔が多数ある。

小片（Ｂ）は扁平な感じで色調は淡茶褐色。側面破面は新しくその観察からは、中心部は銹化した鉄片が積層し、外皮はその銹ぶくれと思われる。

(2) 顕微鏡組織

図版45①～⑤に大片資料の観察結果を示す。①は低倍率の観察結果であるが、長く伸びた灰色は非金属介在物である。②③は①の左側を代表する部分の拡大組織を示す。黒色の紐状は黒鉛（グラファイト：Ｃ）。基地の白色

部分は金属鉄、灰色部分は金属鉄が銹化したものであるが、その元の組織は顕微鏡観察からは不明である。(図版47④に示すSEM像からパーライトと少量のフェライトの混合組織であったと推定される。) ④、⑤は①の右側部分の代表拡大組織を示すが、黒灰色の蜂の巣状はセメンタイトとオーステナイトの共晶組織（レデブライト）の痕跡である。この部分は左側部分よりも冷却が速かったと思われる。小片試料についても組織観察を実施したが同様の結果であった。多くの黒鉛やレデブライトの痕跡が認められることから組成的には高炭素の銑鉄（C＞2％）であるが、非金属介在物が延伸していることから鍛打されたと推定される。したがって、本試料は銑鉄が精錬鍛冶（大鍛冶）の工程の初期段階で放棄され徐冷されたものと推定される。

(3) SEM－EDX定性分析

図版47No. 4に示す。灰白色の物質（A）は金属鉄で、ナイタール腐食でも変化が殆ど見られないことから組織はフェライトであると判断される。基地（B）は銹化した金属鉄でパーライトとフェライトの痕跡が認められる。黒色のひも状物（C）は黒鉛（グラファイト：C）である。

3－5．No. 5：含鉄鉄滓

(1) 目視観察

外観を図版43に示す。色調は黒褐色で破面数は1である。形状は饅頭形で上面は丸く盛り上がり全面に気泡状のくぼみがある。下面は平滑で鉄銹が付着している。側部破面からの観察では内部は気泡が多く、下面側は緻密、上面は粗い。ポーラスながら重い感じで磁着性は強い。

(2) 顕微鏡組織

図版44⑦、⑧に示す。灰白色球形状の結晶はウスタイト（FeO）、灰色の木ずれ状の結晶はファイヤライト（$2FeO \cdot SiO_2$）、黒灰色の基地はガラス質である。

(3) 化学組成分析

表8に示す。また、主成分についてまとめた結果を表9に示す。全鉄分（T・Fe）は55.15％、金属鉄（M・Fe）は0.37％、酸化第1鉄（FeO）48.73％、酸化第2鉄（Fe_2O_3）は24.16％である。ガラス質成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO）は20.56％、このうち塩基性成分（CaO＋MgO）を1.28％含む。全鉄分は高め、ガラス質成分はやや低い値で鍛冶滓の範疇であるが、酸化第2鉄（Fe_2O_3）が比較的少なく酸化第1鉄（FeO）が多めであることから還元性雰囲気下で形成されたものと推定され、製錬滓に近い組成であることから精錬鍛冶滓に分類される。砂鉄特有の二酸化チタン（TiO_2）は0.32％、酸化バナジウム（V_2O_5）も0.034％でやや低めであるが始発原料は砂鉄系であると推定される。

(4) SEM－EDX定性分析

図版47No. 5に示す。球形まゆ状の灰白色の結晶（A）はウスタイト（FeO）、灰色板状の結晶（B）はファイヤライト（$2FeO \cdot SiO_2$）、黒灰色の基地（C）はルーサイト（SiO_2－Al_2O_3－K_2O）である。

3－6．No. 6：鉄滓

(1) 目視観察

外観を図版43に示す。椀形鍛冶滓で全体が赤褐色の酸化土砂に覆われ、特に上面は厚い。側面に破面を有する。磁着はほとんどなし。

(2) 顕微鏡組織

図版44⑨、⑩に示す。灰白色球形状の結晶はウスタイト（FeO）、灰色の板状の結晶はファイヤライト（$2FeO \cdot SiO_2$）、白色部分は金属鉄、黒灰色の基地はガラス質である。

(3) 化学組成分析

表8に示す。また、主成分についてまとめた結果を表9に示す。本試料No. 6は試料No. 3、5と類似の成分系

である。全鉄分（T・Fe）は52.33%、金属鉄（M・Fe）は0.40%、酸化第1鉄（FeO）は48.67%、酸化第2鉄（Fe_2O_3）は20.16%である。ガラス質成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO）は23.36%、このうち塩基性成分（CaO＋MgO）を1.61%含む。全鉄分は高め、ガラス質成分はやや低い値で鍛冶滓の範疇である。砂鉄特有の二酸化チタン（TiO_2）は2.08%、酸化バナジウム（V_2O_5）も0.13%で始発原料は砂鉄系であると推定される。また、酸化第2鉄（Fe_2O_3）が比較的少なく、酸化第1鉄（FeO）が多めであることから還元性雰囲気下で形成されたものと推定され、製錬滓に近い組成であることから精錬鍛冶滓に分類するのが妥当である。

(4) SEM－EDX定性分析

図版47No.6に示す。灰白色の球形状の結晶（B）は僅かにTiを含有するウスタイト（FeO）、灰色で大型板状の結晶（C）はファイヤライト（2FeO・SiO_2）、基地は濃灰色部（D）はガラス質（SiO_2－Al_2O_3－CaO－K_2O－Na_2O－FeO）、黒灰色部（E）はルーサイト（SiO_2－Al_2O_3－K_2O）である。

4．まとめ

試料No.1とNo.2は、外観、色調はやや異なるが、化学成分系、構成鉱物組成が類似している。同様に、試料No.3、No.5およびNo.6も化学成分系、構成鉱物組成が類似しており、いずれも砂鉄系原料を始発とする精錬鍛冶滓である。また、後者の3資料は前2資料に比べて、より精錬が進んだ段階の鉄滓と思われるが、これらの鉄滓の相互の関連は不明である。

試料No.4は、精錬鍛冶途中の銑鉄と推定され、上記の鉄滓との関連は十分に考えられる。

以上の分析調査を通じて、当遺跡周辺には鉄製品の製造にかかわる施設が存在したことを示唆するものであり、また道路状遺構は周辺で生産された鉄あるいは鉄製品の運搬に利用された可能性は高いと思われる。

本調査の分析は日立金属（株）冶金研究所およびハイメック（株）中国事業所で実施した。

表8　鉄滓の化学成分分析（wt%）

No	SiO_2	MnO	P	S	CaO	MgO	V_2O_5	TiO_2	Al_2O_3	FeO	Fe_2O_3	T・Fe	M・Fe
1	24.03	0.19	0.066	0.083	1.99	0.58	0.042	0.46	3.78	45.71	16.77	47.53	0.27
2	27.56	0.12	0.055	0.077	0.73	0.40	0.13	0.60	4.99	39.57	20.29	45.63	0.68
3	18.26	0.22	0.071	0.062	1.11	0.48	0.20	0.76	4.65	41.44	27.72	51.99	0.39
5	16.23	0.13	0.039	0.048	0.87	0.41	0.034	0.32	3.05	48.73	24.16	55.15	0.37
6	17.17	0.25	0.060	0.039	1.10	0.51	0.13	2.08	4.58	48.67	20.16	52.33	0.40

表9　鉄滓の化学成分分析まとめ（wt%）

No	鉱物組成	化学組成							所見
		T・Fe	Fe_2O_3	塩基性成分	TiO_2	V_2O_5	MnO	ｶﾞﾗｽ質	
1	W＋F	47.53	16.77	2.57	0.46	0.042	0.19	30.38	精錬鍛冶滓
2	W＋F＋M	45.63	20.29	1.13	0.60	0.13	0.12	33.68	精錬鍛冶滓
3	W＋F＋L	51.99	27.72	1.59	0.76	0.20	0.22	24.50	精錬鍛冶滓
5	W＋F＋L	55.15	24.16	1.28	0.32	0.034	0.13	20.56	精錬鍛冶滓
6	W＋F＋L	52.33	20.16	1.61	2.08	0.13	0.25	23.36	精錬鍛冶滓

W:ｳｽﾀｲﾄ（Wüstite：FeO）F:ﾌｧｲﾔﾗｲﾄ（Fayalite：2FeO・SiO_2）M:ﾑﾗｲﾄ（Mullite:$3Al_2O_3$・$2SiO_2$）

L:ﾙｰｻｲﾄ（Leucite：K・Al・Si_2O_6系）

図　　版

全景（東から）

全景（西から）

ＳＩ－02～08・17
（北から）

ＳＩ－02～08・17
（東から）

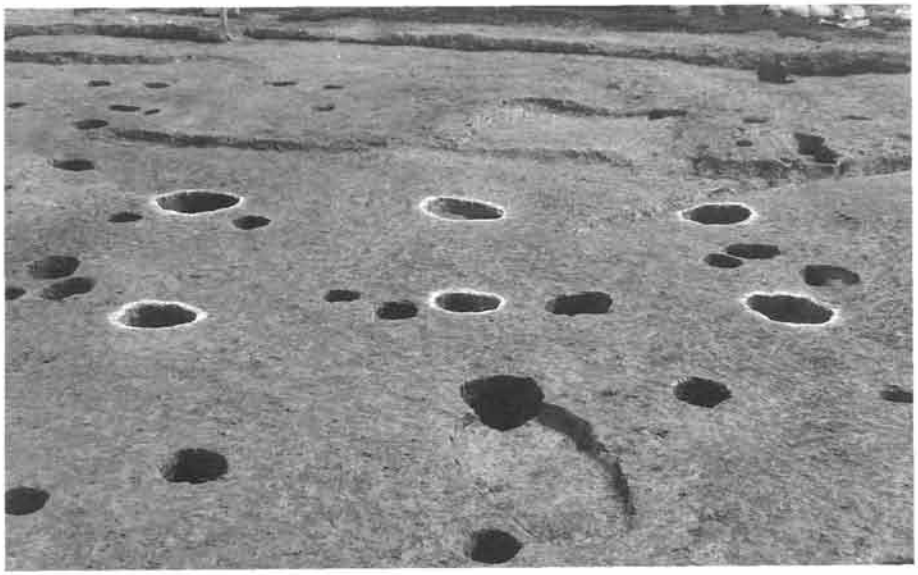
ＳＩ－02・04・05・07
08・17（南から）

ＳＩ－09～11（南から）

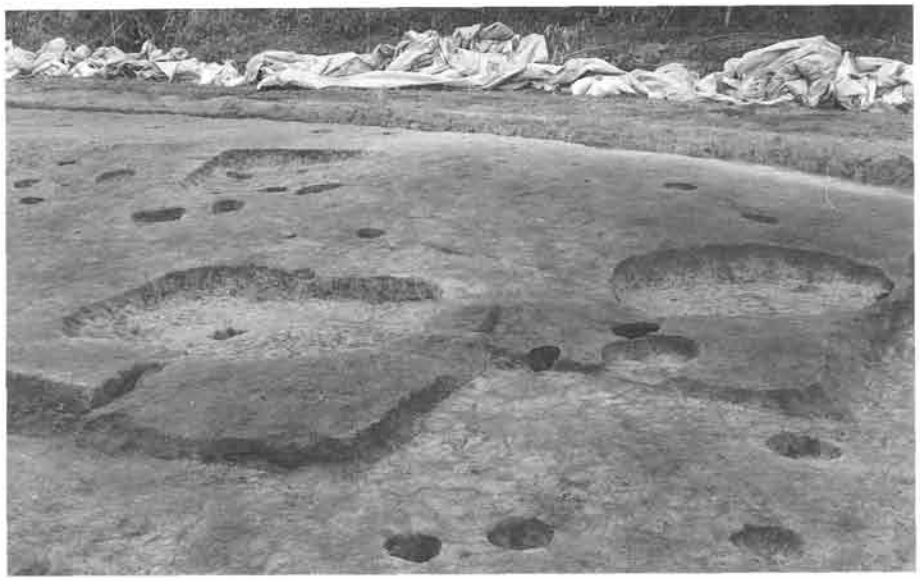
ＳＩ－12・13（北から）

ＳＩ－01・14～16・18
（西から）

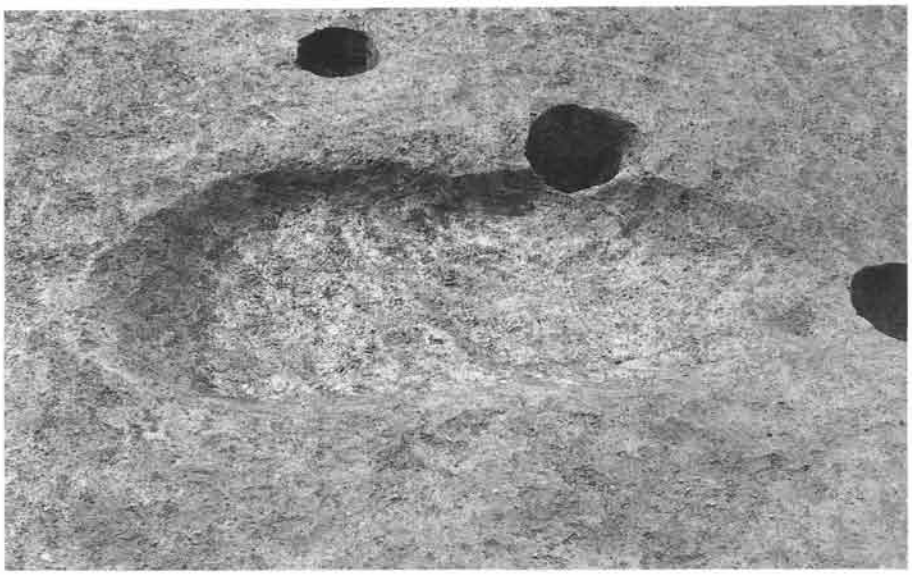
ＳＩ－01・14～16・18
（東から）



ＳＢ－01（北から）

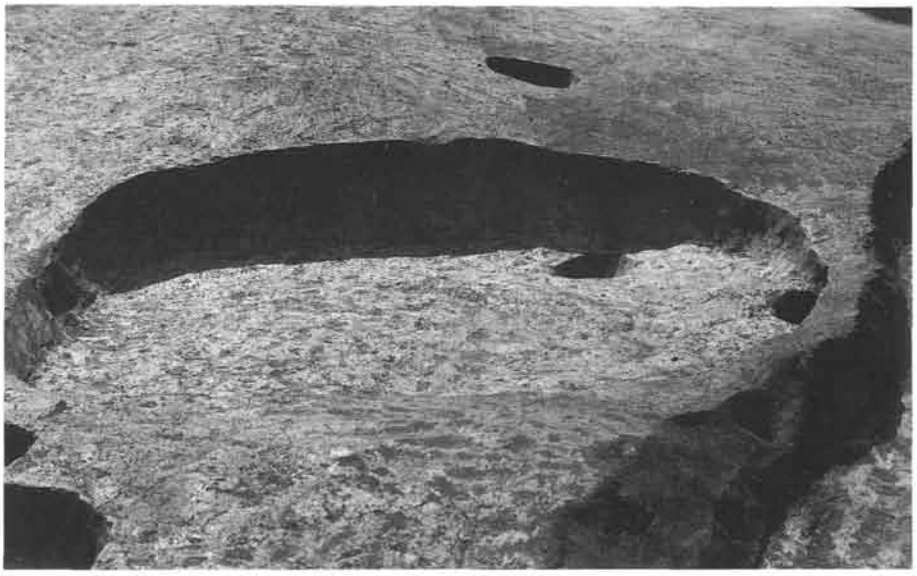


ＳＫ－03～05（北から）



ＳＫ－01

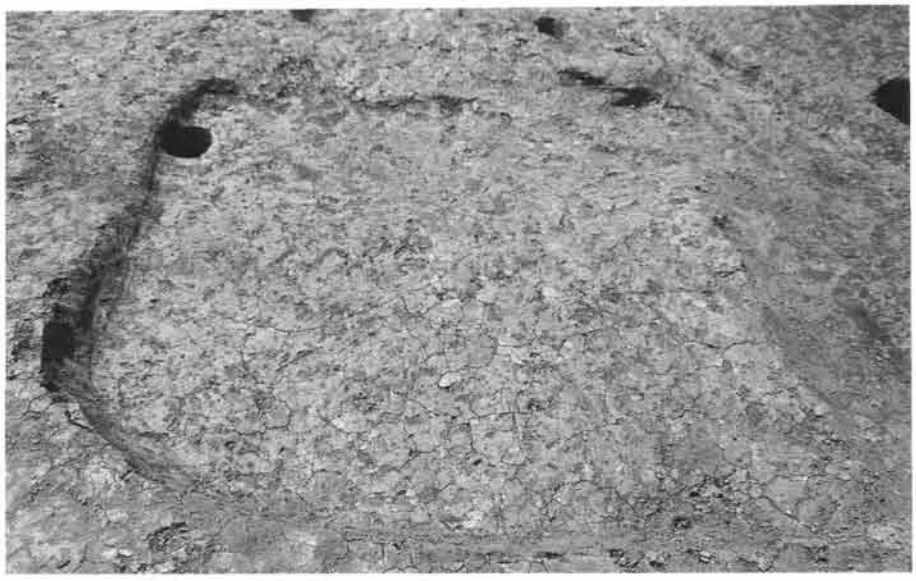
ＳＫ－02



ＳＫ－03

ＳＫ－04

ＳＫ－05

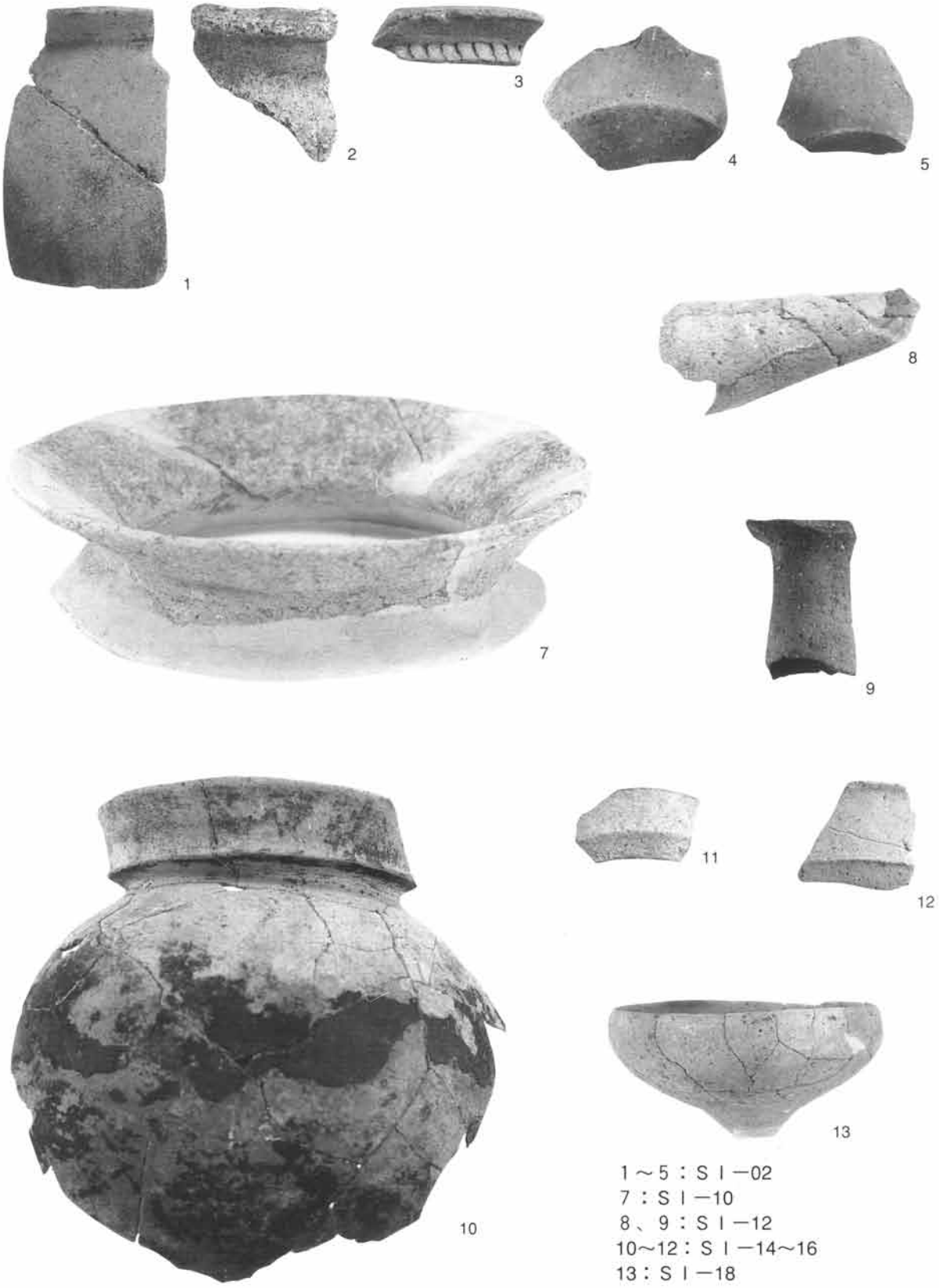


ＳＫ－06

炭焼窯天井崩落状況

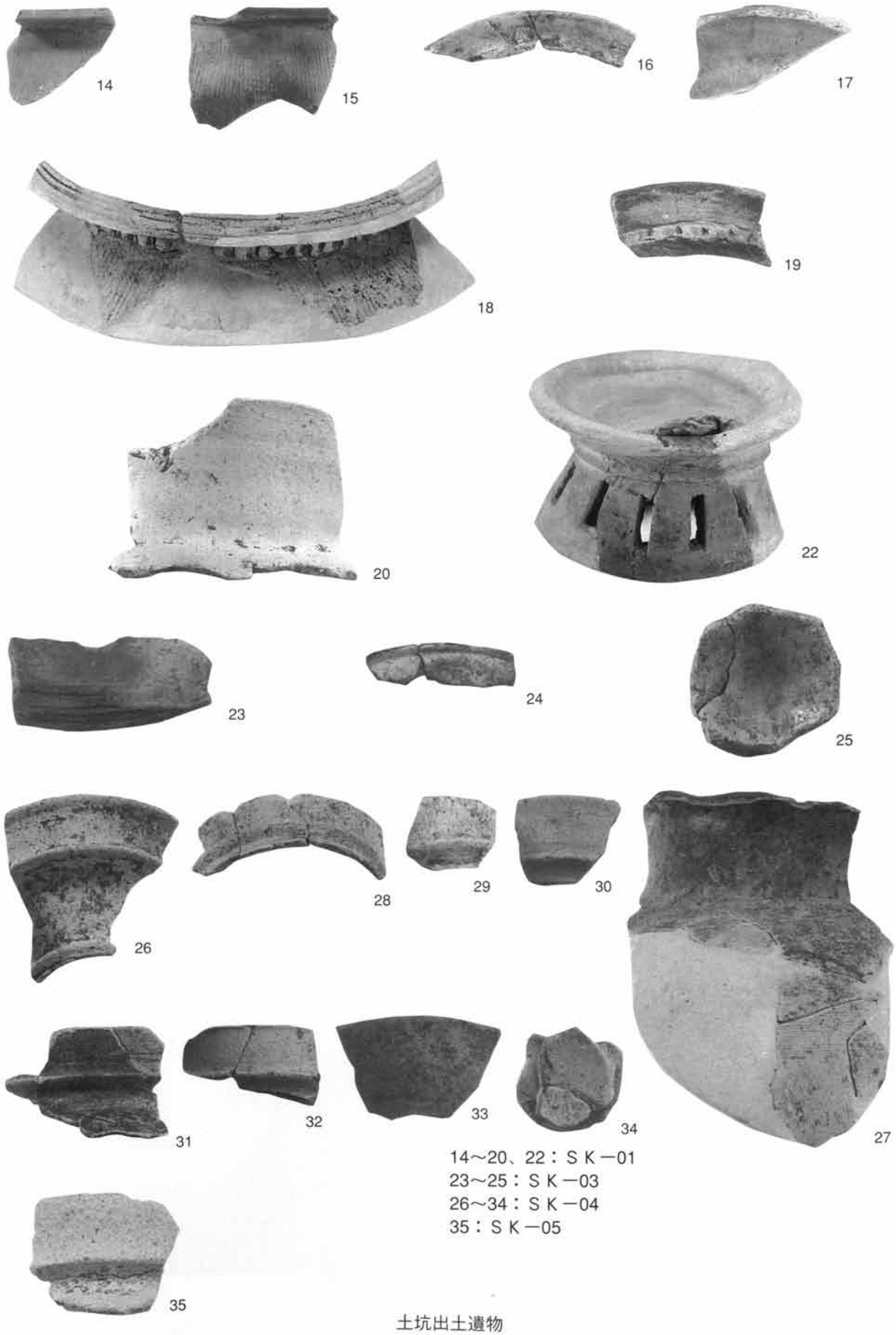
炭焼窯完掘

炭焼窯煙道



1～5：SI－02
7：SI－10
8、9：SI－12
10～12：SI－14～16
13：SI－18

竪穴住居跡出土遺物

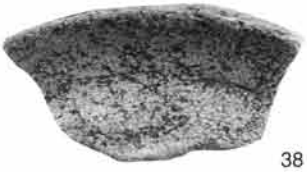


14～20、22：ＳＫ－01
23～25：ＳＫ－03
26～34：ＳＫ－04
35：ＳＫ－05

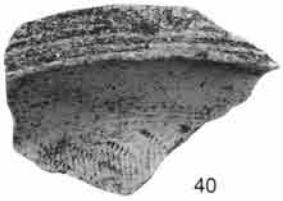
土坑出土遺物

36

37


38

39


40

41

42

43

44

45

46

58

59

60

61

62

63

64

65

66

遺構外出土遺物

第３次調査地空撮（西から）

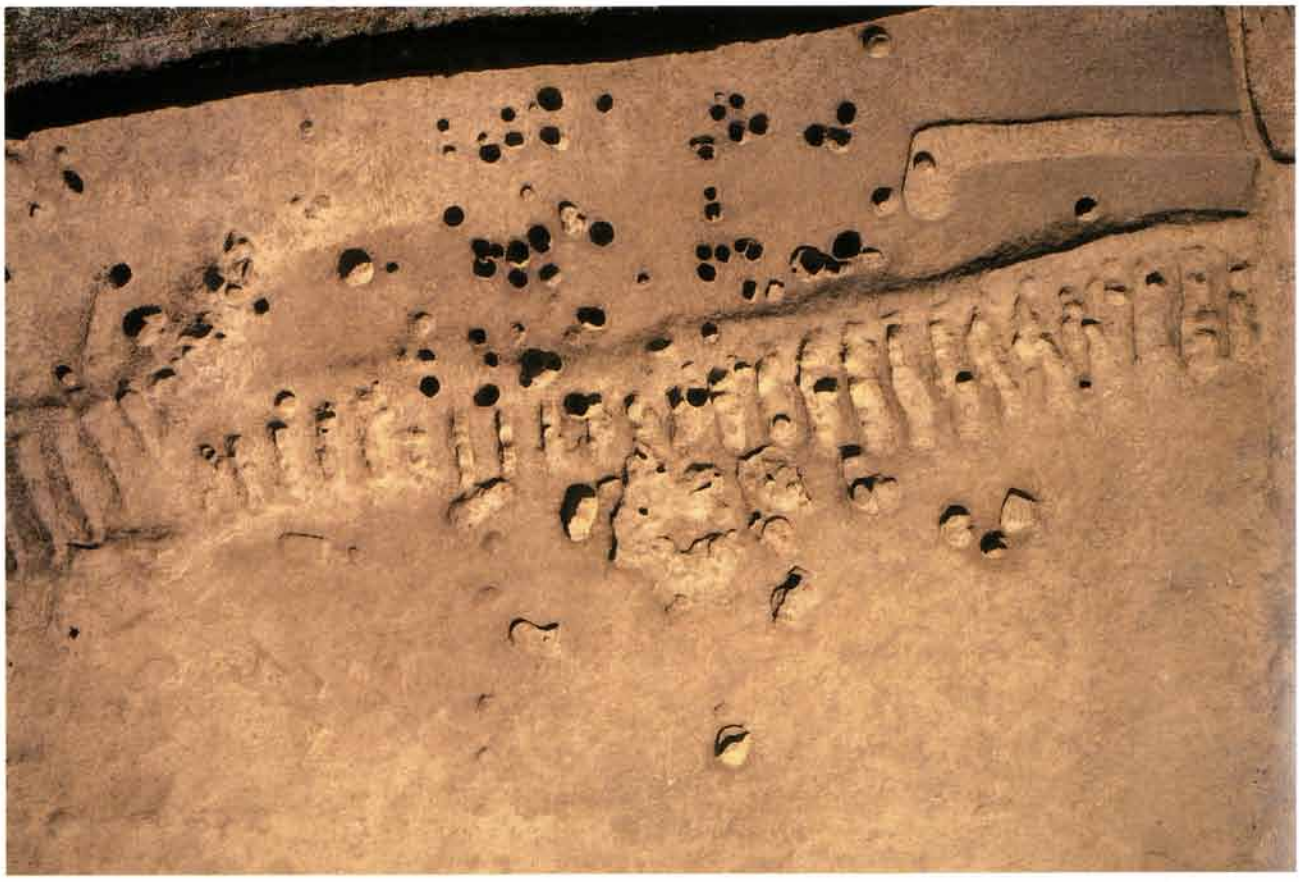
第３次調査地空撮（東から）

第３次調査地空撮（南から）

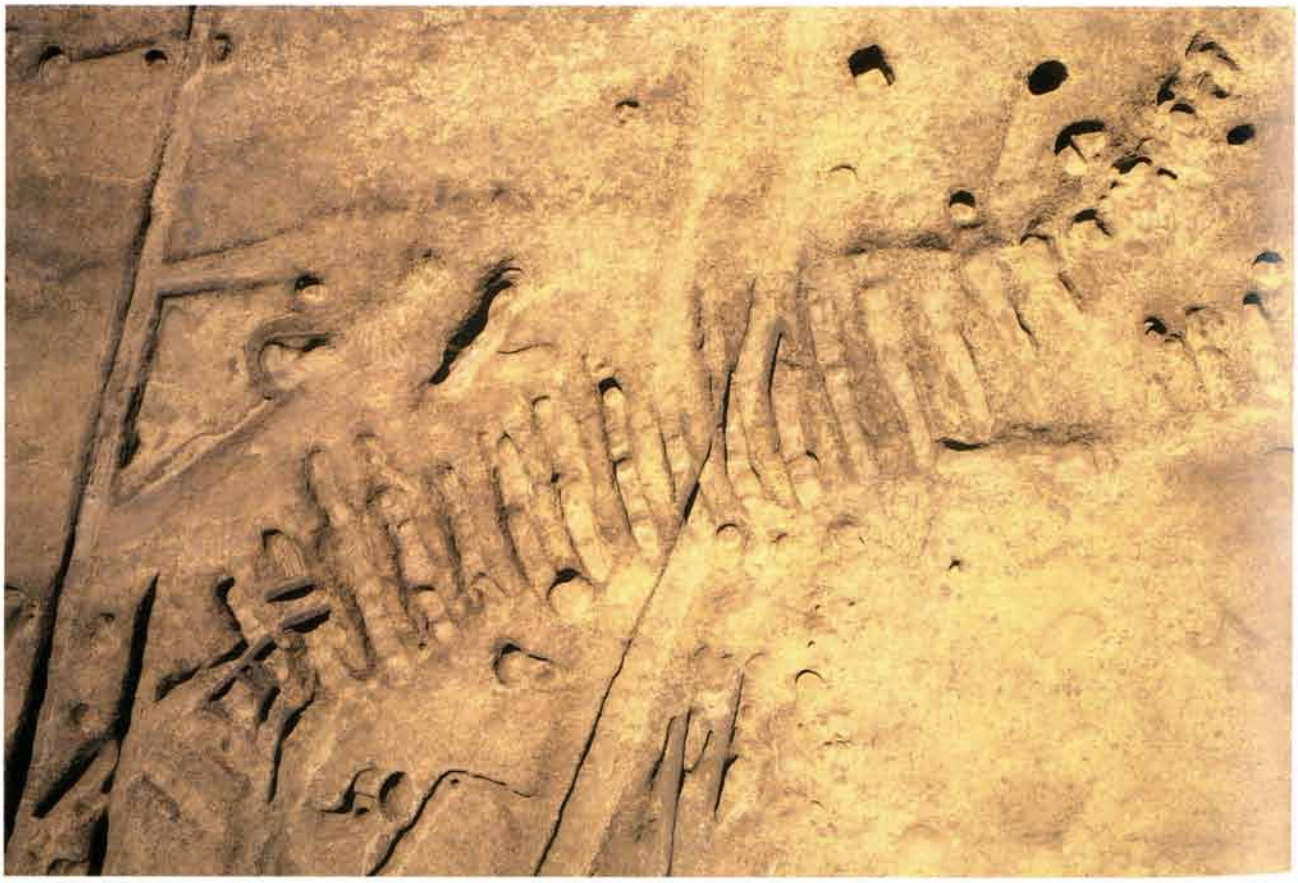
第３次調査地空撮（北から）

4・5区全景（上空から）

4・5区ＳＦ—01・02（上空から）



4区ＳＦ－01（上空から）

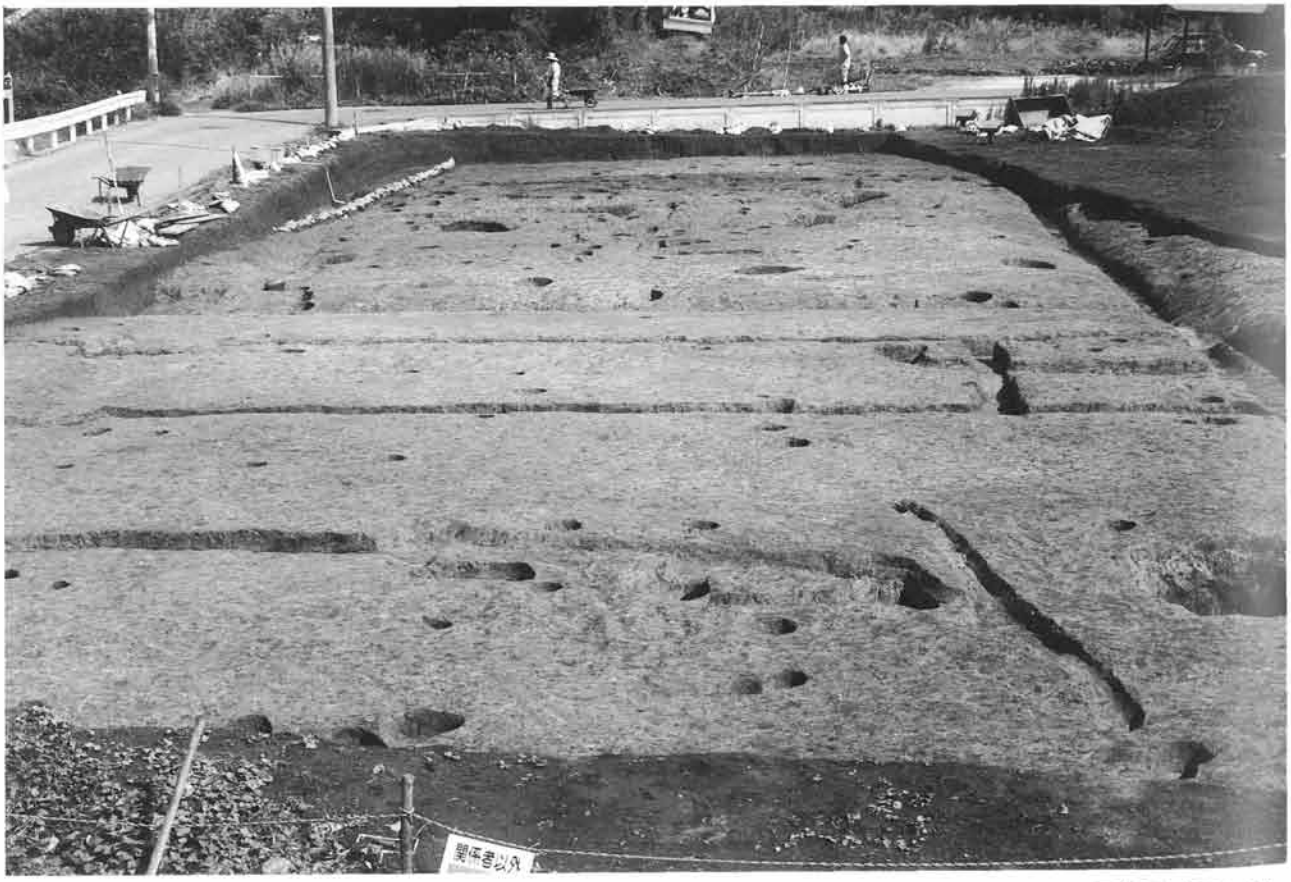


4・5区ＳＦ－02（上空から）

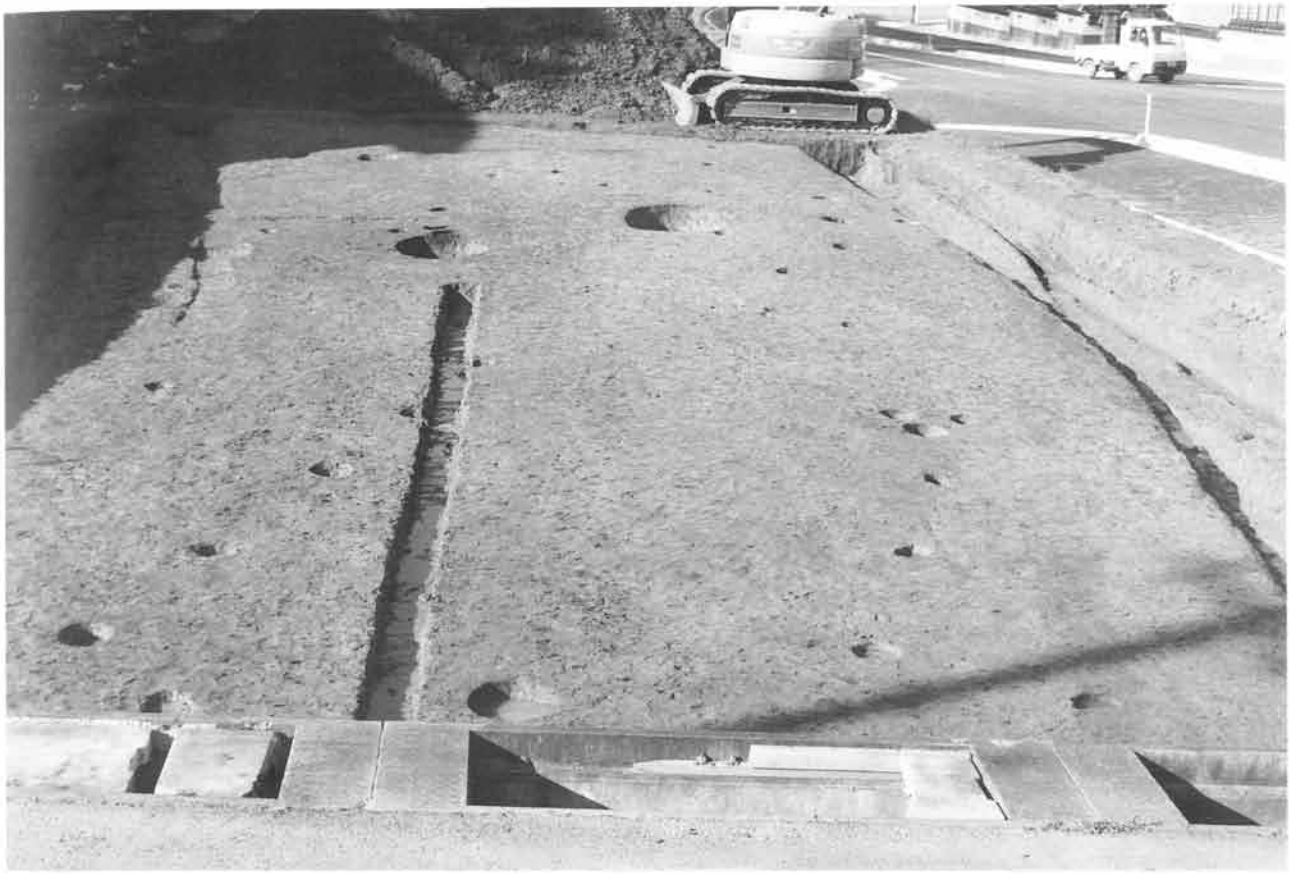
6区ＳＦ－01、ＳＤ－21（上空から）

ＳＦ－04（上空から）

1区全景（東から）



1区全景（西から）



3区東側調査区全景（東から）

3区東側調査区全景（西から）

3区西側調査区全景（東から）

3区西側調査区全景（西から）

2区全景（北西から）

2区全景（西から）

6区全景（東から）

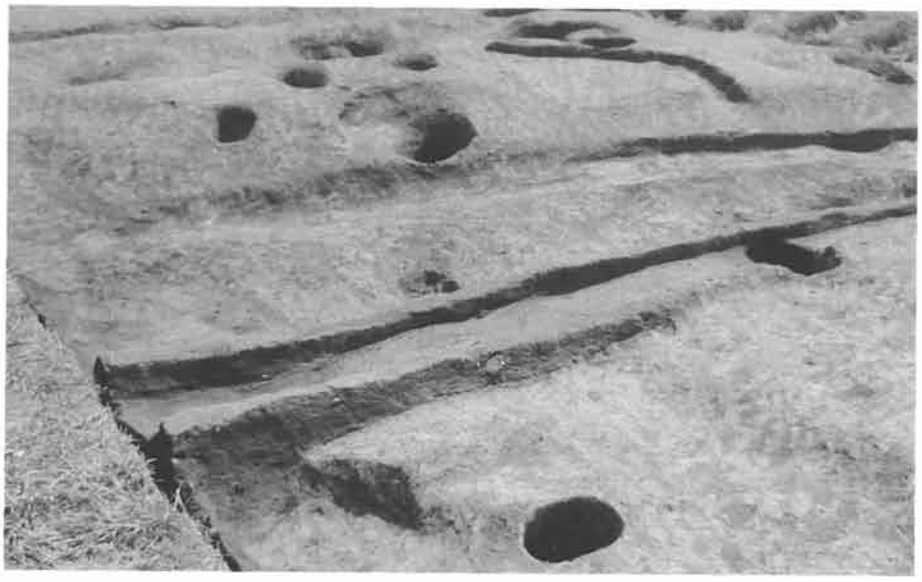
6区全景（西から）

4区第3層上面検出遺構
（東から）

ＳＤ－48・49（東から）

ＳＤ－50（東から）

ＳＩ－01・02（南から）



ＳＩ－03（西から）

ＳＩ－03特殊ピット

2区ＳＦ－01（東から）

2区ＳＦ－01（西から）

4・5区ＳＦ－01・02
（西から）

4・5区ＳＦ－01・02
（北から）

4・5区ＳＦ－01・02
（東から）

4・5区ＳＦ－01・02
（東から）

2区ＳＦ－01部分拡大

2区ＳＦ－01部分拡大

2区ＳＦ－01石出土状況

ＳＦ－02（南から）

ＳＦ－01・02合流地点
（南から）

ＳＦ－01・02合流地点
（北から）

6区ＳＦ－01（東から）

6区ＳＦ－01、ＳＤ－21
（東から）

ＳＦ－03（西から）

ＳＦ－04（西から）

４区ＳＦ－05新段階
（東から）

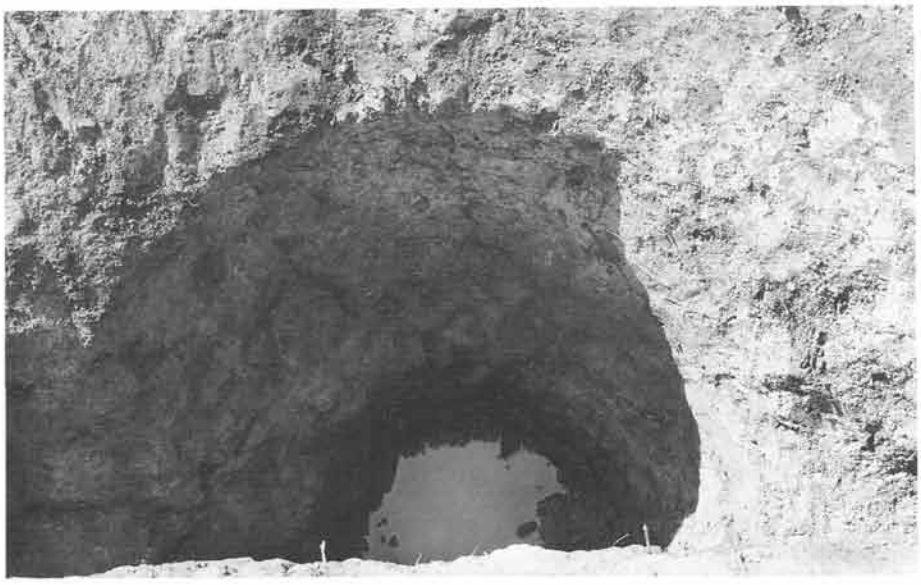
４区ＳＦ－05新段階
（西から）

ＳＦ－05路盤断面
（第47図A－A′ ライン）

ＳＦ－05路盤断面
（第47図B－B′ ライン）

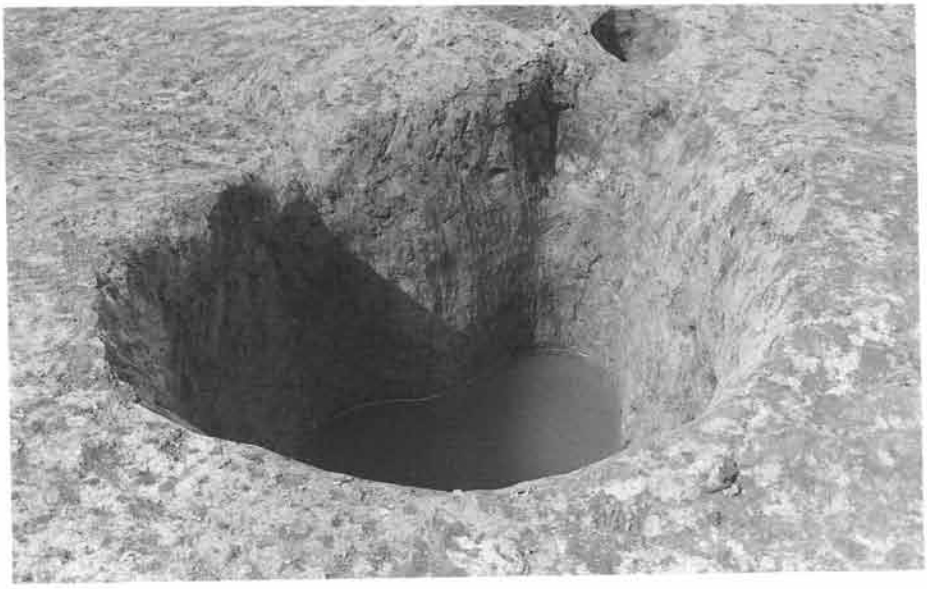
ＳＦ－04断面

ＳＥ－01



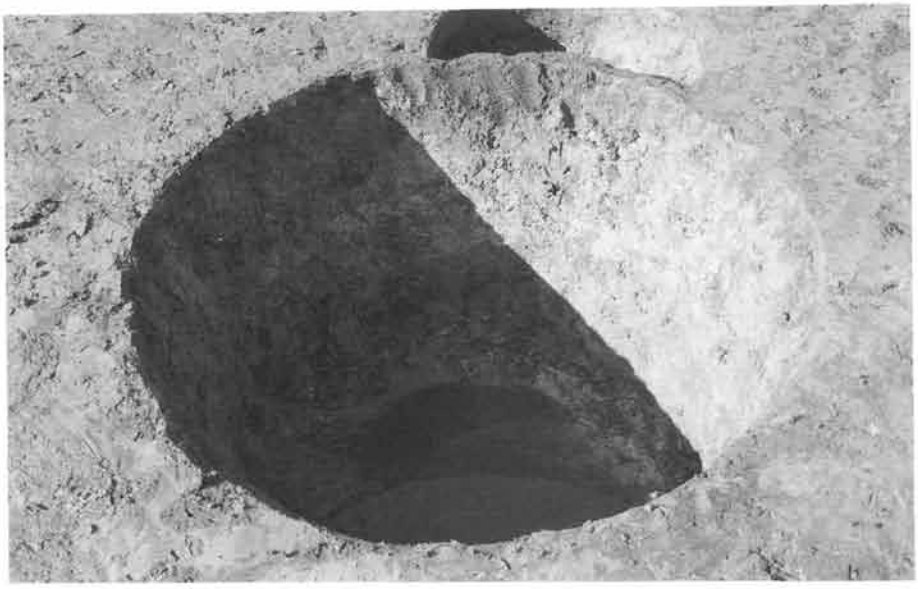
ＳＥ－02

ＳＥ－03

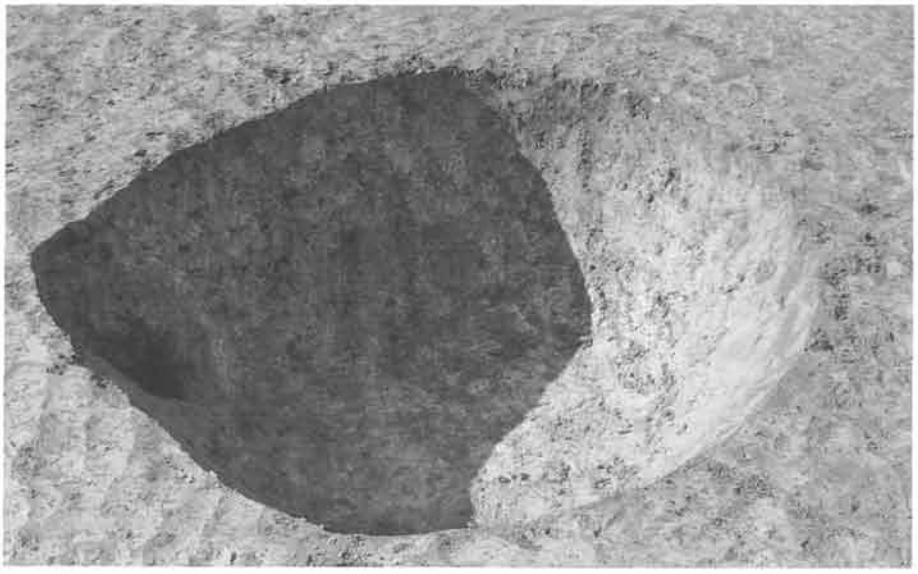


ＳＥ－04

ＳＥ－05

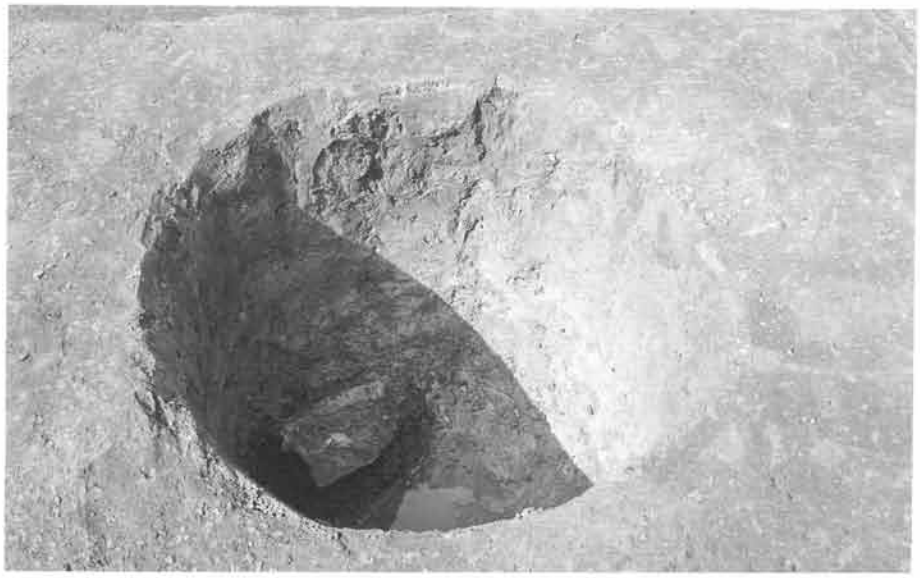


ＳＥ－06

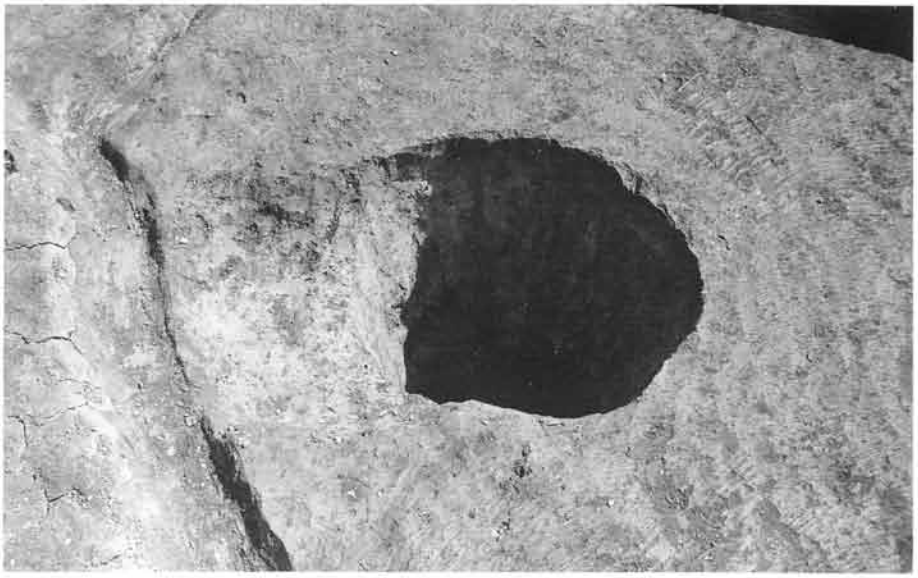


ＳＥ－07

ＳＥ－08



ＳＥ－09



ＳＥ－10

ＳＥ－11・ＳＫ－26

ＳＫ－49

2区ＳＤ－21（南から）

2区ＳＤ－21（北から）

6区ＳＤ－21（西から）

ＳＤ－61・65・67・74
75・77（北から）

石組遺構（東から）

1

3

2

4

5

6

7

8

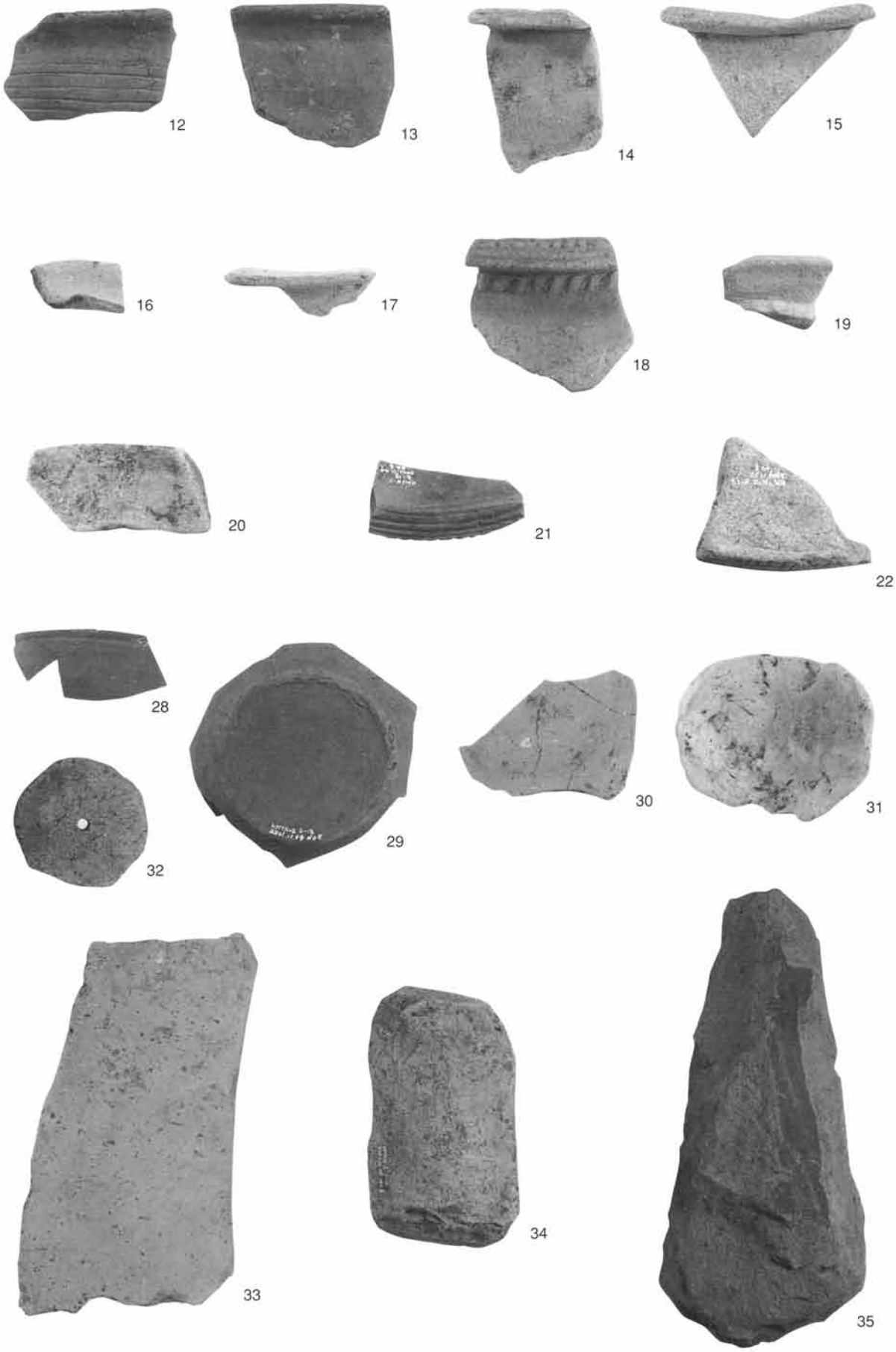
9

10

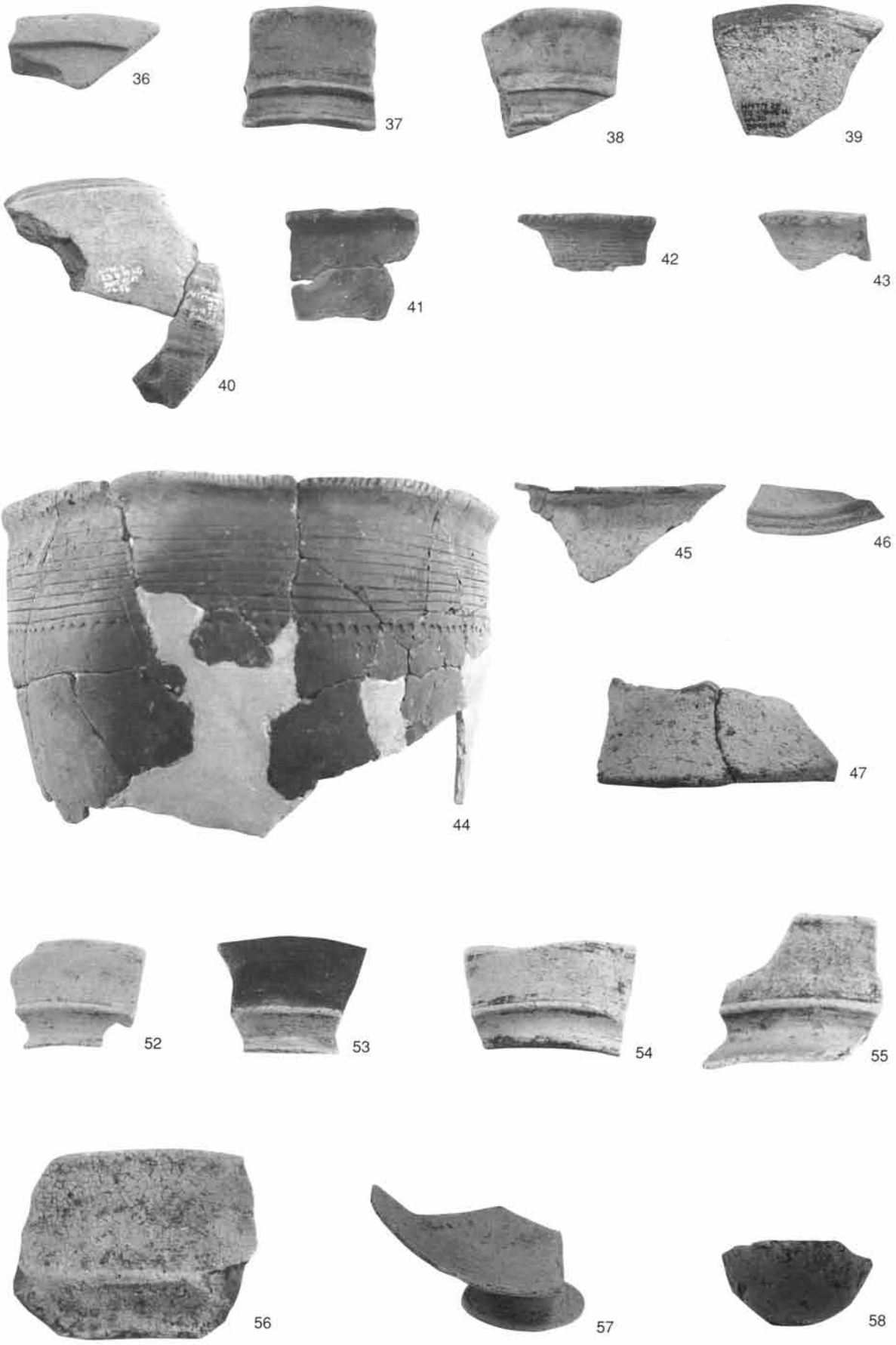
11

1～4：ＳＩ－03
5：ＳＫ－26
6：ＳＫ－49
7～10：ＳＤ－21
11：ＳＤ－67

ＳＩ－03、ＳＫ－26・49、ＳＤ－21・67出土遺物



遺構外出土遺物（1）



遺構外出土遺物（2）

59

60

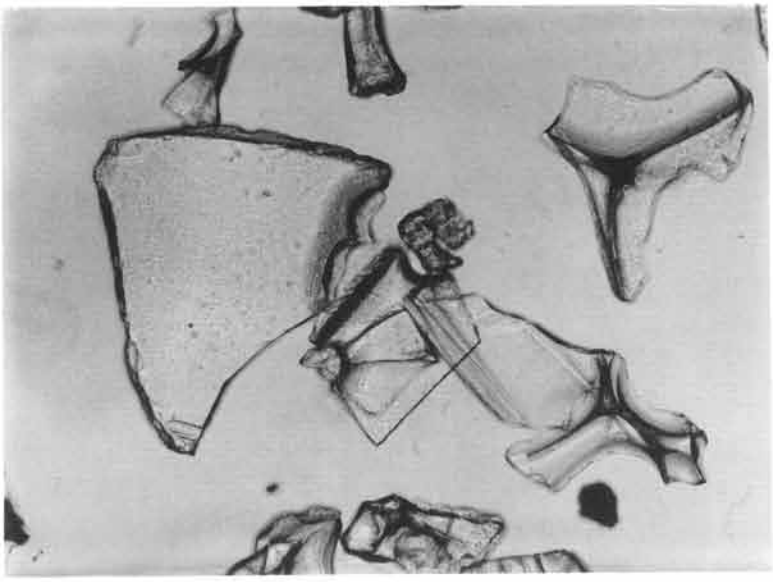
61

62

63

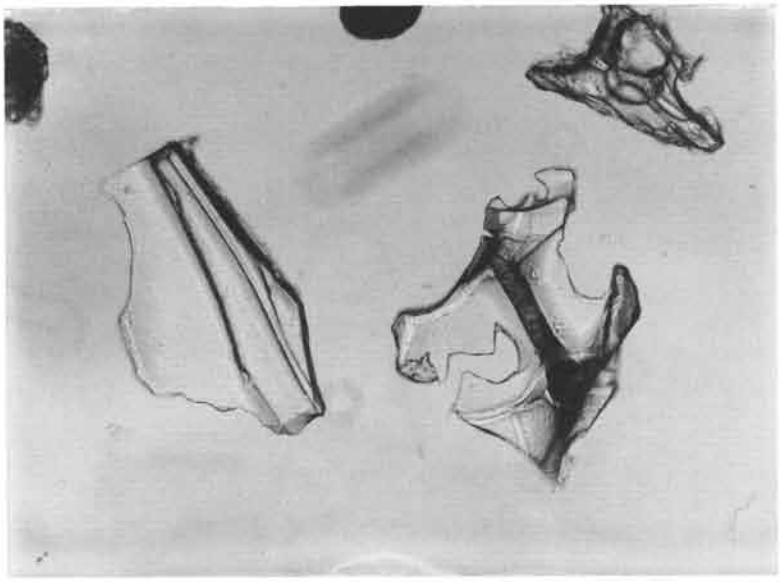
64

遺構外出土遺物（３）



0.1mm

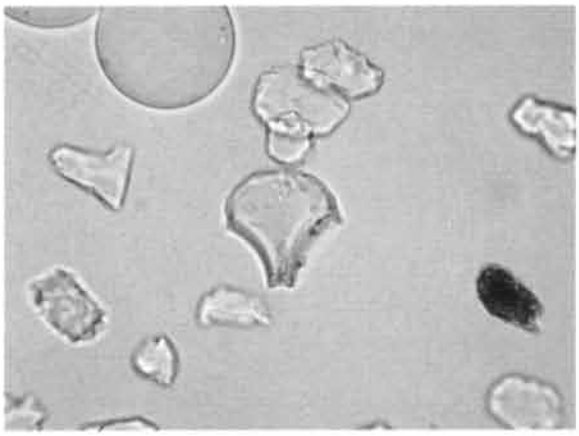
西深掘トレンチ試料31の火山ガラス（AT）



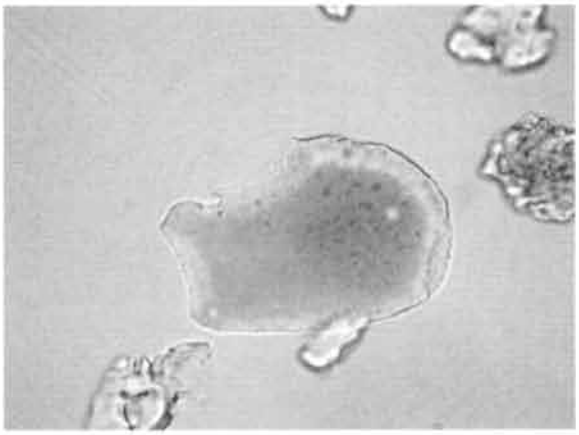
0.1mm

西深掘トレンチ試料９の火山ガラス（Ｋ－Ah）

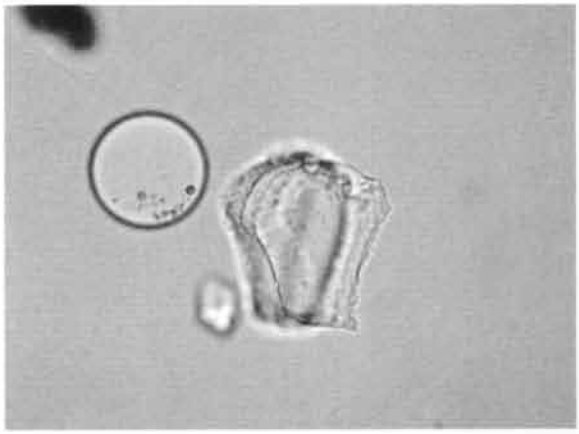
イネ



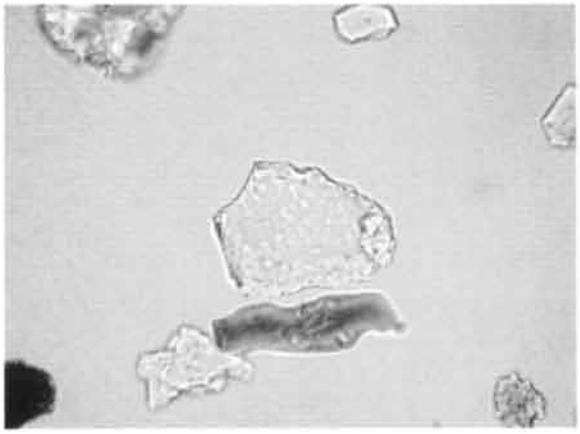
イネ



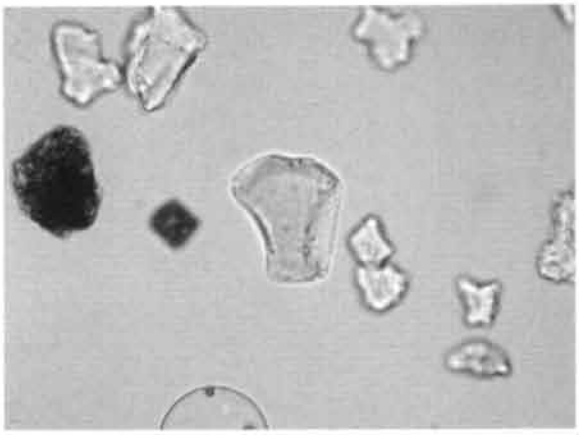
ヨシ属



ネザサ節型



クマザサ属型

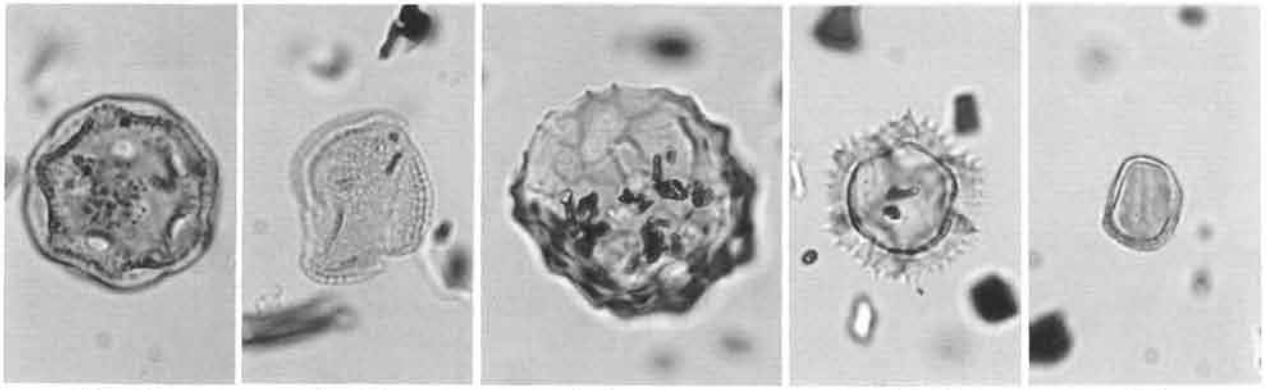


ススキ属型

プラント・オパールの顕微鏡写真　50μm

1　マツ属複維管束亜属　　2　スギ　　3　マメ科

4　イネ科　　5　イネ属型　　6　ソバ属　　7　ソバ属



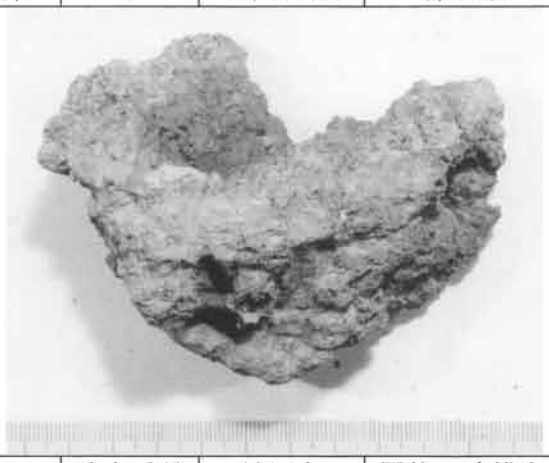
8　ナデシコ科　　9　アブラナ科　　10　ササゲ属　　11　タンポポ亜科　　12　ヨモギ属

10μm

花粉の顕微鏡写真

No. 1	取上番号	地区名	層位・遺構名
鉄滓	2	4区B-24	第2層

No. 2	取上番号	地区名	層位・遺構名
鉄滓	19	2区	SF-01



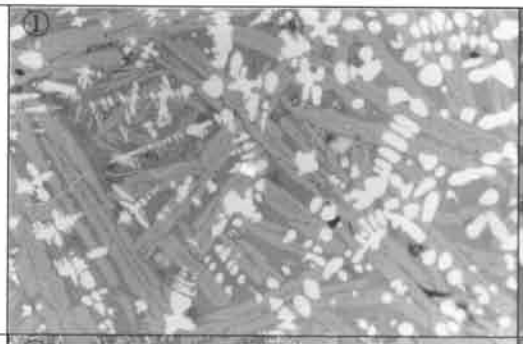
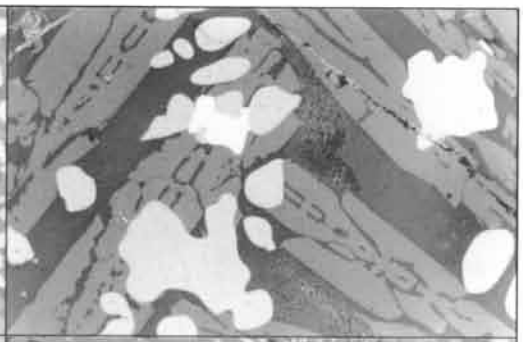
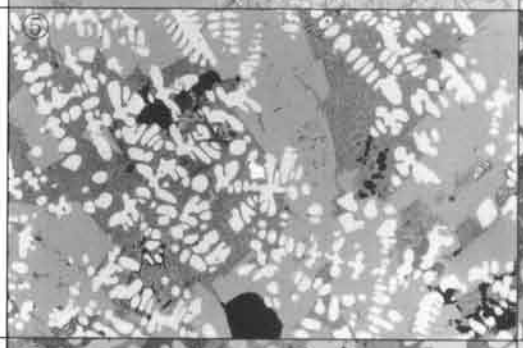
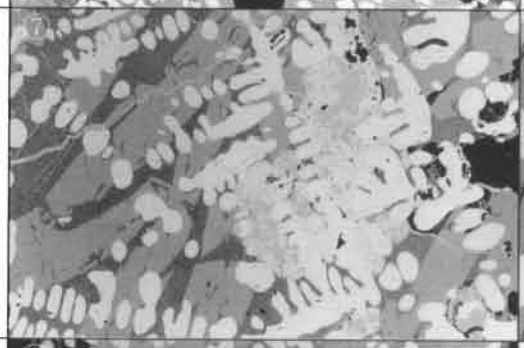
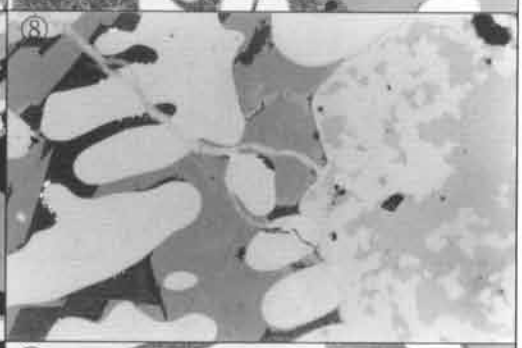
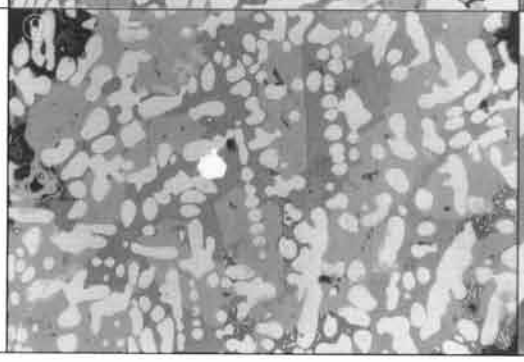
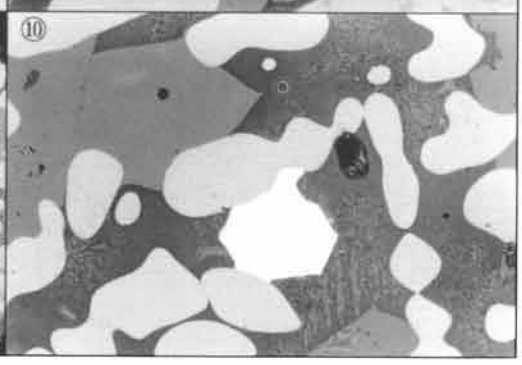
No. 3	取上番号	地区名	層位・遺構名
鉄滓	26	5区B-22	第3層

No. 4	取上番号	地区名	層位・遺構名
鉄滓	30	5区B-20	第3層

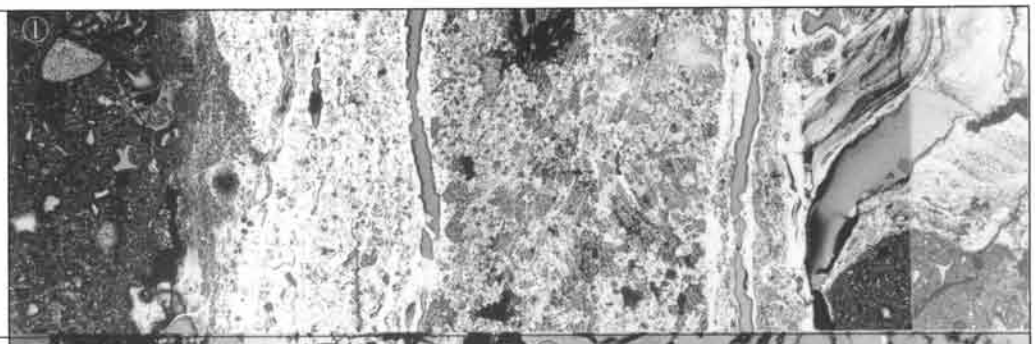
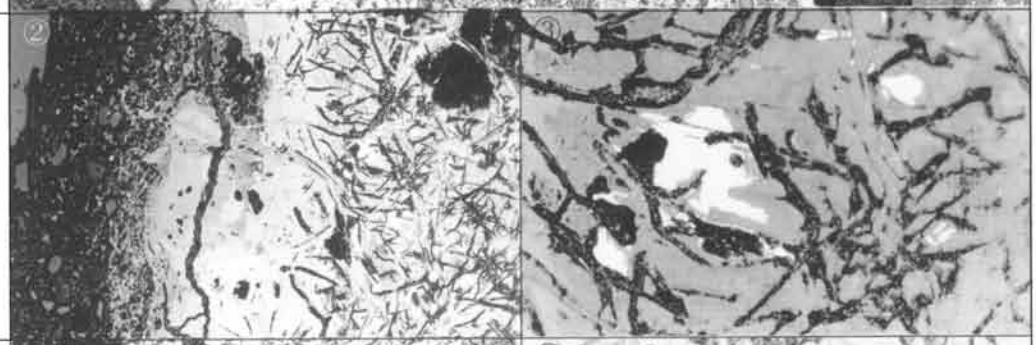
No. 5	取上番号	地区名	層位・遺構名
鉄滓	36	5区A-21	第3層

No. 6	取上番号	地区名	層位・遺構名
鉄滓	58	5区	SF-01

調査試料の外観

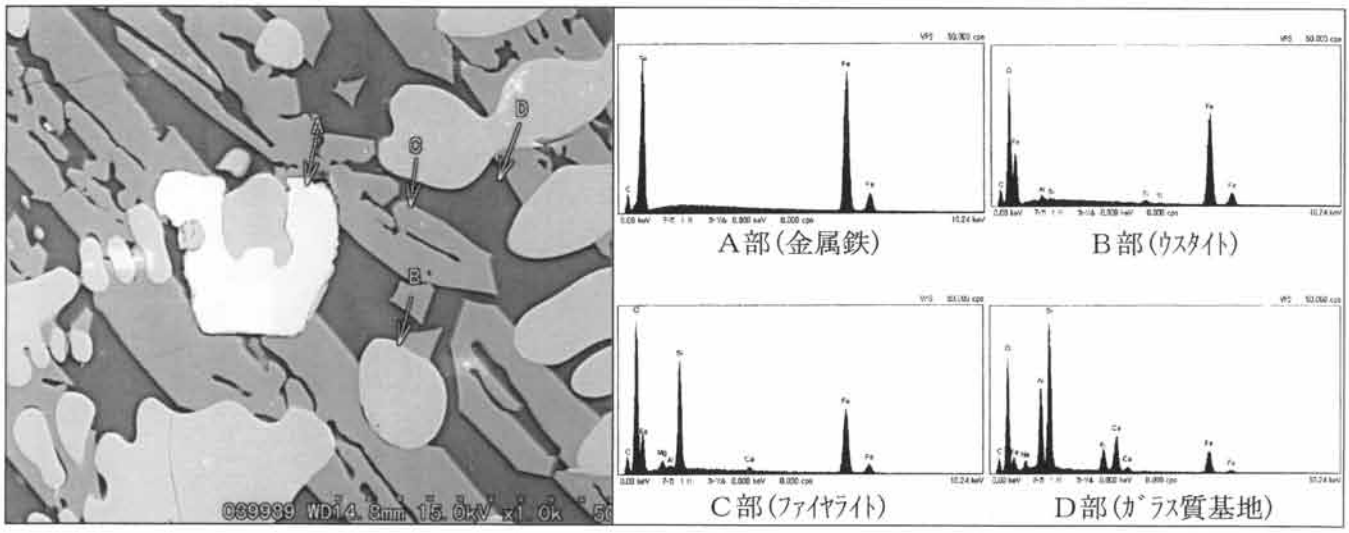
No. 1	①×100 ②×400 ウスタイト ファイヤライト		
No. 2	③×100 ④×400 ウスタイト ファイヤライト		
No. 3	⑤×100 ⑥×400 ウスタイト ファイヤライト		
No. 5	⑦×100 ⑧×400 ウスタイト ファイヤライト		
No. 6	⑨×100 ⑩×400 ウスタイト ファイヤライト		

鉄滓の顕微鏡組織観察（1）

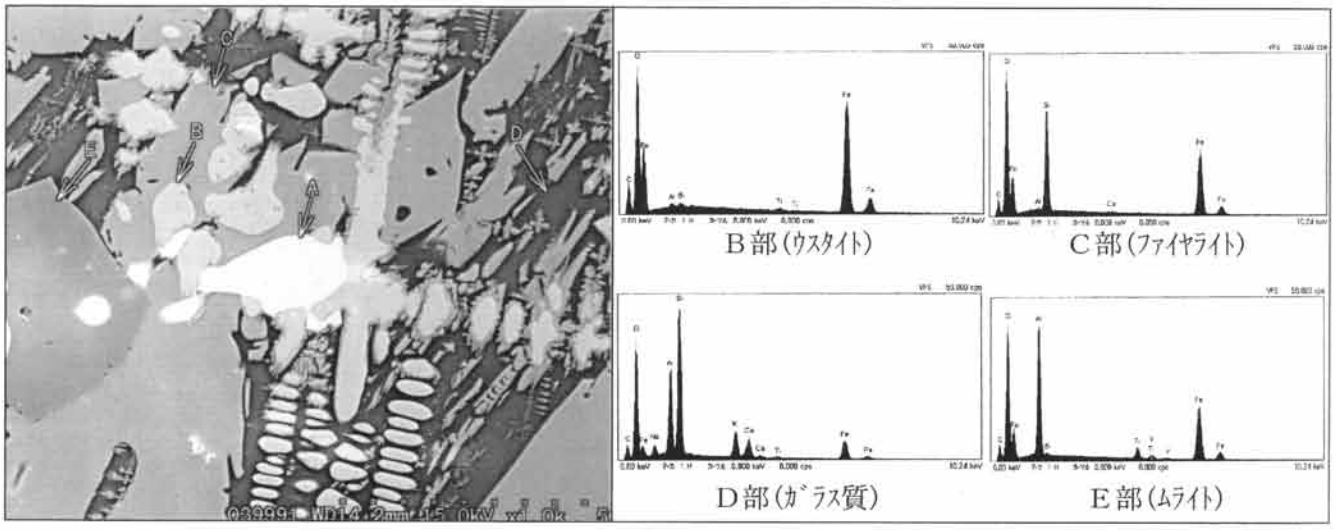
No. 4	①×25	
	②×100 ③×400 ｸﾞﾗﾌｧｲﾄ	
	④×100 ⑤×400 炭化鉄	

鉄滓の顕微鏡組織観察（２）

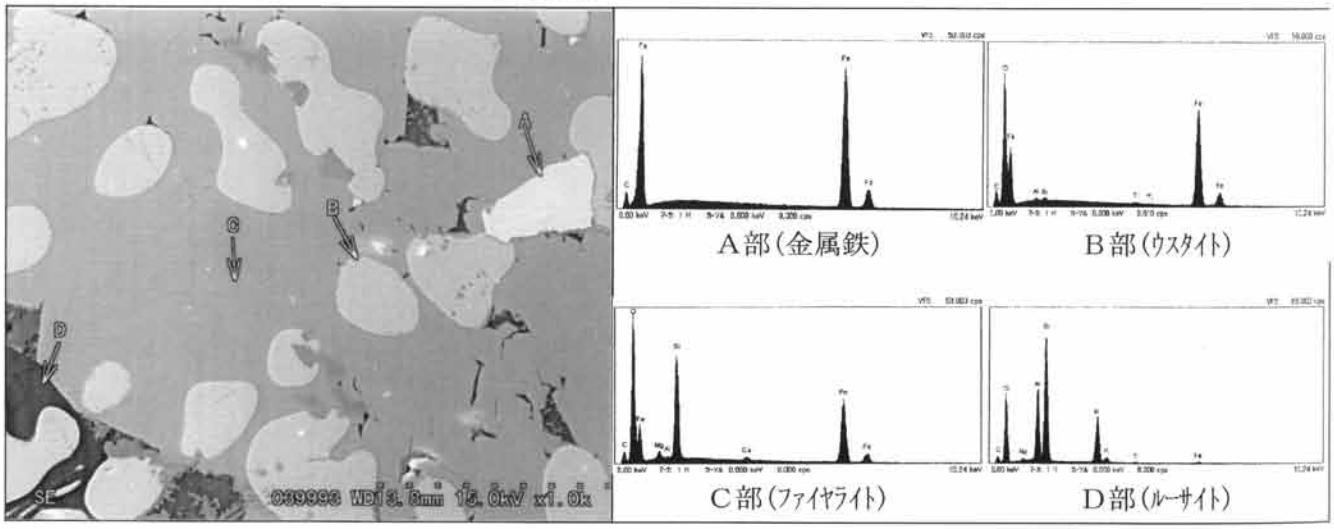
No. 1　　（×1000）



No. 2　　（×1000）

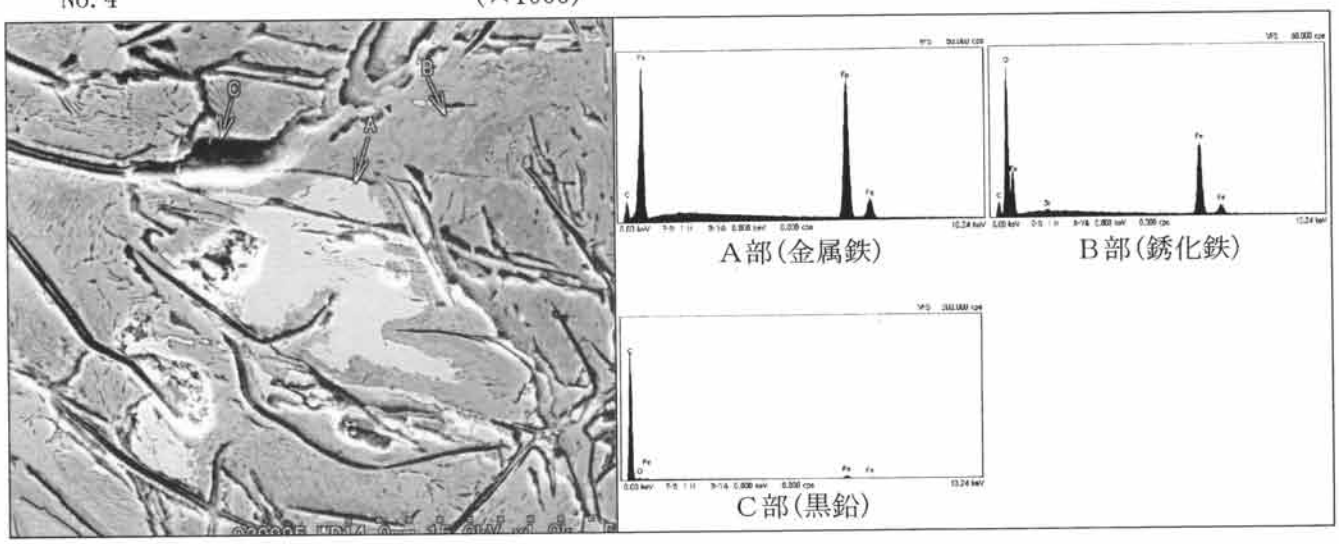


No. 3　　（×1000）

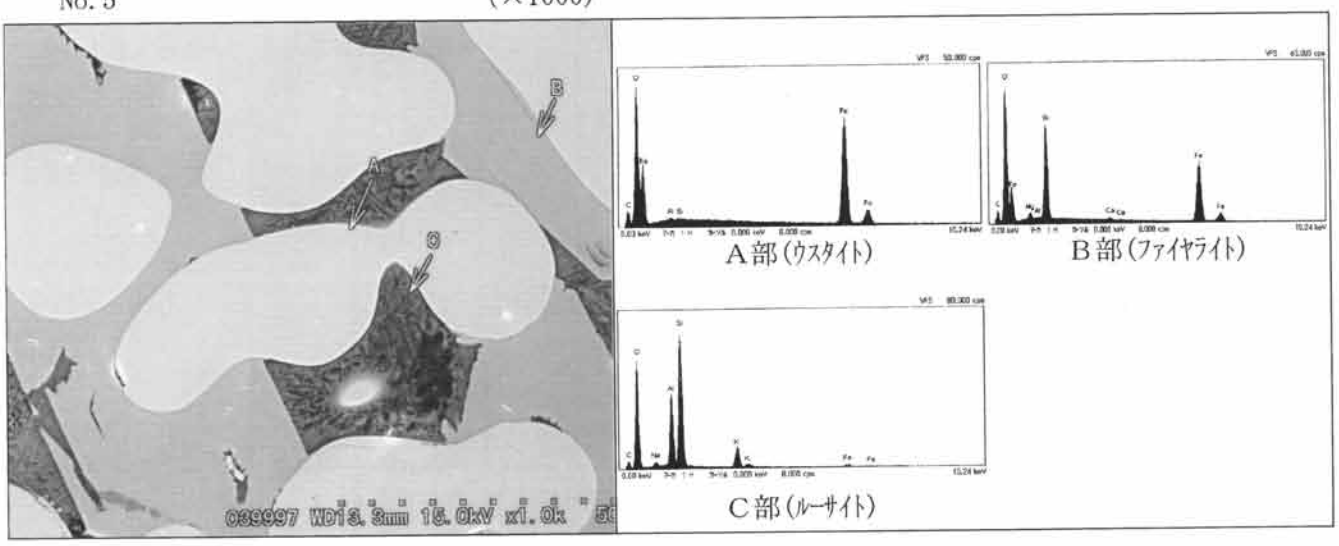


SEM像とEDX微小部分析（1）

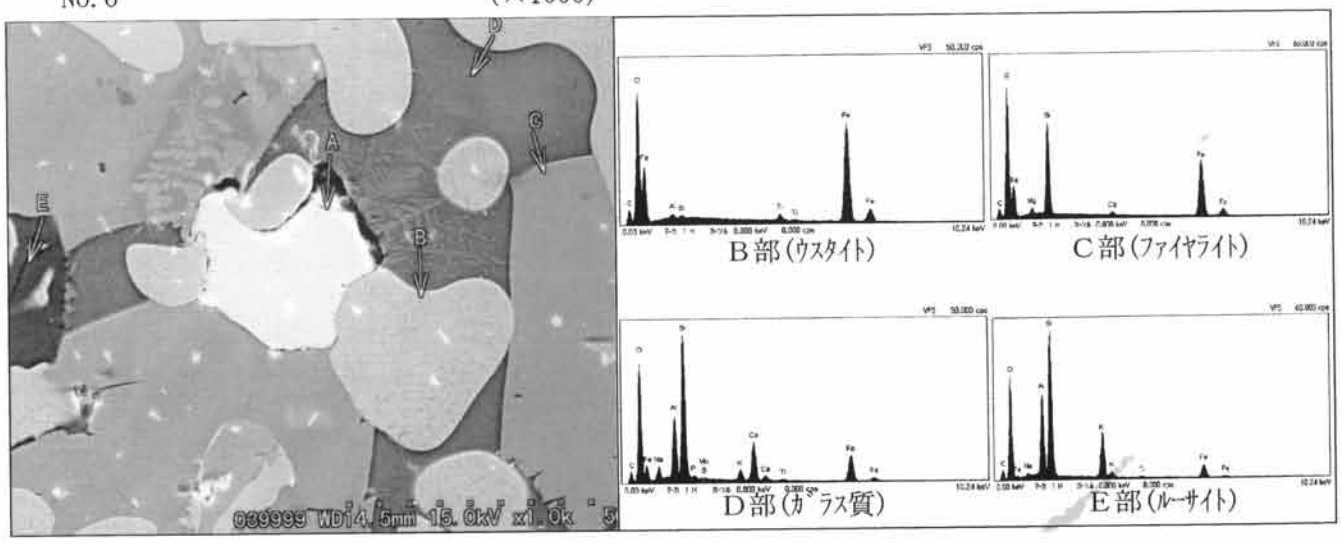
No. 4　　(×1000)



No. 5　　(×1000)



No. 6　　(×1000)



SEM像とEDX微小部分析（2）

報　告　書　抄　録

ふりがな	よしたにかめおのうえいせき はしもととくみちにしいせき
書名	吉谷亀尾ノ上遺跡、橋本徳道西遺跡 第１次～第３次調査
副書名	
巻次	
シリーズ名	(財)米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	４３
編著者名	高橋浩樹
編集機関	財団法人 米子市教育文化事業団 埋蔵文化財調査室
所在地	〒６８３－００３３　鳥取県米子市長砂町９３５－１　TEL０８５９－２２－７２０９
発行年月日	西暦２００３年３月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °　′　″	東経 °　′　″	調査期間	調査面積	調査原因
吉谷亀尾ノ上遺跡	鳥取県米子市 吉谷	31202		35度 23分 24秒	133度 20分 51秒	20000706～ 20000906	1,000㎡	一般県道米子岸本線緊急地方道路整備工事
橋本徳道西遺跡	鳥取県米子市 橋本	31202		35度 23分 24秒	133度 20分 56秒	20000905～ 20001211 20011105～ 20011212 20020110～ 20020331	1,200㎡ 550㎡ 1,000㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
古谷亀尾ノ上遺跡	集落跡	縄文時代		尖頭器	市内で３例目の尖頭器が出土
		弥生時代	竪穴住居跡 掘立柱建物、土坑	弥生土器、石鏃	
		古墳時代	竪穴住居跡、土坑	土師器、須恵器	
橋本徳道西遺跡	集落跡	弥生時代	土坑	弥生土器、石斧	構造が異なる複数の道路状遺構を確認
		古墳時代	竪穴住居跡	土師器、須恵器	
		古代～中世	道路状遺構 溝状遺構	土師器、須恵器、鉄斧、鉄滓 砥石	古代山陰道駅路の可能性がある道路状遺構を確認
		近世	井戸、溝状遺構	陶磁器	

(財)米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書４３

吉谷亀尾ノ上遺跡
橋本徳道西遺跡

第１次～第３次調査

２００３年３月

編集・発行　財団法人　米子市教育文化事業団

〒６８３－００３３　鳥取県米子市長砂町９３５－１

印　　刷　(有)米子プリント社